

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第44集

前中西遺跡XIII

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書XIV—

2 0 2 3

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第44集

まえなかにし
前中西遺跡XIII

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書XIV—

2 0 2 3

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めており、市内上之を中心とした地区で進めている上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の発掘調査により、原始・古代から近世に至るおびただしい遺跡が確認されました。熊谷市教育委員会では遺跡の重要性に鑑み、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事等に関しては、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、2009（平成 21）年度及び 2014（平成 26）年度に発掘調査を行った前中西遺跡について報告するものでございます。前中西遺跡の弥生時代につきましては、これまで実施された調査成果から大規模かつ当地域における拠点集落であることが明らかとなってきております。今回の報告も弥生時代の集落が主体となり、良好な土器や石器、石製品などの遺物が大量に出土いたしました。

今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く御活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護の趣旨を尊重され、御理解・御協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理事務所、並びに地元関係者に厚く御礼申し上げます。

令和 5 年 3 月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市上之 2385 番地地先他に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号 59 - 092）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第 I 章 3 のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、下記のとおりである。

2009（平成 21）年度第 2 次調査：2009（平成 21）年 10 月 30 日～2010（平成 22）年 1 月 29 日
2009（平成 21）年度第 3 次調査：2010（平成 22）年 1 月 5 日～3 月 31 日
2014（平成 26）年度第 1 次調査：2014（平成 26）年 5 月 22 日～8 月 29 日

整理・報告書作成期間は、令和 3 年 4 月 30 日から令和 5 年 3 月 24 日まで実施した。
- 5 発掘調査の担当は、2009（平成 21）年度第 2 次調査及び 2014（平成 26）年度第 1 次調査を松田 哲、2009（平成 21）年度第 3 次調査を吉野 健が行った。

本書の執筆・編集は、松田が行った。
- 6 発掘調査における写真撮影は、各調査の担当者、遺物の写真撮影は、松田が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。
- 8 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

青木克尚 石川日出志 磯崎 一 植木雅博 柿沼幹夫 金子正之 小出輝雄
小林 嵩 小林 高 清水康守 菅谷浩之 宅間清公 知久裕昭 轟 直行
富田和夫 禰宜田佳男 松本 完 村松 篤 吉田 稔
埼玉県教育局文化資源課 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

調査区全体図… 1 / 500 調査区全測図… 1 / 200

住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・柵列跡・溝跡・土坑・河川跡断面図… 1 / 60

土器棺墓… 1 / 30 河川跡平面図… 1 / 100

- 2 遺構挿図中のトーン等は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

 = 地山  = 焼土  = 炭化材

- 3 遺構挿図中、断面図に添えてある数値は、標高を示している。

- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土器・石器・石製品… 1 / 4 土製品・石器・石製品・古銭… 1 / 2 玉類… 1 / 1

- 5 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりであるが、それ以外のものは、個別に示した。

縄文土器・弥生土器・土師器・陶磁器・石器・石製品・玉類断面：白抜き

須恵器断面：黒塗り 灰釉陶器断面： 木製品断面：

赤彩： 被熱：

- 6 遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

- 7 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位は、cm、g である。() が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物などを以下の記号で示した。

A：白色粒子 B：黒色粒子 C：赤色粒子 D：褐色粒子 E：赤褐色粒子

F：白色針状物質 G：長石 H：石英 I：白雲母 J：黒雲母

K：角閃石 L：片岩 M：砂粒 N：礫 O：金雲母

- 8 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖 36 版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行 2014）を参考にした。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	1
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II 遺跡の立地と環境	4
III 遺跡の概要	9
1 調査の方法	9
2 検出された遺構と遺物	9
IV 遺構と遺物	15
1 住居跡	15
2 竪穴状遺構	109
3 掘立柱建物跡	111
4 柵列跡	111
5 溝跡	113
6 土坑	117
7 土器棺墓	125
8 ピット	125
9 河川跡	127
10 遺構外出土遺物	140
V 調査のまとめ	153

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第16図 第2号住居跡出土遺物(4)	34
第2図 周辺遺跡分布図	6	第17図 第3号住居跡(1)	37
第3図 調査地点位置図	10	第18図 第3号住居跡(2)	38
第4図 調査区全体図	11	第19図 第3号住居跡出土遺物(1)	40
第5図 第1区全測図	12	第20図 第3号住居跡出土遺物(2)	42
第6図 第2・3区全測図	13	第21図 第3号住居跡出土遺物(3)	44
第7図 第1号住居跡	15	第22図 第3号住居跡出土遺物(4)	46
第8図 第1号住居跡出土遺物(1)	17	第23図 第3号住居跡出土遺物(5)	49
第9図 第1号住居跡出土遺物(2)	19	第24図 第3号住居跡出土遺物(6)	50
第10図 第1号住居跡出土遺物(3)	22	第25図 第3号住居跡出土遺物(7)	51
第11図 第2号住居跡(1)	26	第26図 第3号住居跡出土遺物(8)	52
第12図 第2号住居跡(2)	27	第27図 第4号住居跡	56
第13図 第2号住居跡出土遺物(1)	28	第28図 第4号住居跡出土遺物(1)	57
第14図 第2号住居跡出土遺物(2)	31	第29図 第4号住居跡出土遺物(2)	59
第15図 第2号住居跡出土遺物(3)	33	第30図 第4号住居跡出土遺物(3)	62

第31 図	第4号住居跡出土遺物(4)……………63	第55 図	第1号掘立柱建物跡……………112
第32 図	第5号住居跡……………68	第56 図	第1・2号柵列跡……………112
第33 図	第5号住居跡出土遺物(1)……………70	第57 図	第1号柵列跡出土遺物……………113
第34 図	第5号住居跡出土遺物(2)……………71	第58 図	第1～4号溝跡……………114
第35 図	第5号住居跡出土遺物(3)……………73	第59 図	溝跡出土遺物……………116
第36 図	第5号住居跡出土遺物(4)……………76	第60 図	第1～8号土坑……………118
第37 図	第6・7号住居跡(1)……………80	第61 図	第9～14号土坑……………121
第38 図	第6・7号住居跡(2)……………81	第62 図	土坑出土遺物……………122
第39 図	第6号住居跡出土遺物……………82	第63 図	第1号土器棺墓……………123
第40 図	第7号住居跡遺物出土状況……………84	第64 図	第1号土器棺墓出土遺物……………124
第41 図	第7号住居跡出土遺物(1)……………85	第65 図	ピット出土遺物……………127
第42 図	第7号住居跡出土遺物(2)……………87	第66 図	第1号河川跡(1)……………128
第43 図	第7号住居跡出土遺物(3)……………88	第67 図	第1号河川跡(2)……………129
第44 図	第7号住居跡出土遺物(4)……………90	第68 図	第1号河川跡(3)……………130
第45 図	第7号住居跡出土遺物(5)……………92	第69 図	第1号河川跡(4)……………131
第46 図	第7号住居跡出土遺物(6)……………95	第70 図	第1号河川跡(5)……………132
第47 図	第7号住居跡出土遺物(7)……………99	第71 図	第1号河川跡(6)……………133
第48 図	第7号住居跡出土遺物(8)……………100	第72 図	第1号河川跡出土遺物(1)……………134
第49 図	第8号住居跡……………104	第73 図	第1号河川跡出土遺物(2)……………138
第50 図	第8号住居跡出土遺物(1)……………105	第74 図	遺構外出土遺物(1)……………141
第51 図	第8号住居跡出土遺物(2)……………106	第75 図	遺構外出土遺物(2)……………143
第52 図	第8号住居跡出土遺物(3)……………108	第76 図	遺構外出土遺物(3)……………146
第53 図	第1号竪穴状遺構……………110	第77 図	遺構外出土遺物(4)……………149
第54 図	第1号竪穴状遺構出土遺物……………110	第78 図	弥生時代遺構分布図……………156

挿表目次

第1 表	周辺遺跡一覧表……………7	第10 表	第1号竪穴状遺構出土遺物観察表……………110
第2 表	第1号住居跡出土遺物観察表……………23	第11 表	第1号柵列跡出土遺物観察表……………113
第3 表	第2号住居跡出土遺物観察表……………35	第12 表	溝跡出土遺物観察表……………116
第4 表	第3号住居跡出土遺物観察表……………52	第13 表	土坑出土遺物観察表……………122
第5 表	第4号住居跡出土遺物観察表……………64	第14 表	第1号土器棺墓出土遺物観察表……………125
第6 表	第5号住居跡出土遺物観察表……………77	第15 表	ピット計測表……………126
第7 表	第6号住居跡出土遺物観察表……………82	第16 表	ピット出土遺物観察表……………127
第8 表	第7号住居跡出土遺物観察表……………101	第17 表	第1号河川跡出土遺物観察表……………139
第9 表	第8号住居跡出土遺物観察表……………109	第18 表	遺構外出土遺物観察表……………150

図版目次

- 図版 1 第 1 区 (2009 (平成 21) 年度第 2 次調査)
全景 (南東から)
第 1 区 (2009 (平成 21) 年度第 2 次調査)
全景 (北西から)
- 図版 2 第 1 区 (2009 (平成 21) 年度第 2 次調査)
全景 (東から)
第 1 区 (2009 (平成 21) 年度第 2 次調査)
全景 (西から)
- 図版 3 第 2 区 (2009 (平成 21) 年度第 3 次調査)
全景 (東から)
第 3 区 (2014 (平成 26) 年度第 1 次調査)
全景 (南から)
第 3 区 (2014 (平成 26) 年度第 1 次調査)
全景 (北から)
- 遺構**
- 図版 4 第 1 号住居跡
第 1 号住居跡遺物出土状況 (1)
第 1 号住居跡遺物出土状況 (2)
第 2 号住居跡 (拡張後)
第 2 号住居跡 (拡張前)
第 2 号住居跡遺物出土状況 (1)
第 2 号住居跡遺物出土状況 (2)
第 3 号住居跡遺物・炭化材出土状況
- 図版 5 第 3 号住居跡
第 3 号住居跡西側遺物・炭化材出土状況
第 3 号住居跡東側遺物・炭化材出土状況
第 3 号住居跡遺物出土状況 (1)
第 3 号住居跡遺物出土状況 (2)
第 3 号住居跡遺物出土状況 (3)
第 3 号住居跡遺物出土状況 (4)
- 図版 6 第 3 号住居跡遺物出土状況 (5)
第 3 号住居跡遺物出土状況 (6)
第 3 号住居跡遺物出土状況 (7)
第 3 号住居跡遺物出土状況 (8)
- 第 3 号住居跡遺物出土状況 (9)
第 4 号住居跡
第 5 号住居跡
第 5 号住居跡遺物出土状況 (1)
図版 7 第 5 号住居跡遺物出土状況 (2)
第 6・7 号住居跡
第 7 号住居跡炉 1・2
第 7 号住居跡遺物出土状況 (1)
第 7 号住居跡遺物出土状況 (2)
第 7 号住居跡遺物出土状況 (3)
第 7 号住居跡遺物出土状況 (4)
第 7 号住居跡遺物出土状況 (5)
- 図版 8 第 8 号住居跡
第 8 号住居跡遺物出土状況
第 1 号竪穴状遺構
第 1 号掘立柱建物跡
第 1 号柵列跡
第 2 号柵列跡
第 1 号溝跡
- 図版 9 第 2・3 号溝跡
第 4 号溝跡
第 1 号土坑
第 2 号土坑
第 3 号土坑
第 4 号土坑
- 図版 10 第 5 号土坑
第 6 号土坑
第 7 号土坑
第 8 号土坑
第 9・10 号土坑
第 11 号土坑
第 12 号土坑
第 13 号土坑
- 図版 11 第 14 号土坑

	第1号土器棺墓		第7号住居跡	第41図1
	第1号河川跡(第1区)	図版19	第7号住居跡	第41図1胴部文様・2
	第1号河川跡(第2区)			・2胴部文様
	第1号河川跡(第2区西側)木片出土状況			第42図3～5
	第1号河川跡(第2区中央)木片出土状況	図版20	第7号住居跡	第43図6・7・9・11
図版12	第1号河川跡(第2区中央)木製品出土状況(西から)	図版21	第7号住居跡	第44図12・23
	第1号河川跡(第2区中央)木製品出土状況(北から)		第8号住居跡	第44図24
	第1号河川跡(第2区中央)木製品出土状況(北側)	図版22	第8号住居跡	第50図1・2
	第1号河川跡(第2区中央)木製品出土状況(南側)			第51図3～5
	第1号河川跡(第3区)火山灰堆積状況(南東から)	図版23	第8号住居跡	第51図6・7(横から)・7(後から)
	第1号河川跡(第3区)1トレンチ土層(南西から)	図版24	第1号土器棺墓	第64図1・2・3
	第1号河川跡(第3区)2トレンチ土層(南西から)	図版25	遺構外	第74図9～11・26
	作業風景	図版26	第1号住居跡	第8図18～34
		図版27	第1号住居跡	第8・9図35～52
			第2号住居跡	第9図53～67
			第2号住居跡	第9図68～88
			第1号住居跡	第9・10図89～106
			第2号住居跡	第13図13～34
			第2号住居跡	第13・14図35～47
			第2号住居跡	第14図48～63
			第2号住居跡	第14・15図64～84
			第3号住居跡	第21図17～39
			第3号住居跡	第21・22図40～55
			第3号住居跡	第22図56～72
			第3号住居跡	第22図73～95
			第3号住居跡	第22・23図96～122
			第4号住居跡	第28・29図12～34
			第4号住居跡	第29図35～50
			第4号住居跡	第29図51～69
			第4号住居跡	第29・30図70～89
			第4号住居跡	第30図90～113
			第5号住居跡	第34図14～36
			第5号住居跡	第34・35図37～56
			第5号住居跡	第35図57～71
			第5号住居跡	第35図72～89

遺物

弥生土器(弥生時代中期後半～末)

図版13	第1号住居跡	第8図1～5・11・17
図版14	第2号住居跡	第13図1・2・9・12
	第3号住居跡	第19図1・2
図版15	第3号住居跡	第19図3～6
		第20図7・8
図版16	第3号住居跡	第20図9～11
		第21図12
	第4号住居跡	第28図1・2
図版17	第4号住居跡	第28図10・11(上から)・11(横から)
	第5号住居跡	第33図1～3
図版18	第5号住居跡	第33図4～6
		第34図7
	第6号住居跡	第40図1

第 36 図 90 ~ 109
図版 36 第 6 号住居跡 第 40 図 2 ~ 13
第 7 号住居跡 第 44 図 25 ~ 45
図版 37 第 7 号住居跡 第 44・45 図 46 ~ 64
第 45 図 65 ~ 81
図版 38 第 7 号住居跡 第 45 図 82 ~ 101
第 45・46 図 102 ~ 118
図版 39 第 7 号住居跡 第 46 図 119 ~ 140
第 46・47 図 141 ~ 163
図版 40 第 8 号住居跡 第 51・52 図 10 ~ 33
第 1 号竪穴状遺構 第 54 図 4・5
第 1 号柵列跡 第 57 図 1 ~ 3
第 4 号溝跡 第 59 図 4 - 2 ~ 15
第 3 号土坑 第 62 図 3 - 1
第 4 号土坑 第 62 図 4 - 1
第 6 号土坑 第 62 図 6 - 2・3
第 7 号土坑 第 62 図 7 - 1
第 11 号土坑 第 62 図 11 - 1
図版 41 第 1 号河川跡 第 72 図 13 ~ 40
第 72・73 図 41 ~ 66
図版 42 遺構外 第 74・75 図 28 ~ 47
第 75 図 48 ~ 70
図版 43 遺構外 第 75 図 71 ~ 91
第 76 図 92 ~ 106
図版 44 遺構外 第 76 図 107 ~ 127
縄文土器
図版 44 第 1 号住居跡 第 10 図 107 ~ 109
第 2 号住居跡 第 15 図 85・86
第 3 号住居跡 第 23 図 123 ~ 132
第 4 号住居跡 第 30 図 114 ~ 119
第 5 号住居跡 第 36 図 110 ~ 113
第 7 号住居跡 第 47 図 164
図版 45 第 1 号竪穴状遺構 第 54 図 1・2
第 1 号溝跡 第 59 図 1 - 1
ピット 28 第 65 図 2
ピット 52 第 65 図 4

ピット 59 第 65 図 5
ピット 81 第 65 図 7
第 1 号河川跡 第 72 図 1 ~ 5
遺構外 第 74 図 1 ~ 8

弥生土器 (弥生時代後期)

図版 45 第 7 号住居跡 第 47 図 165

土師器 (古墳時代前期)

図版 23 遺構外 第 77 図 133

図版 45 第 4 号住居跡 第 30 図 120
第 5 号住居跡 第 36 図 114・115
第 1 号河川跡 第 73 図 68・69
遺構外 第 77 図 134

土師器・須恵器 (古墳時代後期)

図版 23 第 1 号河川跡 第 73 図 73・74
遺構外 第 77 図 142
図版 45 第 1 号河川跡 第 73 図 70
遺構外 第 77 図 135

灰釉陶器 (平安時代)

図版 45 遺構外 第 77 図 144

陶磁器 (近世)

図版 45 遺構外 第 77 図 146・147

石器・石製品 (弥生時代)

図版 46 第 1 号住居跡 第 10 図 112 ~ 120
第 2 号住居跡 第 15 図 91 ~ 100
図版 47 第 2 号住居跡 第 15・16 図 101 ~ 108
第 3 号住居跡 第 23・24 図 134 ~ 139
図版 48 第 3 号住居跡 第 24・25 図 140 ~ 155
第 2 号住居跡 第 16 図 109
第 3 号住居跡 第 26 図 156
図版 49 第 4 号住居跡 第 30・31 図 121 ~ 129
第 5 号住居跡 第 36 図 116 ~ 120
図版 50 第 7 号住居跡 第 47・48 図 170 ~ 176
第 48 図 177 ~ 186
図版 51 第 4 号溝跡 第 59 図 4 - 16
ピット 59 第 65 図 6
第 1 号河川跡 第 73 図 67

遺構外 第76図 128～131

第2号住居跡 第15図 87～90

第3号住居跡 第23図 133

図版52 第7号住居跡 第47図 167

第47図 168・169

土製品（弥生時代）

図版52 第7号住居跡 第47図 166

玉類（弥生時代）

図版52 遺構外 第76図 132

石製品（古墳時代後期以降）

図版52 遺構外 第77図 143

木製品（古墳時代前期以降）

図版53 第1号河川跡 第73図 75

獣骨・種子

図版53 第2号住居跡

第7号住居跡

第1号河川跡

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

1986（昭和61）年6月6日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会では、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、1995（平成7）年11月13日から1996（平成8）年1月19日にかけて遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、1996（平成8）年2月9日付け熊教社発第865号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡、諏訪木遺跡、箱田氏館跡、上之古墳群）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については、教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第94条第1項の規定に基づく本報告3地点分の埋蔵文化財発掘の通知は、代表者熊谷市長より2009（平成21）年6月12日及び11月17日、2014（平成26）年4月24日付けで提出された。本報告に係る発掘調査は、2009（平成21）年度に2回（第2・3次）、2014（平成26）年度に1回（第1次）、熊谷市教育委員会により実施された。発掘調査に関わる熊谷市教育委員会及び埼玉県教育委員会からの通知は、以下のとおりである。

2009（平成21）年度	第2次調査	2009（平成21）年10月22日付け熊教社発第273号
		2009（平成21）年10月28日付け教生文第4－733号
	第3次調査	2010（平成22）年1月4日付け熊教社発第1524号
		2010（平成22）年1月5日付け教生文第4－969号
2014（平成26）年度	第1次調査	2014（平成26）年5月19日付け熊教社埋発第63号
		2014（平成26）年5月28日付け教生文第4－225号

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

2009（平成21）年度

本遺跡における2009（平成21）年度の発掘調査は、計3回実施されたが、今回報告するのは、第2次及び第3次調査についてである。第1次調査については、『前中西遺跡Ⅷ』（熊谷市教育委員会2013）で報告済である。第2次調査の期間は、2009（平成21）年10月30日から2010（平成22）年1月29日までであり、調査面積は、675.5㎡である。第3次調査は、調査地点が2箇所（A・B区）あり、今回報告するのはA区である。B区も含めた調査期間は、2010（平成22）年1月5日から3月31日までであり、A区の調査面積は、360㎡である。

発掘調査は、第2・3次ともまず重機で表土を掘削し、作業員を導入して遺構確認作業を行った。そして、遺構の掘削、土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行い、これらの作業が終了した後、遺構平面図の作成、調査区の全景写真撮影を行った。その後、重機で埋め戻しを行い、現場におけるすべての作業を終了した。

2014（平成26）年度

2014（平成26）年度の発掘調査は、計2回実施されており、今回報告するのは第1次調査についてである。第1次調査は、調査区が3箇所あり、今回報告するのは、第3区である。第1・2区については、次年度以降に報告予定である。第1次調査期間は、未報告の第1・2区も含め、2014（平成26）年5月22日から8月29日までである。第3区の調査面積は、260㎡である。

発掘調査は、まずすべての調査区の表土を掘削し、作業員を導入して遺構確認作業を行った。遺構の掘削などの作業は、第1・2区から着手し、終了の目途がついた7月中旬から第3区に着手した。作業内容は、2009（平成21）年度と同じであり、作業終了後の8月下旬に重機による埋め戻しを行い、現場におけるすべての作業を終了した。

（2）整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、2021（令和3）年4月から2023（令和5）年3月まで実施した。作業は、2021（令和3）年4月から7月まで遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行い、併行して遺構の図面整理・デジタルトレース、遺構の版組を行った。2021（令和3）年8月から2022（令和4）年3月までは、遺物の実測・拓本、5月から7月中旬までは遺物のトレースを行い、7月下旬から8月下旬まで遺物の版組を作成した。9月からは遺物の写真撮影及び写真図版の割付け、10・11月は原稿執筆、12月は編集作業を行った。そして、2023（令和5）年1月末に印刷業者選定の後、印刷に入り、数回の校正を行い、3月中旬に報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

（1）発掘調査

2009（平成21）年度

教育長	野原 晃	主事	山下 祐樹
教育次長	柴崎 久	発掘調査員	長谷川一郎
社会教育課長	斉木 千春	発掘調査員	原野 真祐
社会教育課担当副参事	小林 英夫		
社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井 端		
社会教育課文化財保護係主査	寺社下 博		
主査	吉野 健		
主査	鯨井 敬浩		
主任	松田 哲		
主任	蔵持 俊輔		

2014（平成26）年度

教育長	野原 晃
教育次長	米澤ひろみ
社会教育課長	岩上 精純
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	森田 安彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	吉野 健
文化財保護係主査	杉浦 朗子
主査	松田 哲
主査	小島 洋一
主任	蔵持 俊輔
主任	山下 祐樹
主任	腰塚 博隆
発掘調査員	原野 真祐

（2）整理・報告書作成

2021・2022（令和3・4）年度

教育長	野原 晃
教育次長	鯨井 敏朗（2021（令和3）年度） 権田 宣行（2022（令和4）年度）
社会教育課長	三友 孝二（2021（令和3）年度） 野村 和弘（2022（令和4）年度）
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野 健
社会教育課主幹兼文化財保護係長	松田 哲（2021（令和3）年度）
社会教育課副課長兼文化財保護係長	松田 哲（2022（令和4）年度）
社会教育課文化財保護係主査	星 祥子
主査	小島 洋一
主査	山下 祐樹
主査	腰塚 博隆
主任	新井 端
主事	山川愛希子
主事	山川 守男
主事	大野美知子
主事	中山 浩彦

II 遺跡の立地と環境

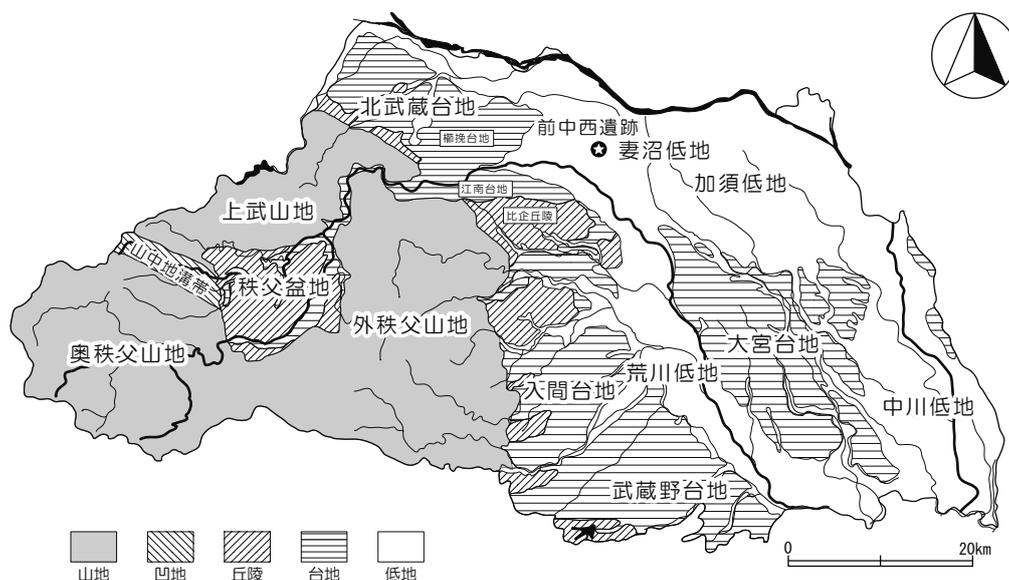
熊谷市は、埼玉県北部に位置し、県北最大の人口を有する。総面積 159.82 km²を測る市の北側を利根川、南側を荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、関東地方の二大河川が最も近接する地域にある。地形的には、西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第1図）。

櫛挽台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称であり、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東は JR 高崎線籠原駅から北へ約 2 km の西別府付近にまで延びている。標高は約 36 ~ 54 m を測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。櫛挽台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新期荒川扇状地が広がる。新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する前中西遺跡は、その新期荒川扇状地の扇端部、標高 24 m 前後に立地している。遺跡は、熊谷市上之、中西三・四丁目、箱田に所在し、JR 東日本熊谷駅からは北東へ約 2 km、荒川からは北へ約 3 km、利根川からは南へ約 6 km の距離にある。

次に前中西遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第2図）。

本遺跡周辺では、縄文時代後期から遺跡が確認されている。東に隣接する諏訪木遺跡（2）では、過去に行われた熊谷市遺跡調査会による調査（熊谷市遺跡調査会 2001）、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002・2007）において後期中葉の加曾利 B 式期から晩期中葉の安行 3 d 式までの遺構・遺物が確認されている。特に後者の調査では、遺構に伴って大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。また、西に隣接する中西遺跡（4）でも、後期中葉の加曾利 B 式期から晩期中葉の安行 3 d 式までの遺構・遺物が確認されており、北東約 2 km に所在する古宮遺跡（11）では、晩期前葉から中葉までに限定された遺物包含層が確認さ



第1図 埼玉県の地形図

れている。当段階の遺跡は、この他にも市北部の妻沼低地上に西城切通遺跡（37）、場違ヶ谷戸遺跡（42）などがある。晩期中葉以降は、途絶えてしまうが、本遺跡及び櫛挽台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）では、晩期末の浮線文土器が検出されている。いずれの遺跡も遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみとれる資料である。

弥生時代は、まず初期段階の前期末から中期前半は、隣接する藤之宮遺跡（3）の2002（平成14）年度に実施した調査で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。当段階の遺跡は、櫛挽台地直下ないし妻沼低地北部の低地上に集中し、横間栗遺跡、飯塚遺跡、飯塚南遺跡、先の深谷市上敷免遺跡（いずれも地図未掲載）などで再葬墓が確認されているにすぎない。なお、上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片が出土している。

中期中葉になると、これまでの状況と一変して集落が本遺跡周辺に集中して出現する。後期前半まで長期間続く本遺跡の他に、東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（10）、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（86）、独立棟持柱建物跡が確認された古宮遺跡などが出現し、本格的な農耕集落が展開される。池上遺跡は、出土遺物67点が2017（平成29）年に、小敷田遺跡は、方形周溝墓出土土器15点が2019（平成31）年に県の有形文化財（考古資料）に指定されている。中期後半は、前段階に続いて営まれる本遺跡の他に、諏訪木遺跡や北島遺跡（24）などが出現する。特に本遺跡は、これまでの成果から当地域における拠点集落であることが判明しており、中期後半以降、長野県北部を中心とする栗林式土器文化圏の影響を強く受けるようになり、長野県外では初の事例となった礫床木棺墓や大阪湾型銅戈を忠実に模倣した全国初の石戈などが確認されている。北島遺跡では、大規模集落の他に水田や水路、堰などの生産域も確認されており、本遺跡とともに東日本屈指の遺跡として注目される。後期以降については、遺跡数が急激に減少し、本遺跡以外確認例がなく、遺跡は台地や丘陵へと移っていく傾向にある。

古墳時代になると、再度低地上への進出が活発化し、前期の遺跡は、近年確認例が増加している。本遺跡以外にも周辺では、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡などで集落跡が確認されており、方形周溝墓による墓域も確認されている。また、中西遺跡では、方形周溝墓の他に前方後方型周溝墓も確認されている。公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により行われた諏訪木遺跡の調査では、河川跡から大量の木製品が出土しており、注目すべきは板倉造り建物の「樋部倉矧」と呼ばれる特殊な加工が施された壁板材が検出されたことが挙げられる（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）。中条遺跡（29）では、木製の農具が検出されており、行田市小敷田遺跡では畿内や東海地方の外来系土器が多数出土している。この他にも古墳時代前期は、たくさん確認例があるが、遺跡は主に利根川流域沿いの自然堤防上に分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、前段階に続いて藤之宮遺跡や中条遺跡などで集落跡が確認されている。また、5世紀末頃の鎧塚古墳や女塚1号墳（C：中条古墳群）、市指定史跡の横塚山古墳（D：奈良古墳群）などの古墳も築造されている。鎧塚古墳は、全長43.8mの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡二箇所から須恵器高坏型器台（県指定文化財）が出土している。女塚1号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長46mを測る。二重周溝を持ち、盾持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳は、B種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			49	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安
1	前中西遺跡	縄文晩、弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	50	別府条里遺跡	奈良・平安
2	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	51	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中・近世
3	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世	52	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
4	中西遺跡	縄文後・晩、弥生中、古墳前	53	奈良氏館跡	平安末～中世
5	箱田氏館跡	平安末～中世	54	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
6	成田氏館跡	中世	55	寺東遺跡	縄文前～後
7	平戸遺跡	弥生中、古墳後、平安、中・近世	56	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
8	久下氏館跡	中世	57	玉井陣屋跡	平安末～中世
9	市田氏館跡	中世	58	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
10	池上遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安	59	水押下遺跡	古墳後
11	古宮遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世	60	稲荷木上遺跡	古墳後
12	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世	61	下河原中遺跡	奈良・平安
13	宮の裏遺跡	古墳後	62	本代遺跡	古墳後、近世
14	成田遺跡	古墳後	63	下河原上遺跡	近世
15	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安	64	天神前遺跡	古墳中・後、中世
16	河上氏館跡	中世	65	兵部裏屋敷跡	中世
17	八幡上遺跡	古墳	66	御蔵場跡	近世
18	出口下遺跡	古墳後	67	田角遺跡	平安
19	熊谷氏館跡	中世	68	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
20	宮町遺跡	奈良・平安、中世	69	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
21	肥塚館跡	中世	70	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
22	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	71	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
23	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	72	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
24	北島遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安、中世	73	村岡館跡	平安末
25	上中条中島遺跡	古墳前・後、奈良・平安	74	村岡北西原遺跡	平安
26	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	75	北西原遺跡	奈良・平安
27	赤城遺跡	古墳、奈良・平安	76	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
28	東浦遺跡	古墳前、平安	77	西浦遺跡	奈良・平安
29	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世	78	腰廻遺跡	奈良・平安
30	中条氏館跡	中世	79	北方遺跡	奈良・平安
31	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	80	宮前遺跡	奈良・平安
32	先載場遺跡	古墳後、奈良	81	西浦町遺跡	奈良・平安
33	八幡間遺跡	古墳後、奈良	82	宮前町遺跡	奈良・平安
34	東城館跡	平安	83	宮町遺跡	奈良・平安
35	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	84	仲町遺跡	奈良・平安
36	西城館跡	平安	85	旭町遺跡	奈良・平安
37	西城切通遺跡	縄文後・晩	行田市		
38	鶴森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	86	小敷田遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安
39	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	古墳群		
40	鷺ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安	熊谷市		
41	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	A	上之古墳群	古墳後～末
42	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	B	肥塚古墳群	古墳後～末
43	宮前遺跡	奈良・平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
44	実盛館	平安	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
45	道ヶ谷戸条里遺跡	縄文後、奈良	E	玉井古墳群	古墳後
46	横塚遺跡	古墳前、平安	F	原島古墳群	古墳後
47	東通遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
48	西通遺跡	古墳後	H	村岡古墳群	古墳後

後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落は規模が大小あるが、多数営まれる。そして、これらは奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造され始める。低地上では、本遺跡北東に位置する上之古墳群（A）のほかに、肥塚古墳群（B）、中条古墳群、奈良古墳群、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、石原古墳群（G）などがある。これらは概ね6世紀から7世紀末ないし8世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群（中条古墳群など）では、埋葬施設に角閃石安山岩、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げら

れる。

奈良・平安時代は、前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多い。規模は大小あるが、概ね大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。第19地点の調査では、二重の堀が巡る台形区画内から建物跡が検出されており、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また、遺物では「篁」の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめ、多くの施釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。また、池上遺跡では整然と配置された9世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、諏訪木遺跡では区画溝内に四面庇の付いた大型掘立柱建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたこと、旧河川跡から土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われていたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡が集中する。

集落以外では、北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡(15)、行田市南河原条里遺跡(地図未掲載)などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡が残る。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも館跡が多数みられる。成田氏館跡(6)、久下氏館跡(8)、市田氏館跡(9)、河上氏館跡(16)、熊谷氏館跡(19)、肥塚館跡(21)、中条氏館跡(30)などがある。このうち、本遺跡北東に位置する成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされており、館跡に隣接する諏訪木遺跡で行われた過去の調査では、成田氏関連と思われる遺構や遺物が相次いで確認されている。公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による2001(平成13)年度の調査では、館跡から南に約300mの所で中世の居館と思われる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている(公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002)。また、2002(平成14)年度の調査では、井戸枠に器高70cmを超える常滑大甕を使用した井戸跡が確認されており、常滑大甕は13世紀中頃のものとして推定されている(公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008)。そして、熊谷市教育委員会による2008(平成20)年度の調査では、埴輪を持つ6世紀代の古墳の周溝が埋没した後に掘削された長方形の土坑から大量の埋蔵銭が検出されている。埋蔵銭は、15世紀前半を上限とし、枚数がおおよそ14,000枚と膨大であることから成田氏に関連するものであることは間違いない(熊谷市教育委員会2020)。

中世段階については、諏訪木遺跡で成田氏を想定させる遺構群や遺物が確認されていることからその一端が明らかになりつつあるが、全体像を把握するには、まだ資料が不足している。また、近世段階についても中世と同様であり、諏訪木遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ 遺跡の概要

1 調査の方法

今回報告する前中西遺跡の調査は、第1章でも述べたとおり、2009（平成21）年度に2回（第2・3次調査）、2014（平成26）年度に1回（第1次調査）実施されており、報告する地点は、計3地点である。

いずれの調査もまず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行った。手掘り作業終了後は、遺構毎に実測、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。実測作業にあたっては、あらかじめ区画整理地内全体を網羅するように日本測地系で設定された一辺5mのグリッド方式に従い、交点を基準に水糸で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

今回報告する3つの調査地点のグリッドは、東西が126から147まで、南北は149から157までが該当する。区画整理地内全体のグリッド図については、過去に刊行した本遺跡の報告（熊谷市教育委員会2002・2003）に記載されていることから本報告では省略した。

2 検出された遺構と遺物

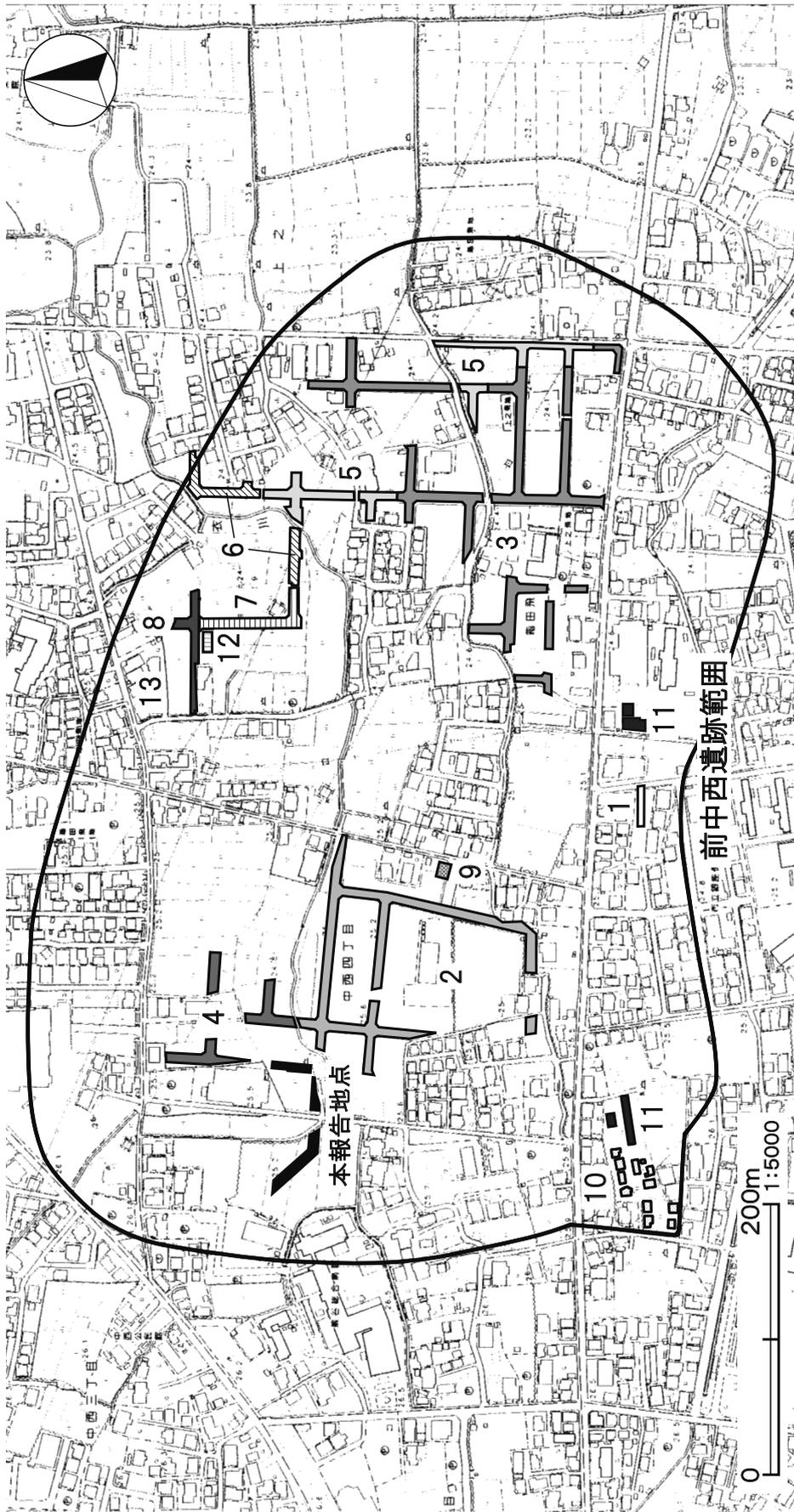
今回報告する3つの調査地点は、遺跡範囲西側中央付近に位置する（第3図）。本報告にあたっては、2009（平成21）年度第2次調査区を第1区、同年度第3次調査区を第2区、2014（平成26）年度第1次調査第3区を第3区と設定した。全調査区を通して検出された遺構は、住居跡8軒、竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡1棟、柵列跡2列、溝跡4条、土坑14基、土器棺墓1基、河川跡1条、ピット83基である（第4～6図）。これらの遺構の大半は、第1区から検出された。

住居跡は、第1区で7軒（1～7号）、第3区で1軒（8号）の計8軒が検出された。第1区で検出された1～7号は、ほぼ全面に点在し、第3区の8号は調査区中央付近の西側に位置する。重複していたのは、第1区南東に位置する6・7号のみである。全形を検出できたものはないが、規模は長軸7m、短軸5m前後を測るものが多い。平面プランは、3号のみ隅丸方形であるが、その他は隅丸長方形を呈するものが多い。2・4号は拡張が行われており、2・3号は壁の外周に浅いテラス状の段が設けられていた。各住居跡からは、大量の遺物が出土した。出土遺物は、弥生土器、石器・石製品、土製品がある。土器は、各住居跡から大量の破片とともに時期を特定できるものが出土した。特に3・7号では、残存状態の良好な土器が多数出土した。石器・石製品は、8号を除く住居跡から出土した。打製石器や磨石などが中心となるが、2・7号では磨製石鎌、3・7号では磨製石剣が出土した。土製品は、7号から紡錘車が出土した。時期は、弥生時代中期後半から末までに収まるが、中期後半は時期差がみられた。

竪穴状遺構は、第1区中央付近で1基検出された。規模・平面プランが住居跡に似るが、浅く、住居とは言い難い構造であることから竪穴状遺構とした。時期は、古墳時代後期と思われる。

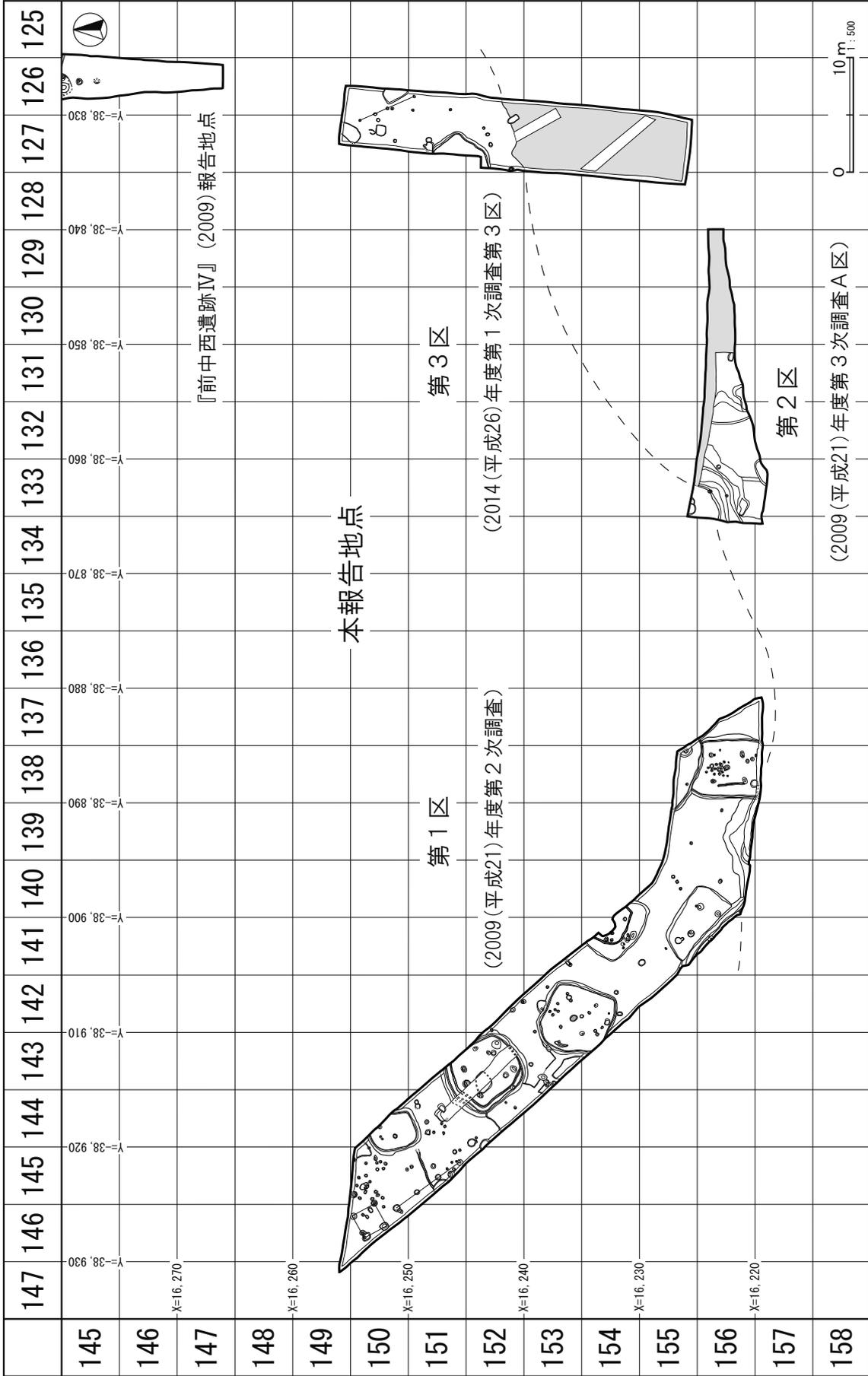
掘立柱建物跡は、第1区北西部で1棟検出された。1×1の建物跡であるが、西側は調査区外に延びる可能性がある。出土遺物はないが、時期は古墳時代後期と思われる。

柵列跡は、第1区と第3区で各1列検出された。第1区で検出された1号は北西部、第3区の2号

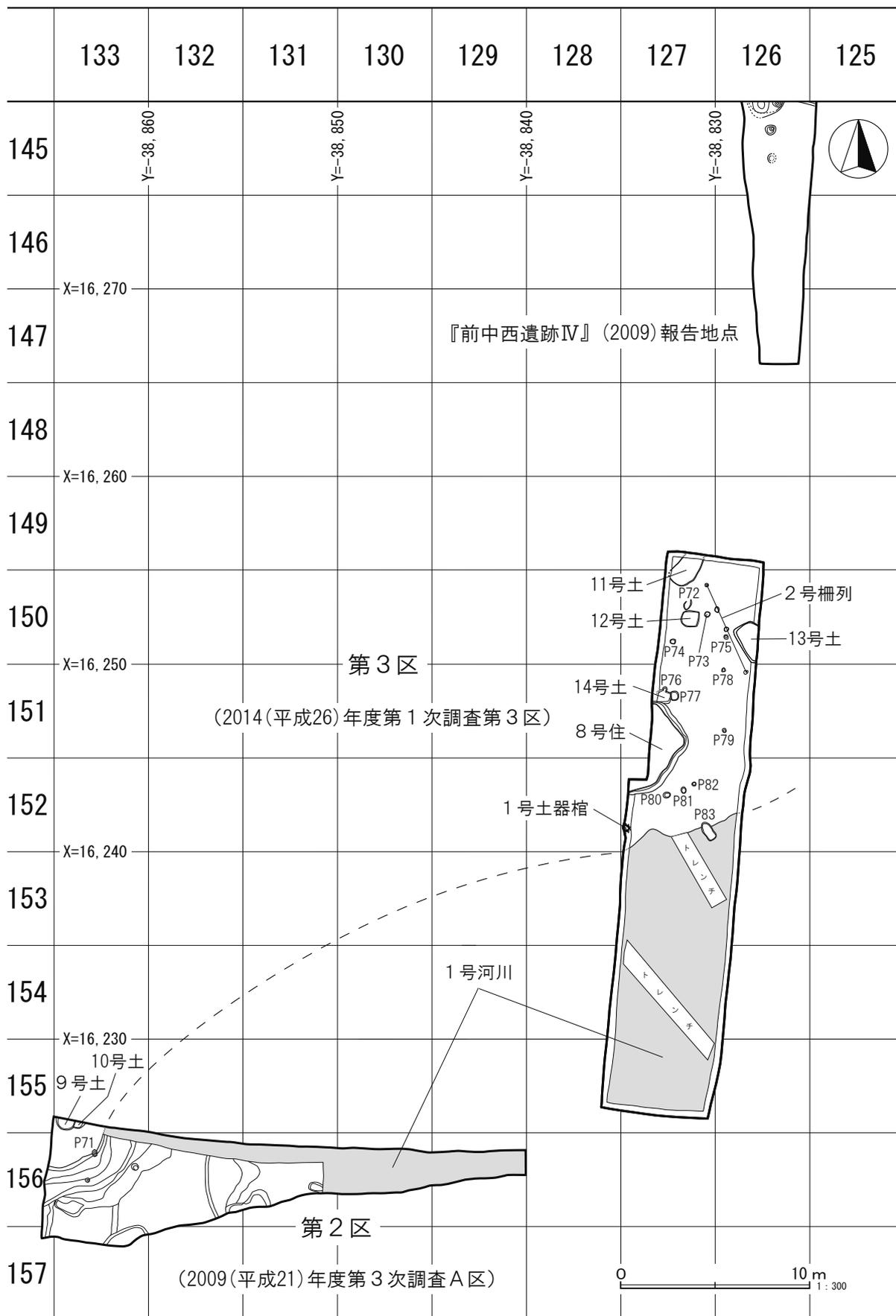


- 1 『前中西遺跡Ⅰ』(1999)報告地点(熊谷市前中西遺跡調査会)
- 2 『前中西遺跡Ⅱ』(2002)報告地点(熊谷市教委)
- 3 『前中西遺跡Ⅲ』(2003)報告地点(熊谷市教委)
- 4 『前中西遺跡Ⅳ』(2009)報告地点(熊谷市教委)
- 5 『前中西遺跡Ⅴ』(2010)報告地点(熊谷市教委)
- 6 『前中西遺跡Ⅵ』(2011)報告地点(熊谷市教委)
- 7 『前中西遺跡Ⅶ』(2012)報告地点(熊谷市教委)
- 8 『前中西遺跡Ⅷ』(2013)報告地点(熊谷市教委)
- 9 『前中西遺跡ほか3遺跡』(2013)報告地点(熊谷市教委)
- 10 『前中西遺跡Ⅷ』(2014)報告地点(熊谷市前中西遺跡調査会)
- 11 『前中西遺跡Ⅸ』(2016)報告地点(熊谷市遺跡調査会)
- 12 『前中西遺跡Ⅹ』(2016)報告地点(熊谷市前中西遺跡調査会)
- 13 『前中西遺跡Ⅺ』(2018)報告地点(熊谷市教委)

第3図 調査地点位置図



第4図 調査区全体図



第6図 第2・3区全測図

は北端に位置する。いずれも検出された柱穴は、4つである。出土遺物に伴うものがないが、時期は古墳時代後期と思われる。

溝跡は、第1区で4条（1～4号）検出された。1号は北西部、2・3号は中央付近、4号は南東部に位置する。規模などはバラツキがみられるが、1・3号は北東から南西方向、2・4号は北西から南東方向に走る。伴う遺物が出土したのは、3号のみであり、時期はすべて古墳時代後期と思われる。

土坑は、第1区で8基（1～8号）、第2区で2基（9・10号）、第3区で4基（11～14号）の計14基が検出された。第1区の1～8号は北西端から中央付近まで、第2区の9・10号は北西端、第3区の11～14号は北側に位置する。全形を検出できたものは少ないが、平面プランは円形、楕円形、隅丸長方形を呈するものがある。出土遺物は少ないが、時期は弥生時代中期後半～末か古墳時代後期に属すると思われる。

土器棺墓は、第3区中央付近の西側で1基検出された。棺身に大型の甕、棺蓋に壺を2個体使用しており、円形の墓壇内に横位に埋設されていた。骨片などは検出されなかった。時期は、弥生時代中期後半と思われる。

ピットは、83基検出された。全調査区で検出されたが、第1区が最も多い。第1区は、ほぼ全面に70基が点在するが、北西部に集中する。第2区は、北西部で1基のみみられた。第3区は、北側に12基が点在する。遺物は、少数のピットから図示不可能なものも含め、縄文時代晩期末、弥生時代中期後半、古墳時代後期の土器などが出土した。時期を特定できるものはないが、検出された他の遺構と同時期の弥生時代中期後半～末か古墳時代後期のいずれかに属すると思われる。

河川跡は、全調査区で検出された。第1区は南東部、第2区はほぼ全面、第3区は南側半分で検出され、西から北東方向へ蛇行していることが判明した。遺物は、縄文時代後・晩期から弥生時代中期後半～末、古墳時代前・後期まで出土しており、最も多いのは弥生時代中期後半である。出土遺物は、縄文時代後期後半及び晩期末の土器、弥生時代中期後半～末の土器・石器、古墳時代前・後期の土師器、前期以降の木製品がある。

遺構外出土遺物は、縄文時代晩期末から弥生時代中期初頭～前半、中期後半～末、古墳時代前・後期、平安時代、中・近世まで幅広く検出されており、最も多いのは弥生時代中期後半～末の遺物である。出土位置は、時代・時期に関係なく、第1区からの出土が多い。出土遺物は、縄文時代晩期末の土器、弥生時代中期初頭～前半の土器、中期後半～末の土器・石器・玉類、古墳時代前期の土師器、後期の須恵器・土師器・石製品、平安時代の土器、中世の古銭、近世の陶磁器がある。なお、本報告では、弥生時代中期後半～末と古墳時代後期以外の遺構は、明確には検出されていない。

IV 遺構と遺物

1 住居跡

第1号住居跡（第7図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）144・145－150・151グリッドに位置する。床面北側中央付近を単独ピット30に切られている。北東隅付近は、調査区外にある。

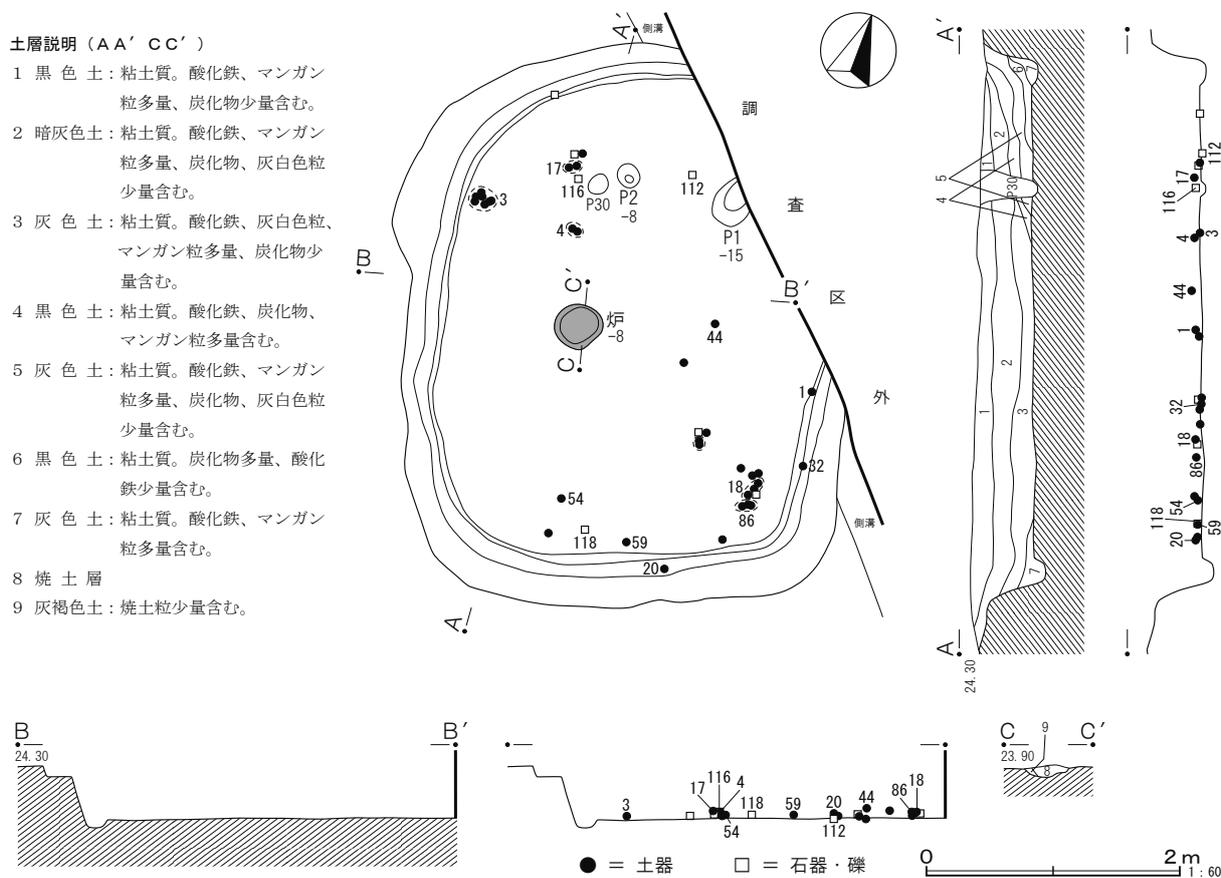
規模は、長軸4.49m、短軸3.5m程を測る。平面プランは、隅丸長方形を呈する。主軸方向は、N－18°－Wを指す。確認面からの深さは、最大0.49mを測る。床面は概ね平坦であり、掘り方はみられなかった。覆土は、7層（1～7層）確認された。ほぼ全層で炭化物が確認され、北壁付近で多く確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

壁溝は、調査区外にある北東隅付近は未確認であるが、おそらく全周すると思われる。幅は0.25m前後、床面からの深さは0.06m程を測る。

ピットは、2基検出された。いずれもその位置から支柱穴ではないと思われる。屋根などを支える柱穴であろうか。覆土は図示できなかったが、いずれも柱痕跡は認められなかった。

炉跡は、床面中央から西寄りに位置する。径0.35m前後のややいびつな円形を呈し、床面からの深さは0.08mを測る。覆土は、焼土層（8層）と掘り方（9層）が確認された。

貯蔵穴は、確認されなかった。



第7図 第1号住居跡

本住居跡では、遺物が大量に出土した。出土遺物（第8～10図）は、弥生土器壺（1・6～10・18～44）、甕（2～5・11～14・45～100）、甑（15）、高坏（16・101～104）、鉢（17・105）、筒形（106）、打製石斧（112）、搔器（113・114）、磨石（115・116・118）、磨石兼敲石（117）、砥石（119・120）がある。出土位置を図示した遺物は、主に北西部と南東部付近の床面直上、その他は覆土からの出土である。また、この他にも流れ込みで縄文時代晩期末の浅鉢（107～109）、古墳時代後期の土師器甕（110・111）が覆土から出土した。土器は、摩耗が著しいものが大半を占める。

1・6～10・18～44は、壺である。破片も含め、中部高地の栗林式系が多い。1は、残存状態の良好な細長の小型壺である。口縁部が逆ハの字に開き、細長の頸部はややすぼまる。胴部は、最大径を持つ中段付近がくの字状に膨らむ。外面の文様は、頸部にヘラ描きの煩雑な平行沈線が2条巡るのみである。調整は、頸部以下の内面は未確認であるが、その他は内外面ともにヘラミガキである。

6～10は、胴下部から底部までに収まる部位である。底部は、円柱状を呈するものが多い。調整は、すべて外面がヘラミガキ、内面はヘラナデであるが、10は内面にヘラナデ前に施されたハケメが一部残る。壺としたが、甕の可能性もある。

18～20は、口縁部から頸部までの破片である。外面の文様は、18・19の口縁端部に縄文が施文され、頸部にヘラ描きの平行沈線が巡る。縄文は、18がLR、19はRL単節縄文である。調整は、すべて内外面ともにヘラミガキであり、外面無文部上位は横位、下位は縦位に施されている。内面は、18・19が横位、20は上位が横位、下位は斜位に施されている。

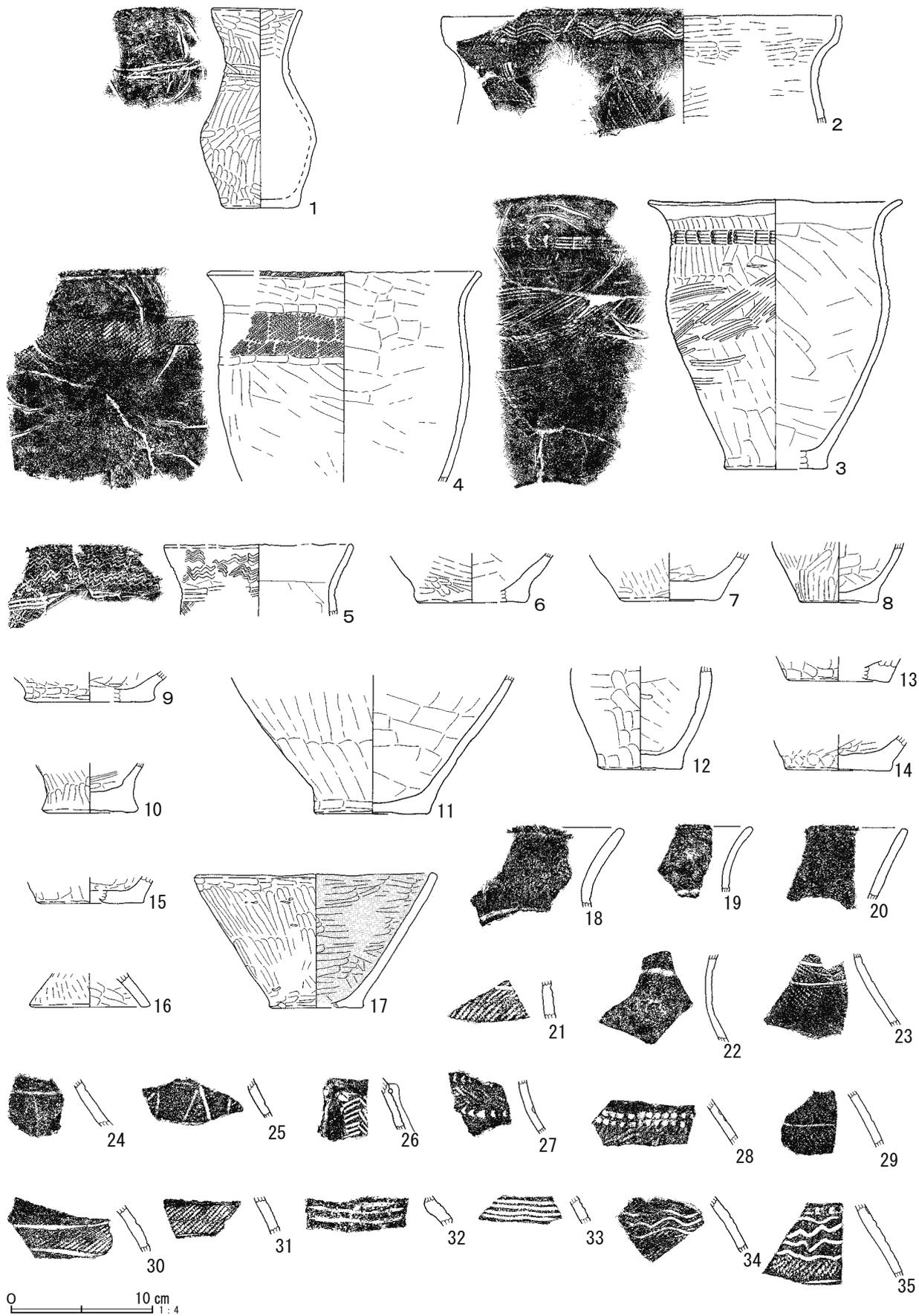
21～23は、頸部から肩部までに収まる破片である。頸部外面にヘラ描きの平行沈線が2条巡り、間に縄文が充填されている。縄文は、21・22がLR、23はRL単節縄文である。22は、上下ともに沈線が浅く、やや太い。21・23は、縄文が平行沈線の上下にはみ出ている。調整は、22の肩部外面無文部が不明、23は縦位のヘラミガキである。内面は、21が横位のヘラミガキ、22は不明、23は縦・斜位のヘラナデである。

24・25は、外面にヘラで上向きの鋸歯文が描かれた肩部片である。いずれも鋸歯文上にヘラ描きの平行沈線が巡り、鋸歯文内に25はLR単節縄文が充填されているが、24の縄文の有無は不明である。調整は、鋸歯文外の外面無文部がヘラミガキであり、24は方位不明、25は斜位に施されている。内面は、24が横位、25は横・斜位のヘラナデである。24は、胎土が粗い。

26は、外面に縦位の突帯が貼り付けられた肩部片である。突帯側面上位に焼成前穿孔を持つ。突帯上にカナムグラによる擬縄文が施文されており、脇はヘラで縦位の羽状文が描かれている。内面調整は、横位のヘラナデである。

27・28は、外面に刺突列が横位に2列巡る破片である。27は肩部、28は胴上部の破片である。刺突は、27が半円形、28は円形を呈する。27は、刺突列間にRL単節縄文が充填されており、以下は無文である。28は、刺突列上が無文、下はLR単節縄文か無節Lが施文されている。調整は、いずれも外面無文部が横位のヘラミガキ、内面は、27が縦・斜位、28は横位のヘラナデである。

29～32は、外面にヘラ描きの平行沈線が巡る胴上部片である。29は、RL単節縄文地に細かい平行沈線がやや間隔を空けて2条巡る。30・31は、2条の平行沈線間にLR単節縄文が充填されている。30は、平行沈線上下の無文部に斜・横位のヘラミガキが施されている。31は、沈線が細い。32は、や



第8图 第1号住居跡出土遺物(1)

や太い平行沈線が4条以上巡る。内面調整は、すべてヘラナデであり、30は横・斜位、その他は横位に施されている。32は、胎土が粗い。

33は、外面に2本一単位の櫛歯状工具による直線文が横位に巡る胴上部片である。直線文は、2条ないしそれ以上巡る。内面調整は、横位のヘラナデである。

34は、外面にヘラ描きの波状文が横位に巡る胴上部片である。LR単節縄文地に煩雑な波状文が3条巡る。沈線が細い。内面調整は、横・斜位のヘラナデである。

35・36は、外面にヘラ描きの平行沈線と横位の波状文ないし山形文が巡る破片である。35は胴上部、36は胴部中段の破片である。35は、LR単節縄文地に上から半円形の刺突列1列、煩雑な波状文4条、やや間隔を空けて平行沈線1条が巡る。36は、LR単節縄文地に平行沈線、横位の山形文4条が巡る。内面調整は、いずれも横・斜位のヘラナデである。

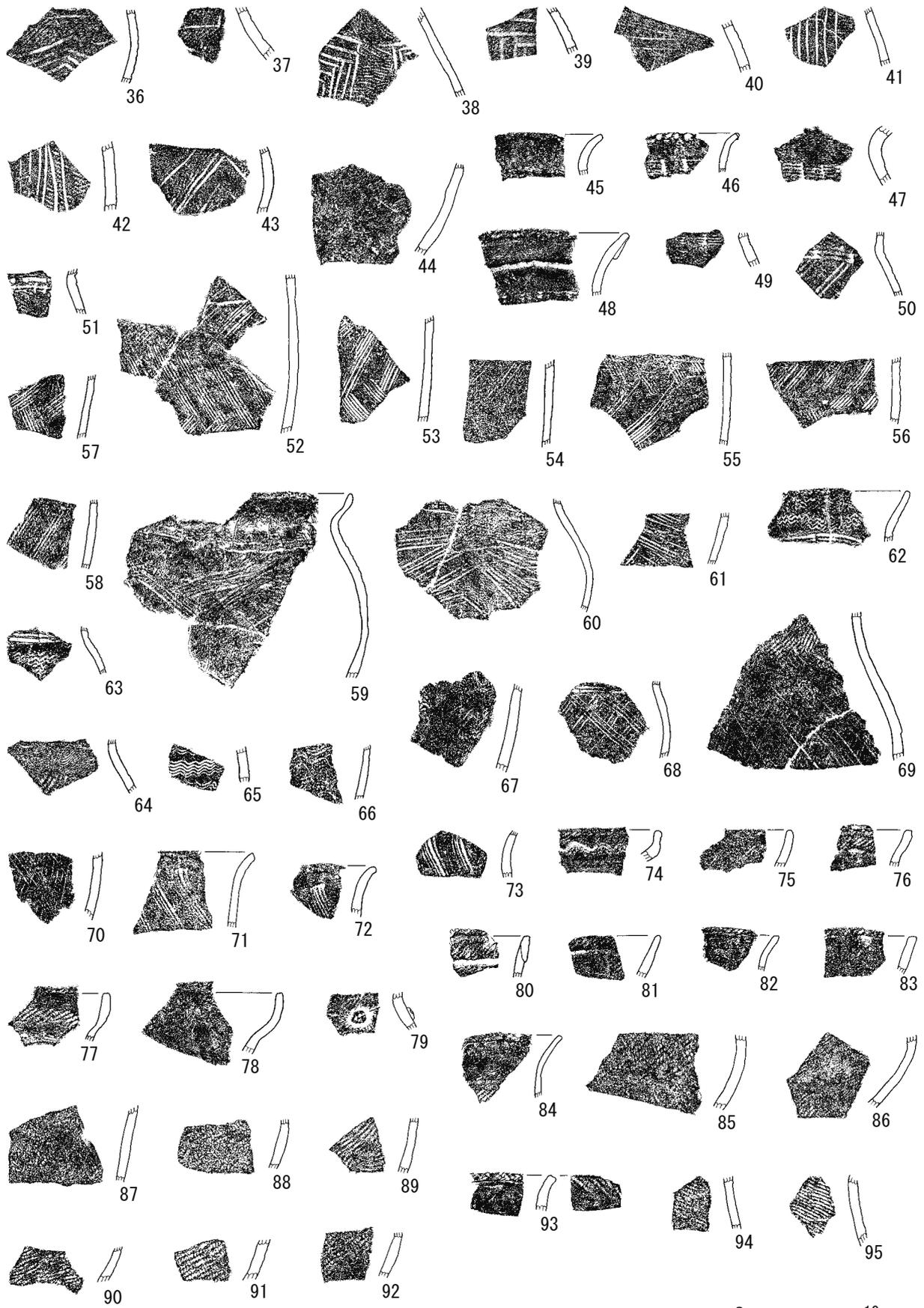
37～42は、外面にヘラで重四角文が描かれた破片である。37は肩部、38～41は胴上部、42は胴上部から中段までの破片である。37・38は、重四角文外にLR単節縄文が施文されており、37は縄文施文部に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。37・40は、沈線が細い。41・42は、地文にRL単節縄文が施文されている。内面調整は、38が不明であるが、その他はすべてヘラナデである。ヘラナデは、37・39・40・42は横位、41は横・斜位に施されている。

43は、外面にヘラで重三角文が描かれた胴部中段の破片である。LR単節縄文充填部と無文部を交互に配置している。調整は、外面無文部が不明、内面は横・斜位のヘラナデである。

44は、無文の胴下部片である。調整は、外面が斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。壺としたが、甕の可能性もある。

2～5・11～14・45～100は、甕である。2・3・5は、櫛歯状工具で文様が描かれた中部高地栗林式系の甕である。2は、大型甕の口縁部から胴上部までの部位である。口縁部が受け口状を呈し、頸部はすぼまる。胴部は、緩やかに膨らみ、中段より上に最大径を持つと思われる。外面の文様は、端部を含む口縁部にLR単節縄文が施文され、3本一単位の波状文1条が横位に巡る。頸部は、無文である。胴部は、口縁部と異なる4本一単位の櫛歯状工具で横位の羽状文が描かれている。頸部外面無文部と内面の調整は、ヘラミガキである。3は、残存状態が比較的良好である。最大径を持つ短い口縁部が大きく外反し、頸部はすぼまる。胴部は倒卵形、底部は円柱状を呈する。外面の文様は、頸部に4本一単位の竹管状工具による簾状文が横位に巡り、胴部は同一工具で煩雑な斜線文が描かれている。調整は、内外面ともに口縁部が横ナデ、頸部以下はヘラナデである。5は、小型甕の口縁部から胴上部までの部位である。破片62・68と同一個体である。口縁部が逆ハの字に開き、頸部はすぼまる。胴部は、膨らみが小さい。外面の文様は、3本一単位の櫛歯状工具で口縁部に波状文が2条、頸部に簾状文が横位に巡り、胴部は斜格子文が描かれている。調整は、内外面ともに口縁部が横ナデ、頸部以下はヘラナデである。4は、口縁部から胴下部までの部位である。最大径を持つ口縁部が逆ハの字に開き、頸部はすぼまる。胴部は、膨らみが小さい。外面の文様は、口縁端部と頸部以下にLR単節縄文が施文されている。調整は、内外面ともにヘラナデであるが、頸部以下の外面に施文された縄文の上下は横位に施されており、区画を意識している。

11～14は、胴下部から底部までに収まる部位である。底部は、円柱状を呈するものが多い。



第9图 第1号住居跡出土遺物(2)

調整は、すべて内外面ともにヘラナデであるが、14は外面に指頭圧痕も施されている。甕としたが、壺の可能性もある。

45～73は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた破片であり、45～70は中部高地栗林式系である。45～49は口縁部から胴上部までに収まり、頸部外面に簾状文が横位に巡る。櫛歯の数は、45・48が不明、その他は4本である。48は、口縁部が肥厚している。簾状文以外の外面文様は、46が口縁端部に刻み、48はLR単節縄文が施文されている。調整は、45・46の内外面、49の外面は不明であるが、47は内外面ともに横ナデ、48は口縁部外面が横ナデ、以下は斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラミガキ、49の内面は横位のヘラナデである。

50～58は、胴部外面に横位の羽状文が描かれた破片であり、頸部から胴部中段までに収まる。櫛歯の数は、50が2本、51は3本、52は6本、同一個体の53～58は7本である。羽状文以外の外面文様は、50・51が頸部に同一工具による簾状文が横位に巡る。51の簾状文は、煩雑である。胴上部外面の地文にRL単節縄文が一部施文されている。内面調整は、50が不明であるが、51・53～58は横・斜位のヘラミガキ、52は横・斜位のヘラナデである。

59～61は、胴部外面に縦位の羽状文が描かれた破片である。同一個体の59・60は口縁部から胴部中段までに収まり、61は胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、59・60が5本、61は3本である。羽状文以外の外面文様は、59が口縁端部にLR単節縄文が施文され、頸部は60も含め、同一工具による簾状文が横位に巡る。調整は、59の口縁部内外面が横ナデ、59・60の頸部以下の内面は横・斜位、61の内面は横位のヘラナデである。59は、胴上部内面に輪積痕がみられた。

62～67は、外面に波状文が横位に巡る破片である。62～65は口縁部から胴上部までに収まり、66・67は胴部中段から下部までの破片である。62は、5・68と同一個体である。櫛歯の数は、62・63が3本、64が4本、65が5本、66・67が2本である。波状文は、62が口縁部に2条、63・66・67は胴部に2条以上、64は頸部に1条、65は胴部に3条以上巡る。波状文以外の外面文様は、62が口縁端部にRL単節縄文が施文され、頸部は63も含め、同一工具による簾状文が横位に巡る。64は、波状文下にLR単節縄文が施文されている。調整は、62の口縁部内外面が横ナデ、頸部内面は横・斜位のヘラナデである。63・65は、外面無文部がヘラミガキであり、63は横位、65は横・斜位に施されている。内面は、いずれも横・斜位のヘラナデである。64の内面は、横位のヘラナデと思われる。66の内外面と67の外面は不明であるが、67の内面は、横・斜位のやや粗いヘラミガキである。

68～70は、胴部外面に斜格子文が描かれた破片であり、頸部から胴部中段までに収まる。68は、5・62と同一個体である。櫛歯の数は68が3本、その他は4本である。斜格子文以外の外面文様は、68の頸部に同一工具による簾状文が横位に巡り、69はLR単節縄文が施文されている。内面調整は、68・70が横・斜位のヘラナデ、69は横・斜位のヘラミガキである。

71～73は、横位の羽状文ないし斜線文が描かれた破片であり、口縁部から胴上部までに収まる。すべて同一個体である。櫛歯の数は、5本である。口縁端部にRL単節縄文が施文されている。調整は、外面が横ナデ、内面は横ナデ後に横位のヘラミガキが施されている。

74～79は、胴部外面にヘラでコの字重ね文が描かれた中部高地栗林式系と思われる破片である。74～78は、受け口状を呈する口縁部から頸部までに収まり、79は頸部から胴上部までの破片である。

74・75は、口縁部外面にヘラ描きの波状文1条が横位に巡り、74は口縁端部にLR単節縄文が施文されている。76・77は、口縁部外面にLR単節縄文が施文されているが、77は下位にのみ施文されている。78は、口縁端部にLR単節縄文が施文されている。79は、胴上部に円形の刺突が3つ刻まれたボタン状貼付文が付く。地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。調整は、74・75の内外面が不明、76は縄文上の口縁部外面が横ナデ、頸部外面は方位不明のヘラミガキ、内面は不明である。77・78は、内外面ともに口縁部が横ナデ、頸部は77が横・斜位、78は横位のヘラミガキである。79は、頸部外面が不明であるが、内面は斜・横位のヘラナデである。

80～95は、外面に縄文が施文された破片である。80～92はLR、93・94はRL単節縄文、95は無節Rである。LR単節縄文が施文された80～92は、80～84が口縁部から頸部まで、85・86は胴部中段から下部まで、87～92は胴下部の破片である。縄文は、80が肥厚した口縁部外面、81は口縁部外面、82・83は口縁端部、84は口縁端部と胴上部外面、85～91は外面全面、92は外面上位に施文されている。84は、胎土がやや粗い。RL単節縄文が施文された93・94は、93が口縁部から頸部まで、94は頸部から胴上部までの破片である。縄文は、93が口縁端部と口縁部内面、94は外面全面に施文されている。無節Rが施文された95は、頸部から胴上部までの破片である。縄文は、外面全面に施文されている。調整は、80・81の頸部外面と内面、82・93の内外面は、不明である。83～92・95は、ヘラナデであり、83・84は内外面ともに横位、85～87・90・91の内面は横位、88・89・92・95の内面は横・斜位、92の外面下位の無文部は斜位に施されている。94の内面は、横位のヘラミガキである。85は外面下位、91は内面下位に輪積痕がみられた。

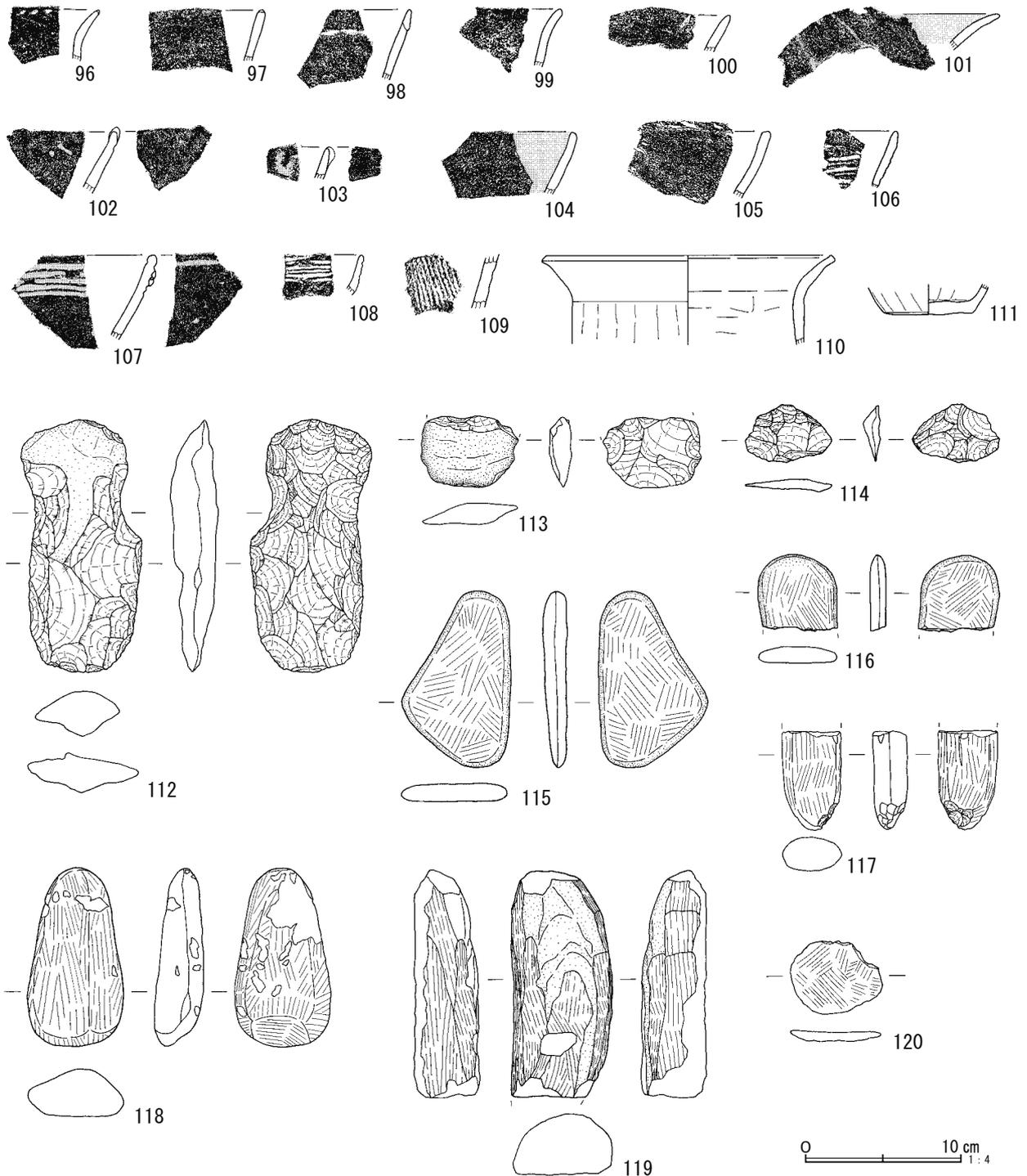
96～100は、ほぼ無文の口縁部から頸部までに収まる破片である。96のみ口縁端部に刻みが施されている。98は、口縁部が肥厚している。調整は、96・97の外面、98の内外面は不明であるが、内面は96が横位、97が横・斜位のヘラナデである。99は、外面が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。100は、内外面ともに横位のヘラナデである。

15は、甑の底部である。底面中央に焼成前穿孔を持つ。調整は、内外面ともにヘラナデである。

16・101～104は、高坏である。破片が多いが、すべて中部高地栗林式系と思われる。16は、ハの字に開く脚部である。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。101～104は、口縁部から坏部までに収まる破片である。102は口縁端部、103は口縁部外面に突起が付く。調整は、101が不明であるが、102～104は内外面ともにヘラミガキである。ヘラミガキは、102・103の内外面が横位、104は外面が横・斜位、内面は横位に施されている。いずれも内外面に赤彩が施されているが、103以外は、ほぼ剥落している。101は、胎土が粗い。102は、口縁部外面に種子圧痕と思われる凹みが1つみられた。

17・105は、鉢である。17は、ほぼ全形の分かる無文の鉢である。口縁部から体部が逆ハの字に開き、底部はやや円柱状を呈する。器壁が厚い。調整は、内外面ともにヘラミガキであり、外面の所々に輪積痕がみられた。内面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。105は、口縁部から体部までの破片である。口縁端部にRL単節縄文が施文されている。調整は、内外面ともにヘラミガキであり、外面は横・斜位、内面は横位に施されている。高坏の可能性もある。

106は、筒形土器の口縁部から頸部までの破片である。口縁部外面にカナムグラによる擬縄文が施文



第10図 第1号住居跡出土遺物(3)

され、以下に重四角文と思われるへラ描きの平行沈線が3条巡る。内面調整は、不明である。筒形土器としたが、壺の可能性もある。

112～120は、石器・石製品である。112は、粘板岩製の打製石斧である。完形品である。中段より上の両側面に抉り込みがある。113・114は、ホルンフェルス製の搔器である。いずれも完形品である。115～118は、磨石であり、117は敲石を兼ねる。115は完形、116・117は半分、118は所々を欠く。石材は、117のみ泥岩、その他は砂岩である。115・116は扁平、117は棒状を呈し、118は厚手である。119・120は、砂岩製の砥石である。いずれも大半を欠く。

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	6.4	14.3	5.4	ABDEHIN	にぶい黄橙色	B	80%	
2	弥生土器 甗	(28.4)	(6.8)	-	ABDHIK	にぶい黄褐色	B	口~胴 20%	内外面摩耗顕著。
3	弥生土器 甗	(18.1)	19.2	(7.3)	ABDHIK	暗灰黄色	B	70%	内外面所々摩耗顕著。
4	弥生土器 甗	(19.4)	(15.0)	-	ABDIKN	黒褐色	B	口~胴 40%	内外面大半摩耗顕著。
5	弥生土器 甗	(13.4)	(5.1)	-	ABDIKN	黒褐色	B	口~胴 20%	No.62・68 同一個体。
6	弥生土器 壺	-	(3.55)	(8.2)	ABDHIKN	外：褐灰 内：浅黄	B	底部 20%	内面、外面上位摩耗顕著。
7	弥生土器 壺	-	(3.45)	(7.2)	ABDEHIKN	外：浅黄橙 内：褐灰	B	底部 40%	内外面摩耗顕著。
8	弥生土器 壺	-	(4.3)	5.6	ABCDI	黒褐色	B	胴~底 80%	
9	弥生土器 壺	-	(2.2)	(9.2)	ABIKN	黒褐色	B	底部 20%	
10	弥生土器 壺	-	(3.55)	(6.8)	ABEIKN	にぶい黄褐色	B	底部 25%	
11	弥生土器 甗	-	(9.9)	8.2	ABCEIN	外：にぶい黄橙 内：黒	B	胴~底 60%	内面やや摩耗、外面摩耗顕著。
12	弥生土器 甗	-	(7.3)	6.0	ABHKN	黒褐色	B	胴~底 40%	内面輪積痕有。
13	弥生土器 甗	-	(1.7)	(7.4)	ABIKN	褐灰色	B	底部 25%	
14	弥生土器 甗	-	(2.6)	7.5	ABCDHIK	外：にぶい黄橙 内：灰	B	底部 100%	
15	弥生土器 甗	-	(1.9)	(7.6)	ABHKN	灰黄色	B	底部 30%	内外面やや摩耗。
16	弥生土器 高坏	-	(2.45)	(8.6)	ABDHKN	橙 色	B	脚部 20%	外面摩耗顕著。
17	弥生土器 鉢	(17.2)	9.55	(6.6)	ADEIK	外：黒褐 内：灰黄	B	25%	内外面所々摩耗。内面赤彩、ほぼ剥落。外面輪積痕有。
18	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHKN	浅黄橙色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
19	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDIK	にぶい橙色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
20	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIK	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	外面摩耗顕著。
21	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIK	褐灰色	B	頸部片	
22	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	頸~肩部片	内外面摩耗顕著。
23	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	褐灰色	B	頸~肩部片	
24	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIKN	明赤褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
25	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	浅黄色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
26	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIK	浅黄色	B	肩部片	内面摩耗顕著。突帯側面焼成前穿孔有。
27	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIK	灰黄色	B	肩部片	外面やや摩耗。
28	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
29	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHKN	外：黄灰 内：浅黄橙	B	胴上部片	
30	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰褐色	B	胴上部片	
31	弥生土器 壺	-	-	-	ABIN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	胴上部片	
32	弥生土器 壺	-	-	-	ABEN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
33	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
34	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	胴上部片	内面やや摩耗。
35	弥生土器 壺	-	-	-	ABIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
36	弥生土器 壺	-	-	-	ABIKN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	
37	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIK	灰白色	B	肩部片	内外面やや摩耗。縄文施文部赤彩、ほぼ剥落。
38	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
39	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEIKN	黒褐色	B	胴上部片	
40	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
41	弥生土器 壺	-	-	-	ABIKN	外：褐灰 内：にぶい黄橙	B	胴上部片	内面やや摩耗。
42	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上~中片	内面やや摩耗。
43	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	浅黄色	B	胴中段片	外面摩耗顕著。
44	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	橙 色	B	胴下部片	内面、外面大半摩耗顕著。
45	弥生土器 甗	-	-	-	ABCDN	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
46	弥生土器 甗	-	-	-	ABCDIK	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
47	弥生土器 甗	-	-	-	ABDHIKN	黒褐色	B	口~頸部片	内面摩耗顕著。
48	弥生土器 甗	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	口~頸部片	内面摩耗顕著。
49	弥生土器 甗	-	-	-	ABIMN	にぶい褐色	B	頸~胴上片	内外面摩耗顕著。
50	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIKMN	灰黄褐色	B	頸~胴上片	内外面摩耗顕著。
51	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	頸~胴上片	内面やや摩耗。
52	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIK	黒褐色	B	胴中段片	内面やや摩耗。
53	弥生土器 甗	-	-	-	ABEHIK	黒褐色	B	胴中段片	No.54~58 同一個体。
54	弥生土器 甗	-	-	-	ABEHIKN	黒褐色	B	胴中段片	内面やや摩耗、外面摩耗顕著。No.53・55~58 同一。
55	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	No.53・54・56~58 同一個体。
56	弥生土器 甗	-	-	-	ABEHIK	黒褐色	B	胴中段片	外面摩耗顕著。No.53~55・57・58 同一個体。
57	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	No.53~56・58 同一個体。
58	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	No.53~57 同一個体。
59	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIKN	にぶい褐色	B	口~胴中片	外面摩耗顕著。No.60 同一。胴上部内面輪積痕有。
60	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIKN	外：褐 内：にぶい褐	B	頸~胴中片	内面、外面上位摩耗顕著。No.59 同一個体。
61	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	胴中~下片	
62	弥生土器 甗	-	-	-	ABDIKN	黒褐色	B	口~頸部片	No.5・68 同一個体。
63	弥生土器 甗	-	-	-	ABIKN	黒褐色	B	頸~胴上片	
64	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	頸~胴上片	内外面摩耗顕著。
65	弥生土器 甗	-	-	-	ABEIN	黒褐色	B	胴上部片	内面やや摩耗。
66	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIN	外：灰黄褐 内：にぶい赤褐	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
67	弥生土器 甗	-	-	-	ABEIKN	外：にぶい橙 内：黒褐	B	胴中~下片	外面摩耗顕著。
68	弥生土器 甗	-	-	-	ABDIKN	黒褐色	B	頸~胴中片	内面摩耗顕著。No.5・62 同一個体。
69	弥生土器 甗	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙 黒褐	B	頸~胴中片	内外面やや摩耗。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
70	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIN	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	B	胴中段片	内面やや摩耗。
71	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIN	にぶい黄褐色	B	口～胴上片	内外面摩耗顕著。No.72・73 同一個体。
72	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	No.71・73 同一個体。
73	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸部片	内面摩耗顕著。No.71・72 同一個体。
74	弥生土器 甕	-	-	-	ABEKN	灰白色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。
75	弥生土器 甕	-	-	-	ABEKN	にぶい黄褐色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。
76	弥生土器 甕	-	-	-	ABCEIN	外：浅黄褐色 内：灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
77	弥生土器 甕	-	-	-	ABHK	黒褐色	B	口～頸部片	
78	弥生土器 甕	-	-	-	ABDEIN	浅黄褐色	B	口～頸部片	内外面大半摩耗顕著。
79	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	外面摩耗顕著。
80	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHKN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
81	弥生土器 甕	-	-	-	ABEIKN	浅黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
82	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHKN	にぶい褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
83	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	暗褐色	B	口～頸部片	
84	弥生土器 甕	-	-	-	ABIN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内面やや摩耗。
85	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
86	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIKN	黄灰色	B	胴中～下片	内面摩耗顕著。
87	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
88	弥生土器 甕	-	-	-	ABIKN	にぶい橙色	B	胴下部片	外面摩耗顕著。
89	弥生土器 甕	-	-	-	ABIKN	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	B	胴下部片	
90	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	外面やや摩耗。
91	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	B	胴下部片	内面輪積痕有。
92	弥生土器 甕	-	-	-	ABIK	灰黄褐色	B	胴下部片	
93	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIN	橙 色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
94	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	外面摩耗顕著。
95	弥生土器 甕	-	-	-	AHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
96	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHK	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	外面摩耗顕著。
97	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIK	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	外面摩耗顕著。
98	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKM	外：浅黄褐色 内：暗灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
99	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIK	黒褐色	B	口～頸部片	外面やや摩耗。
100	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHK	外：黄灰 内：浅黄褐色	B	口縁部片	内外面やや摩耗。
101	弥生土器 高坏	-	-	-	ABCDHN	にぶい橙色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。内外面赤彩、ほぼ剥落。
102	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDHKN	浅黄褐色	B	口～坏部片	内外面摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。外面種子圧痕？凹み有。
103	弥生土器 高坏	-	-	-	ABHK	にぶい赤褐色	B	口縁部片	内外面赤彩。
104	弥生土器 高坏	-	-	-	ABEN	にぶい黄褐色	B	口～坏部片	内外面摩耗顕著。内外面赤彩、ほぼ剥落。
105	弥生土器 鉢	-	-	-	ABDHIK	褐灰色	B	口～体部片	内外面所々摩耗顕著。
106	弥生土器 筒形	-	-	-	ABDIK	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
107	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABEHIKN	灰褐色	B	口～体部片	晩期末。内外面赤彩、ほぼ剥落。
108	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABDHN	浅黄色	B	口～体部片	晩期末。内外面やや摩耗。
109	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHIKN	にぶい褐色	B	胴部片	晩期末。
110	土師器 甕	(18.8)	(5.8)	-	ABEN	橙 色	B	口～胴 20%	古墳後。内外面摩耗顕著。
111	土師器 甕	-	(2.0)	(5.8)	ABDKN	暗褐色	B	底部 60%	古墳後。
112	打製石斧	最大長 16.3 cm、最大幅 7.2 cm、最大厚 2.9 cm。重量 366g。完形。粘板岩。							
113	搔 器	最大長 4.6 cm、最大幅 6.3 cm、最大厚 1.4 cm。重量 45.5g。完形。ホルンフェルス。							
114	搔 器	最大長 3.7 cm、最大幅 5.55 cm、最大厚 1.1 cm。重量 17.5g。完形。ホルンフェルス。							
115	磨 石	最大長 11.4 cm、最大幅 6.95 cm、最大厚 1.6 cm。重量 121g。完形。砂岩。							
116	磨 石	最大長 (4.95) cm、最大幅 (5.1) cm、最大厚 (1.1) cm。重量 (42)g。半分欠。砂岩。							
117	磨石・敲石	最大長 (6.35) cm、最大幅 (3.85) cm、最大厚 (2.2) cm。重量 (62.5)g。半分欠。泥岩。							
118	磨 石	最大長 11.5 cm、最大幅 6.15 cm、最大厚 3.1 cm。重量 (282)g。所々欠。砂岩。							
119	砥 石	最大長 (14.7) cm、最大幅 6.5 cm、最大厚 (4.1) cm。重量 (497.5)g。大半欠。砂岩。							
120	砥 石	最大長 (4.7) cm、最大幅 (5.9) cm、最大厚 (0.7) cm。重量 (18.5)g。大半欠。砂岩。							

流れ込みの 107～109 は縄文土器、110・111 は古墳時代後期の土師器である。107・108 は、晩期末の浮線文土器であり、浅鉢の口縁部から体部までの破片である。口縁部外面に網目状の浮線文が巡り、107 は連結部に瘤が付き、内面にやや太い平行沈線が 1 条巡る。調整は、いずれも丁寧なヘラミガキが横位に施されている。107 は、内外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。109 は、深鉢の胴下部片である。外面に撚糸文が施文されている、内面調整は、斜位のヘラナデである。110・111 は、土師器長胴甕である。110 は口縁部から胴上部までの部位、111 は底部である。110 は、短い口縁部が逆ハの字に大きく開き、以下はほぼ直立する。111 は、底部中央がやや出っ張る。調整は、口縁部内外面が横ナデ、胴部と底部の外面はヘラ削り、内面はヘラナデである。

本住居跡の時期は、弥生時代中期末と思われる。

第2号住居跡（第11・12図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）142～144－151～153グリッドに位置する。西側で第1号竪穴状遺構と重複しており、新旧関係を明確にできなかったが、本住居跡が古いと思われる。南東隅付近は、単独ピット51に切られている。北東隅付近は、調査区外にある。また、北壁中央より南壁中央手前まで長さ8.6m、幅1mの試掘トレンチにより欠く。

本住居跡は、西側と北側で拡張が行われており、拡張前の規模は、長軸6.02m、短軸5.1m程、拡張後は長軸6.71m、短軸5.7m程を測る。また、拡張後は、第1号竪穴状遺構と重複する西壁沿いが未検出であるが、壁の外周に幅0.3m前後、確認面からの深さ0.1m程の浅いテラス状の段が巡る。平面プランは、拡張前後ともややいびつな隅丸長方形を呈する。主軸方向は、N－37°－Wを指す。確認面からの深さは、拡張前が最大0.52m、拡張後は0.4mを測る。床面は、拡張前後とも概ね平坦であった。掘り方は、拡張前後ともみられなかった。覆土は、9層（1～8・18層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。最下層の18層は、拡張に伴い、人為的に埋め戻された土である。

壁溝は、調査区外にある北東隅付近は未確認であるが、おそらく拡張前後とも全周すると思われる。拡張前の幅は0.15m前後、床面からの深さは0.05m程である。拡張後は、幅0.3m前後であり、床面からの深さは、0.05～0.12mとやや幅がみられた。

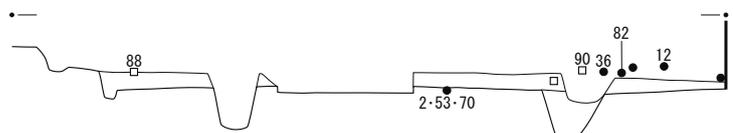
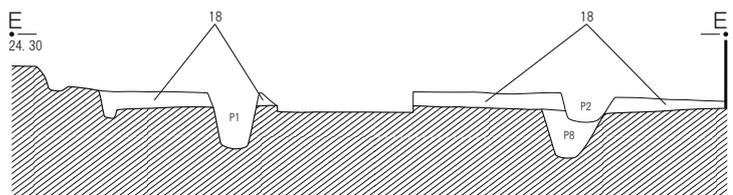
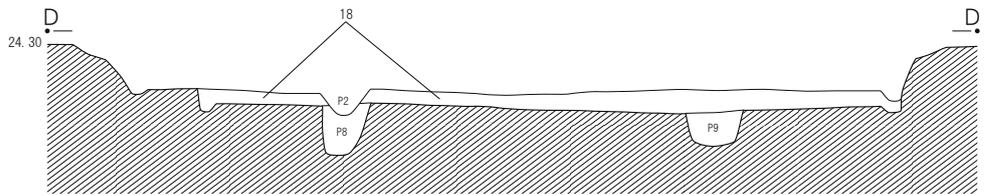
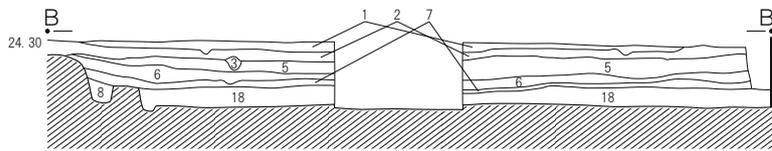
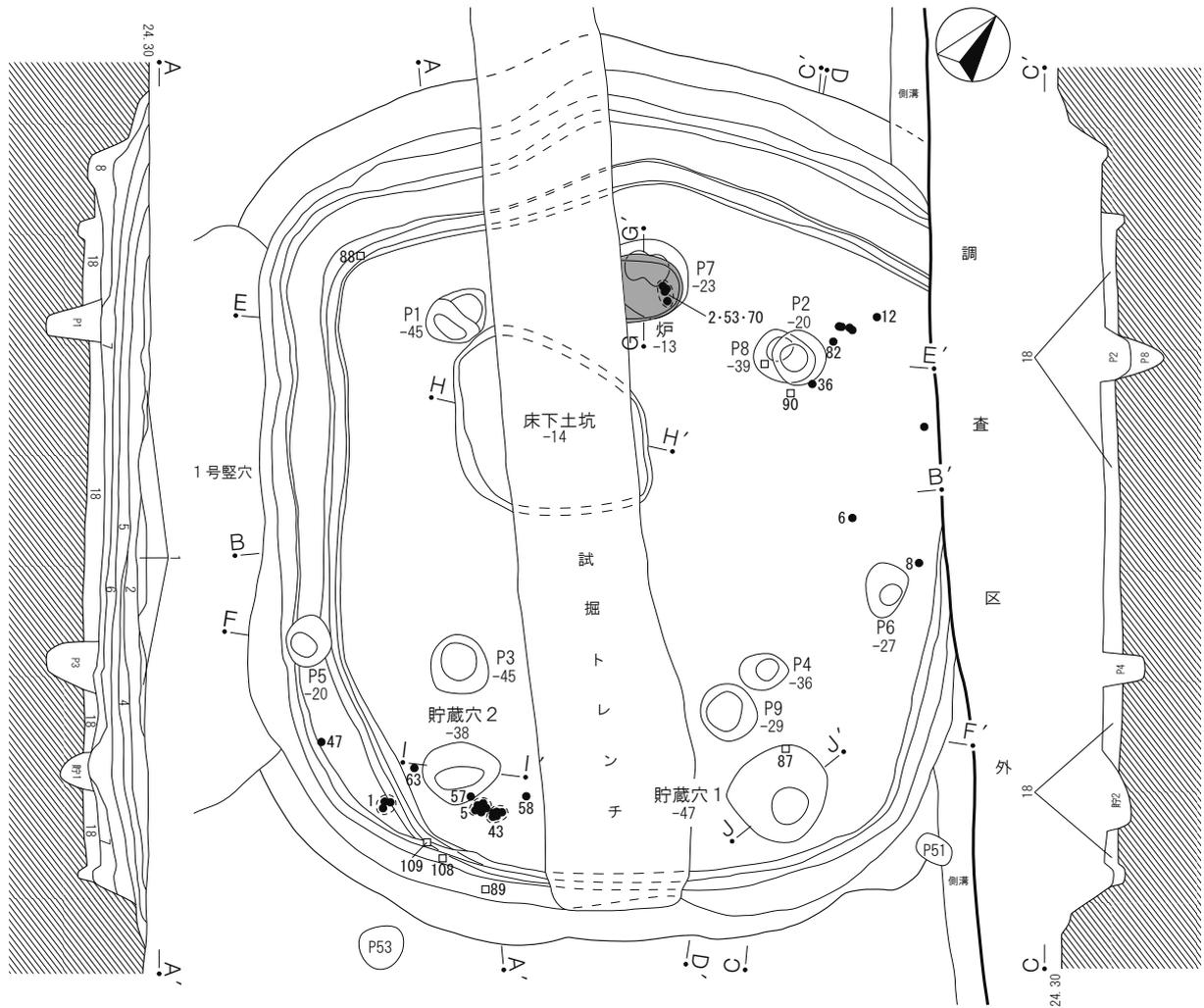
ピットは、計9基検出された。拡張前に伴うものは、ピット7～9である。その他のピットは、再利用したものも含め、拡張後に伴う。支柱穴は、拡張前がピット1・3・8・9、拡張後はピット1～4であり、ピット2はピット8の掘り返し、ピット4はピット9の掘り替えと思われる。拡張前のピット7、拡張後のピット5・6は屋根などを支える柱穴であろうか。いずれも覆土は図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

炉跡は、拡張後のみ検出された。床面中央と北壁の中間に位置し、下に拡張前のピット7がある。西側の立ち上がり付近を試掘トレンチにより欠くが、検出された東西は0.46m、南北は0.55mを測り、平面プランは楕円形を呈すると思われる。床面からの深さは、0.13mを測る。覆土は、炭化物と焼土を少量含む層（9層）と掘り方（10層）が確認された。

貯蔵穴は、2つ確認されたが、いずれも拡張後に伴う。貯蔵穴1は、南東隅に位置する。径0.75m前後の不整円形を呈する。床面からの深さは、0.47mを測る。覆土は、2層（15・16層）確認された。貯蔵穴2は、南西隅付近に位置する。長軸0.62m、短軸0.5mの楕円形を呈する。床面からの深さは、0.38mを測る。覆土は、4層（11～14層）が薄くレンズ状に堆積していた。

床面中央からやや北西寄りでは、床下土坑が確認された。中央付近の大部分を試掘トレンチにより欠くが、長軸1.55m、短軸1.35m程のいびつな楕円形を呈する。床面からの深さは0.14mを測る。覆土は、人為的に埋め戻された灰色土（17層）が確認されたにとどまる。

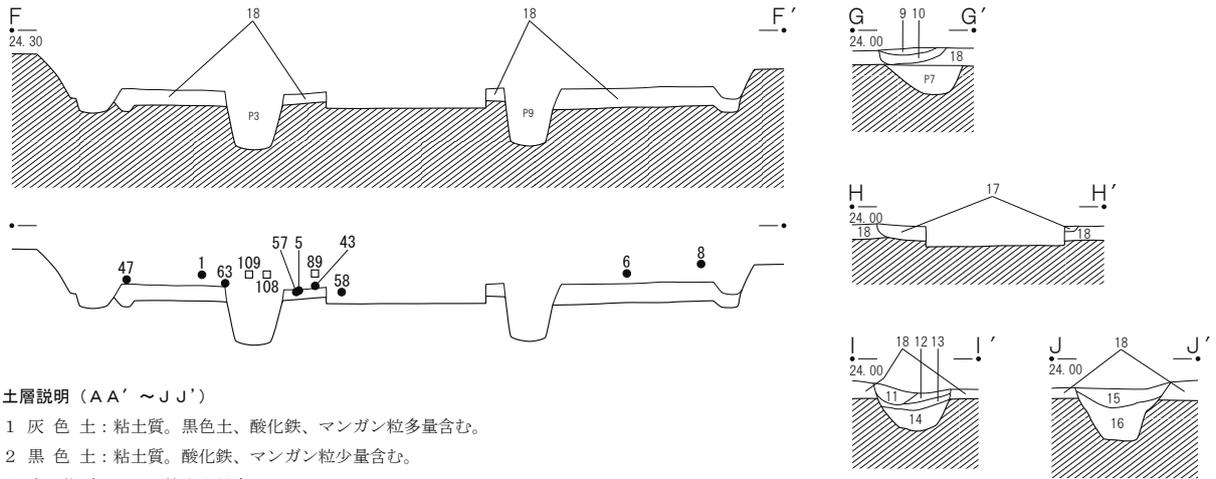
本住居跡も遺物が大量に出土した。出土遺物（第13～16図）は、弥生土器壺（1・3・4・13～44）、広口壺（5・45）、甕（2・6～8・46～80）、高坏（9～12・81～84）、磨製石鏃（87～89）、打製石錐（90）、搔器（91～94）、磨石（95～109）、写真のみの掲載であるが、獣骨片（写真図版53）がある。出土位置を図示した遺物は、主に北東隅及び南西隅付近の床面直上から出土した。出土位置



- = 土器
- = 石器・礫



第11図 第2号住居跡(1)



土層説明 (AA' ~ JJ')

- | | |
|--|---|
| <p>1 灰色土：粘土質。黒色土、酸化鉄、マンガン粒多量含む。</p> <p>2 黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒少量含む。</p> <p>3 炭化物ブロック：焼土少量含む。</p> <p>4 青灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。</p> <p>5 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> <p>6 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。</p> <p>7 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。6層より明るい。</p> <p>8 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。</p> <p>9 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量、焼土粒少量含む。</p> <p>10 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。</p> <p>11 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> | <p>12 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。</p> <p>13 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> <p>14 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。</p> <p>15 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> <p>16 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> <p>17 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> <p>18 灰オリブ色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。拡張に伴う埋戻し。</p> |
|--|---|

● = 土器 □ = 石器・礫 0 ————— 2m 1: 60

第12図 第2号住居跡(2)

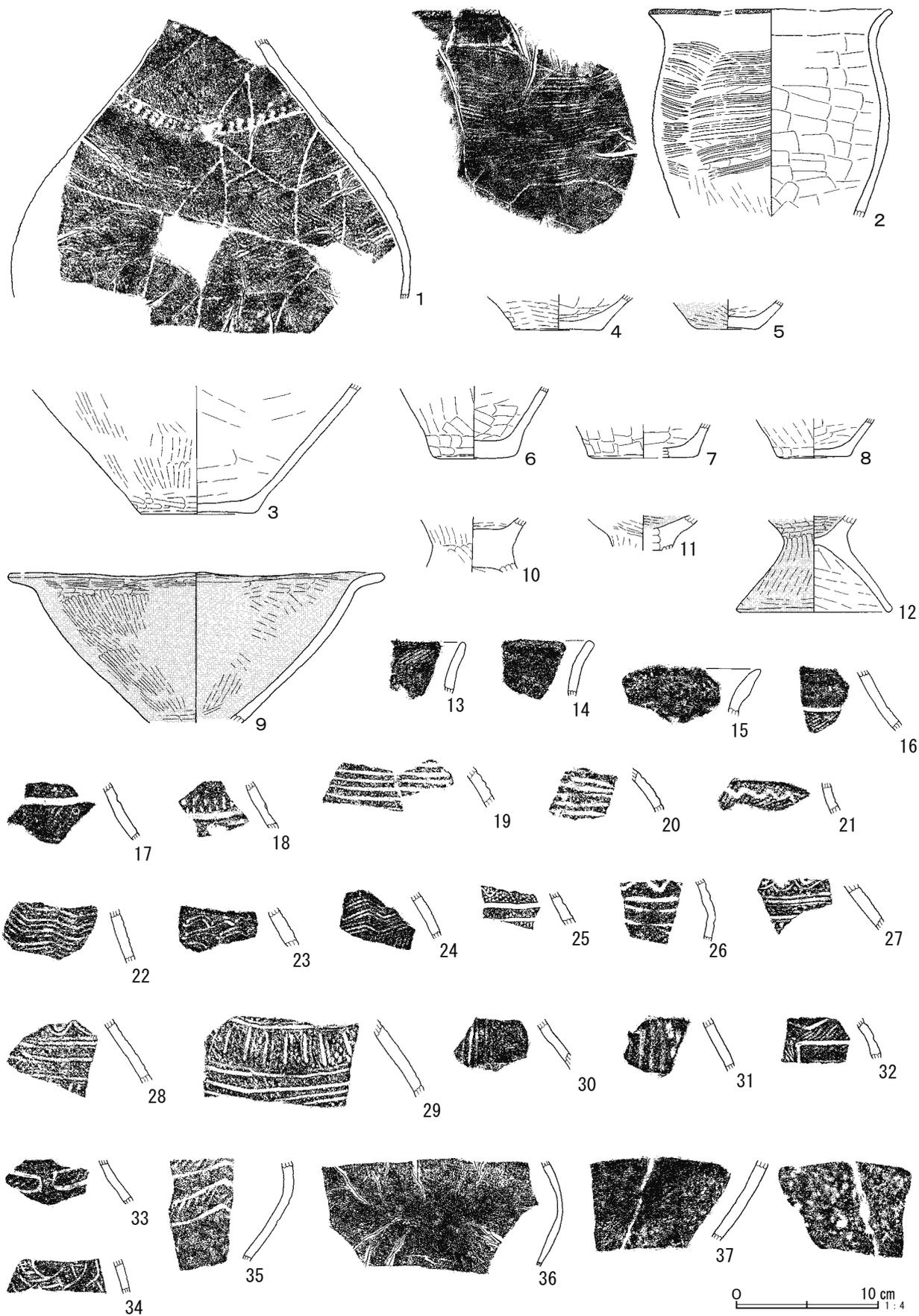
を图示した遺物以外では、4・9・25・83・95・102・107が貯蔵穴2、13がピット1、14・27・61・74がピット2、38・42が貯蔵穴1、39・45・54は18層、48は床下土坑、その他は覆土から出土した。また、この他にも流れ込みで縄文時代晩期末の浅鉢(85・86)が覆土から出土した。土器は、摩耗が著しいものが大半を占める。

1・3・4・13~44は、壺である。1は、肩部から胴部中段までの部位である。器形は、無花果状を呈すると思われる。外面の文様は、肩部にヘラで上向きの鋸歯文が描かれ、鋸歯文内に無節Rが充填されている。鋸歯文外は、無文である。肩部と胴上部境にある段には、2本一単位の櫛歯状工具による簾状文に似た刺突列が巡り、無文部を挟んだ下は同一工具による波状文が上に3条、間隔を空けて下に4条横位に巡り、下の波状文上下に無節Rが施文されている。調整は、外面無文部が不明、内面は斜位のヘラナデである。

3・4は、胴下部から底部までに収まる部位である。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。壺としたが、甕の可能性もある。

13~15は、口縁部から頸部までの破片である。15は、口縁部が肥厚している。外面の文様は、13・15が口縁部、14は口縁端部に縄文が施文されている。縄文は、13・14がLR、15はRL単節縄文である。頸部は、すべて無文である。調整は、14・15の内面が不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、13・14の頸部外面が縦位、15は横位、13の内面は横位に施されている。

16~20は、外面にヘラ描きの平行沈線が巡る破片であり、肩部から胴上部までに収まる。16・17は、



第 13 图 第 2 号住居跡出土遺物 (1)

中部高地栗林式系である。16は、無文部下に平行沈線が1条巡り、下にLR単節縄文が施文されている。17は、LR単節縄文地に平行沈線が2条巡る。上の沈線は太いが、下は細い。18は、無文部下に爪形の刺突列2列と太い平行沈線2条が巡る。19・20は、やや太めの平行沈線が5条以上巡る。調整は、16・18の外面无文部が斜位のヘラミガキである。内面は、16・19が横・斜位、18・20は横位のヘラナデである。17は、内面上位が斜・横位のヘラミガキ、下位は斜位のヘラナデである。20は、胎土が粗い。

21は、外面にヘラ描きの波状文が横位に巡る中部高地栗林式系の肩部片である。LR単節縄文地にやや太い波状文が1条巡る。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。

22～24は、外面に櫛歯状工具による波状文が横位に巡る破片であり、肩部から胴上部までに収まる。櫛歯の数は、22・23が2本、24は3本である。22は5条が密に、23・24は3条がやや間隔を空けて巡る。24は、地文にLR単節縄文が施文されている。内面調整は、すべて横位のヘラナデである。

25・26は、外面にヘラ描きの波状文と平行沈線が横位に巡る中部高地栗林式系の破片である。25は肩部、26は胴上部から中段までの破片である。いずれもLR単節縄文地に上から波状文1条と平行沈線2～3条がほぼ等間隔に巡る。25は、沈線の幅にバラツキがある。26は、やや太い。内面調整は、25が横位、26は横・斜位のヘラナデである。

27～29は、外面に櫛歯状工具による波状文と直線文が横位に巡る破片であり、肩部から胴上部までに収まる。すべて同一個体である。櫛歯の数は、2本である。肩部に波状文、直下に直線文が4条巡り、上3条と下1条の直線文間に同一工具による短い直線文がほぼ等間隔に複数垂下する。以下は、ヘラ描きの平行沈線が3条以上巡る。地文にRLR複節縄文が施文されている。内面調整は、27が斜位、その他は横位のヘラナデである。

30～32は、外面にヘラで重四角文が描かれた破片であり、肩部から胴上部までに収まる。30・31は、複数の沈線が垂下し、31は脇に長方形の刺突列が2列垂下する。32は、重四角文外に細かいLR単節縄文が施文され、上にヘラ描きの山形文が横位に巡る。内面調整は、30が横・斜位、31・32は横位のヘラナデである。

33は、ヘラで工子状の文様が描かれた肩部片である。区画外にLR単節縄文か無節Lが充填されている。調整は、外面無文部が不明、内面は横位のヘラナデである。

34は、外面にヘラでフラスコ文か渦文が描かれた胴上部片である。沈線間にLR単節縄文を充填する部分と無文部を交互に配置している。内面調整は、横位のヘラナデである。

35は、胴部中段から下部までの破片である。外面上位にヘラ描きの連弧文が巡り、沈線間にLR単節縄文を充填する部分と無文部を交互に配置している。調整は、外面上位の無文部が横位、下位は斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。胎土が粗い。

36～44は、無文の破片である。36のみ胴部中段、その他は胴下部の破片である。43・44は、同一個体である。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデが主体となる。外面のヘラミガキは、36・43の上位が横位、下位は斜位、37・39・40・44は横・斜位、38・42は縦位、41は斜位に施されている。39は、粗く施されている。43・44は、ヘラミガキ前に施された横・斜位のハケメが一部残る。内面のヘラナデは、36の上位が横位、下位は斜位、37・39・41・43・44は横・斜位、38・40・42は横位に施されており、41は指頭圧痕もみられた。44は、ヘラナデ前に施された横・斜位のハケメが一部残る。

37の内面は、種子圧痕と思われる凹みが複数みられた。39は、胎土が粗い。

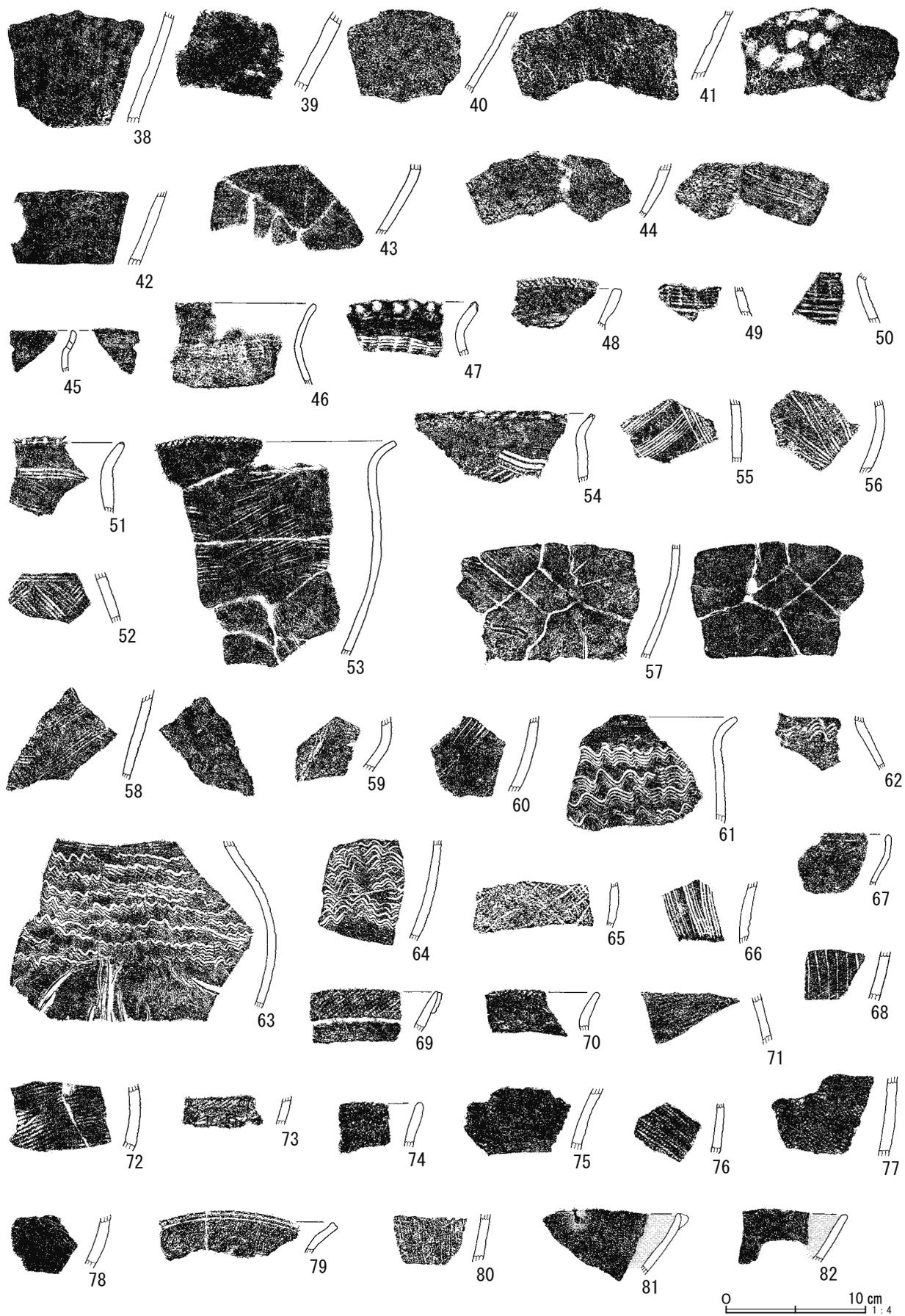
5・45は、広口壺である。5は、底部である。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。鉢の可能性もある。45は、受け口状を呈する口縁部から頸部までの破片である。調整は、内外面ともに横位のヘラミガキで赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。器壁が薄く、口縁部下位に焼成前穿孔がみられた。

2・6～8・46～80は、甕である。2は、中部高地栗林式系の口縁部から胴下部までの部位である。最大径を持つ短い口縁部が外反し、頸部はすぼまる。胴部は倒卵形を呈し、中段よりやや上が膨らむ。外面の文様は、口縁端部にLR単節縄文が施文され、胴部は5本一単位の櫛歯状工具で水平に近い縦位の羽状文が描かれている。調整は、口縁部内外面が横ナデ、胴下部外面はヘラミガキ、頸部以下の内面はヘラナデである。6～8は、胴下部から底部までに収まる部位である。6のみ底部が円柱状を呈する。調整は、すべて内外面ともにヘラナデである。

46～66は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた中部高地栗林式系の破片である。46～50は、頸部外面に簾状文が横位に巡る破片であり、口縁部から胴上部までに収まる。櫛歯の数は、46・49・50が5本、47は4本以上、48は不明である。簾状文以外の外面文様は、口縁端部に47が刻み、48はRL単節縄文が施文され、49・50は胴上部にヘラ描きの平行沈線が複数巡る。調整は、46の内外面、48の外面は不明であるが、47の口縁部外面と内面は横位、48の内面は横・斜位のヘラナデ、49・50の内面は横位のヘラミガキである。46は、胎土が粗い。

51～60は、胴部外面に縦位の羽状文が描かれた破片である。51・52・54は口縁部から胴上部まで、55～60は胴部中段から下部までに収まり、53は口縁部から胴下部までの破片である。櫛歯の数は、51が3本、52・54は4本、53・56・58・60は5本、55は6本、57・59は不明である。羽状文以外の外面文様は、51・52が頸部外面に同一工具による簾状文が横位に巡り、51は口縁端部に刻みが施文されている。53は口縁端部にLR単節縄文、54は口縁端部に刻みが施文されている。調整は、51の口縁部外面と内面は不明、52の内面は横位のヘラナデ、53は口縁部内外面が横ナデ、胴下部外面は縦位のヘラミガキ、頸部以下の内面は方位不明のヘラミガキである。54は、口縁部内外面が横ナデ、胴上部内面は横・斜位のヘラナデである。55の外面無文部と内面はヘラミガキであり、前者は横位、後者は斜位に施されている。56は、外面無文部が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。57の外面無文部と内面はヘラミガキであり、前者は斜・縦位、後者は横位に施されている。内面は、ヘラミガキ前に施された横位のハケメが一部残る。58の内面は、斜位のハケメである。59・60は、外面無文部が不明であるが、内面は59が横位、60は斜位のヘラナデである。54は、胎土がやや粗い。

61～64は、外面に波状文が横位に巡る破片である。61～63は口縁部から胴部中段までに収まり、64は胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、61が5本、62・63・64は4本である。波状文は、61が胴部に4条以上、62は頸部に1条、63は8条、64は6条以上巡る。波状文以外の外面文様は、61が口縁端部にLR単節縄文が施文され、63は頸部に同一工具による簾状文が横位に巡る。調整は、61の口縁部外面が横ナデ、胴部外面無文部と内面はヘラミガキであり、前者は斜位、後者は横位に施されている。62は、胴上部外面が不明であるが、内面は横位のヘラナデである。63の外面無文部と内面は、横・斜位のヘラミガキである。64の外面無文部と内面はヘラミガキであり、前者は波状文の巡



第 14 图 第 2 号住居跡出土遺物 (2)

る上位が斜位、下位は縦・斜位、後者は上位が横位、下位が斜位に施されている。

65 は、外面に斜格子文が描かれた胴部中段の破片である。櫛歯の数は、5本である。内面調整は、横位のヘラナデである。胎土が粗い。

66 は、外面に横位の羽状文ないし斜線文が描かれた胴下部片である。櫛歯の数は、5本である。内面調整は、横・斜位のヘラナデである。

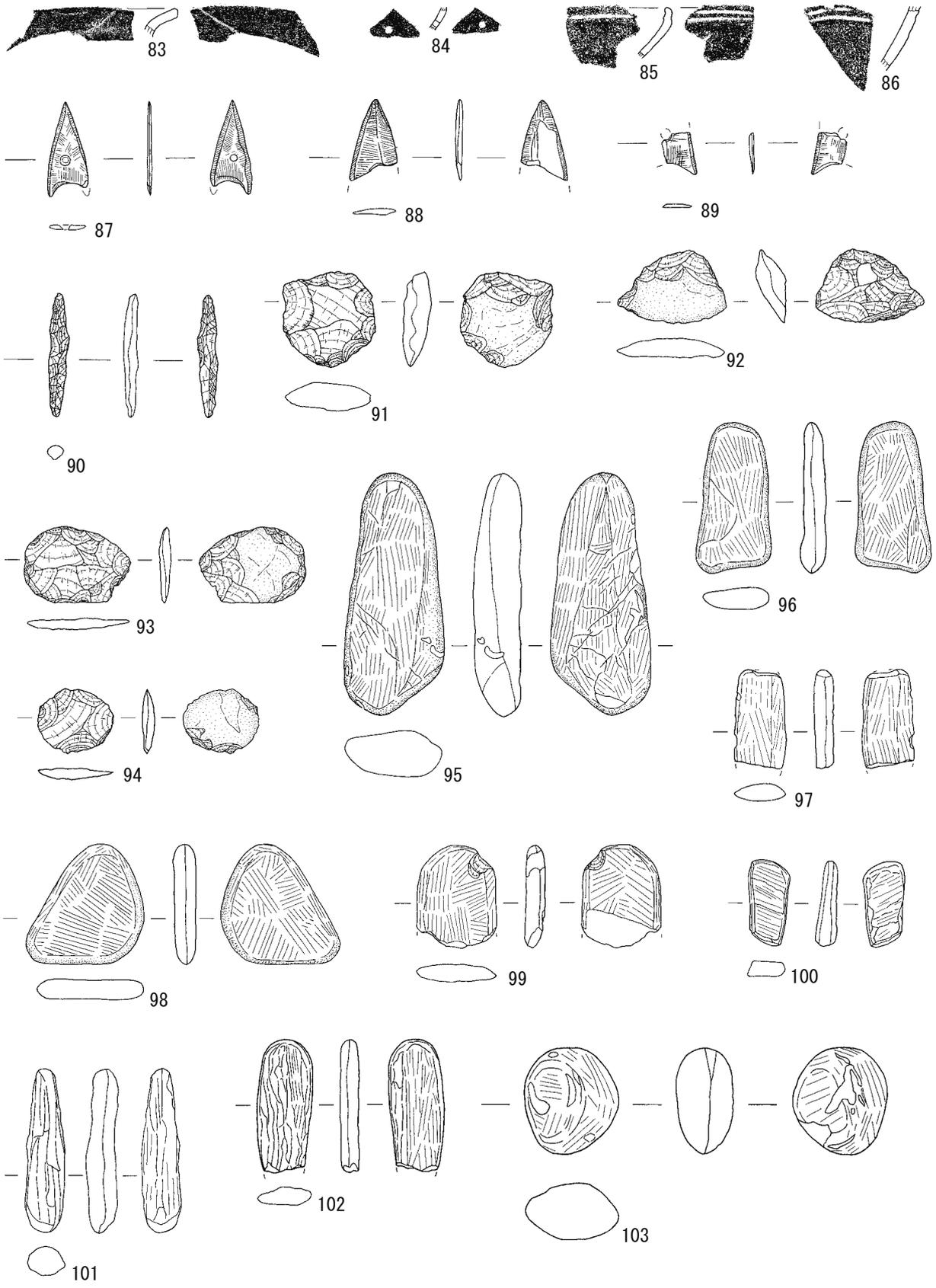
67・68 は、胴部外面にヘラでコの字重ね文が描かれた中部高地栗林式系と思われる破片である。67 は、受け口状を呈する口縁部から頸部まで、68 は胴下部の破片である。67 は、口縁部外面に細かいヘラ描きの波状文1条が横位に巡る。68 は、細かい沈線が複数垂下する。調整は、67の頸部外面と内面が不明、68の外面無文部と内面は、横・斜位のヘラミガキである。

69～78 は、外面に縄文が施文された破片である。69～73 はLR、74～78 はRL単節縄文と思われるが、70は無節L、74・75・78はRの可能性もある。LR単節縄文と思われる縄文が施文された69～73は、69・70が口縁部から頸部まで、71は胴上部、72は胴部中段、73は胴部中段から下部までの破片である。縄文は、69が肥厚した口縁部外面、70は口縁端部、71・72は外面全面、73は外面上位に施文されている。RL単節縄文と思われる縄文が施文された74～78は、74が口縁部から頸部まで、75が頸部、76・77が胴部中段、78が胴部中段から下部までの破片である。縄文は、74が口縁端部、75～77は外面全面、78は外面上位に施文されている。69～78の調整は、69の頸部外面と内面、72・73・76・77の内面は、横位のヘラナデである。70の内外面は、横位のヘラミガキである。71・75・78の内面は、横・斜位のヘラナデである。74は、口縁部内外面上位が横ナデ、下位はヘラミガキであり、ヘラミガキは外面が縦・斜位、内面は横位に施されている。

79・80は、無文の破片である。79は口縁部、80は胴下部の破片である。いずれも胎土がやや粗い。79は、角張った口縁端部中央が凹み、沈線状を呈する。調整は、内外面ともに横位のヘラミガキと思われる。甕としたが、他の器種の可能性もある。80の調整は、外面が縦位のハケメ、内面は横・斜位のヘラナデである。

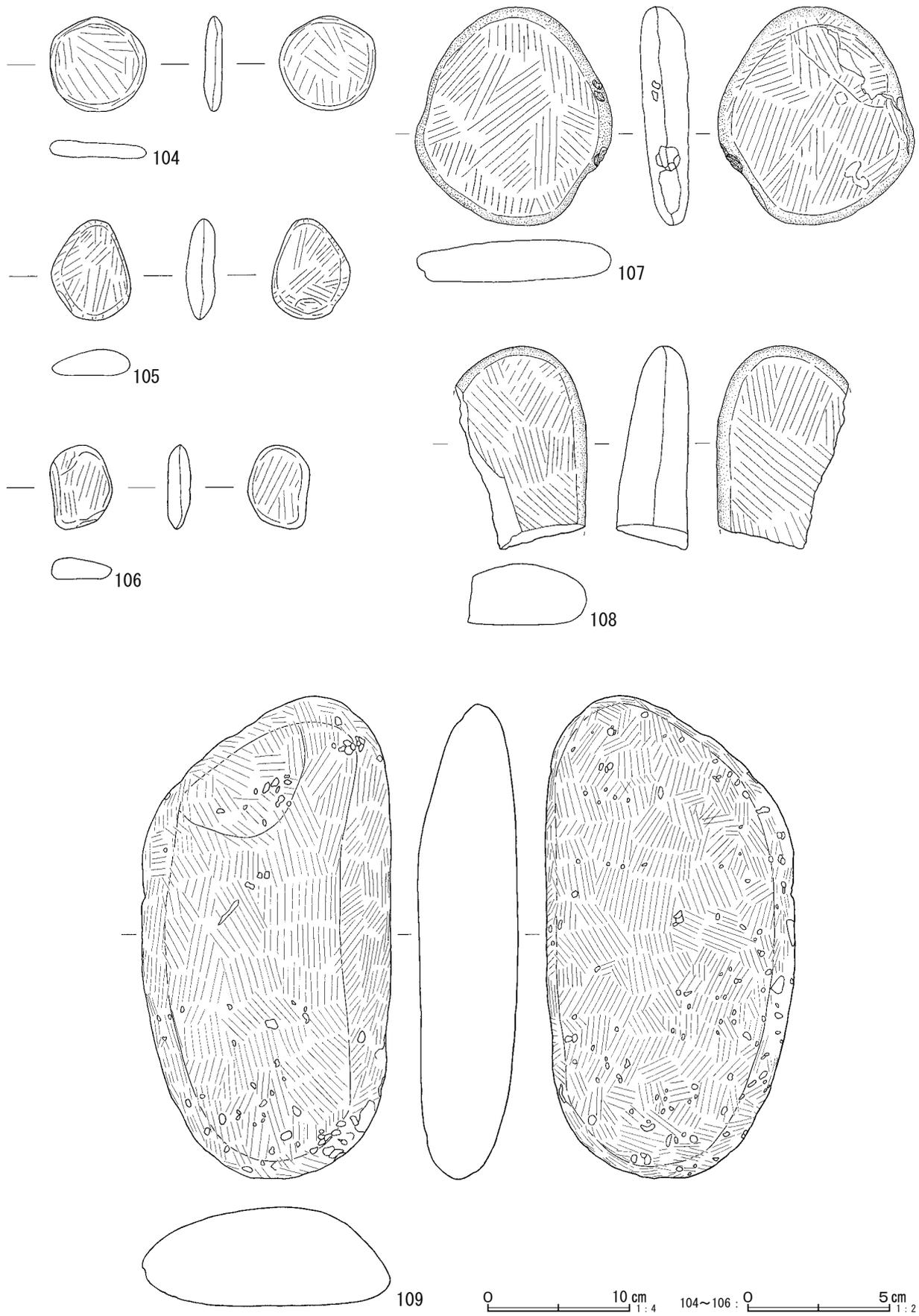
9～12・81～84は、すべて中部高地栗林式系の高坏と思われる。9は、口縁部から坏部までの部位である。短い口縁部が大きく開き、水平に近い。坏部は、接合部に向かって緩やかに内湾する。内外面ともにヘラミガキ調整で赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。10・11は接合部、12は接合部から脚部までの部位である。12の脚部は、ハの字に開くが、やや内湾する部分もみられた。9～12の調整は、外面と坏部内面がヘラミガキ、脚部内面はヘラナデである。11は坏部内面、12は外面と坏部内面に赤彩が施されているが、12はほぼ剥落している。81～84は、口縁部から坏部までに収まる破片である。81は、口縁部外面に突起が付く。84は、坏部に焼成前穿孔がみられた。器壁が薄い。81～84の調整は、すべて内外面ともにヘラミガキであり、81は外面上位と内面が横位、外面下位は斜位、82は内外面ともに横・斜位、83・84は内外面とも横位に施されている。いずれも内外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。

87～109は、石器である。87～89は、粘板岩製の磨製石鏃である。完形品はないが、いずれも長さは3cm前後と思われる。厚さは、0.2mm程で薄い。すべて中央に孔を持つ。孔が完存する87は、片側からの穿孔である。90は、頁岩製の打製石錐である。長さ4.3cmの棒状を呈し、両端が尖っている。



0 10 cm 1:4 87~90 · 103 : 0 5 cm 1:2

第 15 图 第 2 号住居跡出土遺物 (3)



第 16 图 第 2 号住居跡出土遺物 (4)

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	-	(18.4)	-	ABDEHIKN	浅黄色	B	肩~胴 30%	内外面摩耗顕著。
2	弥生土器 甕	(17.2)	(14.8)	-	ABDHKN	灰黄褐色	B	口~胴 30%	内外面やや摩耗。
3	弥生土器 壺	-	(9.1)	(8.2)	ABEN	橙 色	B	胴~底 30%	内外面摩耗顕著。
4	弥生土器 壺	-	(2.55)	6.3	ABDHKN	外：橙 内：褐灰	B	底部 100%	
5	弥生土器 広口壺	-	(2.05)	4.5	ABEHIKN	外：にぶい橙 内：灰白	B	底部 100%	外面赤彩、ほぼ剥落。
6	弥生土器 甕	-	(5.1)	5.8	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴~底 80%	内外面やや摩耗。
7	弥生土器 甕	-	(2.4)	(7.8)	ABDIKN	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄褐	B	底部 40%	
8	弥生土器 甕	-	(2.75)	5.2	ABEHIN	橙 色	B	底部 100%	内外面摩耗顕著。
9	弥生土器 高坏	(26.6)	(10.55)	-	ABDHKN	にぶい橙 色	B	口~坏 20%	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。
10	弥生土器 高坏	-	(3.9)	-	ABDHIN	にぶい黄褐色	B	接合部 100%	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。
11	弥生土器 高坏	-	(2.5)	-	ABDKN	外：浅黄 内：赤褐	B	接合部 30%	内外面摩耗顕著。坏部内面赤彩。
12	弥生土器 高坏	-	(6.8)	11.0	ABDEHIK	外：灰白 内：黒褐	B	接~脚 80%	外面上位以外、摩耗顕著。内外面赤彩、ほぼ剥落。
13	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
14	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHKN	淡黄色	B	口~頸部片	内面摩耗顕著。
15	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHI	にぶい褐 色	B	口~頸部片	内面摩耗顕著。
16	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIKN	外：褐灰 内：にぶい黄褐	B	肩部片	
17	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	にぶい橙 色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
18	弥生土器 壺	-	-	-	ABIKN	外：灰黄褐 内：黒	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
19	弥生土器 壺	-	-	-	ABIKN	外：灰黄褐 内：褐灰	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
20	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIN	にぶい橙 色	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
21	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEIK	灰黄色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
22	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	淡黄色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
23	弥生土器 壺	-	-	-	ABCKKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
24	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
25	弥生土器 壺	-	-	-	ABIK	灰黄褐色	B	肩部片	
26	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：褐灰 内：黒	B	胴上~中片	内外面やや摩耗。
27	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHKN	にぶい橙 色	B	肩~胴上片	No.28・29 同一個体。
28	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIN	橙 色	B	肩~胴上片	内外面摩耗顕著。No.27・29 同一個体。
29	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	橙 色	B	胴上部片	内外面やや摩耗。No.27・28 同一個体。
30	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHKN	浅黄褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
31	弥生土器 壺	-	-	-	ABIKN	外：灰黄褐 内：黒褐	B	肩~胴上片	
32	弥生土器 壺	-	-	-	ABIKN	浅黄褐色	B	胴上部片	
33	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	灰黄色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
34	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIK	浅黄色	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
35	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	にぶい橙 色	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
36	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	外：橙 内：褐灰	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
37	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。内面種子圧痕？凹み有。
38	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	黄灰色	B	胴下部片	内面摩耗顕著。
39	弥生土器 壺	-	-	-	AHN	灰褐色	B	胴下部片	
40	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIN	橙 色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
41	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHKN	外：にぶい橙 内：浅黄橙	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
42	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	黄灰色	B	胴下部片	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。
43	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIKN	灰白色	B	胴下部片	内面摩耗顕著。No.44 同一個体。
44	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIKN	灰白色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。No.43 同一個体。
45	弥生土器 広口壺	-	-	-	ABDIN	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	内外面摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。焼成前穿孔有。
46	弥生土器 甕	-	-	-	ABIN	外：灰黄 内：にぶい赤褐	B	口~胴上片	内外面摩耗顕著。
47	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	口~頸部片	内面摩耗顕著。
48	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	口~頸部片	外面摩耗顕著。
49	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIN	外：暗灰黄 内：灰黄	B	頸部片	外面摩耗顕著。
50	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	頸~胴上片	
51	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	口~胴上片	内外面摩耗顕著。
52	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	頸~胴上片	内外面やや摩耗。
53	弥生土器 甕	-	-	-	ABEIKN	灰褐色	B	口~胴下片	内面大半、外面上下位摩耗顕著。
54	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	口~胴上片	内外面やや摩耗。
55	弥生土器 甕	-	-	-	ABIN	黒褐色	B	胴中段片	
56	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	外：黒褐 内：にぶい褐	B	胴中段片	内面摩耗顕著。
57	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	黒 色	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
58	弥生土器 甕	-	-	-	ABIN	黒褐色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
59	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHI	灰褐色	B	胴中~下片	外面摩耗顕著。
60	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	内面大半、外面下位摩耗顕著。
61	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	黒褐色	B	口~胴中片	内面大半摩耗顕著。
62	弥生土器 甕	-	-	-	ABIKN	黒褐色	B	頸~胴上片	内外面摩耗顕著。
63	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIKN	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	B	頸~胴中片	内外面やや摩耗。
64	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIK	外：黒褐 内：灰黄褐	B	胴中~下片	内面摩耗顕著。
65	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIN	外：灰黄褐 内：明褐	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
66	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIK	淡黄色	B	胴下部片	
67	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	橙 色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
68	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	胴下部片	内面やや摩耗。
69	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHKN	外：灰黄褐 内：にぶい黄褐	B	口~頸部片	内面摩耗顕著。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
70	弥生土器 甕	-	-	-	ABDI	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
71	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIK	黄灰色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
72	弥生土器 甕	-	-	-	ABIKN	黒色	B	胴中段片	内面摩耗顕著。
73	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIN	にぶい黄橙色	B	胴中～下片	
74	弥生土器 甕	-	-	-	ABIKN	にぶい褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
75	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIK	浅黄褐色	B	頸部片	外面摩耗顕著。
76	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐色 内：褐灰	B	胴中段片	
77	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐色 内：黒褐色	B	胴中段片	内面やや摩耗。
78	弥生土器 甕	-	-	-	ABIK	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
79	弥生土器 甕	-	-	-	ABEIN	外：にぶい橙褐色 内：黄灰	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。
80	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
81	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDEIKN	浅黄褐色	B	口～坏部片	内外面赤彩、ほぼ剥落。
82	弥生土器 高坏	-	-	-	ABEHIK	浅黄褐色	B	口～坏部片	内外面赤彩、ほぼ剥落。
83	弥生土器 高坏	-	-	-	ABCHIKN	浅黄褐色	B	口縁部片	内外面やや摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。
84	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDHI	にぶい橙褐色	B	坏部片	内外面赤彩、剥落。焼成前穿孔有。
85	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABHIN	灰黄褐色	B	口～体部片	晩期末。内外面摩耗顕著。
86	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABIN	灰黄褐色	B	体部片	晩期末。内外面摩耗顕著。
87	磨製石鏃	最大長 3.3 cm、最大幅 1.4 cm、最大厚 0.15 cm。							重量 (0.9) g。一部欠。粘板岩。片側穿孔有。
88	磨製石鏃	最大長 (2.8) cm、最大幅 (1.55) cm、最大厚 0.2 cm。							重量 (1.0) g。基部欠。粘板岩。穿孔有。
89	磨製石鏃	最大長 (1.55) cm、最大幅 (1.05) cm、最大厚 (0.18) cm。							重量 (0.3) g。大半欠。粘板岩。穿孔有。
90	打製石錐	最大長 4.3 cm、最大幅 0.6 cm、最大厚 0.45 cm。							重量 1.2 g。完形。頁岩。
91	搔器	最大長 6.55 cm、最大幅 6.3 cm、最大厚 1.95 cm。							重量 96.2 g。完形。ホルンフェルス。
92	搔器	最大長 5.1 cm、最大幅 7.5 cm、最大厚 2.0 cm。							重量 (64.6) g。一部欠。粘板岩。
93	搔器	最大長 5.25 cm、最大幅 7.2 cm、最大厚 0.8 cm。							重量 33.2 g。完形。粘板岩。
94	搔器	最大長 4.5 cm、最大幅 5.2 cm、最大厚 0.85 cm。							重量 20.2 g。完形。粘板岩。
95	磨石	最大長 16.8 cm、最大幅 6.85 cm、最大厚 3.3 cm。							重量 (513) g。所々欠。泥岩。
96	磨石	最大長 10.5 cm、最大幅 5.2 cm、最大厚 1.75 cm。							重量 108 g。完形。泥岩。
97	磨石	最大長 (6.85) cm、最大幅 3.6 cm、最大厚 1.3 cm。							重量 (42) g。両端欠。砂岩。
98	磨石	最大長 8.3 cm、最大幅 7.75 cm、最大厚 1.6 cm。							重量 135 g。完形。砂岩。
99	磨石	最大長 (7.2) cm、最大幅 5.5 cm、最大厚 1.3 cm。							重量 (77.5) g。半分欠。緑泥片岩。
100	磨石	最大長 5.95 cm、最大幅 2.4 cm、最大厚 1.45 cm。							重量 32.5 g。完形。片岩。
101	磨石	最大長 11.4 cm、最大幅 2.7 cm、最大厚 2.1 cm。							重量 83 g。完形。片岩。
102	磨石	最大長 (9.2) cm、最大幅 3.8 cm、最大厚 1.3 cm。							重量 (73.5) g。片端欠。片岩。
103	磨石	最大長 3.7 cm、最大幅 3.25 cm、最大厚 1.95 cm。							重量 (30.5) g。所々欠。片岩。
104	磨石	最大長 3.4 cm、最大幅 3.4 cm、最大厚 0.6 cm。							重量 11 g。完形。粘板岩。
105	磨石	最大長 3.6 cm、最大幅 2.8 cm、最大厚 1.0 cm。							重量 12.5 g。完形。粘板岩。
106	磨石	最大長 3.0 cm、最大幅 2.15 cm、最大厚 0.8 cm。							重量 7.5 g。完形。頁岩。
107	磨石	最大長 15.5 cm、最大幅 13.8 cm、最大厚 3.35 cm。							重量 (990) g。所々欠。安山岩。
108	磨石	最大長 (14.4) cm、最大幅 (8.9) cm、最大厚 (5.05) cm。							重量 (840) g。大半欠。花崗岩。
109	磨石	最大長 34.2 cm、最大幅 17.5 cm、最大厚 7.1 cm。							完形。重量 6,500 g。石英閃緑岩。

完形品である。91～94は、搔器である。92のみ一部を欠くが、その他は完形品である。石材は、91がホルンフェルス、その他は粘板岩である。91は、折れた打製石斧を再利用した可能性がある。95～109は、磨石である。石材、大きさ、形態にバラエティがみられる。石材は、95・96が泥岩、97・98は砂岩、99は緑泥片岩、100～103は片岩、104・105は粘板岩、106は頁岩、107は安山岩、108は花崗岩、109は石英閃緑岩である。大きさにバラツキがみられるが、109のみ超大型である。扁平で楕円形を呈するものが多い。超大型の109は、片面に平滑が顕著な部分がみられ、光沢を帯びている。

流れ込みの85・86は、縄文時代晩期末の浮線文土器の浅鉢である。85は口縁部から体部まで、86は体部の破片である。85は、沈線状の浮線文が口縁部外面に1条、内面に2条巡る。86は、外面上位に眼鏡状の浮線文が巡る。調整は、85が内外面ともに横・斜位、86は外面上位が横位、下位は斜位、内面は横・斜位のヘラミガキである。いずれも胎土が粗く、金雲母を含む。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

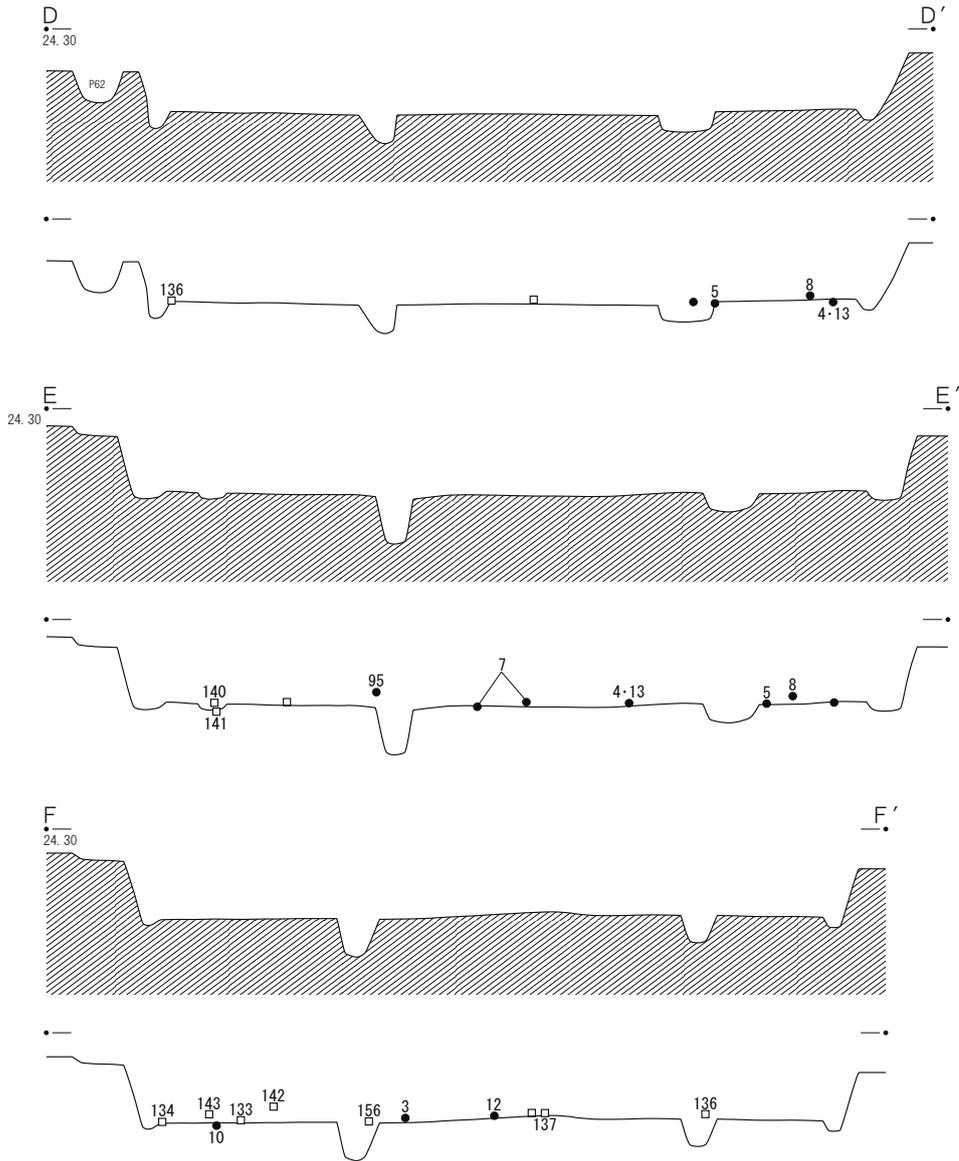
第3号住居跡 (第17・18図)

第1区 (2009 (平成21) 年度第2次調査) 142・143 - 153・154 グリッドに位置する。北壁中央付近を第7号土坑、西壁中央よりやや北側を単独ピット57に切られている。西壁中央付近で重複する第2号溝跡との新旧関係は明確にできなかったが、本住居跡が古いと思われる。南西隅は、調査区外にある。



第17図 第3号住居跡(1)

一辺6.3m前後のややいびつな隅丸方形を呈する。西壁外周には、幅0.18~0.49m、確認面からの深さ0.06m前後を測る浅いテラス状の段が巡る。主軸方向は、N-21°-Eを指す。確認面からの深さは、最大0.53mを測る。床面は概ね平坦であり、掘り方はみられなかった。覆土は、11層(1



土層説明 (AA' BB' GG')

- | | |
|---|--|
| <p>1 黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。</p> <p>2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> <p>3 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
2層より暗い。</p> <p>4 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
3層より暗い。</p> <p>5 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量含む。</p> <p>6 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量含む。4層より暗い。</p> <p>7 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
6層より暗い。</p> | <p>8 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量、酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。床面中央付近で炭化物帯状に堆積。</p> <p>9 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
6層より明るく、7層より暗い。</p> <p>10 灰色土：粘土質。炭化物、灰白色土多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。
床面中央付近で炭化物帯状に堆積。</p> <p>11 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。9層より暗い。</p> <p>12 焼土層</p> <p>13 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量含む。</p> <p>14 灰オリブ色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。掘り方。</p> |
|---|--|

● = 土器 □ = 石器・礫 0 ————— 2m 1:60

第18図 第3号住居跡(2)

～11層) 確認された。1層以外で炭化物が確認され、床面中央付近は帯状に薄く堆積していた。また、東西の床面直上では、放射状に並ぶ垂木と思われる炭化材が多数検出された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

壁溝は、未検出の南西隅も含め、全周すると思われる。幅は0.2～0.4 m、床面からの深さは0.06～0.14 mとややバラツキがみられた。

ピットは、計18基と多数検出された。ピット1～4は、その位置から支柱穴と思われる。ピット10・11は、ピット10上から残存状態の良好な壺の上部(5)が出土したが、支柱穴のピット2を挟んで位置することから補佐する柱穴であろうか。南壁沿いに位置するピット15～18は、その位置から出入口に関連する柱穴と思われる。その他は、屋根などを支える柱穴と思われる。いずれも覆土を図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

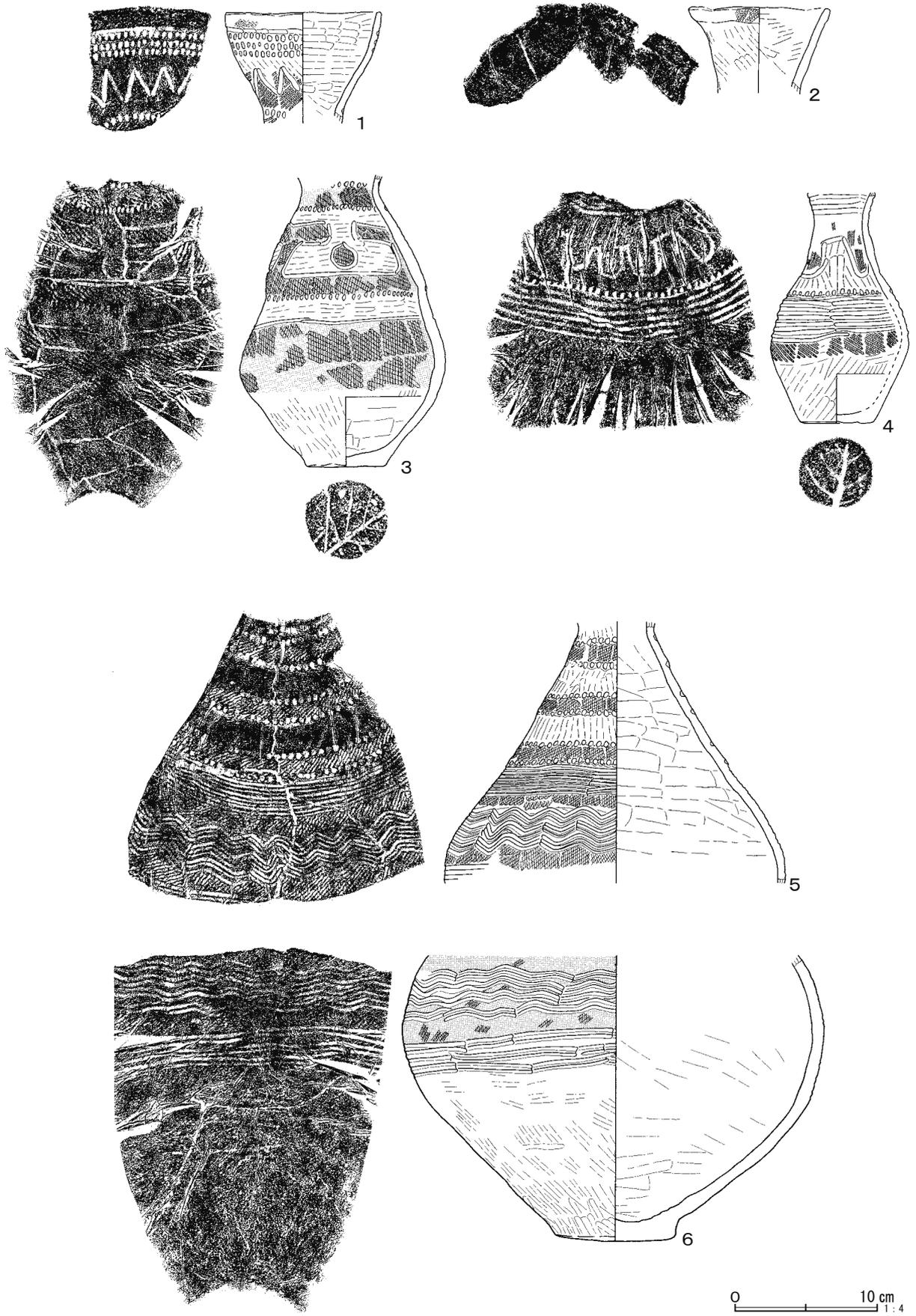
ピット12の西側では、間仕切りと思われる短い溝が南北に走る。長さは1.18 m、幅は最大0.28 m、床面からの深さは0.06 m程を測る。

炉跡は、床面ほぼ中央に位置する。長軸0.68 m、短軸0.52 mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.1 mを測る。覆土は、上層の東側で焼土層(12層)、西側で炭化物を多量含む層(13層)、下層で掘り方(14層)が確認された。

貯蔵穴は、南壁沿い中央付近の床面に位置する。長軸0.55 m、短軸0.42 mの隅丸長方形を呈する。床面からの深さは、0.29 mを測る。覆土は図示できなかったが、炭化物を含む灰色系の土が数層堆積していた。

本住居跡も残存状態の良好な土器をはじめ、遺物が大量に出土した。出土遺物(第19～26図)は、弥生土器壺(1～9・13・17～78)、広口壺(10)、甕(12・14～16・79～117)、筒形(11・118～122)、磨製石剣(133)、打製石斧(134～139)、磨石(140～156)がある。出土位置を図示した遺物は、ほぼ全面の床面直上から出土した。出土位置を図示した遺物以外では、2・47が貯蔵穴、11がピット5、14がピット2、15・19・21・92・135・139・144・147・151が床面直上、25がピット1、149がピット11、その他は覆土から出土した。また、この他にも流れ込みで縄文時代晩期末の浅鉢(123～130)、深鉢(131・132)が覆土から出土した。土器は、摩耗が著しいものが大半を占める。

1～9・13・17～78は、壺である。破片は、判別の難しいものがあるが、中部高地栗林式系ないしその可能性の高いものがある。1・2は、口縁部から頸部までの部位である。1は、口縁部が受け口状を呈し、頸部はすぼまる。外面の文様は、摩耗が著しいため一部のみを図示であるが、口縁部にLR単節縄文が施文され、直下にへら描きの平行沈線と縦長で楕円形を呈する刺突列が3列巡る。頸部は、幅狭い無文部以下にへらで上向きの鋸歯文が描かれ、鋸歯文内にLR単節縄文が充填されているが、上にはみ出ている。鋸歯文下は、上と同じ刺突列が1列巡り、下にLR単節縄文が施文されている。外面無文部と内面の調整は、へらミガキである。2は、口縁部から頸部まで逆ハの字に開く。外面の文様は、摩耗が著しいため一部のみを図示であるが、肥厚した口縁部にLR単節縄文が施文されているのみである。頸部外面無文部と内面の調整は、へらミガキである。胎土がやや粗い。3は、口縁部を欠くが、残存状態の良好なやや小型の壺である。器形が瓢壺に似る。頸部から下位に向かって緩やかに膨らみ、段を持つ胴上部付近がすぼまる。以下は、やや算盤玉状を呈する。底部はやや円柱状を呈し、底面に木葉痕がみられた。外面の文様は、頸部に半円形の刺突列が2列巡り、間に無節Rが充填されている。以下は、幅狭い無文部を挟んで下にへらによる凸状の文様と中心に円形文が描かれ、無節Rが充填されている。段下は、頸部と同じ刺突列が1列、無文部を挟んでへら描きの平行沈

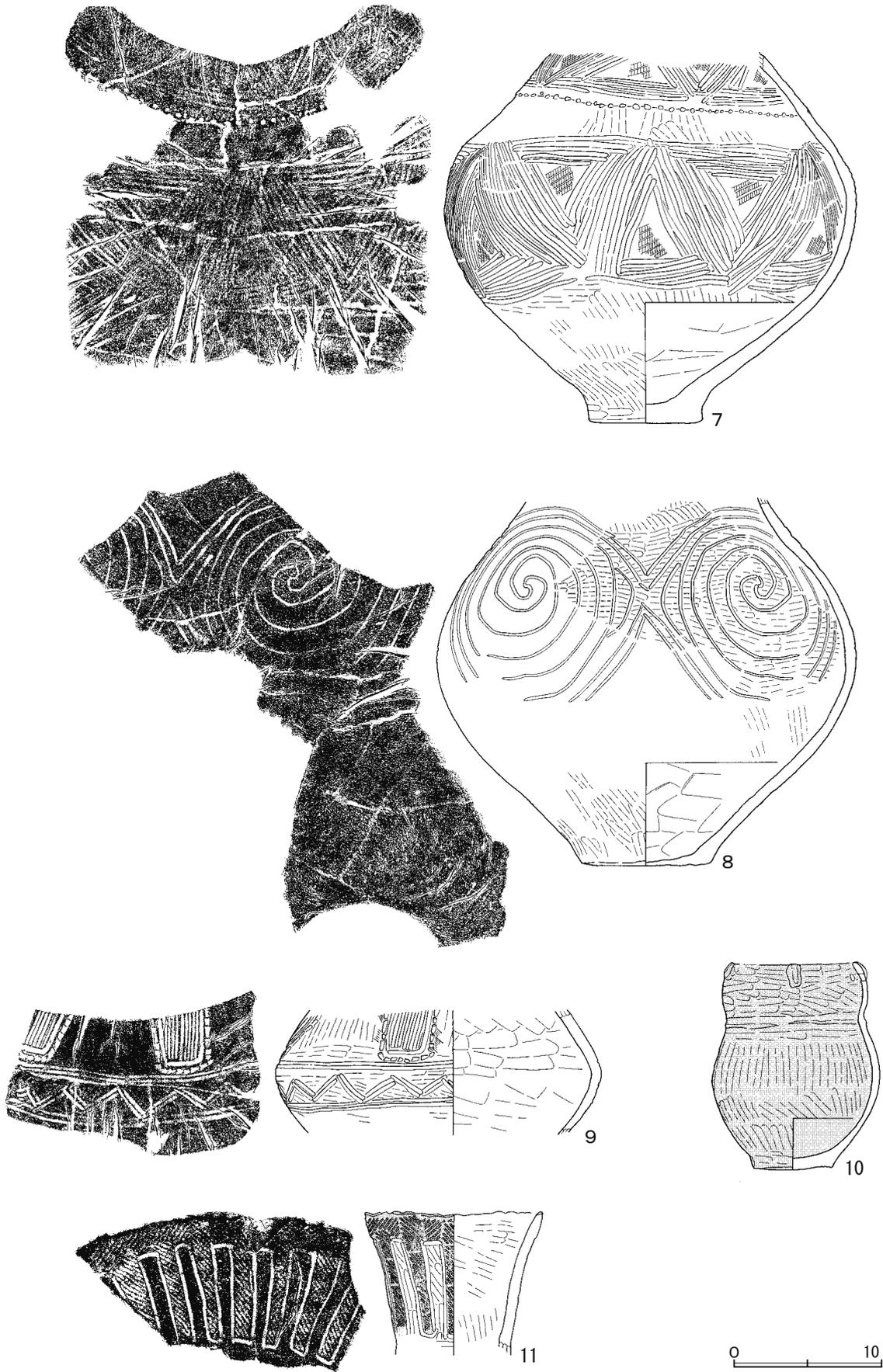


第 19 图 第 3 号住居跡出土遺物 (1)

線が1条巡り、以下は最大径を持つ胴部中段付近まで無節Rが施文されている。縄文施文部に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。調整は、外面無文部がヘラミガキ、内面はヘラナデである。4も口縁部を欠くが、残存状態の良好な細長の小型壺である。頸部と肩部の境がややすぼまり、やや縦長の球形を呈する胴部中段付近に最大径を持つ。底面に木葉痕がみられた。外面の文様は、頸部上位にヘラ描きの平行沈線が3条巡り、下位にヘラで凸状の文様が描かれている。摩耗が著しいため部分的な図示であるが、間に無節Rが縄目を縦位になるように充填されている。凸状文様以下は、幅狭い無文部を挟んで半円形ないし四角形の刺突列が1列、ヘラ描きの平行沈線が5～6条巡り、以下は最大径を持つ胴部中段付近に無節Rが施文されている。調整は、外面無文部がヘラミガキ、内面は不明である。5は、頸部から胴部中段までの部位であるが、残存状態が良好である。細い頸部から段を持つ肩部付近まで緩やかに膨らむが、以下はややすぼまりながら最大径を持つ胴部中段まで膨らむ。外面の文様は、頸部から肩部付近まで半円形ないし楕円形の刺突列2列間に無節Lを充填した部分と無文部を交互に3段配置している。以下は、3本一単位の櫛歯状工具による横位の直線文が胴上部に3条、胴部中段に数条巡り、間に同一工具による横位の波状文が3条巡る。上下に巡る直線文と波状文間には、無節Lが充填されている。調整は、外面無文部がヘラミガキ、内面はヘラナデである。6は、肩部以上を欠くが、残存状態が良好である。球形を呈する胴部中段付近に最大径を持つ。底部は、円柱状を呈する。外面の文様は、胴部中段上位に3本一単位の櫛歯状工具による波状文が4条、やや間隔を空けた下位に直線文が3条横位に巡る。摩耗が著しいため部分的な図示であるが、地文に無節Lが施文されている。縄文施文部に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。調整は、胴下部外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。7も肩部以上を欠くが、比較的残存状態が良好である。最大径を持つ胴部が球形を呈し、胴上部に段を持つ。底部は、円柱状を呈する。外面の文様は、胴上部と中段付近にヘラで重三角文が描かれており、間の段下に楕円形の刺突列が1列巡る。摩耗が著しいため部分的な図示であるが、重三角文内に無節Lが充填されている。調整は、外面無文部がヘラミガキ、内面はヘラナデである。8は、頸部以上を欠く。球形を呈する胴部中段付近に最大径を持つ。底部は、器壁が薄い。外面の文様は、肩部から胴部中段までヘラで渦文が描かれている。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。東北南部の川原町口式系であるが、胎土から在地産と思われる。なお、本資料の胴下～底部は、第4号住居跡から出土したものであり、異なる遺構間で接合関係が認められた。破片68～73と同一個体である。9は、中部高地栗林式系の胴部中段付近の部位である。算盤玉状を呈する。外面の文様は、上位にヘラで懸垂文が描かれ、周囲に長方形の刺突列が巡る。懸垂文内は、5本以上の櫛歯状工具による直線文が複数垂下する。下位は、2本一単位の直線文が上下に1条、間に同一工具による山形文1条が横位に巡る。調整は、外面無文部がヘラミガキ、内面はヘラナデである。破片49～51と同一個体である。13は、底部である。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。甕の可能性もある。

17は、口縁部から頸部までの破片である。外面の文様は、口縁端部と肥厚した口縁部にLR単節縄文が施文されている。調整は、頸部外面無文部が縦・斜位、内面は横位のヘラミガキである。胎土がやや粗い。

18は、外面にヘラで上向きの鋸歯文が描かれた肩部片である。鋸歯文内に縄文は充填されていない。



第 20 图 第 3 号住居跡出土遺物 (2)

調整は、外面無文部が縦・斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。

19～24は、外面に刺突列が横位に巡る破片であり、肩部から胴上部までに収まる。刺突は、19・20・23・24が半円形、21・22は爪形を呈する。19は、段下に刺突列がやや間隔を空けて2列巡る。段上は、LR単節縄文が施文されている。20は、頸部外面に刺突列1列とヘラ描きの平行沈線2条が巡る。以下は、無文である。21・22は、ヘラ描きの平行沈線2条間に刺突列が1列巡る。21は上下が無文、22は上位が不明であるが、下位はLR単節縄文か無節Lが施文されている。23は、ヘラ描きの平行沈線が上下に複数巡り、間に刺突列が1列巡る。24は、2つの段に刺突列が巡り、間にLR単節縄文が施文されている。以下は、ヘラ描きの平行沈線が巡る。縦長で短く、中央が凹んだ突起が付く。調整は、19の内面が横・斜位のヘラミガキ、20は外面無文部が縦・斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデ、21は外面無文部が横位、内面が横・斜位のヘラミガキである。22～24の内面は、ヘラナデであり、22は横・斜位、23・24横位に施されている。

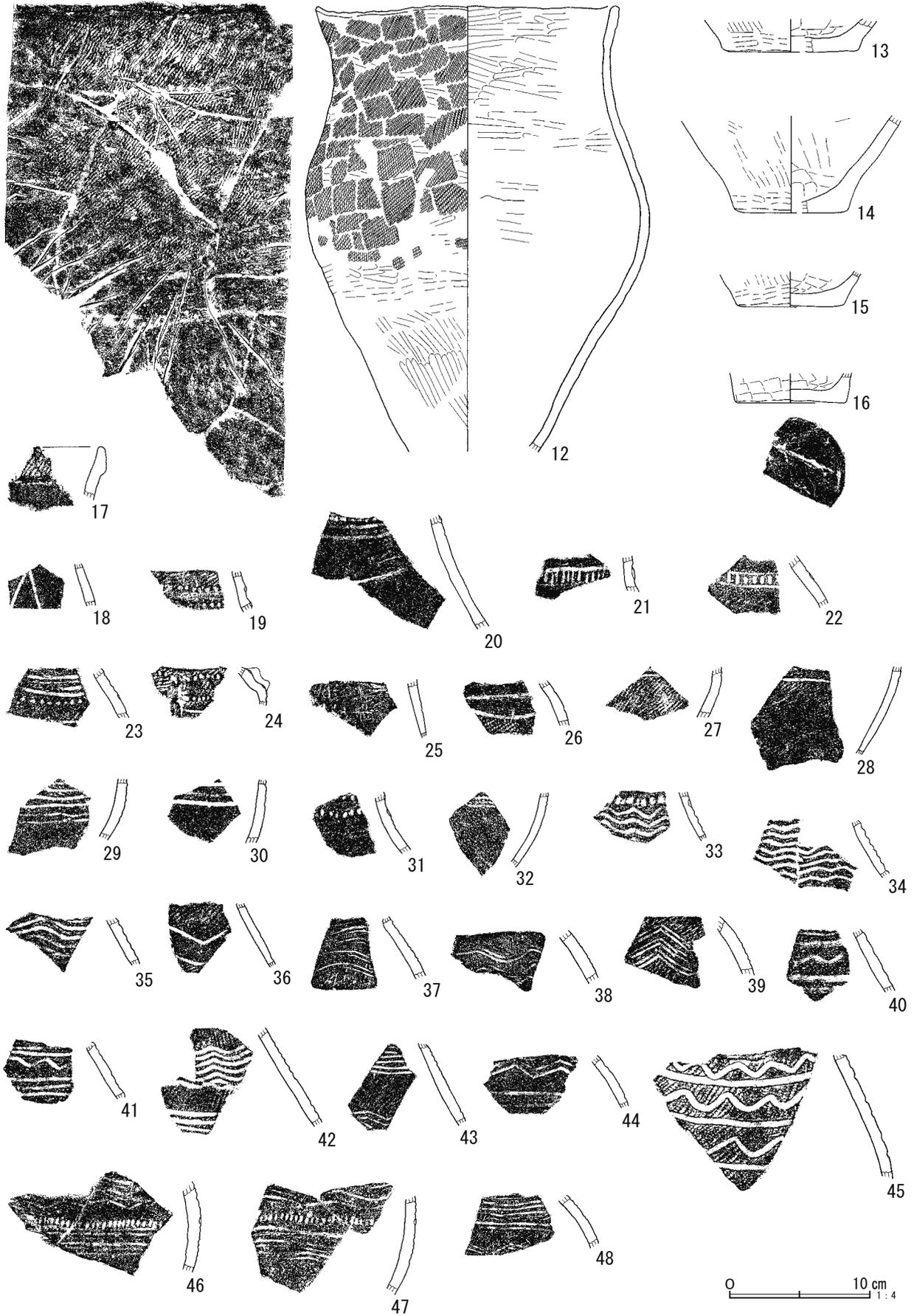
25～30は、外面にヘラ描きの平行沈線が巡る破片である。25は頸部、26は胴上部、27～30は胴部中段から下部までの破片である。25は、平行沈線1条上にLR単節縄文が施文されている。下位は、不明である。26は、やや間隔を空けて2条の平行沈線が巡り、下位にLR単節縄文が施文されている。27は、2条の平行沈線下にLR単節縄文が施文されている。28は、2条の平行沈線下にLR単節縄文か無節Lが施文されている。以下は、無文である。29は、6条以上の平行沈線下にRL単節縄文が施文されている。30は、幅にバラツキのある平行沈線が3条巡る。地文にRL単節縄文が施文された可能性がある。調整は、25の内面が横・斜位のヘラミガキ、26は外面無文部が横位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデ、28は下位の外面無文部が不明、内面は斜位のヘラミガキ、27・29・30の内面は、横・斜位のヘラナデである。

31・32は、外面に櫛歯状工具による直線文が横位に巡る破片である。31は頸部から肩部まで、32は胴部中段から下部までの破片である。31は、上位に半円形の刺突列2列下に3本一単位の直線文が1条巡る。下位は、不明である。32は、上位に胴部中段に2本一単位の直線文が巡る。下位は、不明である。内面調整は、いずれも横位のヘラナデである。31は、胎土がやや粗い。

33～36は、外面にヘラ描きの波状文ないし山形文が横位に巡る肩部片である。33は、半円形の刺突列下に波状文が4条以上巡る。34は、LR単節縄文地に波状文が8条以上巡る。35は、波状文が6条以上巡る。33～35は、沈線がやや太い。36は、間隔を空けて巡る山形文2条の上下にLR単節縄文が施文されている。山形文間は、無文である。内面調整は、33・35が横・斜位、34は横位のヘラナデである。36は、上位が斜位のヘラミガキ、下位は横・斜位のヘラナデである。

37～39は、外面に櫛歯状工具による波状文ないし山形文が横位に巡る胴上部片である。櫛歯の数は、すべて2本である。37は、無節L地に波状文がほぼ等間隔に4条巡る。38は、RL単節縄文地に波状文が3条巡る。39は、無節L地に山形文がほぼ等間隔に3条巡る。内面調整は、37が横位、38・39は横・斜位のヘラナデである。

40～47は、外面にヘラ描きによる横位の波状文ないし山形文と平行沈線が巡る破片であり、40～45は肩部から胴上部まで、46・47は胴部中段から下部までに収まる。40・41・45は、中部高地栗林式系である。40・41は、上下に巡る複数の平行沈線間に波状文が1条巡る。42は、上位に波状文が6条、



第 21 图 第 3 号住居跡出土遺物 (3)

やや間隔を空けた下位に平行沈線が3条以上巡る。43は、上位に平行沈線が6条以上、間隔を空けた下位に山形文が3条以上巡る。44は、上位に山形文、やや間隔を空けた下位に平行沈線がそれぞれ2条以上巡る。45は、平行沈線と波状文がほぼ等間隔で交互に巡る。40・42・45は、沈線が太い。40～45は、地文にLR単節縄文が施文されており、42は縄目が縦位になるように施文されている。46・47は同一個体であり、胎土がやや粗い。外面の文様は、上から山形文が5条以上、幅狭い無文部を挟んだ下に爪形の刺突列が1列、直下に平行沈線が6条巡る。以下は、不明である。調整は、46・47の外面無文部が不明であるが、その他の内面はすべてヘラナデである。ヘラナデは、40・42・45が横位、41・44・46・47は横・斜位、43は上位が横位、下位が斜位に施されている。

48～51は、外面に櫛歯状工具による山形文と直線文が横位に巡る破片である。48は胴上部片、中部高地栗林式系の9と同一個体である49～51は、胴上部から下部までに収まる破片である。櫛歯の数は、すべて2本である。48は、上位に直線文が3条以上、幅狭い無文部を挟んだ下に山形文が1条巡る。調整は、外面無文部が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。9と同一個体の49～51は、省略する。

52～62は、外面にヘラで重四角文が描かれた破片であり、肩部から胴部中段までに収まる。61・62は、同一個体である。52は重四角文上、55は地文、56は重四角文外にLR単節縄文が施文されている。56は、縄文施文部に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。58・59は、縦長の突起が付く。58は突起側面に焼成前穿孔がみられ、59は突起上に爪形の刺突列が垂下する。58は、重四角文内に無節Rが縄目を縦位になるように充填されている。60は、上位が不明であるが、下位の重四角文上に半円形の刺突列が1列巡る。沈線が細い。61・62は、上位にヘラ描きの山形文7条以上が横位に巡り、間隔を空けた下位に重四角文が描かれている。重四角文内中央に山形文が5条横位に巡る。重四角文内外にLR単節縄文と赤彩が施されている。内面調整は、57が不明であるが、その他はすべてヘラナデである。ヘラナデは、52・53・56・59・62が横・斜位、54・55・60は横位、58・61は斜位に施されている。53は、胎土が粗い。

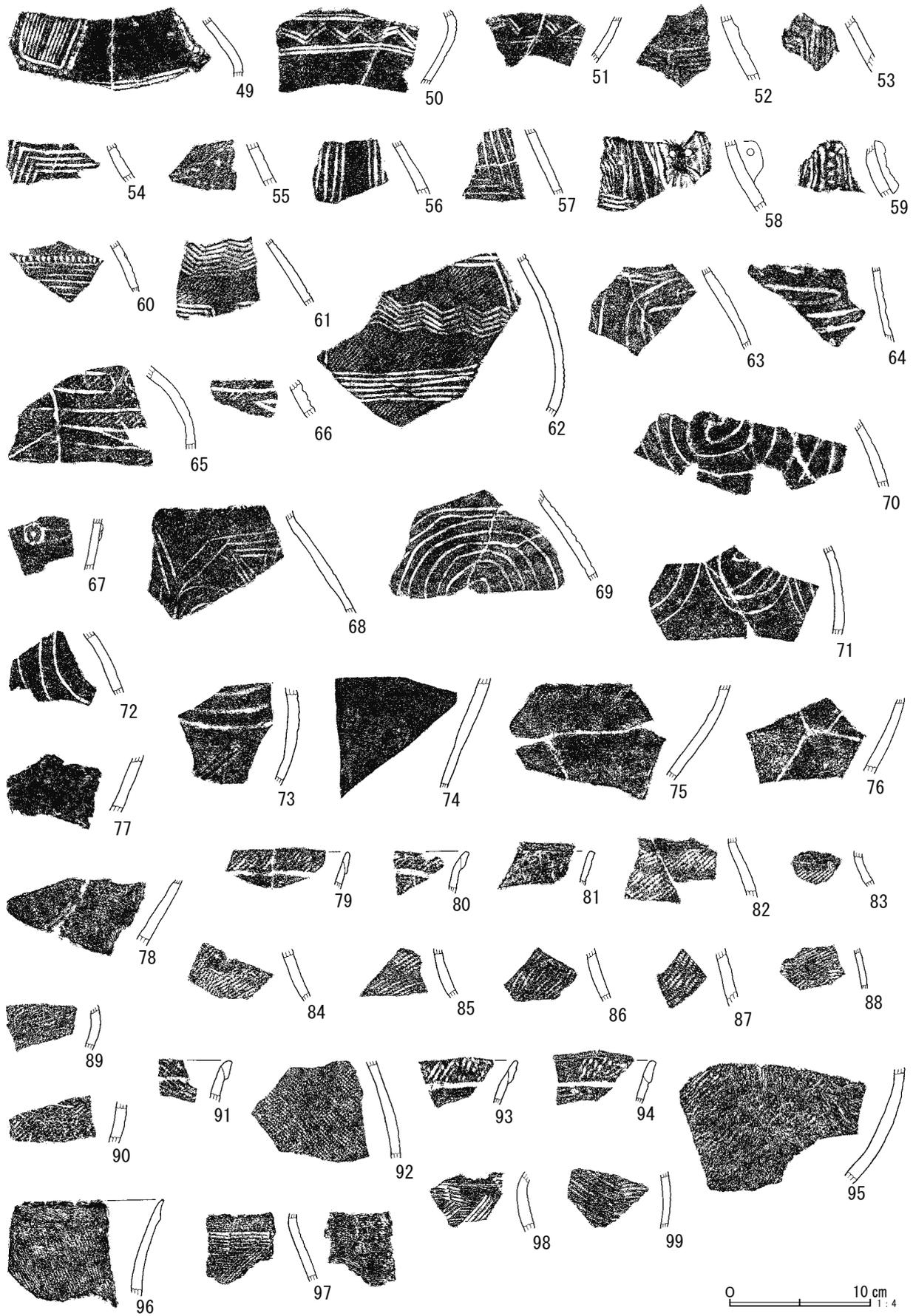
63は、外面にヘラで渦文と重四角文の中間的な文様が描かれた肩部から胴上部までの破片である。上位にヘラ描きの平行沈線が2条巡る。内外面の調整は、不明である。胎土が粗い。

64・65は、外面にヘラで王子状の文様が描かれた破片である。64は頸部から肩部まで、65は胴上部から中段までの破片である。いずれも区画内にLR単節縄文が充填されている。64は、沈線が太く、器壁がやや薄い。内面調整は、64の上位が横位のヘラミガキ、下位は斜位のヘラナデ、65は横・斜位のヘラナデである。

66は、外面にヘラで重三角文が描かれた肩部片である。沈線が太い。内面調整は、横・斜位のヘラナデである。

67は、外面にヘラ描きの連弧文が巡る胴部中段から下部までの破片である。中部高地栗林式系である。連弧文中央に円形の刺突が刻まれたボタン状貼付文が付く。調整は、外面下位の無文部が斜位のヘラミガキ、内面は斜位のヘラナデである。

68～73は、外面にヘラで渦文が描かれた東北南部の川原町口式系の破片であり、頸部から胴部中段までに収まる。8も含め、すべて同一個体であることから省略する。



第 22 图 第 3 号住居跡出土遺物 (4)

74～78は、無文の胴下部片である。壺としたが、甕の可能性もある。調整は、74が内外面ともに不明であるが、その他の外面はすべて斜位のヘラミガキである。74以外の内面は、すべてヘラナデであり、75・76は横・斜位、77は斜位、78は横位に施されている。75は図示しなかったが、内面上位に輪積痕がみられた。77は、胎土が粗い。

10は、残存状態の良好な小型の広口壺である。口縁部が内湾し、頸部はすぼまる。球形を呈する胴部中段付近に最大径を持つ。底部は、やや円柱状を呈する。口縁部にやや縦長の突起がほぼ等間隔に5つ付き、すぼまる頸部に沈線状の凹みが2条巡る。口縁部に焼成前穿孔がみられたが、対面にもあるかは欠損しているため不明である。調整は、図示できなかった内面も含め、すべてヘラミガキである。内外面ともに赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。

12・14～16・79～117は、甕である。12は、底部を欠くが、残存状態が良好である。やや肥厚した口縁部の開きが小さく、頸部はすぼまる。胴部は倒卵形を呈し、中段より上に最大径を持つ。外面の文様は、口縁部から胴部中段まで無節Lが施文されている。調整は、内外面ともにヘラミガキである。胴部中段付近の内面に輪積痕が一部みられた。

14～16は、胴下部から底部までに収まる部位である。14のみ底部がやや円柱状を呈する。調整は、14・15の外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。16は、内外面ともにヘラナデである。16は、底面に木葉痕がみられた。14・15は、壺の可能性もある。

79～96は、外面に縄文が施文された破片である。79～90はLR、91・92はRL単節縄文、93～95は無節L、96はカナムグラによる擬縄文が施文されている。LR単節縄文が施文された79～90は、79～81が口縁部から頸部まで、82～88は頸部から胴上部までに収まり、89・90は胴部中段の破片である。縄文は、79が肥厚した口縁部外面、80は肥厚した口縁部を含む外面全面、81は端部を含む口縁部外面、82・83は無文の頸部以下全面、84～90は外面全面に施文されている。調整は、79・82の頸部外面無文部と内面、80・81・84・86・88の内面、83の頸部外面無文部は、ヘラミガキである。ヘラミガキは、79～82が横位、84は斜位、86・88は横・斜位に施されている。83・85・87・89の内面は不明、90の内面は、横位のヘラナデである。90は、胎土がやや粗い。RL単節縄文が施文された91・92は、91が口縁部から頸部まで、92は胴上部の破片である。縄文は、91が肥厚した口縁部を含む外面全面、92は外面全面に施文されている。内面調整は、91が横位、92は横・斜位のヘラミガキである。無節Lが施文された93～95は、93・94が口縁部から頸部まで、95は胴部中段から下部までの破片である。縄文は、93・94が肥厚した口縁部を含む外面全面、95は外面上位に施文されている。調整は、93・94の内面が横位のヘラナデ、95の外面下位の無文部と内面は、斜位のヘラミガキである。カナムグラによる擬縄文が施文された96は、口縁部から頸部までの破片である。擬縄文は、下位が肥厚した口縁部を含む外面全面に施文されている。口縁端部に刻みが施文されている。内面調整は、不明である。

97～110は、櫛歯状工具で文様が描かれた破片である。97～102は、中部高地栗林式系である。97・98は、頸部から胴上部までの破片である。頸部外面に簾状文が横位に巡り、胴部外面に同一工具で横位の羽状文が描かれている。櫛歯の数は、97が6本、98は4本である。調整は、97の頸部内外面が横ナデ、胴上部は内外面ともにハケメであり、外面は横位、内面は横・斜位に施されている。98は、頸部外面が横ナデ、胴上部外面は横位のハケメ、内面は全面に斜位のヘラミガキが施されている。97は、

胎土がやや粗い。

99 は、外面に縦位の羽状文が描かれた胴部中段の破片である。櫛歯の数は、5 本である。内面調整は、斜位のヘラミガキである。胎土がやや粗い。

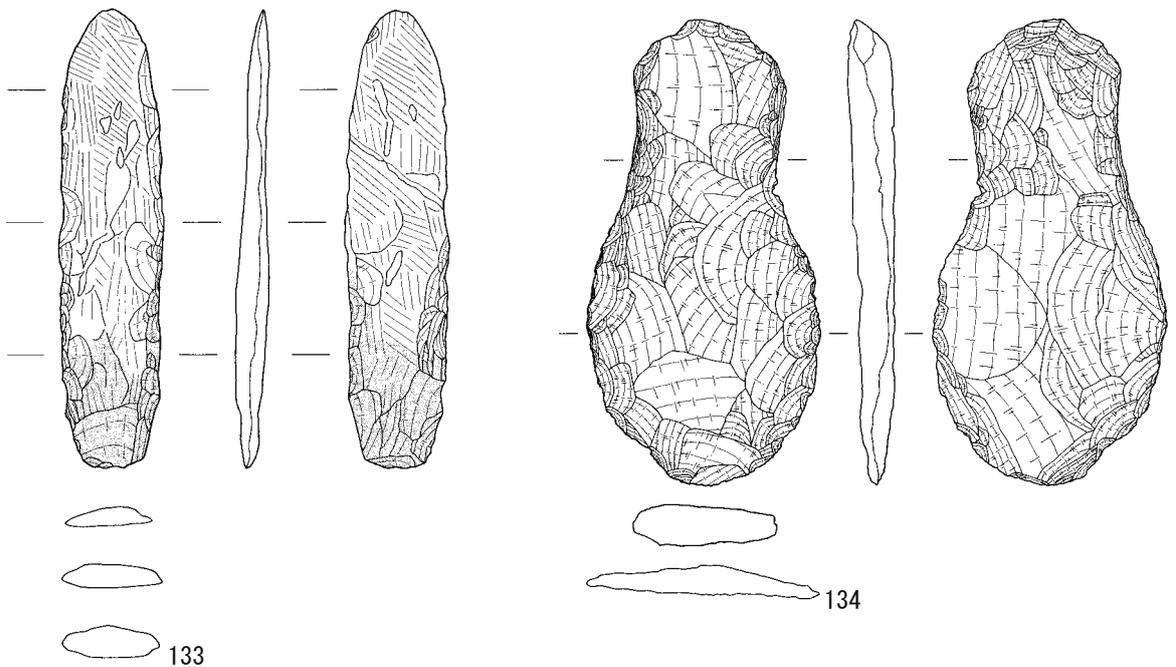
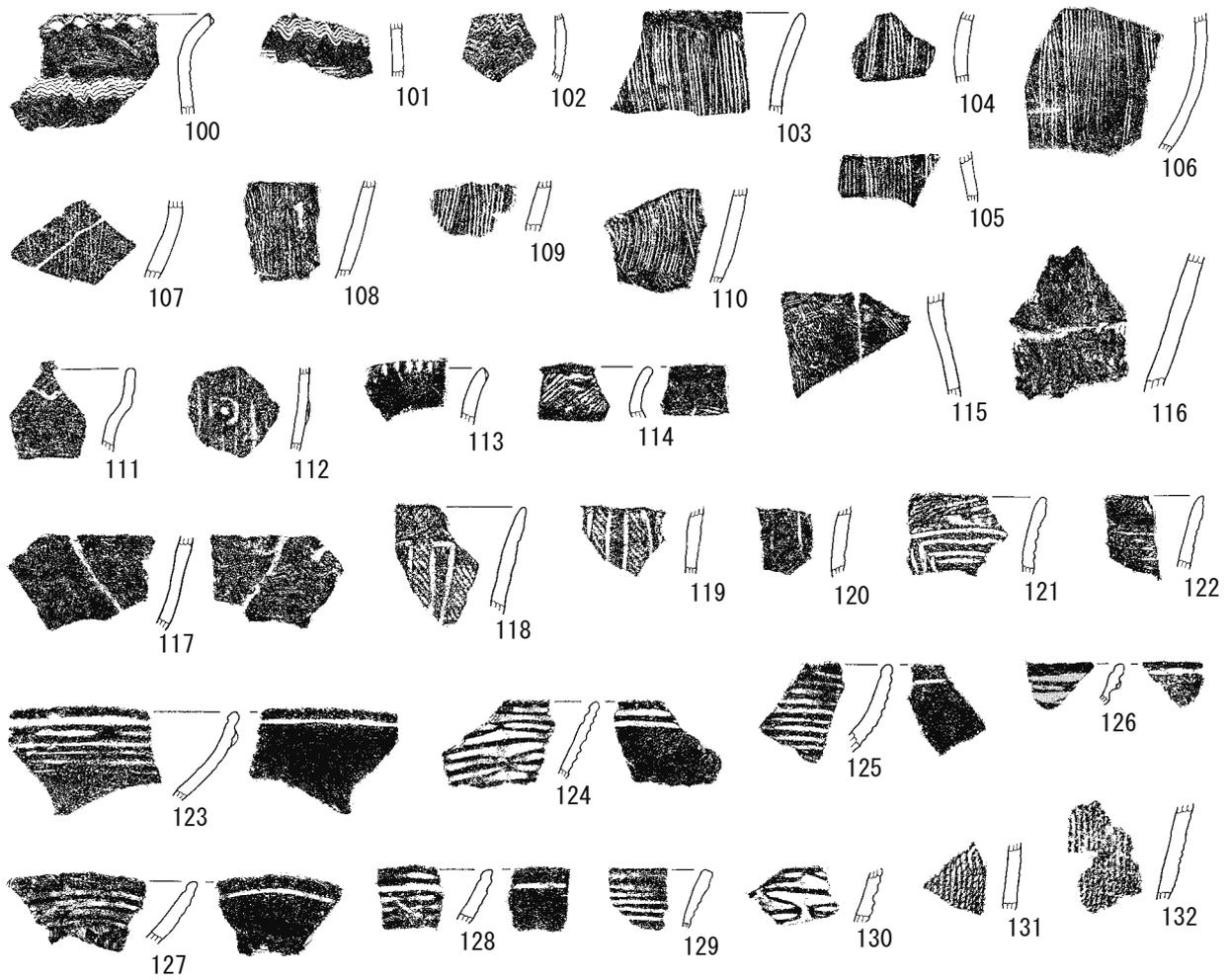
100 ～ 102 は、胴部外面に波状文が横位に巡る破片である。100 は口縁部から胴上部まで、101 は胴上部、102 は胴部中段の破片である。100・101 は、同一個体である。櫛歯の数は、100・101 が 5 本、102 が 3 本である。波状文は、100・101 が 2 条以上、102 が 3 条以上巡る。波状文以外の外面文様は、100 の口縁端部に刻みが施されている。調整は、100 の口縁部外面が横ナデであるが、横ナデ前に施された斜位のハケメが部分的に残る。胴上部外面と内面全面は、ヘラミガキであり、前者は斜位、後者は上位が横位、下位は斜位に施されている。101 の外面無文部と内面は、ヘラミガキであり、前者は斜位、後者は横・斜位に施されている。102 の内面は、不明である。102 は、胎土が粗い。

103 ～ 110 は、外面に直線文が垂下する破片である。103 は口縁部から頸部まで、104 は頸部、105 は胴上部、106・107 は胴部中段から下部まで、108 ～ 110 は胴下部の破片である。103 ～ 106 は、同一個体である。櫛歯の数は、103 ～ 106・108・110 が 7 本、107 は 5 本、109 は 6 本である。110 は、弧状を呈する。内面調整は、105・107・108 が不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、103・104 の上位が横位、下位は斜位、106 は横位、109・110 は横・斜位に施されている。108 は、胎土が粗い。

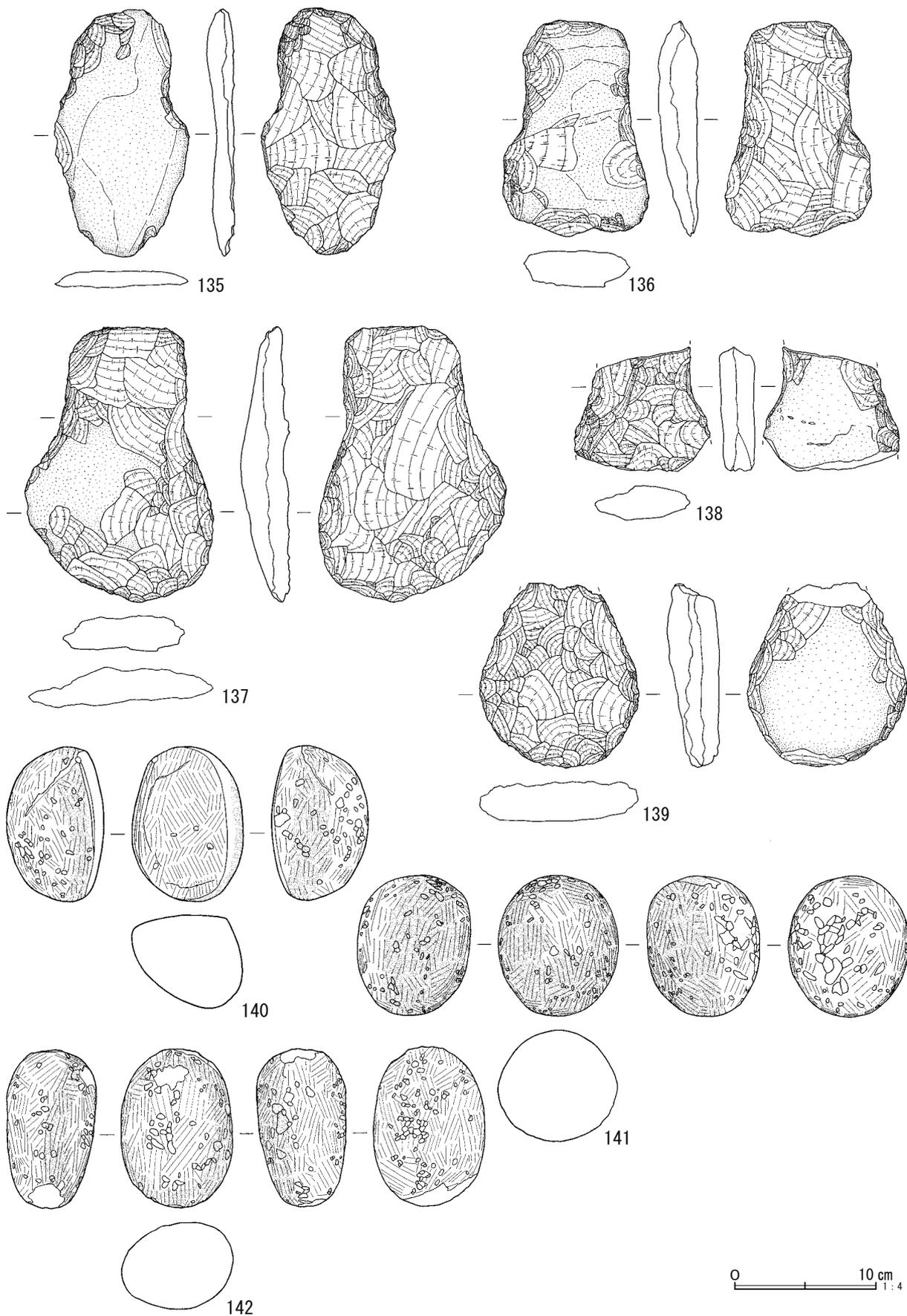
111・112 は、胴部外面にヘラでコの字重ね文が描かれた中部高地栗林式系と思われる破片である。111 は受け口状を呈する口縁部から頸部まで、112 は胴部中段の破片である。コの字重ね文以外の外面文様は、111 が端部を含む口縁部に L R 単節縄文か無節 L が施文され、ヘラ描きの山形文 1 条が横位に巡る。112 は、複数の沈線が垂下し、円形の刺突が刻まれたボタン状貼付文が付く。調整は、111 の頸部外面と内面全面が不明、112 の内面は斜位のヘラミガキである。112 は、胎土がやや粗い。

113 ～ 117 は、ほぼ無文の破片である。113・114 は口縁部から頸部まで、115 は頸部から胴上部まで、116・117 は胴下部の破片である。113 は、口縁端部に刻みが施文されている。調整は、113 の外面が横位、内面は横・斜位のヘラミガキである。114 は、外面が斜位のハケメ、内面は口縁部が横位のヘラミガキ、頸部は横位のハケメである。115 は、外面が斜位のハケメ、内面は横・斜位のやや粗いヘラミガキである。116・117 の外面は、縦・斜位のヘラミガキであり、116 は粗く施されている。内面は、116 が斜位のヘラナデ、117 は斜位のハケメである。116・117 は、胎土が粗い。甕としたが、壺の可能性もある。

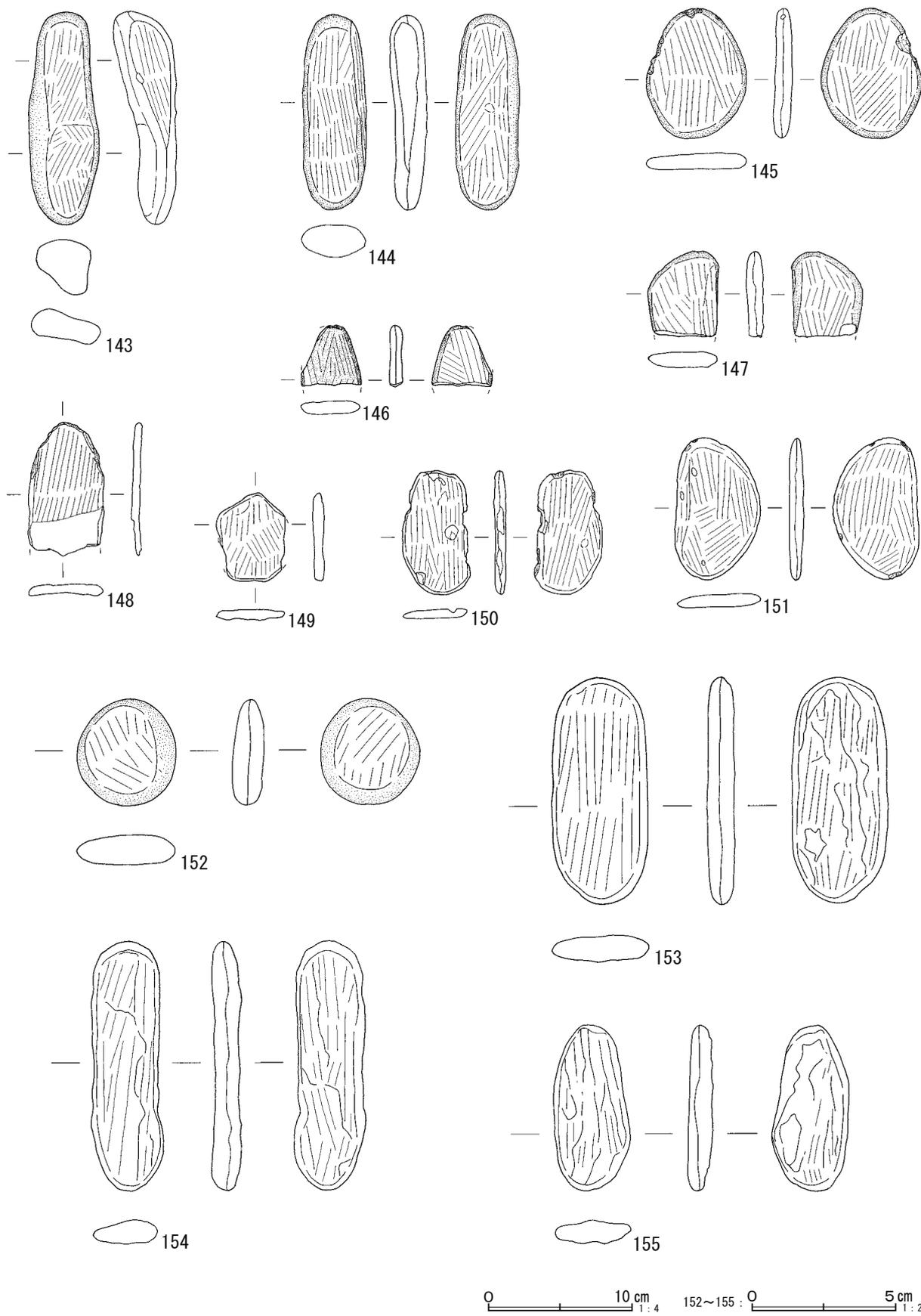
11・118 ～ 122 は、筒形土器である。11 は、口縁部から頸部までの部位である。細かい波状を呈する口縁部がやや外反し、長い頸部が逆ハの字状を呈する。外面の文様は、頸部にヘラで縦長の凸状の文様が描かれ、区画外に L R 単節縄文が充填されている。縄文施文部は赤彩が施されているが、大半が剥落している。凸状文様下の外面無文部と内面の調整は、ヘラミガキである。118 ～ 122 は、口縁部から頸部までに収まる破片である。118 ～ 120 は、同一個体である。外面の文様は、118 ～ 120 が 11 に似るが、縄文は L R 単節縄文である。121 は、口縁部外面に無節 L、以下にヘラで重四角文が描かれている。沈線がやや太い。122 は、L R 単節縄文地にヘラ描きの重四角文と思われる細い平行沈線が複数巡る。調整は、すべてヘラミガキであり、118 ～ 120 の外面無文部は縦位、内面は 118 ～ 120・122 が横位、121 は横・斜位に施されている。筒形土器としたが、壺の可能性もある。



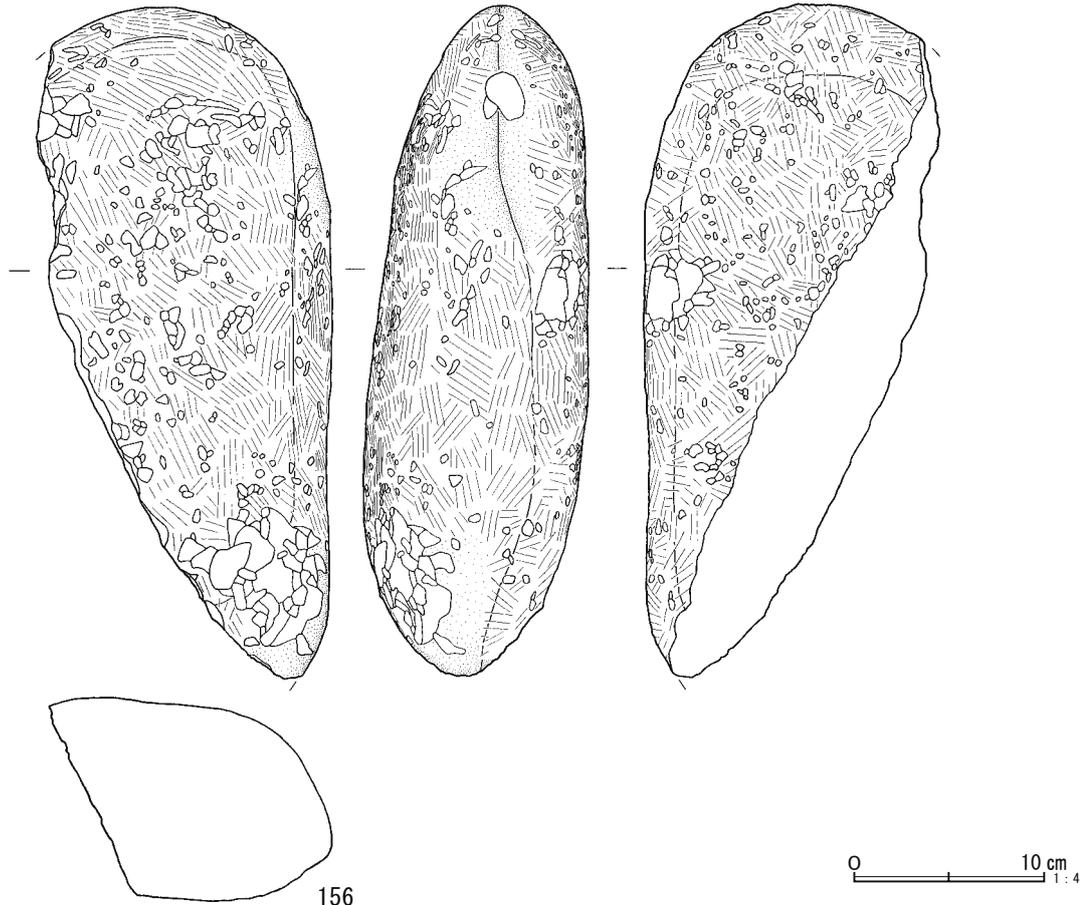
第 23 图 第 3 号住居跡出土遺物 (5)



第 24 图 第 3 号住居跡出土遺物 (6)



第 25 图 第 3 号住居跡出土遺物 (7)



156
第 26 図 第 3 号住居跡出土遺物 (8)

第 4 表 第 3 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	(11.0)	(7.85)	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口~頸 25%	内面やや摩耗、口縁部外面摩耗顕著。
2	弥生土器 壺	(10.0)	(6.1)	-	ABDHIKN	浅黄色	B	口~頸 35%	内外面摩耗顕著。
3	弥生土器 壺	-	(20.55)	5.6	ABDHIKN	黒褐 灰	B	頸~底 90%	内外面摩耗顕著。縄文施文部赤彩、ほぼ剥落。
4	弥生土器 壺	-	(16.25)	5.1	ABDHIKN	外：浅黄橙 内：黒	B	頸~底 90%	内面全面、外面大半摩耗顕著。
5	弥生土器 壺	-	(18.45)	-	ABDHIKN	外：黄灰 内：暗灰	B	頸~胴 90%	内面大半摩耗顕著。
6	弥生土器 壺	-	(20.1)	8.4	ABDEHIKN	浅黄橙 黒褐	B	胴~底 90%	内外面摩耗顕著。縄文施文部赤彩、ほぼ剥落。
7	弥生土器 壺	-	(25.2)	7.6	ACDHIKN	黒色	B	胴~底 60%	内外面摩耗顕著。
8	弥生土器 壺	-	(25.1)	(8.9)	ABCDHIK	にぶい黄色	B	肩~底 30%	内面全面、外面所々摩耗。胴下~底部 4 号住出土。
9	弥生土器 壺	-	(8.5)	-	ABDEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中段 25%	内外面所々摩耗顕著。No. 49 ~ 51 同一個体。
10	弥生土器 広口壺	8.7	14.1	(5.4)	AHIKN	黒褐色	B	90%	内面大半、胴部外面摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。
11	弥生土器 筒形	(12.0)	(9.75)	-	ABCDHIKN	灰黄褐色	B	口~頸 40%	内面剥離、外面所々摩耗。縄文施文部赤彩、大半剥落。
12	弥生土器 甕	21.4	(31.9)	-	ABDHIKN	灰褐 黒褐	B	口~胴 80%	内面大半、外面所々摩耗顕著。
13	弥生土器 壺	-	(2.4)	(9.6)	ABDHIKN	外：淡黄 内：黒	B	底部 25%	内外面摩耗顕著。
14	弥生土器 甕	-	(6.95)	(8.2)	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴~底 30%	内外面摩耗顕著。
15	弥生土器 甕	-	(2.55)	7.7	ABCDHIKN	灰黄色	B	底部 90%	内外面摩耗顕著。
16	弥生土器 甕	-	(2.15)	(8.0)	ABHIKN	灰褐色	B	底部 30%	外面摩耗顕著。
17	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
18	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIK	橙 色	B	肩部片	外面摩耗顕著。
19	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHN	灰白色	B	肩部片	
20	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHN	外：浅黄橙 内：褐灰	B	肩~胴上片	内外面やや摩耗。
21	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEI	灰白色	B	肩部片	
22	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰黄色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
23	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIK	外：淡黄 内：黒褐	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
24	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	灰白色	B	胴上部片	外面やや摩耗。
25	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	黄灰色	B	頸部片	外面摩耗顕著。
26	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：灰白 内：暗灰	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
27	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	灰黄色	B	胴中~下片	内外面やや摩耗。
28	弥生土器 壺	-	-	-	ABIKN	外：にぶい橙 内：黒褐	B	胴中~下片	内面下位、外面全面摩耗顕著。
29	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
30	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	灰黄色	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
31	弥生土器 壺	-	-	-	ABHN	灰黄色	B	頸~肩部片	内外面摩耗顕著。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
32	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外：にぶい黄橙 内：黄灰	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
33	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	灰黄褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
34	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1K	外：黒褐 内：暗灰黄	B	肩部片	内面摩耗顕著。
35	弥生土器 壺	-	-	-	ABCH1KN	外：灰黄褐 内：灰褐	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
36	弥生土器 壺	-	-	-	ABEH1K	灰黄褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
37	弥生土器 壺	-	-	-	ABCH1KN	浅黄色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
38	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1K	外：浅黄 内：褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
39	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1K	褐灰色	B	胴上部片	
40	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
41	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1K	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	肩部片	内外面やや摩耗。
42	弥生土器 壺	-	-	-	ABCH1KN	暗灰黄色	B	肩～胴上片	内外面摩耗顕著。
43	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	灰黄褐色	B	肩～胴上片	内外面摩耗顕著。
44	弥生土器 壺	-	-	-	AB1K	黒褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
45	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
46	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。No. 47 同一個体。
47	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIK	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。No. 46 同一個体。
48	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外：黒褐 内：にぶい黄褐	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
49	弥生土器 壺	-	-	-	ABEH1N	外：暗褐 内：にぶい黄褐	B	胴上～中片	内面摩耗顕著。No. 9・50・51 同一個体。
50	弥生土器 壺	-	-	-	ABEH1N	外：橙 内：灰黄	B	胴中～下片	内外面やや摩耗。No. 9・49・51 同一個体。
51	弥生土器 壺	-	-	-	ABEH1N	外：橙 内：灰黄	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。No. 9・49・50 同一個体。
52	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	外：にぶい黄 内：黒	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
53	弥生土器 壺	-	-	-	AB1KN	灰黄色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
54	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1	外：黄灰 内：灰	B	肩部片	
55	弥生土器 壺	-	-	-	ABEH1KN	淡黄色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
56	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHKN	浅黄色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。縄文施文部赤彩、ほぼ剥落。
57	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1N	灰黄色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
58	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1K	灰黄褐色	B	肩部片	縦長突起脇焼成前穿孔有。
59	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	浅黄色	B	肩部片	縦長突起有。内外面やや摩耗。
60	弥生土器 壺	-	-	-	ABE1N	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
61	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIK	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。縄文施文部赤彩。No. 62 同一個体。
62	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIK	にぶい黄褐色	B	胴上～中片	内面摩耗、外面やや摩耗。縄文施文部赤彩。No. 61 同一。
63	弥生土器 壺	-	-	-	AB1KN	浅黄色	B	肩～胴上片	内外面摩耗顕著。
64	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	灰白色	B	頸～肩部片	内外面摩耗顕著。
65	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外：灰白 内：黒	B	胴上～中片	内外面摩耗顕著。
66	弥生土器 壺	-	-	-	ABEH1N	橙 色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
67	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	黒褐色	B	胴中～下片	
68	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	暗灰黄色	B	頸～胴上片	内外面摩耗顕著。No. 8・69～73 同一個体。
69	弥生土器 壺	-	-	-	ABEH1N	暗灰黄色	B	肩～胴上片	内面全面、外面半分摩耗。No. 8・68・70～73 同一個体。
70	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEH1KN	外：黒褐 内：暗灰黄	B	胴上部片	内面摩耗顕著。No. 8・68・69・71～73 同一個体。
71	弥生土器 壺	-	-	-	ABDE1KN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。No. 8・68～70・72・73 同一個体。
72	弥生土器 壺	-	-	-	ABDE1KN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。No. 8・68～71・73 同一個体。
73	弥生土器 壺	-	-	-	ABCH1KN	浅黄褐色	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。No. 8・68～72 同一個体。
74	弥生土器 壺	-	-	-	ABE1KN	灰白色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
75	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外：淡黄 内：灰	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。内面上位輪積痕有。
76	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEH1N	外：浅黄橙 内：黄灰	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
77	弥生土器 壺	-	-	-	ABDN	橙 色	B	胴下部片	
78	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	外：灰白 内：黒褐	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
79	弥生土器 甕	-	-	-	AB1KN	黒褐色	B	口～頸部片	外面半分摩耗顕著。
80	弥生土器 甕	-	-	-	AB1KN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
81	弥生土器 甕	-	-	-	AB1KN	にぶい黄褐色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。
82	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1KN	外：黒褐 内：暗褐	B	頸～胴上片	内面摩耗顕著。
83	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1KN	外：灰黄褐 内：にぶい橙	B	頸～胴上片	内面摩耗顕著。
84	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDH1KN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
85	弥生土器 甕	-	-	-	ABEH1K	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面摩耗顕著。
86	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1K	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	外面摩耗顕著。
87	弥生土器 甕	-	-	-	AB1KN	外：黒褐 内：にぶい褐	B	頸～胴上片	内面摩耗顕著。
88	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
89	弥生土器 甕	-	-	-	ABEH1KN	外：にぶい橙 内：灰褐	B	胴中段片	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。
90	弥生土器 甕	-	-	-	ABHK	灰褐色	B	胴中段片	外面やや摩耗。
91	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIK	外：黒褐 内：にぶい褐	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
92	弥生土器 甕	-	-	-	ABE1K	外：褐 内：にぶい黄橙	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
93	弥生土器 甕	-	-	-	ABCIKN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
94	弥生土器 甕	-	-	-	ABE1	外：にぶい黄橙 内：灰褐	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
95	弥生土器 甕	-	-	-	ABEH1KN	外：暗褐 内：灰黄褐	B	胴中～下片	外面大半摩耗顕著。
96	弥生土器 甕	-	-	-	ABDEH1KN	外：にぶい褐 内：にぶい黄褐	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
97	弥生土器 甕	-	-	-	ABEH1N	黒褐 にぶい橙	B	頸～胴上片	
98	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1K	黒褐色	B	頸～胴上片	
99	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1KN	黒褐色	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
100	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1KN	外：黒褐 内：暗褐	B	口～胴上片	内面やや摩耗。No. 101 同一個体。
101	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1KN	外：黒褐 内：暗褐	B	胴上部片	No. 100 同一個体。
102	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1KN	黒褐色	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
103	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	No.104～106 同一個体。
104	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	頸部片	No.103・105・106 同一個体。
105	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	胴上部片	内面摩耗顕著。No.103・104・106 同一個体。
106	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	胴中～下片	内面摩耗顕著。No.103～105 同一個体。
107	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI	外：灰黄褐色 内：黒	B	胴中～下片	内面摩耗顕著。
108	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
109	弥生土器 甕	-	-	-	ABIKN	外：黒褐色 内：にぶい黄橙	B	胴下部片	
110	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：灰褐色 内：暗褐色	B	胴下部片	
111	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIK	浅黄橙色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
112	弥生土器 甕	-	-	-	ABDEHIKN	にぶい橙色	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
113	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい黄橙 内：黒褐色	B	口～頸部片	外面摩耗顕著。
114	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
115	弥生土器 甕	-	-	-	ABDEHIKN	外：黒褐色 内：にぶい橙	B	頸～胴上片	
116	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIN	外：橙 内：褐色灰	B	胴下部片	外面摩耗顕著。
117	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHN	橙色	B	胴下部片	内外面やや摩耗。
118	弥生土器 筒形	-	-	-	ABDHIN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。No.119・120 同一個体。
119	弥生土器 筒形	-	-	-	ABDHIN	灰黄褐色	B	頸部片	内外面やや摩耗。No.118・120 同一個体。
120	弥生土器 筒形	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	頸部片	内外面摩耗顕著。No.118・119 同一個体。
121	弥生土器 筒形	-	-	-	ABCHIN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
122	弥生土器 筒形	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
123	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABDHIN	灰白色	B	口～体部片	晩期末。外面摩耗顕著。
124	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABDHN	灰白色	B	口～体部片	晩期末。
125	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABDHKN	灰黄色	B	口～体部片	晩期末。内外面やや摩耗。
126	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABHKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	晩期末。外面赤彩。
127	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABHIKN	褐色灰	B	口～体部片	晩期末。内面やや摩耗。
128	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：灰黄褐色	B	口～体部片	晩期末。内外面やや摩耗。
129	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABIKN	黒褐色	B	口～体部片	晩期末。内外面摩耗顕著。
130	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABDHIN	灰黄色	B	体部片	晩期末。内外面やや摩耗。
131	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIK	にぶい赤褐色	B	胴部片	晩期末。
132	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHKN	にぶい褐色	B	胴部片	晩期末。内面摩耗顕著。
133	磨製石剣	最大長 12.1 cm、最大幅 2.7 cm、最大厚 0.85 cm。重量 34.5g。完形。緑色岩。基部付近被熱。							
134	打製石斧	最大長 24.65 cm、最大幅 12.25 cm、最大厚 2.3 cm。重量 (728)g。一部欠。粘板岩。							
135	打製石斧	最大長 17.65 cm、最大幅 9.45 cm、最大厚 1.9 cm。重量 320g。完形。粘板岩。							
136	打製石斧	最大長 15.3 cm、最大幅 10.2 cm、最大厚 2.7 cm。重量 470.5g。完形。粘板岩。							
137	打製石斧	最大長 19.1 cm、最大幅 12.5 cm、最大厚 3.2 cm。重量 762.5g。完形。粘板岩。							
138	打製石斧	最大長 (8.7) cm、最大幅 (9.6) cm、最大厚 (2.5) cm。重量 (254)g。刃・基部欠。粘板岩。							
139	打製石斧	最大長 (13.1) cm、最大幅 (11.25) cm、最大厚 (3.6) cm。重量 (673.5)g。基部欠。花崗岩。							
140	磨石	最大長 11.15 cm、最大幅 7.8 cm、最大厚 6.8 cm。重量 738g。完形。花崗岩。被熱。							
141	磨石	最大長 10.0 cm、最大幅 8.45 cm、最大厚 7.95 cm。重量 899.5g。完形。花崗岩。被熱。							
142	磨石	最大長 11.3 cm、最大幅 7.8 cm、最大厚 6.25 cm。重量 (774.5)g。所々欠。花崗岩。被熱。							
143	磨石	最大長 14.9 cm、最大幅 4.85 cm、最大厚 4 cm。重量 293g。完形。砂岩。							
144	磨石	最大長 13.6 cm、最大幅 4.45 cm、最大厚 2.45 cm。重量 158.5g。完形。砂岩。							
145	磨石	最大長 9.1 cm、最大幅 7.0 cm、最大厚 1.25 cm。重量 (98.5)g。所々欠。砂岩。							
146	磨石	最大長 (4.25) cm、最大幅 (4.2) cm、最大厚 (0.9) cm。重量 (19.5)g。大半欠。砂岩。被熱。							
147	磨石	最大長 (6.0) cm、最大幅 4.85 cm、最大厚 1.15 cm。重量 (41)g。半分欠。砂岩。							
148	磨石	最大長 (9.3) cm、最大幅 (5.2) cm、最大厚 (0.8) cm。重量 (50.5)g。大半欠。片岩。							
149	磨石	最大長 6.2 cm、最大幅 (4.75) cm、最大厚 0.8 cm。重量 (32)g。大半欠。片岩。							
150	磨石	最大長 8.65 cm、最大幅 4.5 cm、最大厚 0.85 cm。重量 (50)g。所々欠。緑泥片岩。							
151	磨石	最大長 9.9 cm、最大幅 5.85 cm、最大厚 1 cm。重量 96.5g。完形。緑泥片岩。							
152	磨石	最大長 3.7 cm、最大幅 3.45 cm、最大厚 1.05 cm。重量 19g。完形。砂岩。							
153	磨石	最大長 7.95 cm、最大幅 3.35 cm、最大厚 0.95 cm。重量 44.5g。完形。片岩。							
154	磨石	最大長 8.75 cm、最大幅 2.4 cm、最大厚 9.5 cm。重量 30.5g。完形。片岩。							
155	磨石	最大長 5.8 cm、最大幅 2.65 cm、最大厚 0.85 cm。重量 17.5g。完形。片岩。							
156	磨石	最大長 (32.6) cm、最大幅 (14.9) cm、最大厚 (10.35) cm。重量 (7,000)g。約半分欠。砂岩。							

133～156は、石器・石製品である。133は、緑色岩製の磨製石剣である。所々に剥離痕が残るが、完形品と思われる。鏑は、片面のみみられた。刃先付近は、研磨痕が顕著であり、刃こぼれが生じている。基部付近が被熱している。134～139は、打製石斧である。135～137は完形品であり、134は一部欠損、138・139は大半を欠損している。石材は、139のみ花崗岩、その他は粘板岩である。大きさは、134のみ大型、その他は欠損するものも含め、中型である。形態は様々であるが、すべて中段付近の両側面に挟り込みを入れている。140～156は、磨石である。石材、大きさ、形態にバラエティがみられる。石材は、140～142が花崗岩、143～147・152・156は砂岩、148・149・153～155は片岩、150・151は緑泥片岩である。大きさにバラツキがあるが、156のみ超大型である。形態は、楕円形のものが多いが、

140～142は球形を呈する。140～142は、平滑が顕著な部分があり、140・142は光沢を帯びている。140～142・146は、被熱している。

流れ込みの123～132は、縄文土器である。123～130は、晩期末の浮線文土器であり、浅鉢の口縁部から体部までに収まる破片である。外面は、網目状ないし眼鏡状の浮線文が施文されており、123・126は連結部に瘤が付く。129以外は、口縁部内面に沈線が巡る。調整は、129が不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、123の体部外面が横位、内面は123・124・126の体部が横・斜位、125・128・130の体部は横位、127の体部内外面は横位に施されている。126～128は、胎土がやや粗い。131・132は、深鉢の胴部片である。外面に撚糸文が施文されている、内面調整は、斜位のヘラミガキである。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第4号住居跡（第27図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）140・141－154・155グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。北東半分が調査区外にある。

本住居跡は、検出された範囲内全面で拡張が行われている。正確な規模は不明であるが、拡張前は東西が3.78m、南北は1.6m、拡張後は東西が5.78m、南北は2.85mを測る。平面プランは、拡張前後とも隅丸長方形か方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－33°－Eを指すと思われる。確認面からの深さは、拡張前後とも最大0.54mを測る。床面は、拡張前後ともやや凹凸がみられた。掘り方は、みられなかった。覆土は、10層（1～10層）確認された。中層前後で炭化物や焼土粒などを含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。最下層の11層は、拡張に伴い、人為的に埋め戻された土である。

壁溝は、拡張前のみ全周する。幅0.15m前後、床面からの深さは0.08m程を測る。

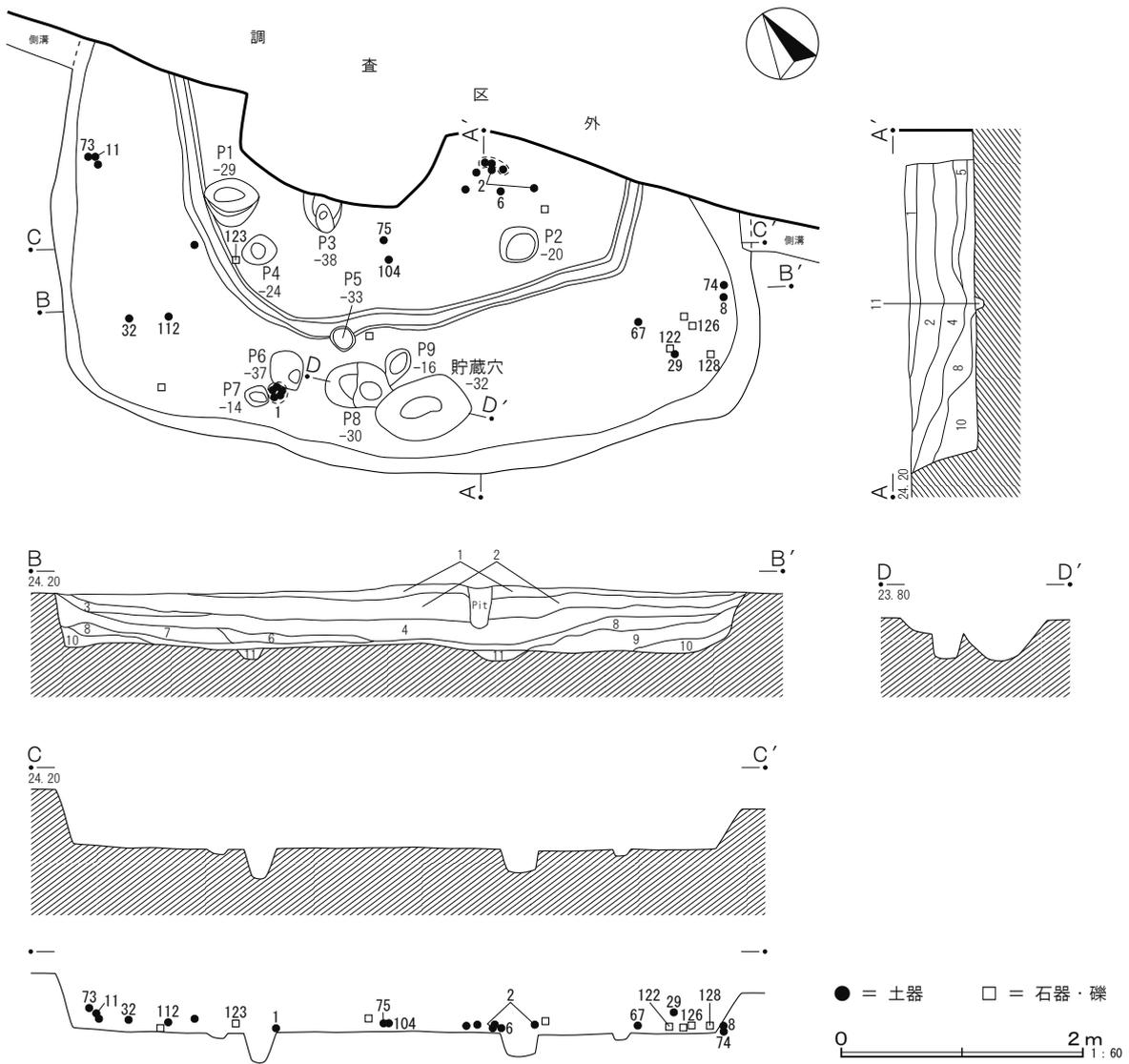
ピットは、計9基検出された。ピット1・2は、拡張後の支柱穴と思われる。南壁沿いに位置するピット6～9は、出入口に関連するもの、床面中央付近に位置するピット群は、屋根などを支えるものであろうか。いずれも覆土は図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

貯蔵穴は、南壁沿い中央付近の床面に位置する。長軸0.8m、短軸0.51mのいびつな隅丸長方形を呈する。床面からの深さは、最大0.32mを測る。覆土は、図示できなかったが、炭化物を含む灰色系の土が数層堆積していた。

炉跡は、確認されなかった。

本住居跡も大量の遺物が出土した。出土遺物（第28～31図）は、弥生土器壺（1・4～6・12～77）、甕（2・3・7～9・78～108）、高坏（109～111）、筒形土器（10・112）、片口（11）、鉢（113）、磨石（121～129）がある。出土位置を図示した遺物は、貯蔵穴周辺以外の床面直上ないし床面直上に近いレベルで出土した。出土位置を図示した遺物以外では、50・60・113がピット6、66がピット1、その他は覆土から出土した。また、この他にも流れ込みで縄文時代後期後葉の精製深鉢（114）、後・晩期の粗製深鉢（115）、晩期末の浅鉢（116～118）、深鉢（119）、古墳時代前期の壺（120）も覆土から出土した。土器は、摩耗が著しいものが大半を占める。

1・4～6・12～77は、壺である。破片は、判別の難しいものがあるが、中部高地栗林式系ないし

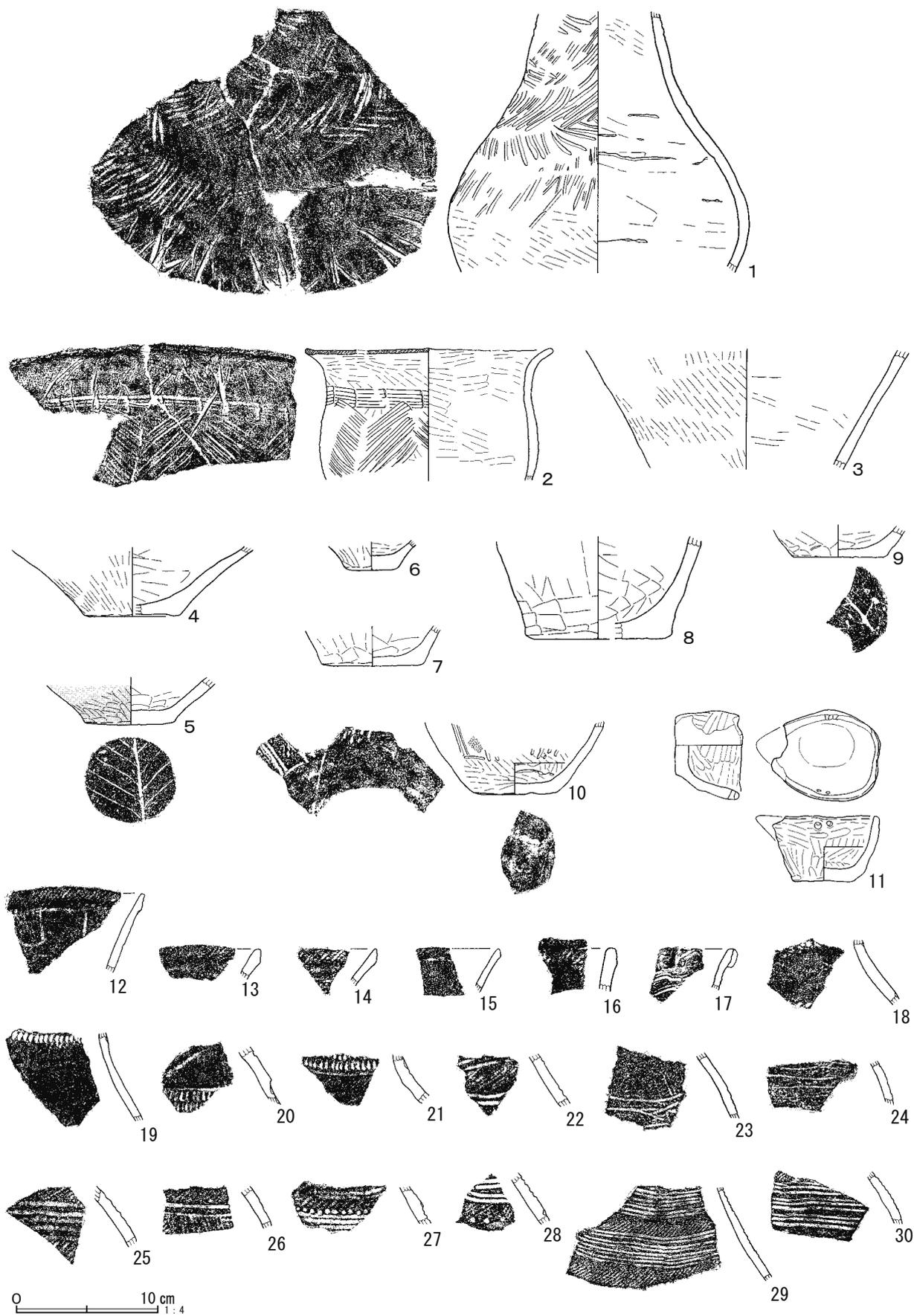


土層説明 (AA' BB')

- | | |
|--|---|
| <p>1 黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。</p> <p>2 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。</p> <p>3 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量含む。</p> <p>4 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。2層より暗い。</p> <p>5 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量含む。4層より暗い。</p> <p>6 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量含む。</p> | <p>7 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。</p> <p>8 灰色土：粘土質。灰白色粒多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。</p> <p>9 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。8層より暗い。</p> <p>10 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。9層より暗い。</p> <p>11 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒多量含む。拡張に伴う埋め戻し土。</p> |
|--|---|

第27図 第4号住居跡

その可能性の高いものがある。1は、頸部から胴部中段付近までの部位である。やや太い頸部がハの字状を呈し、肩部との境付近がややすぼまる。球形を呈する胴部中段付近に最大径を持つと思われる。外面の文様は、頸部から胴部中段までヘラ描きの煩雑な羽状文が横位に複数巡る。調整は、胴部中段付近の外面無文部がヘラミガキ、内面は摩耗が著しいため部分的な図示であるが、頸部がヘラミガキ、以下はヘラナデである。肩部から胴部中段付近の内面に輪積痕が複数みられた。文様・器形から他系統と思われるが、胎土は在地のものである。4～6は、胴下部から底部までに収まる部位である。調整は、4・5の外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。5は、外面に赤彩が施されているが、ほ



第 28 图 第 4 号住居跡出土遺物 (1)

ぼ剥落している。底面に木葉痕がみられた。小型の6は、内外面ともにヘラミガキである。4～6は、壺以外の器種の可能性もある。

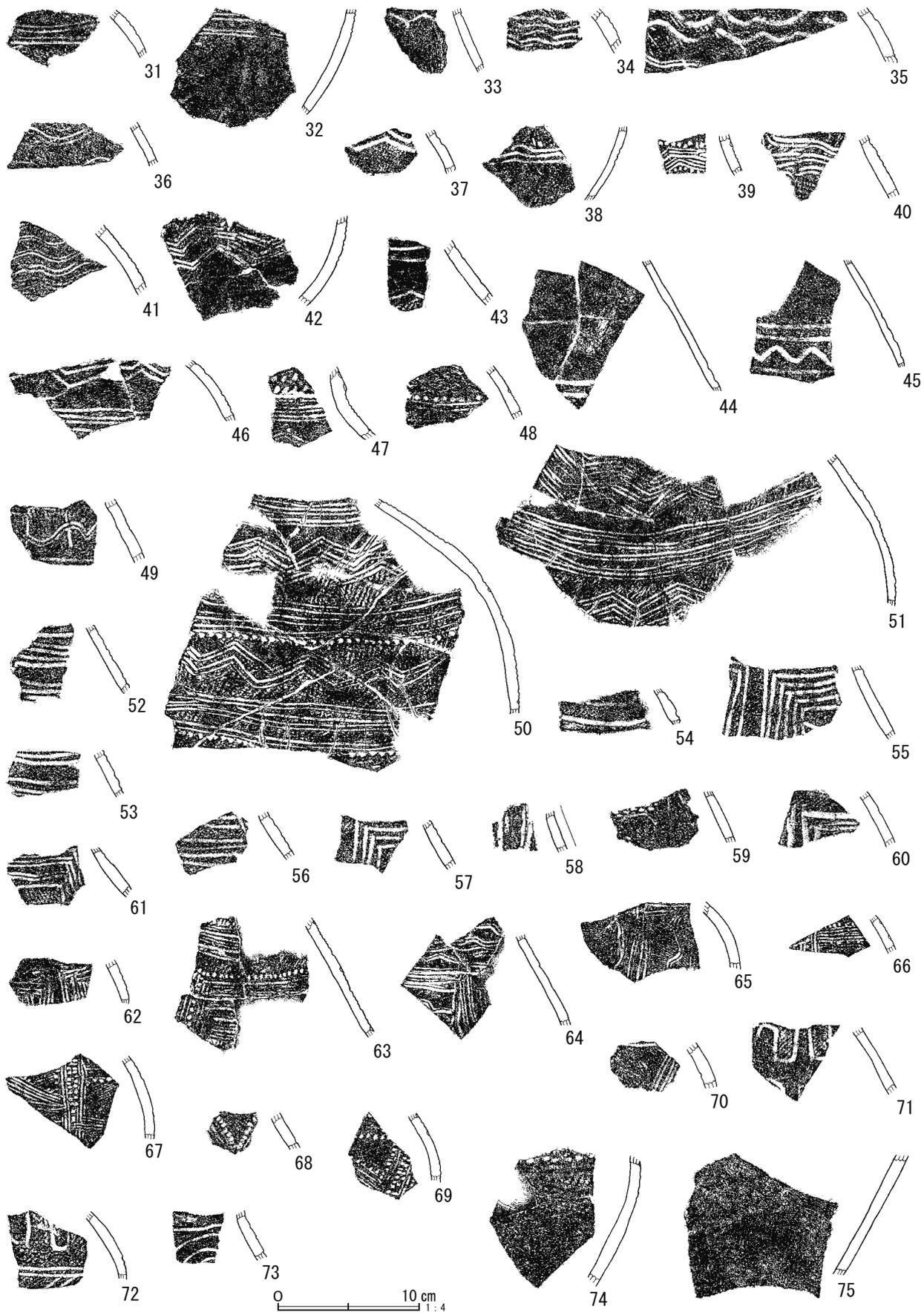
12～17は、口縁部から頸部までの破片である。外面の文様は、12～16が口縁部にLR単節縄文が施文されており、12は縄文直下に半円形の刺突列が1列巡る。以下は、ヘラで舌状文が描かれ、舌状文内にLR単節縄文が充填されている。15は、縄文施文部に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。17は、口縁部外面に突起が付き、突起脇と下に2本一単位の波状文が横位に巡る。調整は、12・13・15の頸部外面無文部と内面が不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、14の頸部外面無文部と内面、16・17の内面は横位、16の頸部外面無文部は縦位に施されている。

18・19は、外面に半円形の刺突列が横位に巡る頸部から肩部までの破片である。18は、上下に刺突列が巡る。刺突列間の文様の有無は、不明である。19は、頸部に刺突列が巡り、以下は無文である。調整は、18が不明であるが、19の外面無文部と内面は、斜位のヘラミガキである。

20～26は、外面にヘラ描きの平行沈線が巡る破片であり、肩部から胴上部までに収まる。同一個体の20・21は、段上の地文にLR単節縄文が縄目を縦位になるように施文され、ヘラ描きの斜線文が2条巡る。段下は、爪形の刺突列2列と細い平行沈線1条が巡り、以下はLR単節縄文と赤彩が施されているが、赤彩はほぼ剥落している。22は、上下に平行沈線が2条巡り、間にLR単節縄文が充填されている。上の平行沈線は、やや傾いている。23は、下位に細く煩雑な平行沈線が2条巡り、上位はLR単節縄文と思われる縄文が施文されている。24も細く煩雑な平行沈線がほぼ等間隔に複数巡る。25は、太い平行沈線が5条巡り、上下にLR単節縄文が施文されている。26は、やや太い平行沈線2条下に複数の沈線がほぼ等間隔に垂下する。地文にLR単節縄文が施文されている。内面調整は、20・21・23・25・26が不明であるが、22・24はヘラナデである。ヘラナデは、22が横・斜位、24は斜位に施されている。

27～32は、外面に櫛歯状工具による直線文が横位に巡る破片である。27～31は肩部から胴上部までに収まり、32は胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、30が3本、その他は2本である。27は、直線文が上位に1条、段下に2条巡る。段に円形の刺突列が1列巡り、上位の直線文との間にLR単節縄文が充填されている。28は、上位に直線文が2条、下位の段に円形の刺突列が1列巡る。段上は、地文に無節Lが施文されている。29は、LR単節縄文地に直線文4条がやや間隔を空けて上下に巡る。30は、LR単節縄文下に直線文がほぼ等間隔に3条巡る。以下は、無文である。31は、無文部下に直線文が2条巡り、以下にLR単節縄文が施文されている。32は、上位に直線文が2条巡り、以下は無文である。調整は、27の内面が斜位のヘラナデ、30は下位の外面無文部が横位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデ、31は上位の外面無文部が横位のヘラミガキ、32は下位の外面無文部が斜位のヘラミガキ、内面は上位が横位のヘラナデ、下位は横・斜位のヘラミガキである。28・29・31の内面は、不明である。

33～38は、外面にヘラ描きの波状文ないし山形文が横位に巡る破片である。33は頸部から肩部まで、34～37は胴上部、38は胴部中段から下部までの破片である。33は、上位に山形文が巡り、以下は無文である。34は、やや太い波状文が等間隔に5条巡る。35は、中部高地栗林式系である。上位に太い波状文が2条、下位に2本一単位の波状文が1条巡る。地文にLR単節縄文が施文されている。36は、



第 29 图 第 4 号住居跡出土遺物 (2)

細い波状文が上下にやや間隔を空けて上位は3条、下位は1条以上巡る。波状文間は、無文である。37は、上位に太い山形文が2条巡り、下位にLR単節縄文と思われる縄文が施文されている。38は、中段に波状文が3条巡る。上下の文様の有無は、不明である。調整は、33の外面無文部と内面はヘラミガキであり、前者は斜位、後者は横・斜位に施されている。34・35・37・38の内面、36の外面無文部と内面は、不明である。

39～42は、外面に櫛歯状工具による波状文ないし山形文が横位に巡る破片である。39・40は頸部から肩部までに収まり、41は胴上部、42は胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、39が3本、その他は2本である。39は、上下に巡る円形の刺突列間に山形文が2条巡る。40は、上位に煩雑な波状文が3条巡る。41は、波状文がほぼ等間隔に4条以上巡る。40・41は、地文にLR単節縄文が施文されている。42は、上位に山形文が3条巡り、上にLR単節縄文か無節Lが施文されている。下位は、無文である。調整は、39の内面上位、42の外面無文部が斜位のヘラミガキ、39の内面下位、42の内面は横位のヘラナデである。40・41の内面は、不明である。

43～46は、外面にヘラ描きによる横位の波状文ないし山形文と平行沈線が巡る破片であり、肩部から胴上部までに収まる。同一個体の44・45は、中部高地栗林式系である。43は、上位に平行沈線が2条、下位に山形文が1条巡る。間は無文で山形文下にLR単節縄文が施文されている。44・45は、上位が無文で下位に上から平行沈線2条、波状文1条、平行沈線1条が巡る。沈線が太い。46は、上位に山形文が2条、下位に平行沈線が4条巡る。地文にLR単節縄文が施文されている。調整は、43の外面無文部と内面が横・斜位のヘラミガキ、44・45の外面無文部と内面、46の内面は、不明である。

47～51は、外面に櫛歯状工具による波状文ないし山形文と直線文が横位に巡る破片であり、肩部から胴部中段までに収まる。櫛歯の数は、すべて2本である。47は、段下に直線文が3条、幅狭い無文部を挟んで下に波状文が1条巡る。段と段上に半円形の刺突列が2列巡る。48は、上位に波状文、下位に円形の刺突列1列と直線文2条が巡る。間は、無文である。49は、ヘラ描きの沈線がほぼ等間隔に垂下し、中段付近に波状文が1条巡る。下位は、直線文が1条横位に巡る。地文にLR単節縄文か無節Lが縄目を縦位になるように施文されている。50・51は、煩雑な直線文と山形文が交互に複数巡る。地文に無節Lが施文されている。50は、直線文が3条、波状文は上が3条、下は2条である。51は、上の波状文が5条、下は3条、直線文は4条である。50は、中段と下位の直線文下に半円形の刺突列が1列巡る。51は、3号住居跡出土土器と接合関係が認められた。調整は、47の外面無文部と内面、48の外面無文部、49の内面は不明であるが、48の内面は横位のヘラナデ、50の内面は上位が横位のヘラミガキ、下位は横位のヘラナデ、51の内面は横・斜位のヘラミガキである。

52～60は、外面にヘラで重四角文が描かれた破片であり、肩部から胴上部までに収まる。52～54は、同一個体である。52～54、55～57・60は、沈線が太い。58は、縦長の突帯が付く。59は、重四角文内に半円形の刺突がランダムに充填されている。57は地文にLR単節縄文、60はLR単節縄文か無節Lが施文されているが、その他は縄文が施文されているか不明である。内面調整は、60が斜位のヘラナデである以外、不明である。

61～67は、外面に櫛歯状工具で重四角文が描かれた破片であり、肩部から胴上部までに収まる。櫛歯の数は、63・66・67が3本、その他は2本である。61は、地文にLR単節縄文が施文されている。

62 は、地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。63 は、重四角文に沿って半円形の刺突列が1列巡り、重四角文上に同じ刺突列が1列と直線文3条が横位に巡る。地文に無節Lが施文されている。64 は、重四角文と同一工具による波状文が上に5条、重四角文内中央に1条横位に巡る。65 は、重四角文内外に同一工具による波状文が垂下する。64・65 は、地文にカナムグラによる擬縄文が施文されている。66 は、重四角文に沿って半円形の刺突列が1列巡る。67 は、重四角文内に直線文と円形の刺突列が間隔を空けて横位に巡り、外縁に同じ刺突列が2列垂下する。重四角文外は、同一工具による斜線文と円形の刺突列が施文されている。地文にカナムグラによる擬縄文が施文されている。内面調整は、61・63・66・67 がヘラナデであり、61 は斜位、63・66・67 は横・斜位に施されている。62・64・65 は、ヘラミガキであり、62・64 は斜位、65 は横位に施されている。

68～70 は、外面に櫛歯状工具で重三角文が描かれた破片であり、肩部から胴上部までに収まる。櫛歯の数は、68 が不明、69・70 は2本である。68 は、重三角文に沿って内側に半円形の刺突列が1列巡る。地文にRL単節縄文か無節Rが施文されている。69 も重三角文に沿って半円形の刺突列が巡る。重三角文内は1列、重三角文間は2列巡る。地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。70 は、地文にRL単節縄文か無節Rが施文されている。内面調整は、すべて不明である。69 は、中段付近に輪積痕がみられた。

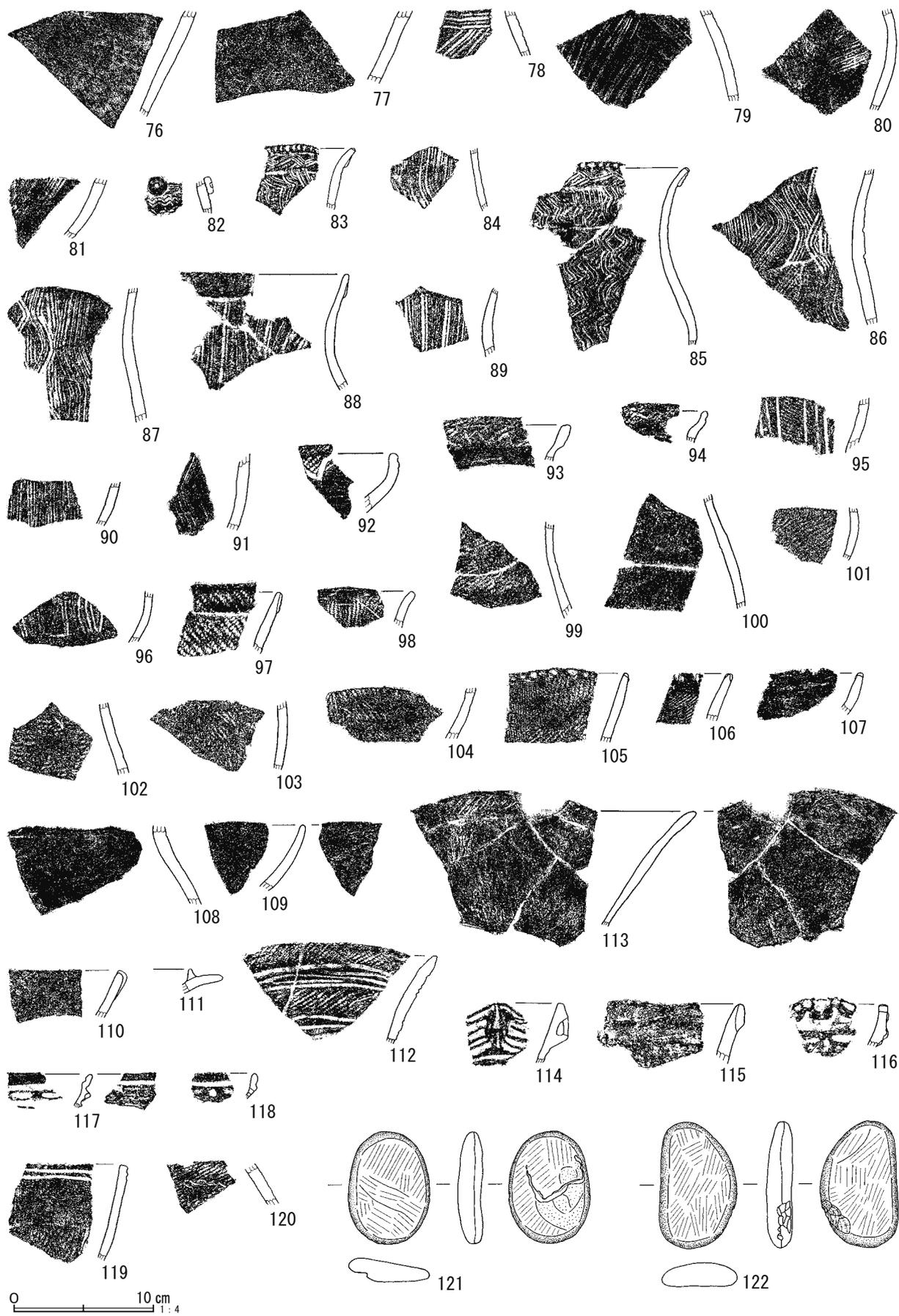
71・72 は、外面にヘラで舌状文が描かれた胴上部片である。71 は、舌状文が上下に描かれており、間は無文である。舌状文内にLR単節縄文が充填されている。72 は、舌状文下にやや間隔を空けてヘラ描きの平行沈線が2条巡り、下に斜線文がほぼ等間隔に施文されている。地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。調整は、71 の外面無文部が横・斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデ、72 の内面は斜位のヘラナデである。

73 は、外面にヘラで渦文が描かれた頸部から肩部までの破片である。沈線がやや細い。調整は、内外面ともに不明である。東北南部川原町口式系であるが、胎土から在地産と思われる。なお、第3号住居跡出土8・69～73 とは、色調・胎土が異なることから別個体と思われる。

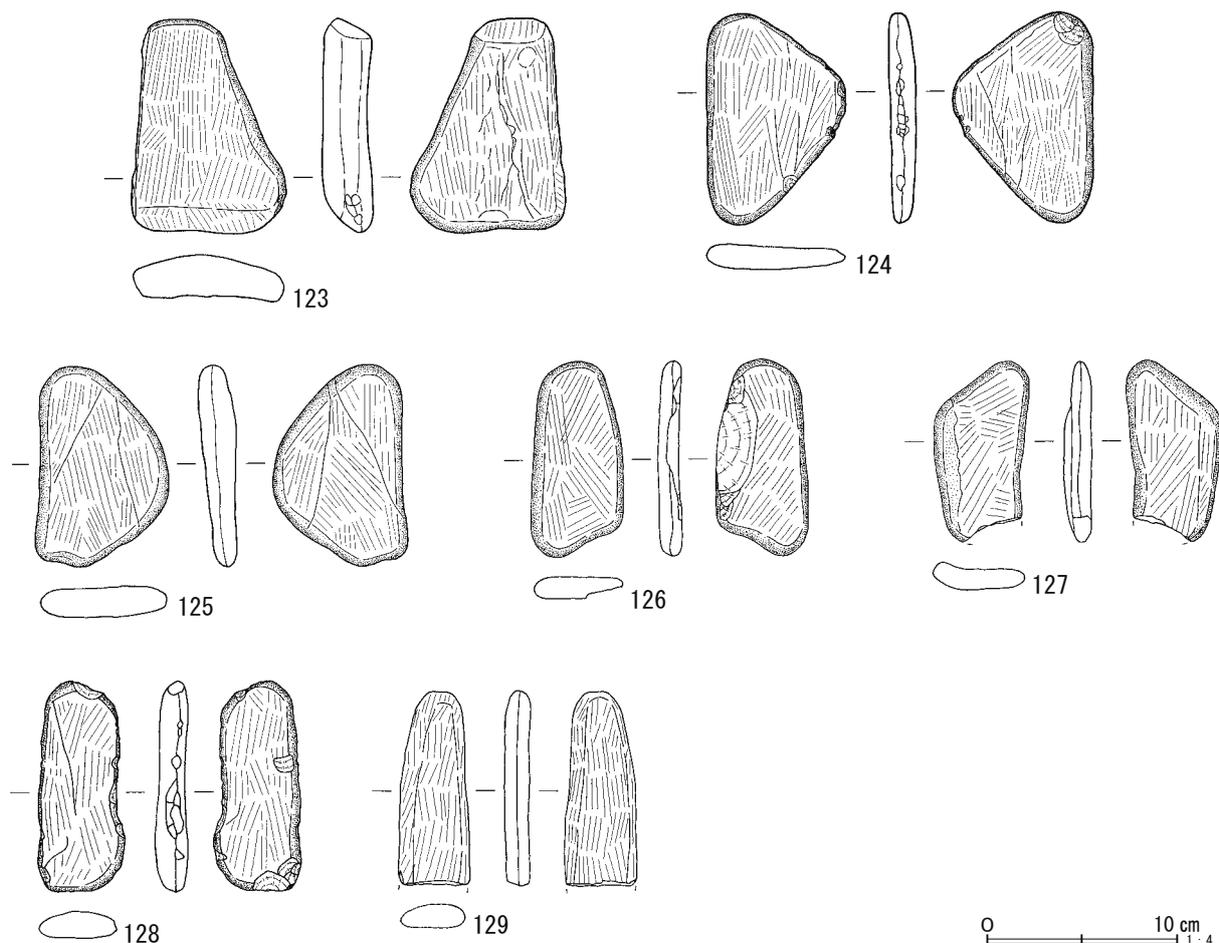
74～77 は、胴下部外面が無文の破片である。74 は胴部中段から下部まで、その他は胴下部の破片である。74 は、上位に円形の刺突列1列とヘラ描きの浅い平行沈線が4条巡る。調整は、74 の外面無文部と内面、76・77 の内面は不明であるが、75 は内外面ともにヘラミガキであり、外面は斜位、内面は横・斜位に施されている。76・77 の外面は、斜位のヘラミガキであり、76 はやや粗く施されている。

2・3・7～9・78～108 は、甕である。2 は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた中部高地栗林式系の甕である。口縁部から胴部中段付近までの部位である。最大径を持つ口縁部が大きく外反し、頸部はほぼ直立する。胴部は中段付近がやや膨らむ。外面の文様は、口縁端部にLR単節縄文が施文され、頸部に5本一単位の簾状文が横位に巡る。胴部は、同一工具で縦位の羽状文が描かれている。調整は、内外面ともにヘラミガキである。胎土が粗い。3・7～9 は、胴下部から底部までに収まる部位である。3 は、胴下部が逆ハの字状を呈する。調整は、内外面ともに3 がヘラミガキ、7～9 はヘラナデである。9 は、外面一部に輪積痕、底面に木葉痕と種子圧痕と思われる凹みが2つみられた。8 は、胎土がやや粗い。3 は、壺の可能性はある。

78～91 は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた破片である。78～82 は、中部高地栗林式系である。



第 30 图 第 4 号住居跡出土遺物 (3)



第 31 図 第 4 号住居跡出土遺物（4）

78～80 は、胴部外面に縦位の羽状文が描かれた破片である。78・79 は頸部から胴上部までに収まり、80 は胴部中段の破片である。櫛歯の数は、78 が 5 本、79・80 は 4 本である。羽状文以外の外面文様は、78 の頸部に同一工具による直線文が横位に巡る。調整は、79 の内面、80 の内外面は不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、78 の内面が斜・横位、79 の外面は横位に施されている。80 は、胎土がやや粗い。

81 は、胴部外面に横位の羽状文が描かれた胴下部片である。櫛歯の数は、5 本である。羽状文下は、無文である。調整は、外面無文部が横・斜位、内面は斜位のヘラミガキである。

82 は、外面に直線文と波状文が横位に巡る胴上部片である。櫛歯の数は、3 本である。直線文下に波状文が 2 条以上巡る。上位に中央に円形の刺突が刻まれたボタン状貼付文が付く。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。

83～91 は、頸部外面以下に直線文ないし波状文が垂下する破片である。83～89 は口縁部から胴部中段までに収まり、90・91 は胴下部の破片である。86・87、88・89 は、同一個体である。櫛歯の数は、83・90 が 4 本、84・88・89 は 5 本、85 は 3 本、86・87 は 11～12 本、91 は 7 本である。外面の文様は、83 が口縁端部に刻みが施文され、肥厚した口縁部に波状文が横位に巡る。頸部以下は、煩雑な波状文が複数垂下する。地文に L R 単節縄文が施文されている。84 は、緩い波状文が複数垂下する。85 は、文様が 83 に似るが、肥厚した口縁部に巡るのは山形文であり、櫛歯の数も異なる。86・87 は、波

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	-	(18.65)	-	ABEHIKM	にぶい黄橙 黒褐	B	頸~胴 40%	内外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
2	弥生土器 甕	19.6	(9.4)	-	ABDEHIKN	外：にぶい褐 内：黒褐	B	口~胴 30%	内外面摩耗顕著。
3	弥生土器 甕	-	(18.55)	-	ABCHIKN	にぶい赤褐 灰褐	B	胴下部 40%	内外面摩耗顕著。
4	弥生土器 壺	-	(4.95)	(6.8)	ABDHIKN	にぶい黄 黄灰	B	胴~底 35%	内外面摩耗顕著。
5	弥生土器 壺	-	(3.3)	6.4	ABDHIKN	外：暗褐 内：褐灰	B	底部 100%	内外面やや摩耗。外面赤彩、ほぼ剥落。
6	弥生土器 壺	-	(2.05)	3.9	ABHIKN	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	B	底部 95%	内面摩耗顕著。
7	弥生土器 甕	-	(2.85)	7.2	ABCDHIKN	外：にぶい黄橙 内：黒褐	B	底部 60%	外面摩耗顕著。
8	弥生土器 甕	-	(7.35)	(10.3)	ABEHN	黒褐 にぶい黄橙	B	胴~底 25%	内外面やや摩耗。
9	弥生土器 甕	-	(2.25)	(6.6)	ABHIKN	灰黄褐色	B	底部 45%	内外面やや摩耗。外面輪積痕有。
10	弥生土器 筒形	-	(5.2)	(5.9)	ABCDHIKN	灰黄色	B	胴~底 50%	内面輪積痕有。底面種子圧痕？凹み複数有。
11	弥生土器 片口	(7.55)	(4.8)	4.4	ABHIKN	黒褐色	B	90%	内外面所々摩耗顕著。口縁部二個一対穿孔有。
12	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	浅黄色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
13	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	にぶい黄色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
14	弥生土器 壺	-	-	-	ABIKN	黒褐色	B	口~頸部片	
15	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。縄文施文部赤彩、ほぼ剥落。
16	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	
17	弥生土器 壺	-	-	-	ABIKN	褐灰色	B	口~頸部片	内面摩耗顕著。
18	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	灰黄色	B	頸~肩部片	内外面摩耗顕著。
19	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIK	にぶい黄褐色	B	頸~肩部片	内外面やや摩耗。
20	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐 内：黒	B	肩~胴上片	内面摩耗顕著。No.21 同一個体。
21	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	外：にぶい黄褐 内：黒	B	肩部片	内面摩耗顕著。縄文施文部赤彩、ほぼ剥落。No.20 同一。
22	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEHIK	外：にぶい黄褐 内：黒	B	肩部片	
23	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIK	外：にぶい黄橙 内：灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
24	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：黒	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
25	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：灰白 内：灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
26	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIK	外：浅黄橙 内：褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
27	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	外：淡黄 内：黒	B	肩~胴上片	内外面摩耗顕著。
28	弥生土器 壺	-	-	-	ABHKN	褐灰色	B	肩~胴上片	内面摩耗顕著。
29	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい黄橙 内：黒	B	肩~胴上片	内面摩耗顕著。
30	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIN	外：黒褐 内：褐灰	B	胴上部片	
31	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
32	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	オリーブ黒色	B	胴中~下片	
33	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEHIKN	灰黄褐色	B	頸~肩部片	外面摩耗顕著。
34	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	浅黄色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
35	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
36	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIKN	にぶい橙色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
37	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
38	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	外：灰白 内：褐灰	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
39	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIK	浅黄色	B	頸~肩部片	
40	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
41	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄 内：灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
42	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	褐灰色	B	胴中~下片	内外面大半摩耗顕著。
43	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIK	灰黄褐色	B	肩部片	
44	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEKN	浅黄褐色	B	肩~胴上片	内外面摩耗顕著。No.45 同一個体。
45	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEIKN	浅黄褐色	B	肩~胴上片	内外面摩耗顕著。No.44 同一個体。
46	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	にぶい黄色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
47	弥生土器 壺	-	-	-	ABIKN	灰黄褐色	B	肩~胴上片	内外面摩耗顕著。
48	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEHIKN	灰黄色	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
49	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐 内：褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
50	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	B	肩~胴中片	
51	弥生土器 壺	-	-	-	AHIKN	外：黒褐 内：褐灰	B	胴上~中片	内面摩耗顕著。3号住出土土器と接合。
52	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰黄色	B	肩~胴上片	内外面摩耗顕著。No.53・54 同一個体。
53	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰黄色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。No.52・54 同一個体。
54	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰黄色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。No.52・53 同一個体。
55	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	浅黄褐色	B	肩~胴上片	内外面摩耗顕著。
56	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	浅黄褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
57	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIK	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
58	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIK	外：にぶい黄橙 内：灰黄褐	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
59	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
60	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	
61	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIK	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄褐	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
62	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
63	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIK	灰黄褐色	B	肩~胴上片	外面摩耗顕著。
64	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	肩~胴上片	
65	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	外：にぶい黄橙 内：黒褐	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
66	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIK	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	胴上部片	
67	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：灰	B	胴上部片	内面やや摩耗。
68	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDIKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	内面摩耗顕著。
69	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIK	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。内面輪積痕有。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
70	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIN	外：灰黄褐色 内：黒	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
71	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	外：灰黄褐色 内：黒褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
72	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
73	弥生土器 壺	-	-	-	ABCEHIKN	灰黄褐色	B	頸～肩部片	内外面摩耗顕著。
74	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：にぶい黄橙 内：灰	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
75	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIK	にぶい黄橙色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
76	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIK	外：にぶい黄橙 内：灰	B	胴下部片	内面摩耗、剥離顕著。
77	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐色 内：灰黄	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
78	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDIKN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	内外面やや摩耗。
79	弥生土器 甕	-	-	-	ABDKN	外：黒褐色 内：にぶい黄橙	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
80	弥生土器 甕	-	-	-	ABDEHKN	明赤褐色	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
81	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：黒褐色 内：にぶい黄橙	B	胴下部片	外面やや摩耗。
82	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒色	B	胴上部片	内面やや摩耗。
83	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：黒褐色 内：にぶい黄橙	B	口～頸部片	
84	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
85	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIKN	外：黒褐色 内：にぶい褐色	B	口～胴中片	内面大半摩耗顕著。
86	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外：黒褐色 内：にぶい褐色	B	頸～胴中片	内面摩耗顕著。No. 87 同一個体。
87	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外：黒褐色 内：にぶい褐色	B	頸～胴中片	内面摩耗顕著。No. 86 同一個体。
88	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	内外面摩耗顕著。No. 89 同一個体。
89	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	頸部片	内面摩耗顕著。No. 88 同一個体。
90	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	胴下部片	内面摩耗顕著。内面輪積痕有。
91	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDH	外：黒褐色 内：にぶい黄橙	B	胴下部片	内面やや摩耗。
92	弥生土器 甕	-	-	-	ABDLM	外：浅黄橙 内：褐灰	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
93	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	外面摩耗顕著。
94	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIK	赤褐色	B	口～頸部片	外面摩耗顕著。
95	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIK	灰黄褐色	B	胴下部片	内面摩耗顕著。
96	弥生土器 甕	-	-	-	ABEIKN	淡黄色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
97	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	黒褐色	B	口～頸部片	内面やや摩耗。
98	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	外：黒褐色 内：暗褐色	B	口～頸部片	内面やや摩耗。
99	弥生土器 甕	-	-	-	ABEIKM	外：褐灰 内：にぶい黄橙	B	頸～胴上片	外面摩耗顕著。No. 100 同一個体。
100	弥生土器 甕	-	-	-	ABEIKM	外：褐灰 内：にぶい黄橙	B	胴上部片	外面摩耗顕著。内面輪積痕有。No. 99 同一。
101	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐色 内：暗灰	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
102	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	内面摩耗顕著。No. 103・104 同一個体。
103	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIK	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	B	胴中段片	内面摩耗顕著。No. 102・104 同一個体。
104	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	B	胴下部片	内面摩耗顕著。No. 102・103 同一個体。
105	弥生土器 甕	-	-	-	AHIK	黒色	B	口～頸部片	
106	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外：黒褐色 内：灰黄褐色	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
107	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
108	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	褐灰色	B	頸～胴上片	内外面大半摩耗顕著。
109	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDIKN	浅黄橙 黒	B	口～坏部片	内外面摩耗顕著。内外面赤彩、ほぼ剥落。
110	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙 褐灰	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。
111	弥生土器 高坏	-	-	-	ABHIKN	にぶい赤褐色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。内外面赤彩、大半剥落。
112	弥生土器 筒形	-	-	-	ABDIK	灰黄褐色	B	口～頸部片	
113	弥生土器 鉢	-	-	-	ABCDHIKN	黒褐色	B	口～体部片	内面、外面一部摩耗顕著。
114	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDEHIKN	浅黄色	B	口縁部片	後期後。内面摩耗顕著。
115	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHKN	にぶい橙色	B	口～頸部片	後・晩期。外面摩耗顕著。
116	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABCHIKN	外：灰褐色 内：黒	B	口～体部片	晩期末。
117	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABCEN	灰黄褐色	B	口～体部片	晩期末。
118	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABCDHIKN	黄灰 灰白	B	口～体部片	晩期末。内面摩耗顕著。焼成後穿孔有。
119	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHKN	黒褐色	B	口～胴上片	晩期末。
120	土師器 壺	-	-	-	ABDHKN	灰黄褐色	A	胴上部片	古墳前。
121	磨石	最大長 8.05 cm、最大幅 5.85 cm、最大厚 1.75 cm。重量 84g。完形。砂岩。							
122	磨石	最大長 9.1 cm、最大幅 5.55 cm、最大厚 1.8 cm。重量 (117)g。一部欠。砂岩。							
123	磨石	最大長 11.15 cm、最大幅 8.05 cm、最大厚 2.6 cm。重量 (301.5)g。一部欠。砂岩。							
124	磨石	最大長 11.2 cm、最大幅 7.3 cm、最大厚 1.4 cm。重量 (120.5)g。所々欠。泥岩。							
125	磨石	最大長 10.55 cm、最大幅 6.8 cm、最大厚 1.9 cm。重量 165.5g。完形。砂岩。							
126	磨石	最大長 10.25 cm、最大幅 4.85 cm、最大厚 1.2 cm。重量 (80.5)g。片面約半分欠。砂岩。							
127	磨石	最大長 (9.45) cm、最大幅 4.85 cm、最大厚 1.1 cm。重量 (74)g。片端欠。砂岩。							
128	磨石	最大長 (11.1) cm、最大幅 4.5 cm、最大厚 1.7 cm。重量 (98)g。所々欠。砂岩。							
129	磨石	最大長 (10.25) cm、最大幅 3.8 cm、最大厚 1.3 cm。重量 (67.5)g。片端欠。泥岩。							

状文が複数垂下する。88・89は、頸部以下に直線文が複数垂下する。口縁部外面の文様の有無は、不明である。90は直線文、91は波状文が複数垂下する。内面調整は、86～90が不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、83が横位、84・85は横・斜位、91は斜位に施されている。90は、内面に輪積痕がみられた。84・86・87・90は、胎土に白雲母を多量含む。88・89は、胎土が粗い。83・85は、その文様構成から筒形土器の範疇で捉えた方が良いかもしれない。

92～96は、胴部外面にヘラでコの字重ね文が描かれた中部高地栗林式系と思われる破片である。92～94は、受け口状を呈する口縁部から頸部まで、95・96は胴下部の破片である。92～94は、口縁部外面にヘラ描きの波状文が1条横位に巡る。92は、端部を含む口縁部の波状文より上、93・94は口縁部の地文に縄文が施文されている。縄文は、92・93がLR単節縄文、94は無節Lである。92の波状文以下及び93・94の頸部は、無文である。92は、沈線が太い。95は、ヘラ描きの沈線、96は4本一単位の櫛歯状工具による直線文が複数垂下する。95は、地文にLR単節縄文が施文されているが、96は縄文が施文されているか不明である。調整は、92の内面、94の頸部外面無文部、95・96の内面は不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、92の頸部外面無文部は横ナデ後縦位、93の頸部外面無文部と内面、94の内面は横位に施されている。

97～106は、外面に縄文が施文された破片である。97・98はRL、99～101はLR単節縄文、102～104は無節R、105・106はLである。RL単節縄文が施文された97・98は、口縁部から頸部までの破片である。縄文は、97が端部を含む肥厚した口縁部全面、98は外面全面に縄目が縦位になるように施文されている。内面調整は、97が斜位、98が横位のヘラミガキである。97は、胎土に白雲母を多量含む。LR単節縄文が施文された99～101は、99・100が頸部から胴上部までに収まり、101は胴部中段付近の破片である。99・100は、同一個体である。縄文は、すべて外面全面に施文されている。内面調整は、99・100が横・斜位のヘラナデ、101は不明である。100は、内面中段に輪積痕がみられた。無節Rが施文された102～104は、102が頸部から胴上部まで、103が胴部中段付近、104が胴下部の破片であり、すべて同一個体である。縄文は、外面全面に施文されている。内面調整は、不明である。胎土に白雲母を多量含む。無節Lが施文された105・106は、口縁部から頸部までの破片である。縄文は、105が外面全面、106は口縁部下位以下に施文されている。いずれも口縁端部に刻みが施文されている。内面調整は、105が横・斜位のヘラミガキ、106は不明である。

107・108は、ほぼ無文の破片である。107は口縁部から頸部まで、108は頸部から胴上部までの破片である。107は、口縁端部に刻みが施文されている。108は、頸部にヘラ描きの細い平行沈線が1条巡る。調整は、いずれも内外面ともにヘラミガキであり、107は横位、108は縦・斜位に施されている。107は、胎土がやや粗い。

109～111は、中部高地栗林式系の高坏である。109は口縁部から坏部まで、110・111は口縁部の破片である。110は、口縁端部以下の外面に縦長の低い突起が付く。111は、内面に受けを持つ。蓋の可能性もある。調整は、すべて内外面ともにヘラミガキであり、109は斜位、110・111は横位に施されている。109・111は、内外面に赤彩が施されているが、109はほぼ剥落、111は大半が剥落している。

10・112は、筒形土器である。10は、胴下部から底部までの部位である。胴下部が内湾する。底径がやや大きい。外面の文様は、ヘラで重四角文が描かれており、重四角文内にLR単節縄文が施文されている。調整は、内外面ともにヘラミガキである。内面に輪積痕がみられた。底面は、細かい網代痕と種子圧痕と思われる複数の凹みがみられた。112は、口縁部から頸部までの破片である。外面の文様は、肥厚した口縁部を含む全面にLR単節縄文とヘラ描きの太い平行沈線4条が交互に施文されている。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。器壁が厚い。壺の可能性もある。

11は、小型の片口である。片口先端を欠くが、残存状態は比較的良好である。口縁部の短径両側面

に二個一対の焼成前穿孔がみられた。調整は、内外面ともにヘラミガキである。器壁が厚い。

113 は、鉢の口縁部から体部までの破片である。口縁部がやや外反しながら大きく開き、口縁部と体部の境が凹む。文様は、口縁部内外面に無節Lが施文されている。体部内外面の調整は、ヘラミガキであり、外面は縦位に施され、内面は方位不明である。壺の可能性もあるが、口縁部内外面に文様があること、口径が大きいことなどから鉢とした。

121～129 は、磨石である。部分的に欠損するものが多い。石材は、124・129 が泥岩、その他は砂岩である。大きさは、ほぼ同じであるが、123 のみ分厚く、その他は扁平である。形態は、様々である。

流れ込みの114～119 は縄文土器、120 は古墳時代前期の土師器壺である。114 は、後期後葉高井東式の精製深鉢の波状口縁部片であり、側面に孔を持つ。波状口縁に沿って沈線が複数巡る。内面調整は、不明である。115 は、後・晩期の粗製深鉢の口縁部から頸部までの破片である。調整は、肥厚した口縁部に指頭圧痕が施されている。頸部外面は不明、内面は横位のヘラナデである。胎土が粗く、礫を多量含む。116～119 は、晩期末の土器である。116～118 は、浮線文土器の浅鉢であり、すべて口縁部から体部までの破片である。文様は、口縁部外面に眼鏡状の浮線文が巡り、116・117 は連結部に瘤が付く。116 は、口縁端部に頂点が平らな突起が付く。117 は、内面に平行沈線が1条巡る。118 は、体部に外側からの焼成後穿孔がみられた。調整は、116の内面、117の内外面、118の外面に横位のヘラミガキが施されており、116・117 は丁寧である。118の内面は、不明である。119 は、深鉢の口縁部から胴上部までの破片である。文様は、口縁部外面にヘラ描きの平行沈線が2条巡り、以下にLR単節縄文が施文されている。内面調整は、不明である。116 は、胎土が粗く、礫を多量含む。120 は、古墳時代前期の土師器壺の胴上部片である。外面の文様は、無節L地にS字結節文が1条巡る。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。焼成が良好である。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第5号住居跡（第32図）

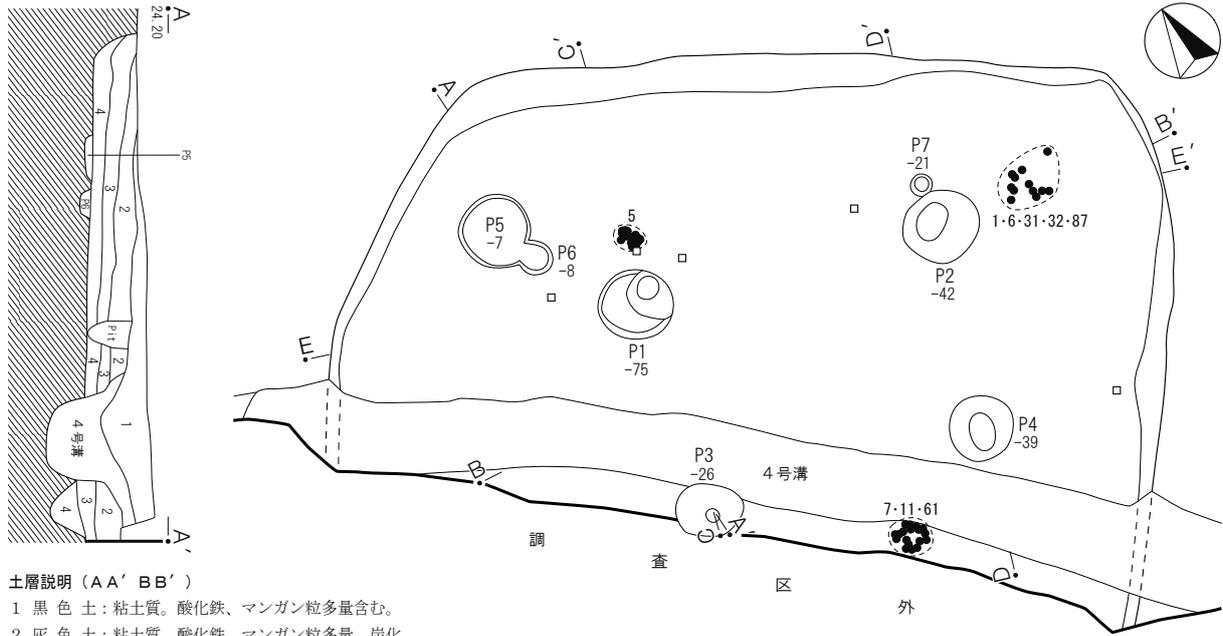
第1区（2009（平成21）年度第2次調査）140・141－155・156グリッドに位置する。ほぼ中央付近を北西から南東方向に走る第4号溝跡に切られている。南西半分は、調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は6.45 m、南北は4 m前後を測る。平面プランは、隅丸長方形か方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－51°－Wを指すと思われる。確認面からの深さは、最大0.48 mを測る。床面は、北から南へやや下るが、概ね平坦である。掘り方は、みられなかった。覆土は、5層（1～5層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピットは、計7基検出された。ピット1・2は、その位置から主柱穴と思われる。本住居跡のほぼ中央に位置するピット3は、屋根などを支えるものか。ピット4は、出入口に関連するものか。浅いピット5・6は、性格不明である。ピット7は、主柱穴のピット2北側に隣接することから補佐するものか。ピット3以外、覆土を図示できなかったが、いずれも柱痕跡は認められなかった。

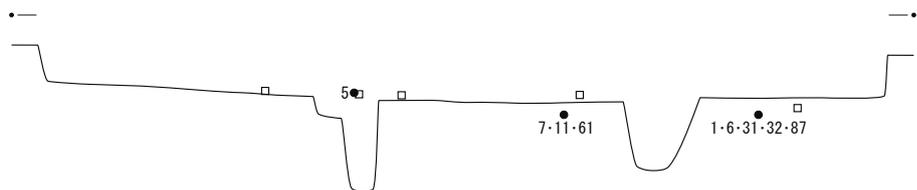
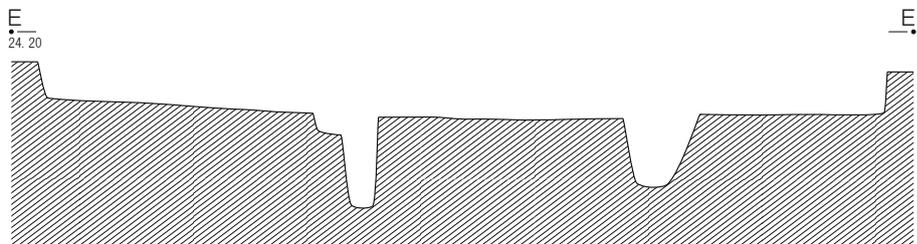
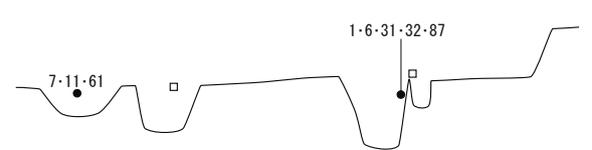
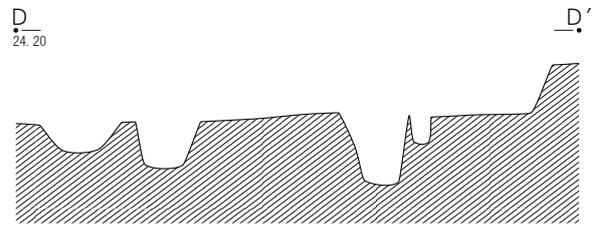
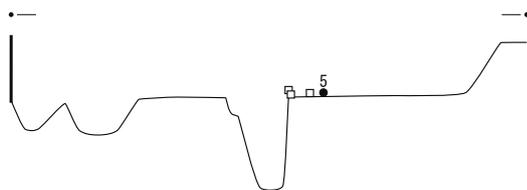
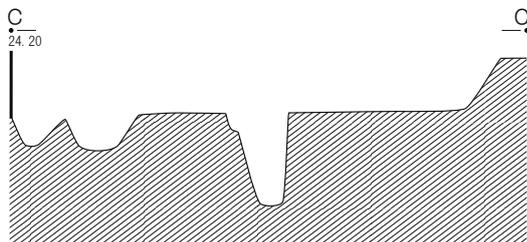
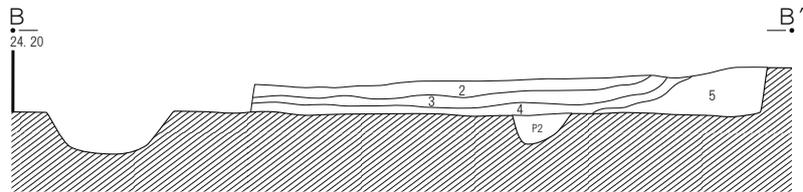
壁溝・炉跡・貯蔵穴は、確認されなかった。

本住居跡も遺物が大量に出土した。出土遺物（第33～36図）は、弥生土器壺（1～3・14～64）、広口壺（8・65）、甕（4～7・9～13・66～106）、高坏（107・108）、筒形（109）、打製石斧（116）、搔器（117・118）、磨石兼敲石（119）、磨石（120）がある。出土位置を図示した遺物は、



土層説明 (A A' B B')

- 1 黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。2層より暗い。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色シルト、マンガン粒多量、炭化物少量含む。3層より暗い。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。4層より明るい。



● = 土器
□ = 石器・礫

0 2m 1:60

第32図 第5号住居跡

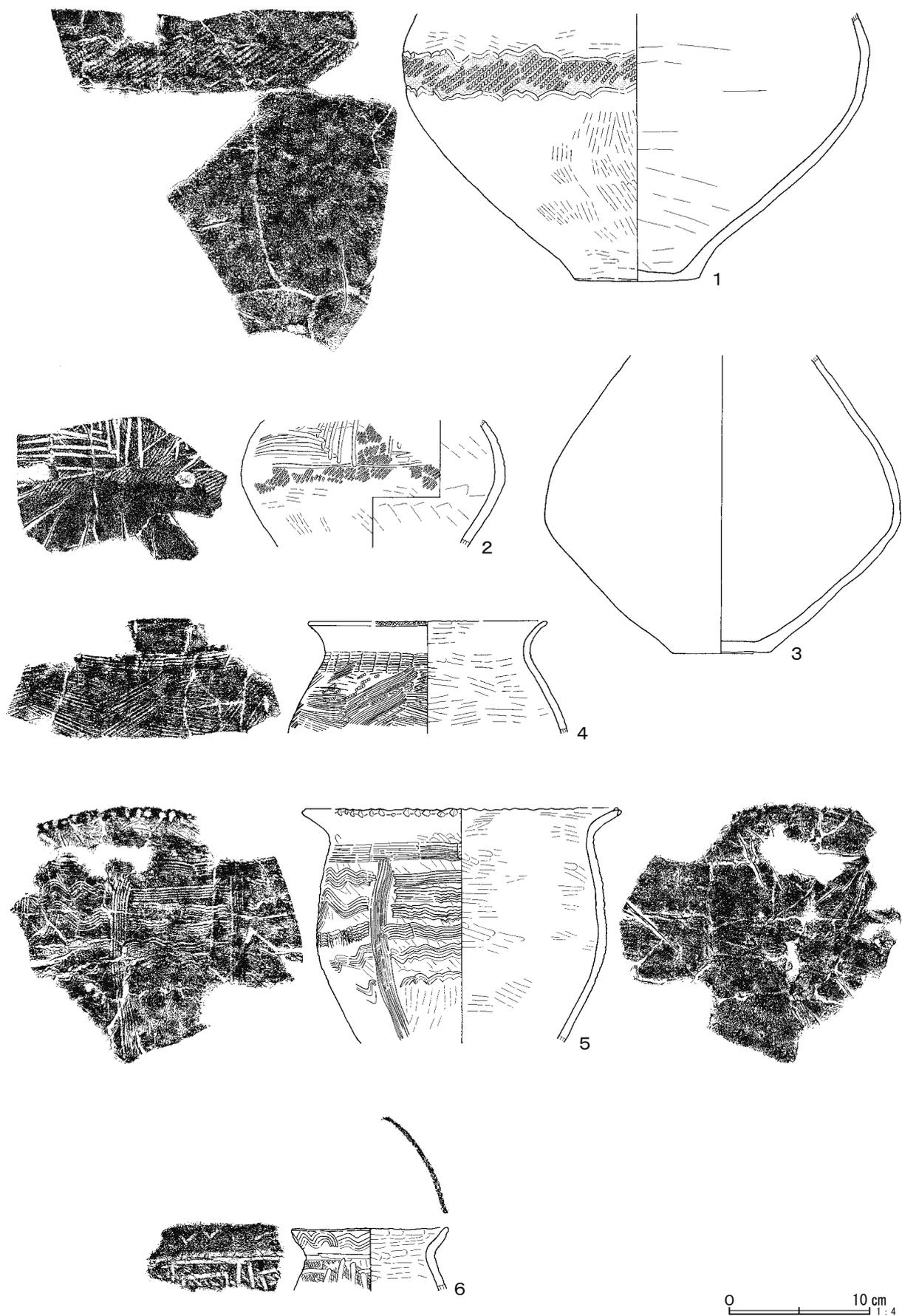
北東及び北西隅、南東部の床面直上から出土した。出土位置を図示した遺物以外では、10がピット3、38がピット4、その他は覆土から出土した。また、この他にも流れ込みで縄文時代晩期末の浅鉢(110～113)、古墳時代前期の台付甕(114・115)が覆土から出土した。土器は、摩耗が著しいものが大半を占める。

1～3・14～64は、壺である。破片は、判別の難しいものもあるが、中部高地栗林式系ないしその可能性が高いものが多い。1は、胴部中段付近から底部までの部位である。球形を呈する胴部中段付近に最大径を持つと思われる。外面の文様は、胴部中段にヘラ描きの波状文が横位に2条巡り、間に縄目の大きいLR単節縄文が充填されている。縄文施文部に赤彩が施されている。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。破片31・32と同一個体である。2は、球形を呈する胴上部から下部までの部位である。最大径を中段付近に持つと思われる。外面の文様は、胴上部にヘラで重四角文が描かれ、重四角文外は胴部中段付近まで縄目の細かいLR単節縄文が施文されている。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。器壁がやや厚い。3は、肩部から底部までの部位である。やや縦長の算盤玉状を呈し、胴部中段よりやや下に最大径を持つ。内外面ともに摩耗が著しいため文様・調整は図示できなかったが、外面はおそらく無文と思われる。

14～18は、口縁部から頸部までに収まる破片である。18は、中部高地栗林式系である。外面の文様は、14～16が肥厚した口縁部外面、18は大きく外反する口縁端部に縄文が施文されている。縄文は、14が無節R、15・16はRL、18はLR単節縄文である。縄文施文部以下は、14・15・18が無文、16はヘラで上向きの鋸歯文が描かれている。17は、口縁部外面に縦長の突起が付き、側面に径の小さい焼成前穿孔がみられた。突起以外は、無文である。調整は、15の頸部外面無文部と内面、16の内面は不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、14の頸部外面無文部が斜位、内面は横・斜位、17の外面は斜・縦位、内面は横位、18は内外面ともに横・斜位に施されている。14・17は、胎土がやや粗い。

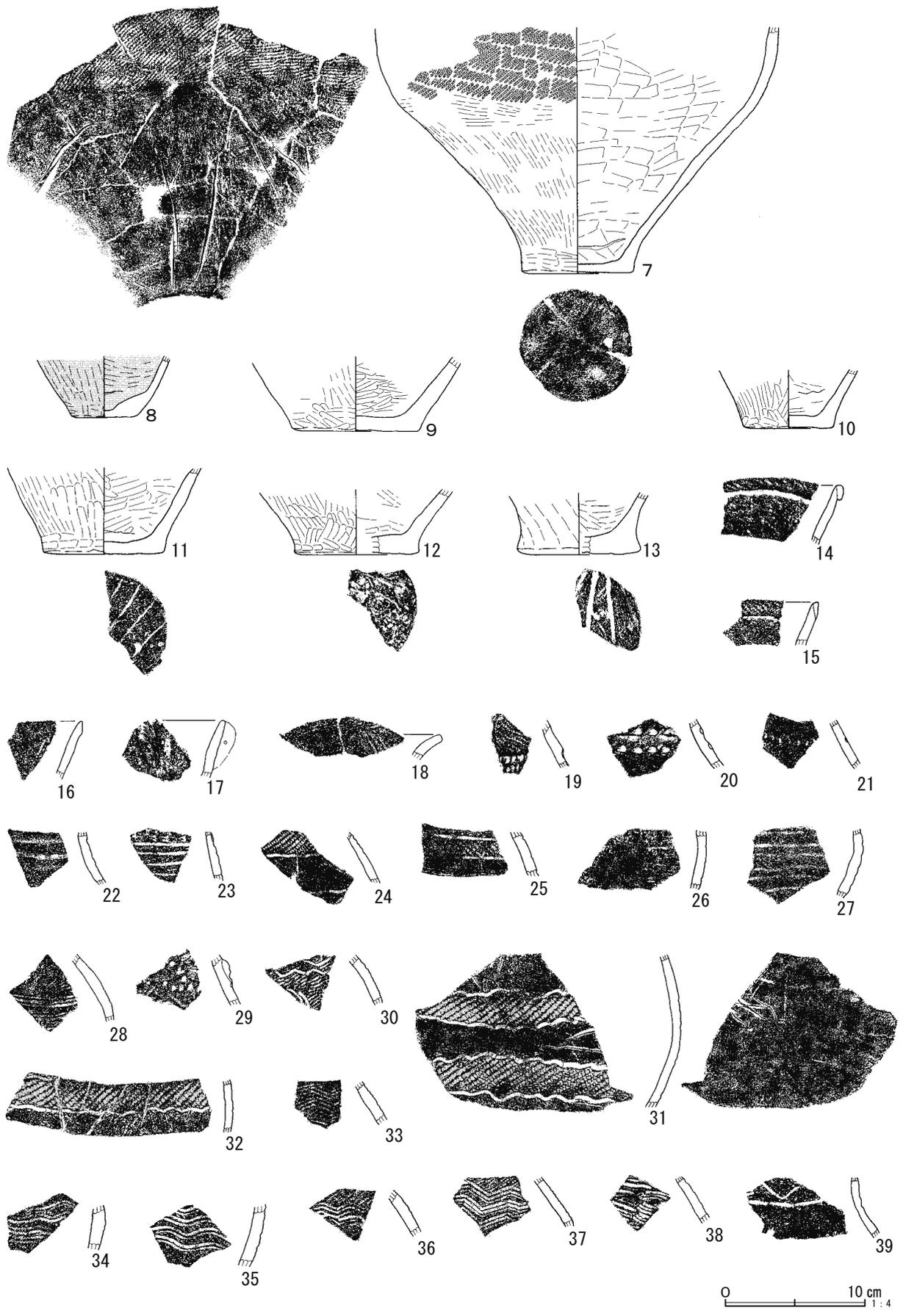
19～21は、外面に刺突列が横位に巡る肩部片である。刺突は、19が爪形、20・21は半円形を呈する。19は、段下に刺突列が2列巡る。段上はRL単節縄文が施文されている。20は、上位に巡る低い突帯2条に刺突列が施文されている。以下は、無文である。21は、刺突列上が無文、下はLR単節縄文が施文されている。調整は、19・20の内面、21の外面無文部は不明であるが、20の外面無文部、21の内面は横位のヘラミガキである。20は、胎土がやや粗い。

22～27は、外面にヘラ描きの平行沈線が巡る破片である。22～25は肩部から胴上部まで、26・27は胴部中段から下部までに収まる破片である。22は、やや幅広の浅い平行沈線が3条巡る。23は、平行沈線4条上に2本一単位の簾状文に似た刺突列が巡る。地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている可能性がある。24は、平行沈線2条が間隔を空けて巡り、間は無文、上下はLR単節縄文が施文されている。25は、平行沈線2条間にRL単節縄文が充填されている。上下は、無文である。26は、細く浅い平行沈線がほぼ等間隔に3条巡り、無文部とRL単節縄文施文部を交互に配置している。27は、平行沈線がほぼ等間隔に6条巡る。調整は、22・24・26・27の内面は不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、23の内面、24の外面無文部が横・斜位、25の外面無文部と内面、26の外面無文部は横位に施されている。27は、胎土が粗い。



0 10 cm 1:4

第 33 图 第 5 号住居跡出土遺物 (1)



第 34 图 第 5 号住居跡出土遺物 (2)

28 は、外面に櫛歯状工具による直線文が横位に巡る胴上部片である。櫛歯の数は、3本である。下位に直線文が3条以上巡り、上に無節Lが施文されている。内面調整は、不明である。

29～32 は、外面にへら描きの波状文ないし山形文が横位に巡る破片である。29 は肩部、30～32 は胴上部から中段までに収まる破片である。31・32 は、1 と同一個体である。29 は、上位にやや縦長の突起が付き、下位に半円形の刺突列1列と波状文1条が巡る。地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。30 は、上位に山形文が2条、下位は弧状の沈線が2条巡る。地文に無節Lが施文されている。31・32 は、同一個体の1と同じであるが、31 から2条の波状文間にLR単節縄文を充填する文様帯が間隔を空けて2段巡ることが判明した。調整は、29・30の内面、31・32の外面無文部がへらミガキであり、29・31・32は横位、30は横・斜位に施されている。31・32の内面は、横位のへらナデである。31は、内面に輪積痕がみられた。

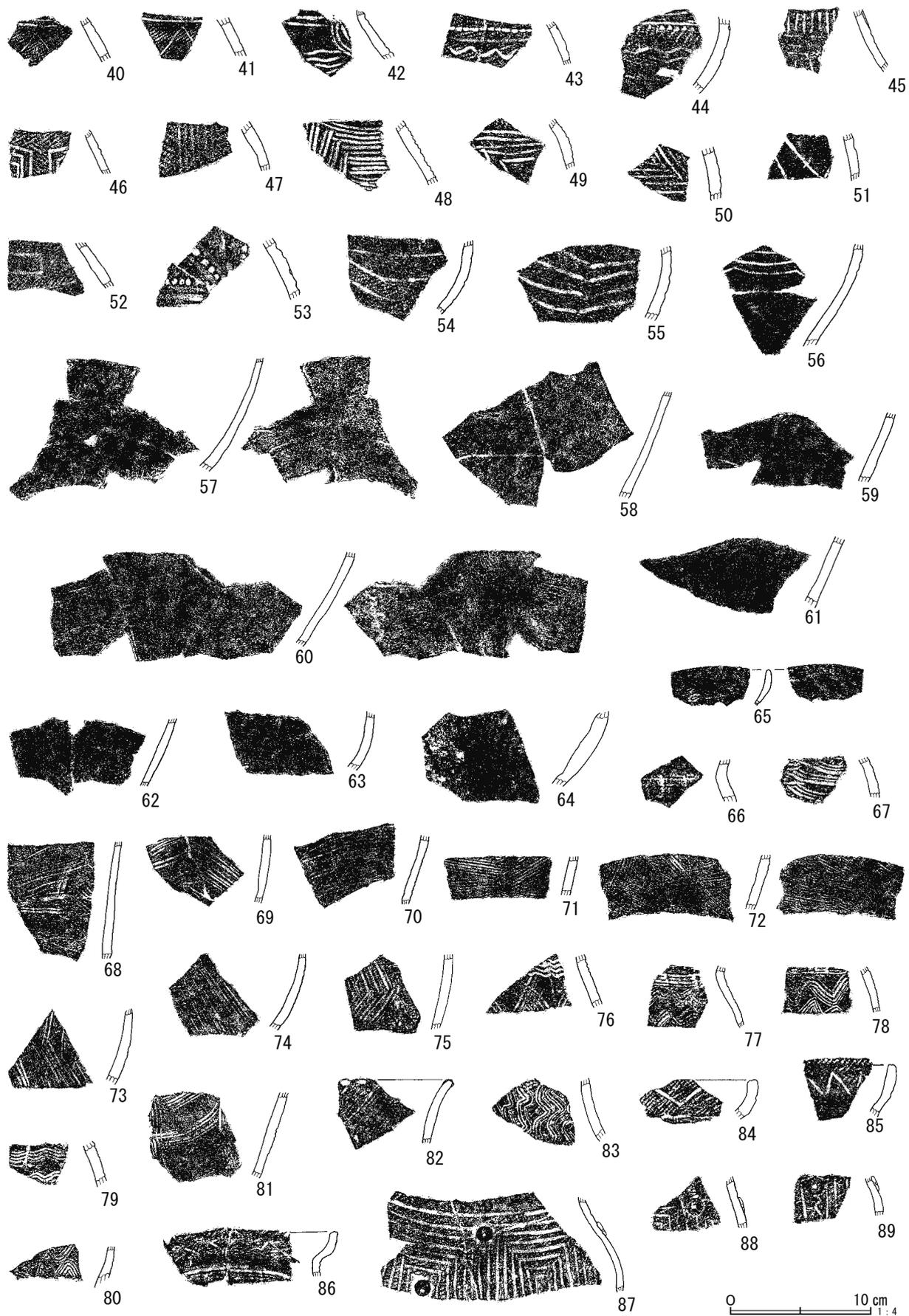
33～38 は、外面に櫛歯状工具による波状文ないし山形文が横位に巡る破片である。33・36～38 は胴上部、34・35 は胴部中段から下部までに収まる破片である。櫛歯の数は、33～35が2本、36～38は3本である。33 は、山形文が上位に3条、下位に1条巡り、間に無節Lが充填されている。34・35 は、RL単節縄文地に波状文が4条巡る。波状文は、34が密、35はやや間隔を空けてほぼ等間隔に巡る。36 は、波状文2条の上にLR単節縄文が施文されている。以下は、無文である。37 は、LR単節縄文地に山形文が3条巡る。38 は、煩雑な波状文が4条巡る。調整は、33の内面が横・斜位のへらミガキであるが、その他は不明である。

39～44 は、外面にへら描きによる横位の波状文ないし山形文と平行沈線が巡る破片である。39～43 は頸部から胴上部までに収まり、44 は胴部中段から下部までの破片である。39～41 は、中部高地栗林式系であり、40・41 は同一個体である。39 は、上位に山形文と平行沈線が巡り、下位は無文である。40・41 は、上下に細い平行沈線が2条、間に山形文が1条巡る。地文に縄目の細かいLR単節縄文が施文されている。42 は、上位にやや太い平行沈線が2条、下位に緩い波状文が4条巡り、間に弧状の沈線が3条垂下する。地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。43 は、上から横長の刺突列、平行沈線、波状文の順でほぼ等間隔に巡る。地文にLR単節縄文が施文されている。44 は、上から平行沈線2条、半円形の刺突列1列、LR単節縄文帯、波状文2条の順で施文されており、以下は無文である。調整は、43の内面、44の外面無文部と内面は不明であるが、その他はすべてへらミガキである。へらミガキは、39の外面無文部が斜位、内面は横位、40・41の内面は横位、42の内面は横・斜位に施されている。39は、胎土がやや粗い。44は、胴下部外面に長方形の凹みが1つみられた。

45～47 は、外面にへらで重四角文が描かれた破片であり、肩部から胴上部までに収まる。45 は、重四角文上に短い沈線がほぼ等間隔に複数垂下する。沈線が細い。46 は、重四角文外にLR単節縄文が施文されている。47 は、地文にLR単節縄文が施文されている。内面調整は、45が横位のへらミガキ、46・47は不明である。

48 は、外面に櫛歯状工具で重四角文が描かれた胴上部片である。櫛歯の数は、2本である。重四角文内に同一工具による直線文が横位に2条以上巡る。内面調整は、横位のへらミガキである。

49～51 は、外面にへらで重三角文が描かれた破片であり、胴上部から胴部中段までに収まる。49 は、地文にLR単節縄文が施文されているが、50・51は不明である。内面調整は、50が不明であるが、そ



第 35 图 第 5 号住居跡出土遺物 (3)

の他はヘラミガキであり、49は横位、51は横・斜位に施されている。

52は、外面にヘラで王子状の文様が描かれた胴上部片である。区画内にLR単節縄文が充填されており、区画外は無文である。外面無文部と内面の調整は、不明である。

53は、外面にヘラで三角文が描かれた胴上部片である。沈線が幅広で浅い。円形の刺突列が伴う。内面調整は、不明である。胎土がやや粗い。流れ込みの可能性が高い。

54～56は、外面にヘラ描きの連弧文が横位に巡る胴部中段から下部までの破片である。54は、連弧文間にLR単節縄文を充填する部分と無文部を交互に配置している。55は、沈線がやや太くて浅い。56は、沈線が細い。連弧文以下は、無文である。調整は、54・55の内外面が不明、56は胴下部外面の無文部が斜位の粗いヘラミガキであるが、ヘラミガキ前に施された横位のハケメが残る。内面は、横・斜位のヘラミガキである。55は、胎土がやや粗い。

57～64は、無文の胴下部片である。調整は、57・62の外面、58・64の内面は不明であるが、その他はヘラミガキが主体となる。ヘラミガキは、57の内面が横位のハケメ後に横位、58の外面は斜位、59の内外面、62の内面、64の外面は横・斜位、60の外面は横位、61は外面が横・斜位、内面は斜位、63は外面が横・斜位、内面は横位に施されている。59の外面のヘラミガキは、やや粗く施されている。60の内面は、横位のハケメである。57・59・60・63は、胎土がやや粗い。

8・65は、広口壺である。8は、胴下部から底部までの部位である。調整は、内外面ともにヘラミガキで赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。内面に輪積痕が一部みられた。65は、無文の口縁部から頸部までの破片である。口縁部が受け口状を呈する。調整は、内外面ともに横位のヘラミガキで赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。器壁がやや薄い。

4～7・9～13・66～106は、甕である。4～6は、中部高地栗林式系の甕である。4・5は、頸部と胴部外面に櫛歯状工具で文様が描かれている。櫛歯の数は、4が8本、5は6本である。4は、口縁部から胴上部までの部位である。短い口縁部が外反し、頸部はすぼまる。胴部は、最大径を持つ中段付近に向かって大きく膨らむ。外面の文様は、口縁端部にLR単節縄文が施文され、頸部は簾状文が横位に巡る。胴上部は、縦位の羽状文が描かれており、地文にLR単節縄文が部分的に施文されている。調整は、口縁部外面が横ナデ、胴上部はハケメとヘラナデが併用されている。内面は、全面ヘラミガキである。5は、口縁部から胴下部までの部位である。最大径を持つ短い口縁部が大きく開き、頸部はすぼまる。胴部は倒卵形を呈し、中段よりやや上が膨らむ。外面の文様は、口縁端部に刻みが施文され、頸部は簾状文が横位に巡る。胴部は、縦位の直線文が1条垂下し、両脇に直線文や煩雑な波状文が5～6条横位に巡る。調整は、口縁部外面が横ナデ、頸部以下の外面と内面全面はヘラミガキである。6は、小型甕の口縁部から胴上部までの部位である。口縁部がやや受け口状を呈し、頸部はすぼまる。胴部は、中段に向かって膨らむ。外面の文様は、口縁部に4本一単位の櫛歯状工具による波状文が横位に1条巡り、胴部外面はヘラでコの字重ね文が描かれている。口縁端部と胴部外面の地文に無節Rが施文されている。調整は、口縁部外面が横ナデ、胴上部外面と内面全面は、ヘラミガキである。7は、胴部中段付近から底部までの部位である。大きく膨らんだ胴部中段から底部に向かって反りながら下る。底部は、円柱状を呈する。外面の文様は、胴部中段にLR単節縄文が密に施文されている。調整は、胴下部の外面無文部がヘラミガキ、内面はヘラナデである。胴下部内面下位に輪

積痕、底面に木葉痕がみられた。9～13は、胴下部から底部までの部位である。底部は、円柱状を呈するものが多い。調整は、9～12が内外面ともにヘラミガキ、13は外面がヘラナデ、内面はヘラミガキである。10の胴下部内面に輪積痕、11～13の底面に木葉痕と種子圧痕と思われる複数の凹みが見られた。9～12は、壺の可能性もある。

66～83は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた破片である。66～81は、中部高地栗林式系である。

66は、頸部外面に簾状文が横位に巡る破片である。櫛歯の数は4本で2段施文されている。調整は、頸部外面の無文部が横位のヘラミガキ、内面全面は、不明である。胎土がやや粗い。

67～72は、胴部外面に縦位の羽状文が描かれた破片である。67は胴上部、68～72は胴部中段から下部までに収まる破片である。櫛歯の数は、67が3本、68～70・72は5本、71は8本である。内面調整は、67・68・70が不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、69が横・斜位、71・72は横位に施されているが、72は横・斜位のハケメ後、部分的に施されている。

73～75は、胴部外面に横位の羽状文が描かれた胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、73が4本、74は5本、75は不明である。内面調整は、73・75が不明であるが、74は横・斜位のヘラミガキである。

76は、胴部外面に斜格子文が描かれた頸部から胴上部までの破片である。櫛歯の数は、4本である。頸部外面に同一工具による波状文が巡る。内面調整は、横位のヘラミガキである。

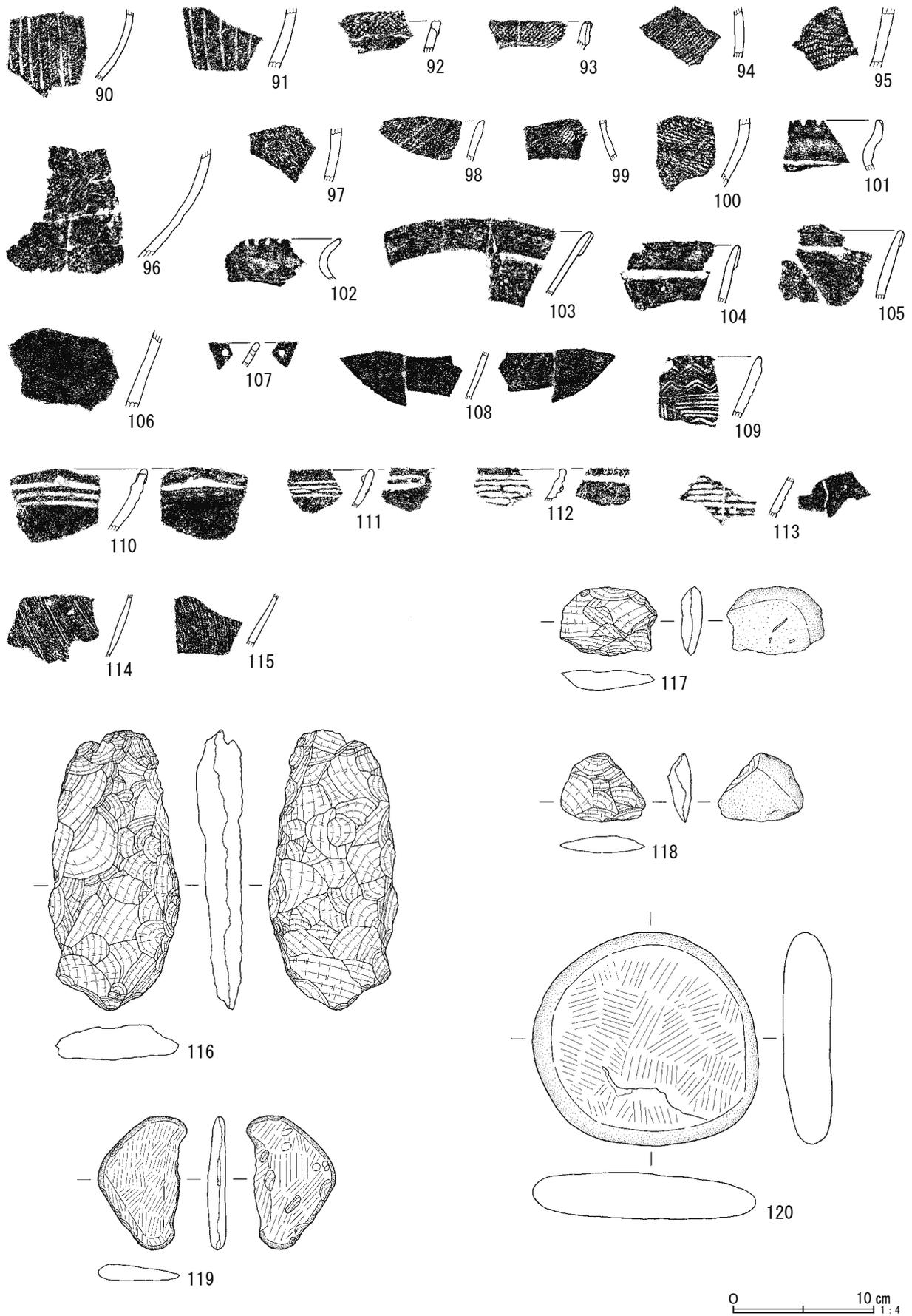
77～80は、胴部外面に波状文が横位に巡る破片である。77～79は頸部から胴上部までに収まり、80は胴部中段の破片である。櫛歯の数は、すべて5本である。波状文は、2条以上巡る。77・78は、頸部外面に同一工具による簾状文が横位に巡る。77は、簾状文上が無文である。調整は、77・80の内面が不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、77の外面無文部、78の内面は横位、79の内面は横・斜位に施されている。

81は、外面に縦位の直線文と弧状に近い斜線文が描かれた胴下部片である。櫛歯の数は、6本である。調整は、外面無文部と内面全面に斜・縦位のヘラミガキが施されている。

82は、口縁部外面以下に斜線文が描かれた口縁部から頸部までの破片である。口縁端部に刻みが施文されている。櫛歯の数と内面調整は、不明である。

83は、外面に煩雑な波状文が複数垂下する頸部片である。櫛歯の数は、4本である。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。

84～91は、胴部外面にヘラでコの字重ね文が描かれた中部高地栗林式系の破片であるが、84～86は異なる可能性もある。84～86は受け口状を呈する口縁部から頸部まで、87～89は頸部から胴部中段までに収まり、90・91は胴部中段から下部までの破片である。84～86は、口縁端部と口縁部外面の地文にLR単節縄文が施文され、ヘラ描きの山形文が1条横位に巡る。84・85の頸部は無文であるが、86は3本以上の櫛歯状工具による簾状文が横位に巡る。85・86は、沈線が細い。87～89は、コの字重ね文の連結部上位と区画内中央に円形刺突が刻まれたボタン状貼付文が付く。87は、沈線が太い。88は、上位に4本以上の櫛歯状工具による簾状文が横位に巡る。89は、ボタン状貼付け文下に波状文が1条垂下する。沈線が細い。88・89は、地文にLR単節縄文が施文されている。90・91は、複数の沈線が垂下する。90は、地文にLR単節縄文が施文されているが、91は縄文が施文されているか不明



第 36 图 第 5 号住居跡出土遺物 (4)

第6表 第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	-	(19.2)	8.8	ABDH1KN	外:黒褐 内:にぶい黄褐	B	胴~底 40%	内外面大半摩耗。縄文施文部赤彩。No.31・32 同一。
2	弥生土器 壺	-	(9.1)	-	ABCH1KN	褐灰 黒褐	B	胴部 20%	内外面大半摩耗顕著。
3	弥生土器 壺	-	(21.35)	7.1	ABEN	にぶい赤褐 にぶい黄橙	B	肩~底 40%	内外面大半摩耗顕著。
4	弥生土器 甕	(17.0)	(8.1)	-	ABH1KN	黒褐色	B	口~胴 20%	内面大半、外面一部摩耗顕著。
5	弥生土器 甕	(22.8)	(16.75)	-	ABDEH1N	にぶい橙 黒褐	B	口~胴 20%	内外面摩耗顕著。
6	弥生土器 甕	(11.2)	(4.5)	-	ABH1KN	黒褐色	B	口~胴 25%	内外面摩耗顕著。
7	弥生土器 甕	-	(17.7)	8.0	ABDH1K	にぶい黄橙 黒褐	B	胴~底 60%	内面大半、胴下部外面摩耗。内面輪積痕有。
8	弥生土器 広口壺	-	(4.45)	4.7	ABCDH1K	灰黄褐色	B	胴~底 45%	内外面摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。内面輪積痕有。
9	弥生土器 甕	-	(5.4)	9.2	ABCDH1KN	外:浅黄 内:褐灰	B	胴~底 80%	外面摩耗顕著。
10	弥生土器 甕	-	(5.25)	6.4	ABCDH1KN	灰黄褐色	B	胴~底 90%	内面摩耗顕著。
11	弥生土器 甕	-	(6.2)	(8.6)	ABH1KN	外:にぶい黄褐 内:黒褐	B	胴~底 30%	内外面摩耗顕著。底面種子圧痕?凹み複数有。
12	弥生土器 甕	-	(4.7)	(9.0)	ABDH1KN	暗灰黄色	B	胴~底 20%	内面摩耗顕著。底面種子圧痕?凹み複数有。
13	弥生土器 甕	-	(4.45)	(8.8)	ABDH1KN	外:にぶい橙 内:灰白	B	胴~底 25%	内外面摩耗顕著。底面種子圧痕?凹み複数有。
14	弥生土器 壺	-	-	-	ABCH1KN	褐灰色	B	口~頸部片	内外面大半摩耗顕著。
15	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:にぶい橙 内:灰黄褐	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
16	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	浅黄色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
17	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDH1KN	灰黄色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。縦長突起側面焼成前穿孔有。
18	弥生土器 壺	-	-	-	ABEKN	浅黄色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。
19	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
20	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	褐灰色	B	肩部片	内面摩耗顕著。
21	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	外:黒 内:褐灰	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
22	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
23	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:灰黄褐 内:暗灰	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
24	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDH1KN	外:黒褐 内:褐灰	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
25	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDH1KN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面大半摩耗顕著。
26	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDH1K	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
27	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1K	外:灰黄褐 内:黒褐	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
28	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	黒褐色	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
29	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDH1K	灰黄色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
30	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	褐灰色	B	胴上部片	内面やや摩耗。
31	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:黒褐 内:にぶい黄橙	B	胴中段片	縄文施文部赤彩。内面輪積痕有。No.1・32 同一個体。
32	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:黒褐 内:にぶい黄橙	B	胴中段片	内外面やや摩耗。縄文施文部赤彩。No.1・31 同一個体。
33	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEH1KN	褐灰色	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
34	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDH1KN	外:にぶい黄橙 内:黄灰	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
35	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEH1KN	外:にぶい黄橙 内:灰褐	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
36	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	外:にぶい黄橙 内:黒褐	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
37	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1K	灰黄色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
38	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:灰黄褐 内:灰黄	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
39	弥生土器 壺	-	-	-	ABEKN	外:にぶい赤褐 内:暗褐	B	頸~肩部片	
40	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	外:黒褐 内:褐灰	B	胴上部片	No.41 同一個体。
41	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	外:黒褐 内:褐灰	B	胴上部片	No.40 同一個体。
42	弥生土器 壺	-	-	-	ABCH1KN	外:暗灰黄 内:黄灰	B	肩部片	内面摩耗顕著。
43	弥生土器 壺	-	-	-	ABCEH1KN	外:にぶい黄橙 内:灰褐	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
44	弥生土器 壺	-	-	-	ABCD1KN	外:浅黄 内:暗灰	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。外面下位長方形凹み有。
45	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:黒褐 内:にぶい黄橙	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
46	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDH1KN	灰黄色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
47	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:にぶい黄橙 内:褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
48	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	外:黒褐 内:灰黄褐	B	胴上部片	内面大半摩耗顕著。
49	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1K	外:灰黄褐 内:褐灰	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
50	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:灰黄褐 内:暗灰	B	胴上~中片	内外面摩耗顕著。
51	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:灰黄褐 内:黄灰	B	胴上~中片	外面摩耗顕著。
52	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:にぶい黄橙 内:黄灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
53	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:にぶい黄橙 内:褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
54	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEH1KN	外:灰白 内:褐灰	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
55	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDH1KN	外:にぶい黄橙 内:灰白	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
56	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:灰黄褐 内:灰黄	B	胴中~下片	内外面やや摩耗。
57	弥生土器 壺	-	-	-	ABE1KN	外:にぶい橙 内:褐灰	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
58	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDH1KN	外:黒 内:褐灰	B	胴下部片	内面全面、外面大半摩耗顕著。
59	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDH1KN	外:黒 内:黄灰	B	胴下部片	
60	弥生土器 壺	-	-	-	ABCH1KN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
61	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	外:黒褐 内:灰黄褐	B	胴下部片	
62	弥生土器 壺	-	-	-	ABH1KN	外:灰黄褐 内:黒褐	B	胴下部片	外面摩耗顕著。
63	弥生土器 壺	-	-	-	ABCH1N	外:黒褐 内:褐灰	B	胴下部片	内面やや摩耗。
64	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDH1KN	外:黒褐 内:にぶい黄橙	B	胴下部片	内面剥離、摩耗顕著。
65	弥生土器 広口壺	-	-	-	ABH1KN	外:にぶい黄橙 内:赤	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。内外面赤彩、ほぼ剥落。
66	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1N	にぶい黄褐色	B	頸部片	内外面摩耗顕著。
67	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1KN	外:黒褐 内:にぶい黄橙	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
68	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1KN	にぶい黄橙 褐灰	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
69	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1KN	外:黒褐 内:灰黄褐	B	胴中~下片	内面大半摩耗顕著。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
70	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	黒褐 にぶい褐	B	胴下部片	内面摩耗顕著。
71	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	
72	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	
73	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIK	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	胴中～下片	内面摩耗顕著。
74	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHKN	にぶい橙 黒褐	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
75	弥生土器 甕	-	-	-	ABCIKN	外：浅黄橙 内：灰白	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
76	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：黒褐 内：灰黄褐	B	頸～胴上片	
77	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外：褐灰 内：橙	B	頸～胴上片	内面摩耗顕著。
78	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	黒褐 褐	B	頸～胴上片	
79	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHKN	外：灰褐 内：褐灰	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
80	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIKN	外：にぶい黄橙 内：橙	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
81	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	外：褐灰 内：黒褐	B	胴下部片	
82	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
83	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	B	頸部片	
84	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIN	褐灰 にぶい黄橙	B	口～頸部片	
85	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHI	外：灰黄褐 内：黒	B	口～頸部片	外面摩耗顕著。
86	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい褐 内：黒褐	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
87	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	浅黄褐色	B	頸～胴中片	内外面摩耗顕著。外面種子圧痕？凹み有。
88	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐 内：褐灰	B	頸～胴上片	内外面大半摩耗顕著。
89	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：にぶい黄褐 内：黄灰	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
90	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：にぶい褐 内：褐灰	B	胴中～下片	外面摩耗顕著。
91	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐 内：にぶい褐	B	胴中～下片	外面摩耗顕著。
92	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい橙 内：灰黄褐	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
93	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
94	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
95	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴下部片	
96	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
97	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐 内：黒褐	B	胴中段片	外面摩耗顕著。
98	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
99	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
100	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄褐	B	胴中～下片	内面やや摩耗。
101	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。頸部外面輪積痕有。
102	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIN	にぶい黄橙	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
103	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	淡黄色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
104	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIN	外：褐 内：橙	B	口～頸部片	
105	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい褐 内：黒褐	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
106	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴下部片	外面摩耗顕著。
107	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDN	にぶい黄褐色	B	口縁部片	内外面赤彩、ほぼ剥落。焼成前穿孔有。
108	弥生土器 高坏	-	-	-	ABEHIKN	にぶい橙 にぶい黄橙	B	坏部片	内外面赤彩、ほぼ剥落。
109	弥生土器 筒形	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
110	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABCHIKN	灰黄褐色	B	口～体部片	晩期末。内外面大半摩耗顕著。
111	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABDHIKN	外：褐灰 内：浅黄橙	B	口～体部片	晩期末。外面摩耗顕著。
112	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABCDHIKN	灰黄褐色	B	口～体部片	晩期末。内外面摩耗顕著。
113	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABCDHIK	浅黄褐色	B	体部片	晩期末。内外面摩耗。内面種子圧痕？凹み有。
114	土師器 台付甕	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴下部片	古墳前。No. 115 同一個体。
115	土師器 台付甕	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴下部片	古墳前。No. 114 同一個体。
116	打製石斧	最大長 19.95 cm、最大幅 9.35 cm、最大厚 3.2 cm。重量 597.5 g。							完形。粘板岩。
117	搔器	最大長 4.9 cm、最大幅 6.75 cm、最大厚 1.45 cm。重量 59 g。							完形。粘板岩。
118	搔器	最大長 4.9 cm、最大幅 6.05 cm、最大厚 1.7 cm。重量 42.5 g。							完形。粘板岩。
119	磨石・敲石	最大長 9.55 cm、最大幅 5.8 cm、最大厚 1.25 cm。重量 (64) g。							ほぼ完形。砂岩。
120	磨石	最大長 15.15 cm、最大幅 15.9 cm、最大厚 3.45 cm。重量 1,187 g。							完形。砂岩。

である。84～91の調整は、すべてヘラミガキであり、84・85の頸部外面無文部と内面、86・88・89・91の内面は横位、87・90の内面は横・斜位に施されている。88以外、胎土がやや粗い。

92～100は、外面に縄文が施文された破片である。92～96はLR、97はRL単節縄文、98・99は無節L、100はRであるが、96は無節Lの可能性もある。LR単節縄文と思われる縄文が施文された92～96は、92・93が口縁部から頸部まで、94～96は胴部中段から下部までに収まる破片である。縄文は、92が端部を含む肥厚した口縁部外面、93は肥厚した口縁部外面、94・95は外面全面、96は外面上位に施文されている。縄文以外の文様は、93の口縁端部に刻みが施文されている。調整は、92の頸部外面無文部、94の内面、96の胴下部外面無文部と内面が不明であるが、92・93・95の内面は、横位のヘラミガキである。RL単節縄文が施文された97は、胴部中段の破片である。縄文は、外面全面に施文されている。

内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。無節Lの施文された98・99は、98が口縁部から頸部まで、99が頸部から胴上部までの破片である。縄文は、外面全面に施文されている。内面調整は、横位のヘラミガキである。無節Rが施文された100は、胴部中段から下部までの破片である。縄文は、外面全面に施文されている。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。

101～106は、ほぼ無文の破片である。101～105は口縁部から頸部まで、106は胴下部の破片である。101・102は、口縁端部に刻みが施文されている。103～105は、口縁部が肥厚している。調整は、101の口縁部内外面が横ナデ、頸部の内外面はヘラミガキであり、外面は横位、内面は横・斜位に施されている。頸部外面に輪積痕がみられた。102は、外面が不明であるが、内面は横位のヘラミガキである。103は、内外面ともに不明である。104・105は、内外面ともにヘラミガキであり、口縁部外面は横位、頸部外面は斜位、内面は104が横・斜位、105は横位に施されている。104の頸部外面のヘラミガキは、粗い。106は、外面が斜位、内面は横位のヘラミガキである。102は、胎土がやや粗い。

107・108は、中部高地栗林式系の高坏と思われる。107は口縁部、108は坏部の破片である。107は、焼成前穿孔がみられた。調整は、107が内外面ともに横位、108は外面が斜位、内面は横位のヘラミガキである。いずれも内外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。

109は、筒形土器の口縁部から頸部までの破片である。外面の文様は、口縁端部に刻みが施文され、口縁部は2本一単位の櫛歯状工具による波状文2条がやや間隔を空けて横位に巡る。以下は、同一工具で重四角文が描かれており、重四角文内に波状文が横位に巡る。内面調整は、横位のヘラミガキである。筒形土器としたが、壺の可能性もある。

116～120は、石器である。116は、粘板岩製の打製石斧である。完形品である。短冊状を呈する。117・118は、粘板岩製の搔器である。いずれも完形品である。119・120は、砂岩製の磨石であり、119は敲石を兼ねる。119はほぼ完形、120は完形品である。いずれも扁平であるが、119はやや小型で三角形状、120は大型で円形を呈する。

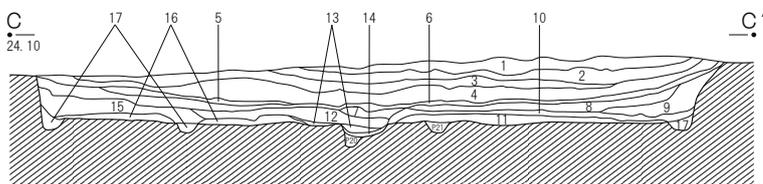
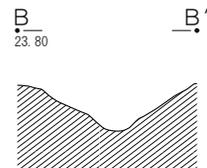
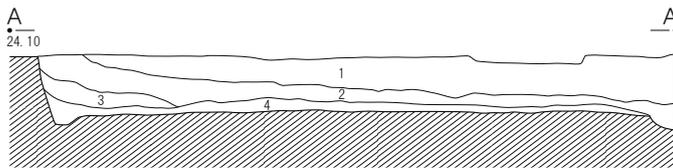
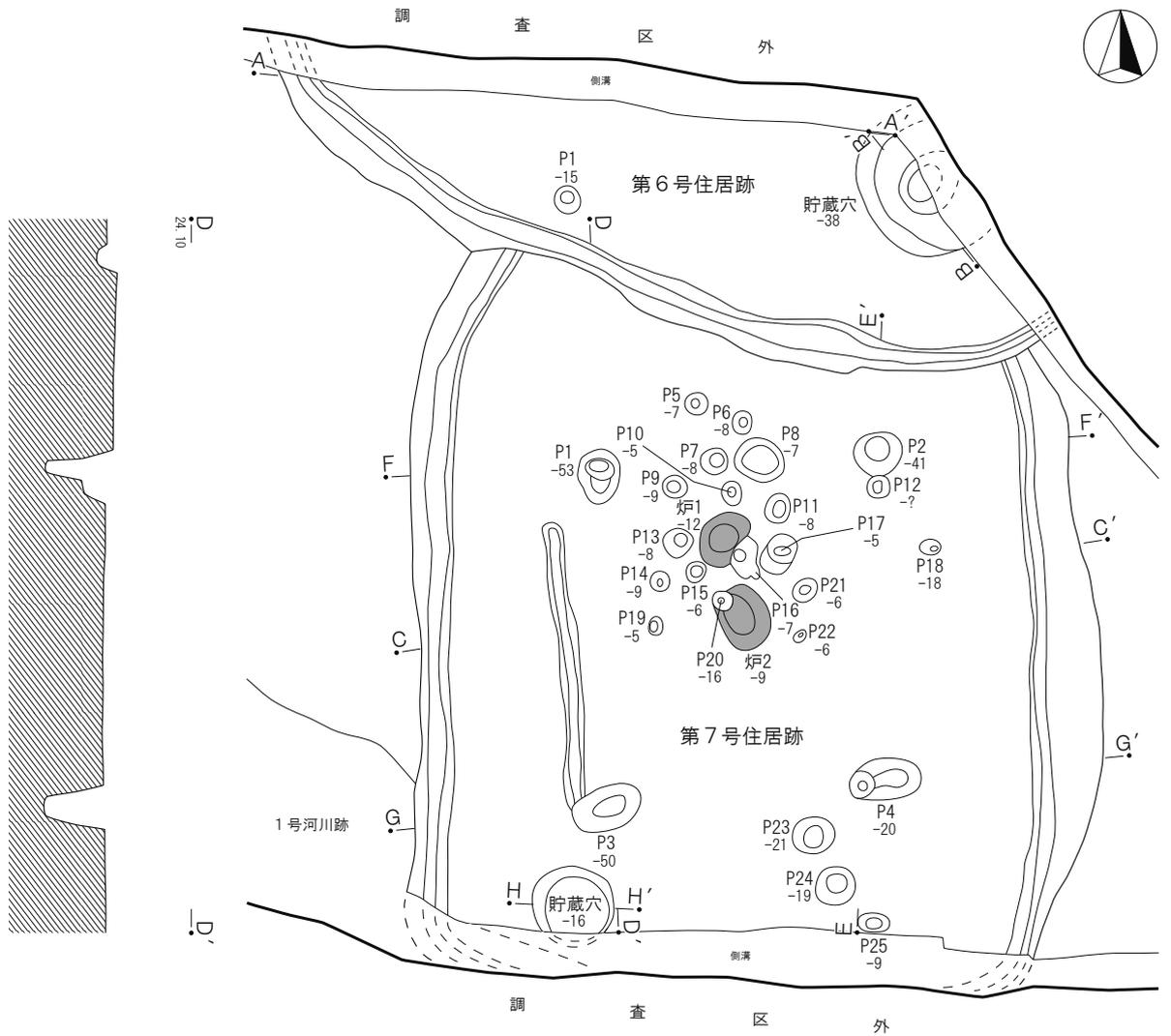
流れ込みの110～113は縄文土器、同一個体の114・115は古墳時代前期の土師器台付甕である。110～113は、晩期末の浮線文土器の浅鉢であり、すべて口縁部から体部までに収まる破片である。文様は、口縁部外面に眼鏡状の浮線文が施文されるものが多い。110は口縁部が波状を呈し、頂点の内外面に下から上に挟り込みが入る。113以外は、内面に平行沈線が巡り、111は突帯も巡る。体部外面の無文部と内面の調整は、すべて横位のヘラミガキである。113は、内面に種子圧痕と思われる凹みが1つみられた。112・113は、胎土がやや粗い。114・115は、土師器台付甕の胴下部片である。調整は、外面が斜位のハケメ、内面は斜位のヘラナデである。器壁が薄いことからS字甕と思われる。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

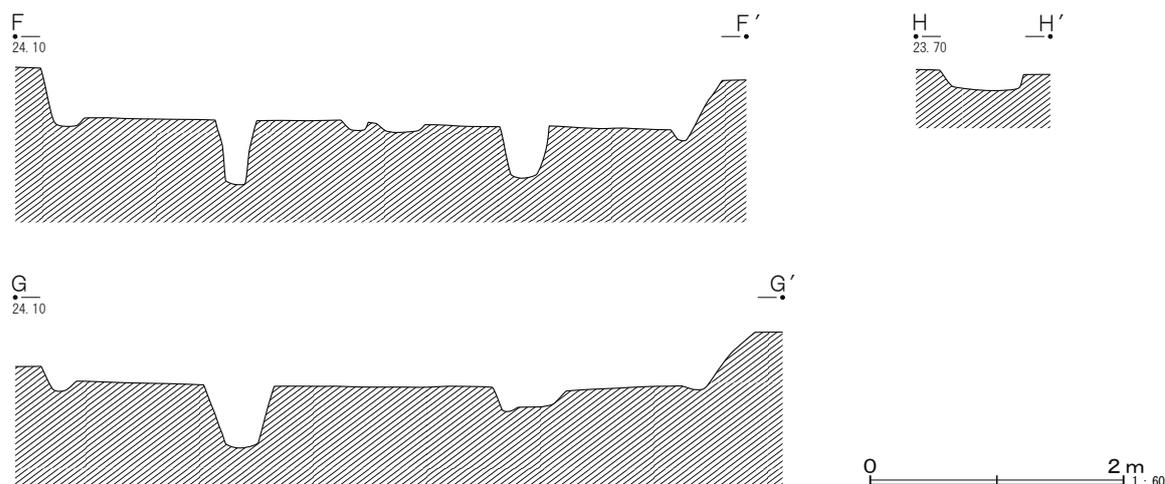
第6号住居跡（第37・38図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）137～139－155・156グリッドに位置する。南側で第7号住居跡を切っている。検出できたのは南西壁付近のみであり、大半が調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は6.6m、南北は2.36mを測る。平面プランは、隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向は、N-67°-Wを指すと思われる。確認面からの深さは、最大0.45mを測る。床面は概ね平坦であり、掘り方はみられなかった。覆土は、4層（1～4層）確認



第37図 第6・7号住居跡(1)



第6号住居跡

土層説明 (A A')

- 1 黒色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量含む。
- 3 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

第7号住居跡

土層説明 (C C')

- 1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。2層より暗い。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量、炭化物少量含む。3層より暗い。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。4層より暗い。

- 6 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 7 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量含む。
- 8 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 9 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量含む。8層より暗い。
- 10 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量、焼土粒少量含む。9層より暗い。
- 11 暗灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。
- 12 暗灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒多量、酸化鉄、焼土粒、マンガン粒少量含む。
- 13 炭化物層
- 14 焼土層
- 15 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
- 16 灰白色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 17 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒少量含む。

第38図 第6・7号住居跡(2)

された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

壁溝は、検出された範囲内を全周する。幅は0.17～0.41mとバラツキがあり、床面からの深さは0.07m前後を測る。

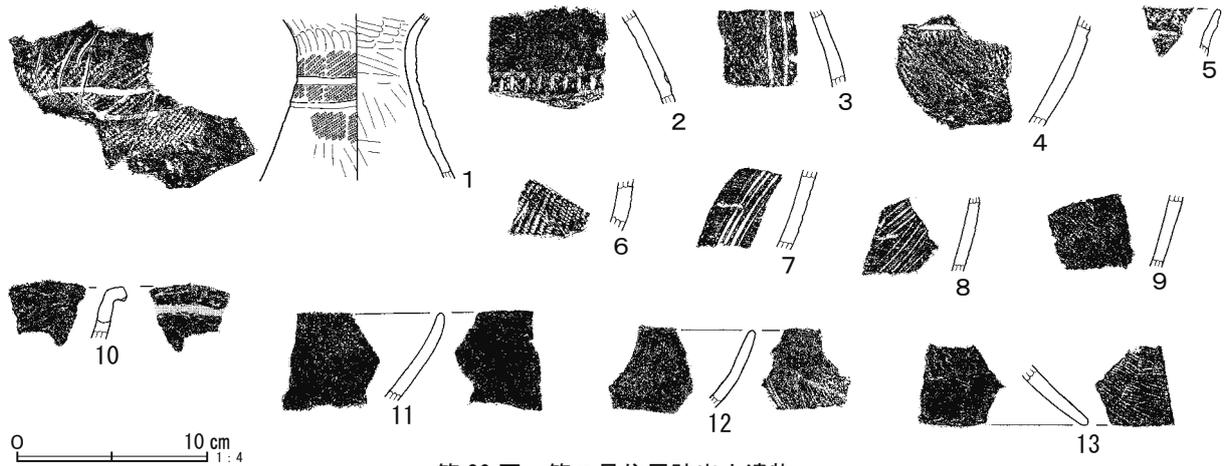
ピットは、1基のみ検出された。その位置から屋根などを支えるものであろうか。単独ピットの可能性もある。覆土は図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

貯蔵穴は、南西隅付近からやや離れた床面に位置する。北東部が調査区外にあるが、長軸1.3m、短軸1m程の楕円形を呈すると思われる。床面からの深さは、最大0.38mを測り、挿鉢状を呈する。覆土は、図示できなかったが、炭化物を含む灰色系の土が数層堆積していた。

炉跡は、確認されなかった。

出土遺物は、図示不可能なものも含め、非常に少ない。出土遺物(第39図)は、土器のみであり、弥生土器壺(1～4)、甕(5～9)、高坏(10～13)がある。すべて覆土からの出土である。摩耗が著しいものが多い。

1～4は、壺である。1は、中部高地栗林式系の頸部から肩部までの部位である。すぼまる頸部か



第 39 図 第 6 号住居跡出土遺物

第 7 表 第 6 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	-	(8.75)	-	ABCHI	黒褐色	B	頸～肩 25%	
2	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面摩耗、内面剥離顕著。
3	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
4	弥生土器 壺	-	-	-	ABCEHIKN	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	B	胴下部片	内面やや摩耗。
5	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
6	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	黒褐色	B	胴中段片	
7	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：黒褐 内：暗褐	B	胴下部片	
8	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	B	胴下部片	内面やや摩耗。
9	弥生土器 甕	-	-	-	ABIKM	外：にぶい橙 内：黒褐	B	胴下部片	
10	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDHKN	浅黄橙色	B	口～坏部片	内外面摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。焼成前穿孔有。
11	弥生土器 高坏	-	-	-	ABHIKN	にぶい赤褐 にぶい黄褐	B	口～坏部片	内外面赤彩、外面半分剥落。
12	弥生土器 高坏	-	-	-	ABHIK	外：赤 内：にぶい黄橙	B	口～坏部片	外面赤彩、大半剥落。
13	弥生土器 高坏	-	-	-	ABHIK	外：赤 内：灰白	B	脚部片	外面赤彩。

ら肩部までハの字状を呈する。外面の文様は、頸部にヘラ描きの平行沈線が2条巡り、上下間にLR単節縄文が施文されている。調整は、外面無文部と頸部内面はヘラミガキであるが、肩部外面はヘラミガキ前に施された縦・斜位のハケメが部分的に残る。頸部以下の内面は、ヘラナデである。2・3は胴上部片、4は胴下部片である。2は、外面下位にヘラ描きのやや幅広で浅い平行沈線が2条、間に爪形の刺突列が1列巡る。上位は、無文である。3は、外面にヘラ描きの重四角文と思われる沈線が2条垂下する。地文にRL単節縄文が施文されている。4は、上位に無節R地にヘラ描きの平行沈線が1条巡る。下位は、無文である。調整は、2・4の外面無文部はヘラミガキであり、2が横位、4は横・斜位に施されている。2・3の内面は、摩耗・剥離が著しいため不明である。4の内面は、横・斜位のヘラナデである。

5～9は、甕である。5・6は、外面に縄文が施文された破片である。5は口縁部から頸部まで、6は胴部中段の破片である。5は、肥厚した口縁部にLR単節縄文か無節Lが施文されている。以下は、無文である。6は、外面全面にLR単節縄文が施文されている。5の頸部外面無文部と内面の調整は、不明である。6の内面調整は、横位のヘラミガキである。7・8は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた中部高地栗林式系の胴下部片である。櫛歯の数は、7が5本、8は4本である。7は横位、8は縦位の羽状文が施文されている。調整は、7の外面が横位のハケメ、内面は斜位のヘラナデである。8の内面は、横位のヘラミガキである。9は、無文の胴下部片である。調整は、外面が斜位のハケメ、内面は横・斜位のヘラミガキである。

10～13は、中部高地栗林式系の高坏である。10～12は口縁部から坏部まで、13は脚部の破片である。

10は、角張った短い口縁部が大きく開き、下端に斜位の刻みが施されている。坏部に大きな焼成前穿孔がみられた。調整は、ヘラミガキが主体となる。ヘラミガキは、10の外表面が斜位、内表面は横位、11は内外表面ともに横位、12は外表面と内面上位が横位、内面下位は斜位、13の外表面は横・斜位に施されている。13は、ヘラミガキ前に施された斜位のハケメが所々に残る。13の内表面は、上位が斜位のハケメ、下位は横ナデが施されている。10・11の内外表面、12・13の外表面は、赤彩が施されているが、10はほぼ全面、11は外表面半分、12は大半が剥落している。

本住居跡の時期は、弥生時代中期末と思われる。

第7号住居跡（第37・38・40図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）137・138－155～157グリッドに位置する。北壁を第6号住居跡、南西隅を第1号河川跡に切られている。南壁付近は、調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された長軸は5.89m、短軸は5.54mを測る。平面プランは、隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向は、N-2°-Eを指し、ほぼ東西南北に軸が合う。確認面からの深さは、最大0.49mを測る。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。掘り方は、みられなかった。覆土は、16層（1～13・15～17層）と多数確認された。東側の下層で炭化物を多量含む層が確認されたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

壁溝は、第6号住居跡に切られている北壁と未検出の南壁沿いも含め、全周すると思われる。幅は0.3m前後、床面からの深さは0.08m程を測る。

ピットは、計25基と多数検出された。ピット1～4は、その位置から支柱穴と思われる。床面中央から北側に密集するピット5～11・13～17・19～22は、径が小さく、浅いものが多い。その位置から炉跡に関連するものと思われる。ピット12は、支柱穴のピット2に接することから補佐するもの、他のピットと離れているピット18は、その位置から屋根などを支えるものであろうか。ピット23～25は、東側に偏るが、南壁付近に位置することから出入口に関連すると思われる。いずれも覆土を図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

床面西側では、西壁から1.1m前後離れた部分に間仕切りの溝が壁に併行して走り、南側で支柱穴のピット3に接続する。長さ2.28m、幅0.15m前後、床面からの深さは0.06m程を測る。

炉跡は、床面ほぼ中央に南北2つ並んで位置する。北側に位置する炉跡1は、南東部でピット16と重複しており、炉跡1が切られている。炉跡1は、長軸0.47m、短軸0.36m程のややいびつな楕円形を呈し、床面からの深さは0.12mを測る。覆土は、図示できなかったが、上層で炭化物を含む焼土層、下層で掘り方が確認された。南側に位置する炉跡2は、北西部でピット20と重複しているが、炉跡2が切っている。長軸0.53m、短軸0.39mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.09mと浅い。覆土は、上層で炭化物層（13層）、下層に焼土層（14層）が確認され、掘り方はみられなかった。

貯蔵穴は、南西隅付近に位置する。南側の立ち上がりを欠くが、径0.67m前後の円形を呈する。床面からの深さは、最大0.16mを測る。覆土は図示できなかったが、炭化物を含む灰色系の土が数層堆積していた。

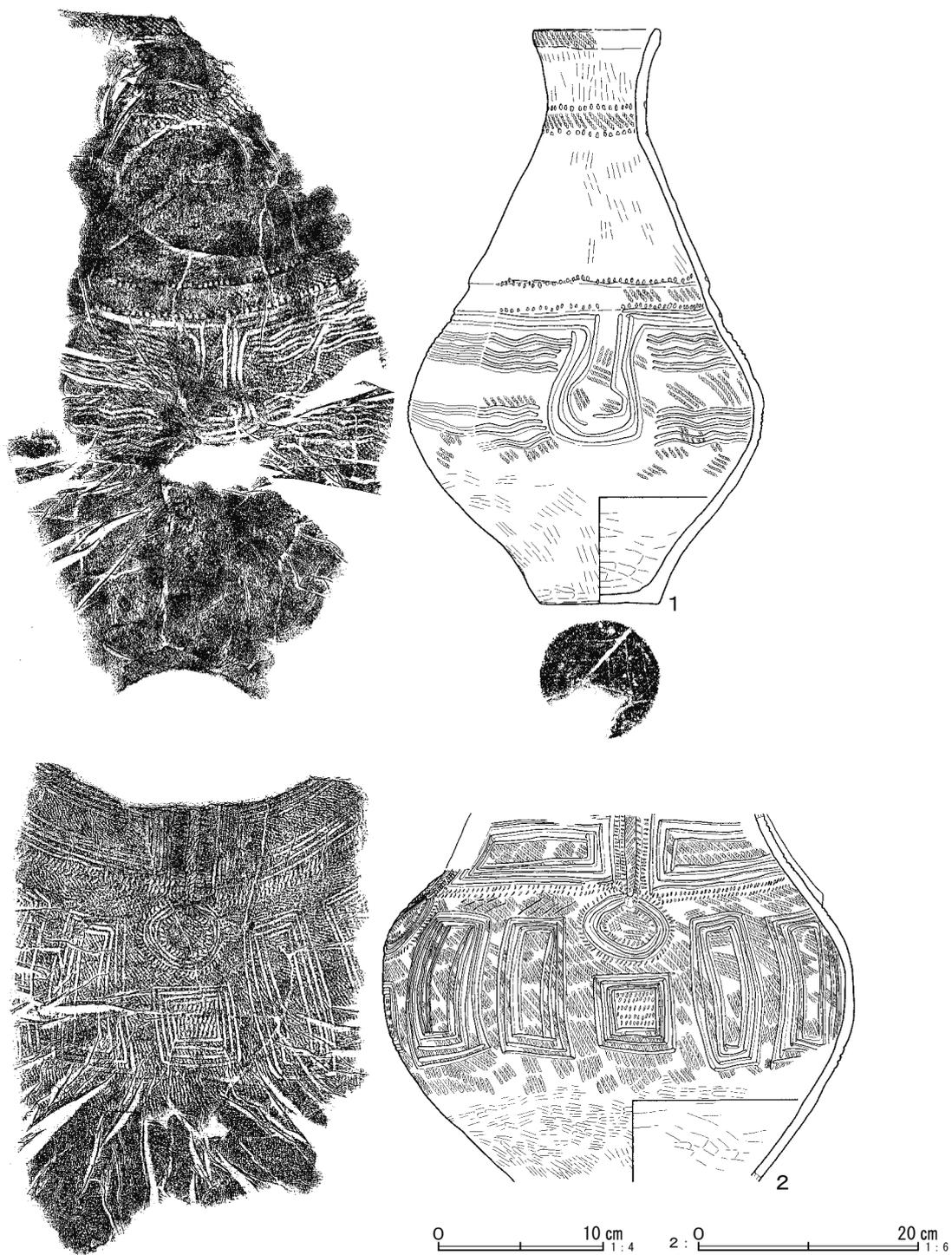
本住居跡では、残存状態の良好な土器をはじめ、バラエティに富んだ大量の遺物が出土した。出土遺物（第41～48図）は、弥生土器壺（1～10・25～96）、広口壺（97）、甕（11～21・98～155）、



第40図 第7号住居跡遺物出土状況

高坏 (22・156～160)、鉢 (23・163)、筒形 (161・162)、ミニチュア土器 (24)、土製紡錘車 (166)、磨製石剣 (167)、磨製石鏃 (168・169)、打製石斧 (170)、搔器 (171～173)、磨石 (174～184)、砥石 (185・186)、写真のみの掲載であるが、獣骨片 (写真図版 53) がある。出土位置を図示した遺物は、主に床面中央に位置する2つの炉跡の北側及び周辺の床面直上付近から出土した。出土位置を図示した遺物以外では、19・34・49・62・87・133・141が床面直上、その他は覆土から出土した。また、この他にも流れ込みで縄文時代晩期末の浅鉢 (164)、弥生時代後期前半の壺 (165) が覆土から出土した。土器は、摩耗が著しいものが大半を占める。

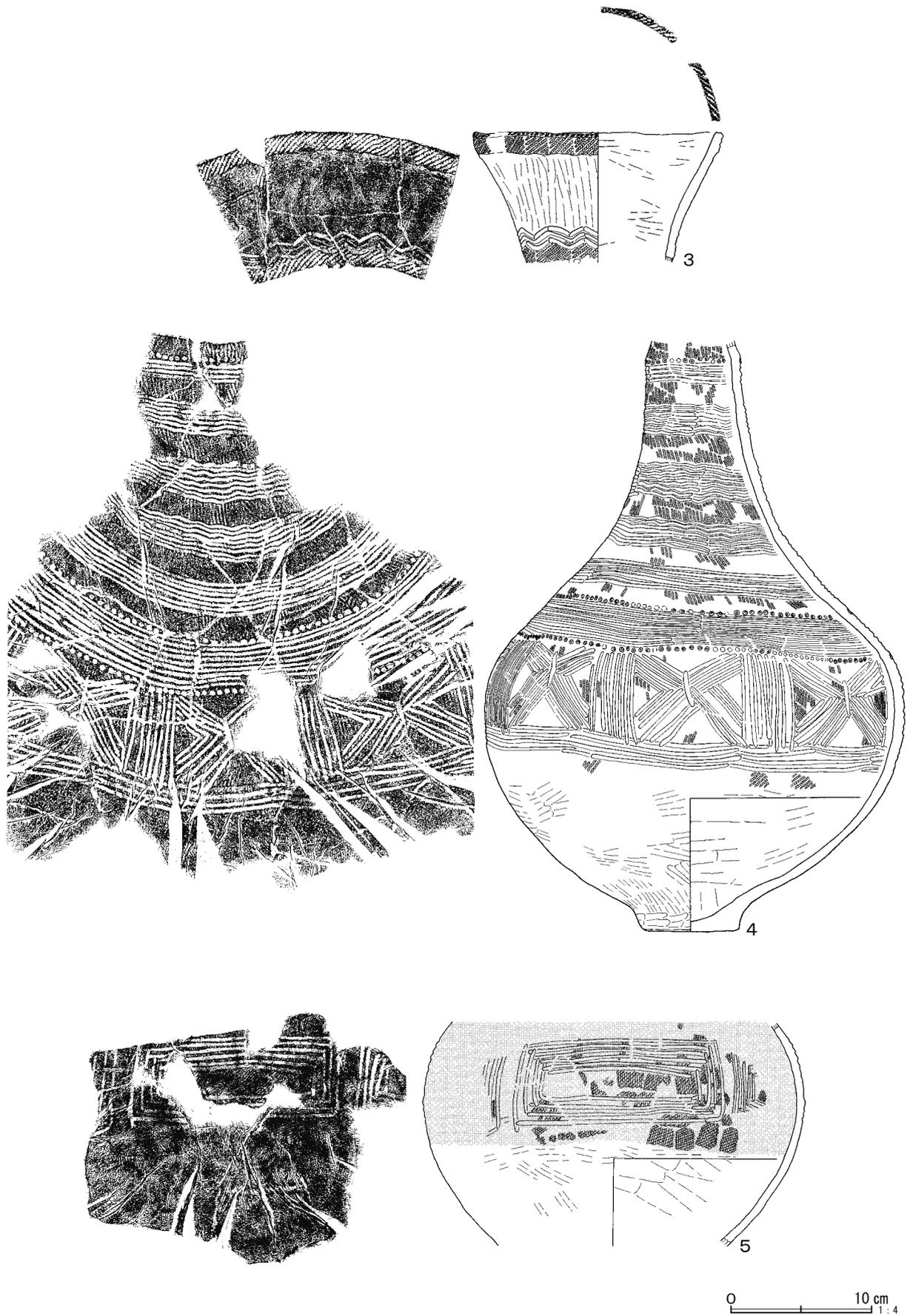
1～10・25～96は、壺である。破片は、判別の難しいものもあるが、中部高地栗林式系ないしその可能性が高いものが少数みられた。1は、全形の分かる残存状態の比較的良好な壺である。肥厚した口縁部の開きが小さく、頸部はすばまる。肩部がハの字状を呈し、胴上部に2つの段を持つ。球形



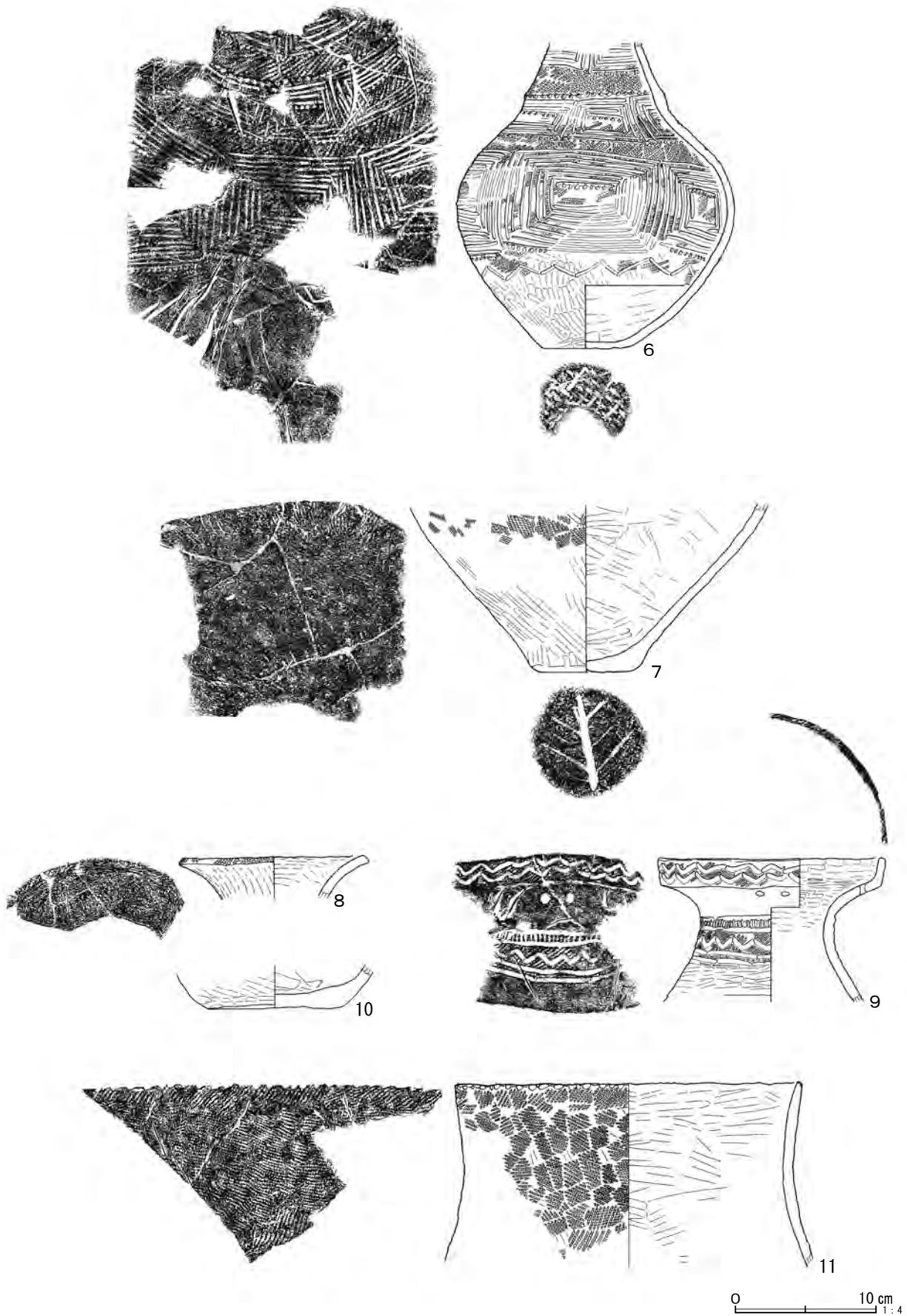
第41図 第7号住居跡出土遺物(1)

を呈する胴部は、中段付近に最大径を持ち、以下は底部に向かってやや反りながら下る。外面の文様は、口縁部にRL単節縄文が施文され、頸部は上下に巡る爪形の刺突列2列間にRL単節縄文が充填されている。胴上部にある2つの段には、頸部と同じ刺突列が2列巡り、間にRL単節縄文が充填されている。以下は、ヘラでフラスコ文が描かれ、両脇に2本一単位の波状文3条が上下に巡る。フラスコ文は、胴部に4つ配置されている。フラスコ文以下の両脇は、地文にRL単節縄文が施文されており、フラスコ文内は充填されている。段下に施文された縄文は、摩耗が著しいため部分的な図示であるが、

本来は全面に施文されている。調整は、外面無文部がヘラミガキ、内面は図示していない口縁部が横位、頸部は縦位のヘラミガキ、以下は横・斜位のヘラナデである。底面に木葉痕がみられた。2は、大型壺の肩部から胴下部までの部位である。約半分のみが残存であるが、焼成が良好であり、外面の文様も明確に残る部分が多い。肩部は、ハの字状にやや外反しながら下り、胴上部との境ですぼまる。胴部は球形を呈し、中段よりやや上に最大径を持つ。外面の文様は、肩部から胴部中段下まで隙間なく施文されている。肩部は、ヘラで横長の重四角文が描かれ、重四角文内に無節Rが充填されている。重四角文間には、フラスコ文が胴上部まで施文されている。フラスコ文は、上位が突帯、下位の円形はヘラ描きで構成され、突帯両脇には爪形の刺突列が2列、円形部分には1列巡る。円形区画内は、無節Rが充填されている。フラスコ文は、胴部に4つ配置されていると思われる。肩部の重四角文下は、上位と同じ刺突列が2列巡り、以下にヘラで重四角文が複数描かれている。胴部の重四角文は、フラスコ文下が方形、その他は縦長の長方形であり、前者の区画内には上位と同じ刺突列が5列充填されている。肩部の重四角文下に巡る刺突列2列下は、地文に無節Rが胴部中段下まで施文されている。調整は、胴下部外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。3は、口縁部から頸部までの部位である。残存状態が良好である。肥厚した口縁部がやや受け口状を呈し、頸部はすぼまる。器壁がやや厚い。外面の文様は、端部を含む口縁部にLR単節縄文が施文され、頸部は上位にヘラ描きの波状文が3条、下位に楕円形の刺突列が横位に巡り、間にLR単節縄文が充填されている。外面無文部と内面の調整は、ヘラミガキである。4は、口縁部を欠くが、ほぼ全形の分かる残存状態の良好な壺である。細長の頸部は、最上位が内傾するが、以下はほぼ直立に近い。肩部は、外反しながら緩やかに下る。胴部は球形を呈し、最大径を中段よりやや上に持つ。底部は、円柱状を呈する。外面の文様は、頸部から胴部中段下まで隙間なく施文されている。頸部は、上位に竹管状工具による円形の刺突列1列とヘラ描きの平行沈線4条が巡り、以下は胴上部までヘラ描きによる複数の波状文が3段、平行沈線1段がほぼ等間隔に巡る。波状文は、上位が7条、中間と下位は8条、平行沈線は7条である。胴上部以下は、上下に複数の平行沈線が巡り、間に垂下する複数の沈線と*形結紐文が描かれている。平行沈線は、上位が9～10条、下位は4条であり、上位の平行沈線の上下には頸部と同じ刺突列が巡る。平行沈線間に垂下する沈線は8条、*形結紐文は6条前後である。頸部以下には、胴部中段下まで地文にLR単節縄文が施文されており、頸部から肩部までは縄目が縦位になるように施文されている。縄文は、摩耗が著しいため部分的な図示であるが、本来は胴部中段下まで全面に施文されている。調整は、胴下部外面がヘラミガキ、内面は図示していない頸部が縦・斜位のヘラミガキ、以下は横・斜位のヘラナデである。胴下部内面に輪積痕が一部みられた。5・6は、外面にヘラで重四角文が描かれた壺である。5は、胴上部から下部までの部位である。胴部が球形を呈し、中段よりやや上に最大径を持つ。器壁がやや薄い。外面の文様は、胴上部から中段に横長の重四角文が描かれ、地文に無節Lが施文されている。縄文施文部に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。調整は、胴下部外面の無文部がヘラミガキ、内面はヘラナデである。6は、頸部上位以上を欠くが、比較的残存状態の良好な小型の壺である。頸部下位はハの字状を呈し、肩部に段を持つ。段下はすぼまり、胴部は球形を呈する。最大径を胴部中段に持つ。外面の文様は、頸部下位から胴部中段下まで隙間なく施文されている。外面の文様は、頸部、胴上部、胴部中段にヘラで重四角文が描かれており、一部方形を呈する箇所がみられたが、大半は横



第 42 图 第 7 号住居跡出土遺物 (2)

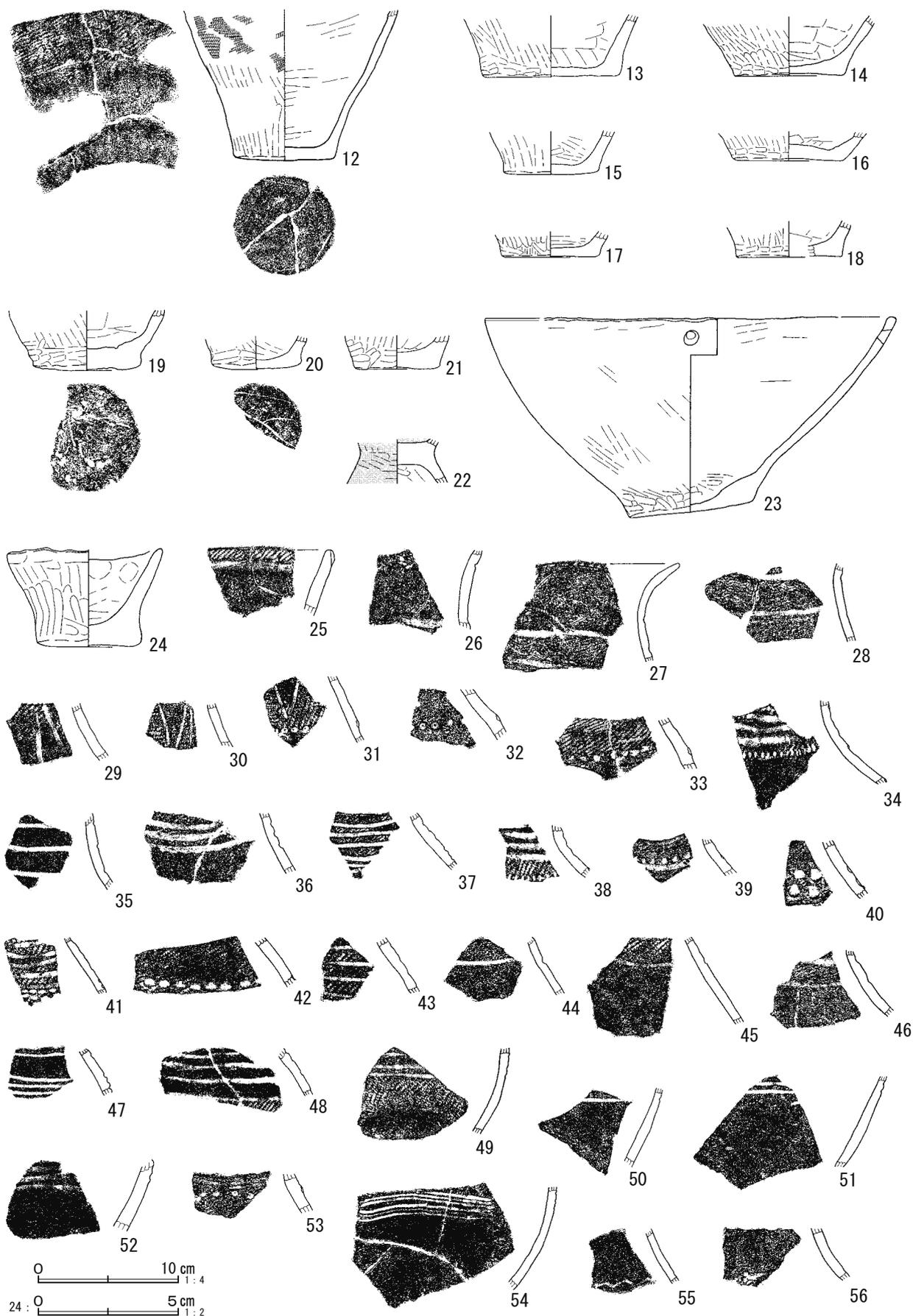


第 43 图 第 7 号住居跡出土遺物 (3)

長の長方形を呈する。頸部の重四角文下と肩部の段に半円形ないし円形の刺突列が1列巡り、間にLR単節縄文が充填されている。胴上部及び胴部中段に描かれた重四角文内上位には、上記と同じ刺突列が1列、胴部中段の重四角文下にはへら描きの山形文が1条横位に巡る。肩部の段下から胴部中段下に巡る山形文付近まで地文にLR単節縄文が施文されており、摩耗が著しいため部分的な図示であるが、本来は胴部中段まで全文に施文されている。調整は、胴下部外面がへらミガキ、内面は図示していない頸～肩部が横・斜位のへらミガキ、以下は横・斜位のへらナデである。底面に網代痕がみられた。7は、半球形を呈する胴部中段から底部までの部位である。残存状態が良好である。器壁が厚い。外面の文様は、胴部中段に無節Lが施文され、上に一部のみの残存であるが、へら描きの斜線文か波状文が描かれている。胴下部外面無文部と内面の調整は、へらミガキである。底面に木葉痕がみられた。8・9は、中部高地栗林式系である。8は、口縁部から頸部上位までの部位である。口縁部が大きく外反する。外面の文様は、角張った口縁端部にLR単節縄文が施文されている。以下は、無文である。調整は、内外面ともにへらミガキである。胎土がやや粗い。9は、口縁部から肩部までの部位である。残存状態が比較的良好である。口縁部が受け口状を呈し、太く短い頸部がすぼまる。以下は、ハの字に開く。器壁が厚い。外面の文様は、口縁端部と口縁部の地文にLR単節縄文が施文され、へら描きの山形文が横位に2条巡る。以下は、幅狭い無文部を挟んだ頸部の上下に平行沈線が2条ずつ巡り、上位の平行沈線間は爪形の刺突列が1列、中間のやや幅広い平行沈線間は山形文が1条巡る。沈線が太い。頸部は、地文にLR単節縄文が施文されている。調整は、口縁部外面直下の無文部が横ナデ、肩部はへらミガキであるが、頸部下位に巡る平行沈線付近は、へらミガキ前に施されたハケメが所々に残る。内面は、口縁部から頸部上位までへらミガキであるが、以下は摩耗が著しいため不明である。口縁部内面に輪積痕が一部みられた。口縁部直下には、二個一対の焼成前穿孔があり、対面にも同様の穿孔がみられた。10は、径の大きい底部である。調整は、外面がへらミガキ、内面はへらナデである。甕の可能性もある。

25～28は、口縁部から肩部までに収まる破片である。同一個体の27・28は、中部高地栗林式系である。外面の文様は、25が肥厚した口縁部にLR単節縄文が施文されている。以下は、無文である。26は、上位が無文であるが、下位にへら描きの太い平行沈線が巡る。27・28は、大きく外反する口縁端部にLR単節縄文が施文され、口縁部は無文である。頸部は、へら描きの太い平行沈線が上下に巡り、間に3本一単位の櫛歯状工具による波状文2条が横位に巡る。肩部は、へら描きの懸垂文と思われる沈線が垂下する。調整は、27・28の外面無文部と内面は不明であるが、その他はへらミガキである。25の外面無文部と内面は、前者の上位が横位、下位は斜位、後者は横・斜位、26の外面無文部は斜位、内面は上位が横位、下位は斜位に施されている。26の外面無文部上位には、種子圧痕と思われる凹みが1つみられた。

29～31は、外面にへらで上向きの鋸歯文が描かれた破片であり、肩部から胴上部までに収まる。29は、鋸歯文外にLR単節縄文が施文されており、一部はみ出ている。30は、鋸歯文内にLR単節縄文が充填されている。鋸歯文外は、無文である。31は、段の上に鋸歯文が描かれ、鋸歯文内にLR単節縄文が充填されている。段に竹管状工具による円形の刺突列が横位に巡る。段下は、無文である。調整は、すべてへらミガキであり、29の内面は横・斜位、30の外面無文部と内面は斜位、31の外面無文部は横位、



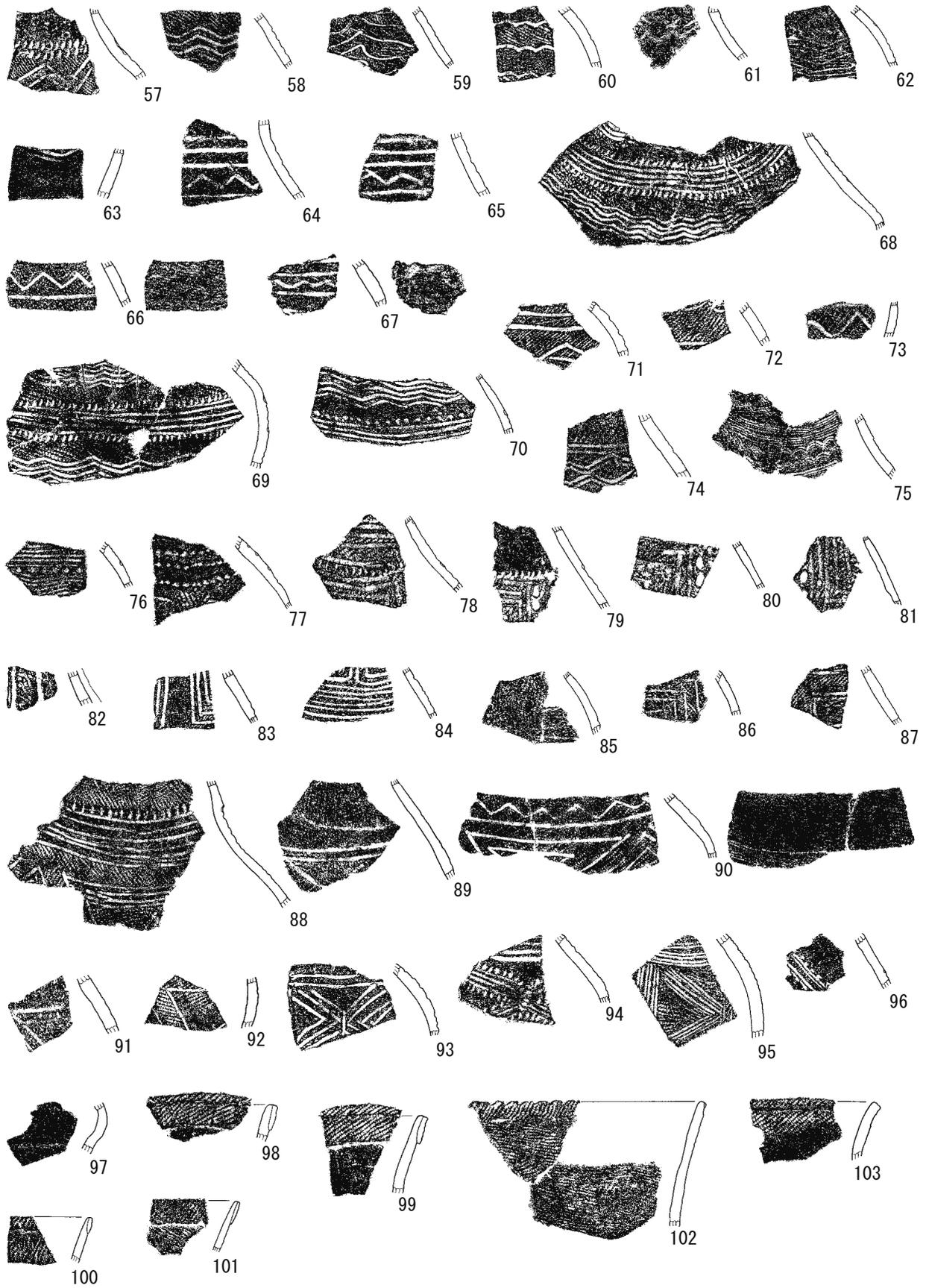
第 44 图 第 7 号住居跡出土遺物 (4)

内面は斜位に施されている。

32・33は、外面の段に刺突列が横位に巡る肩部から胴上部までの破片である。刺突は、竹管状工具による円形を呈する。いずれも刺突列上にLR単節縄文か無節Lが施文されており、段下は無文である。33は、縄文施文部に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。調整は、いずれも段下の外面無文部が横位のヘラミガキであるが、内面は不明である。

34～52は、外面にヘラ描きの平行沈線が巡る破片である。34～48は頸部から胴上部までに収まり、49～52は胴部中段から下部までの破片である。34・35・44・45は、中部高地栗林式系である。34は、頸部の上下に爪形の刺突列が横位に1列巡り、間に太い平行沈線がほぼ等間隔に3条巡る。頸部の地文にLR単節縄文が施文されているが、肩部は無文である。35・36も太い平行沈線が3条巡るが、35は間隔を空けて、36は間隔を狭めて上位に巡る。35は、3条の平行沈線間にLR単節縄文が施文されている可能性がある。下位の平行沈線下は、無文である。36は、地文にLR単節縄文が施文されている。37は、やや太い平行沈線が6条巡る。重四角文の可能性がある。全面ではないが、地文にLR単節縄文が施文されている。38は、上位に太い平行沈線3条がほぼ等間隔に巡り、下位はLR単節縄文が施文され、半円形の刺突列が1列巡る。39は、太く浅い2条の平行沈線間下位に円形の刺突列が1列巡る。40も上位に太く浅い平行沈線が2条、下位に大きい円形の刺突列が2列巡る。41は、上位に浅くやや太い平行沈線が4条、下位に横長の刺突列が2列巡る。地文にLR単節縄文が施文されている。42は、LR単節縄文地に浅い平行沈線が1条、下位に楕円形の刺突列が1列巡る。43は、4条の平行沈線がほぼ等間隔に巡り、沈線間にLR単節縄文を充填する部分と無文部を交互に配置している。44・45は、上位に2条の平行沈線が間隔を空けて巡り、間にLR単節縄文が充填されている。下位は、無文である。46は、上位に太い平行沈線が2条巡り、間にLR単節縄文が充填されている。平行沈線下は、縦位の沈線が1条垂下している。47は、平行沈線が4条巡り、上2条の幅広い平行沈線間にRL単節縄文か無節Rが充填されている。縄文施文部に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。48は、浅く太い平行沈線がほぼ等間隔に4条巡り、下にLR単節縄文が施文されている。49～52は、胴部中段付近にやや太い平行沈線が複数巡る。50・51は、同一個体である。52以外は、胴部中段下まで地文に縄文が施文されている。49はLR単節縄文、50・51はRL単節縄文か無節Rが施文されている。縄文以下は、無文である。52は、平行沈線下が無文である。調整は、ヘラミガキが主体となる。ヘラミガキは、34・35・45・49の外面無文部、43の外面無文部と内面は斜位、37・40・42の内面、50・51の外面無文部と内面、46の内面は横・斜位、44は外面無文部が斜位、内面は横位、52の外面無文部は横位、内面は横・斜位に施されている。34の内面は、上位が横・斜位のヘラミガキであるが、下位は横・斜位のヘラナデである。36・38・39の内面は、横・斜位のヘラナデである。35・41・45・47～49の内面は、不明である。

53・54は、外面に櫛歯状工具による直線文が横位に巡る破片である。53は肩部から胴上部まで、54は胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、53が2本、54が3本である。53は、段に竹管状工具による円形の刺突列が1列、段上に直線文1条が巡る。段下は、LR単節縄文か無節Lが施文されている。54は、胴部中段付近に直線文が2条巡る。以下は、無文である。調整は、54の外面無文部が横・斜位のヘラミガキ、53・54の内面は不明である。



第 45 图 第 7 号住居跡出土遺物 (5)

55～60は、外面にヘラ描きの波状文ないし山形文が横位に巡る破片であり、頸部から胴上部までに収まる。55・56は、下位に巡る波状文1条下にLR単節縄文が施文されている。上位は、無文である。57は、上位の無文部下に爪形の刺突列が2列、下位は細かいRL単節縄文地に山形文が2条巡る。58は、山形文がほぼ等間隔に4条巡り、上にRL単節縄文が施文されている。山形文下は、無文である。外面全面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。59は、無節R地に煩雑で細い波状文がほぼ等間隔に5条巡る。60は、やや太い波状文がほぼ等間隔に3条巡り、間に無節Rを充填する部分と無文部を交互に配置している。調整は、ヘラミガキが主体となる。ヘラミガキは、55・56の外面無文部が縦・斜位、内面は横・斜位、57は外面無文部が縦位、内面は横・斜位、58の外面無文部は斜位、60の外面無文部は横位に施されている。56の内面は、斜位のヘラナデであり、55の内面はヘラミガキ前に施された横位のヘラナデが一部、59は外面の所々に縦・斜位のハケメが残る。59・60の内面は、不明である。57は、内面に輪積痕がみられた。58は、胎土がやや粗い。

61～63は、外面に櫛歯状工具による波状文ないし山形文が横位に巡る破片である。61は頸部から肩部まで、62は胴上部、63は胴部中段から下部までの破片である。61は、中部高地栗林式系と思われる。櫛歯の数は、すべて2本である。61は、上位に波状文が2条巡り、下位は無文である。62は、上位が無文であり、下位に半円形の刺突列1列と煩雑な波状文ないし山形文が3条巡る。63は、地文にLR単節縄文か無節Lが中段まで施文され、上位に波状文ないし山形文が1条巡る。下位は、無文である。調整は、63の外面無文部と内面は不明であるが、その他はヘラミガキが主体となる。ヘラミガキは、61の外面無文部が縦位、62の外面無文部は斜位に施されている。内面は、すべて横・斜位に施されており、61はヘラミガキ前に施された横位のハケメが一部残る。

64～73は、外面にヘラ描きの平行沈線と横位の波状文ないし山形文が巡る破片であり、頸部から胴部中段までに収まる。64～67は、中部高地栗林式系である。64・65は、上位に平行沈線3条、下位に1条、間に山形文1条がほぼ等間隔に巡る。いずれも沈線が太い。66は、上位に山形文、下位に平行沈線が1条巡る。67は、上下に平行沈線がほぼ等間隔に2条、間に波状文が1条巡る。68・69は、上下に波状文、間に平行沈線が5条ずつ巡り、平行沈線の上下に爪形の刺突列が1列巡る。70は、68・69と同じ文様構成であるが、上位に波状文が5条、間隔を空けて下位に平行沈線が3条以上巡り、平行沈線上に半円形の刺突列が1列巡る。71は、上位に平行沈線がやや間隔を空けて2条、下位に山形文と思われる文様とその下に短い平行沈線が1条巡る。沈線が太い。72は、上位に波状文、下位に平行沈線が1条巡る。73は、上位に平行沈線、下位に山形文が1条巡る。64～73は、地文に縄文が施文されている。64～66・72・73はLR、68～70はRL単節縄文、71は無節Lである。内面調整は、ヘラミガキが主体となり、64・65・67・70・73は横位、66・68・71は横・斜位に施されている。66・67は、ヘラミガキ前に施されたハケメ、69は横位のヘラナデが一部残る。ハケメは、66が斜位、67は横位に施されている。72は、不明である。70は、内面に輪積痕がみられた。

74～76は、外面に櫛歯状工具による波状文ないし山形文と直線文が横位に巡る破片である。74・75は肩部、76は胴上部の破片である。櫛歯の数は、74が2本、75は4本、76は3本である。74は、中段に直線文が1条、下位に山形文が2条巡る。下位の山形文は、上下を互い違いに施文しており、菱形状を呈する。地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。外面全面に赤彩が施されているが、

ほぼ剥落している。75は、波状文と直線文が2条ずつ交互に巡る。76は、上位に直線文、下位に緩い波状文が2条巡り、間に半円形の刺突列が1列巡る。内面調整は、74が不明、75・76は横位のヘラミガキである。74・75は、胎土がやや粗い。

77は、外面にヘラで舌状文が描かれた胴上部片である。上位は、半円形の刺突列がほぼ等間隔に3列巡り、刺突列間に沈線状を呈する浅い凹みが入る。下位は、短い舌状文が描かれており、最下位の刺突列と舌状文間にLR単節縄文が充填されている。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。

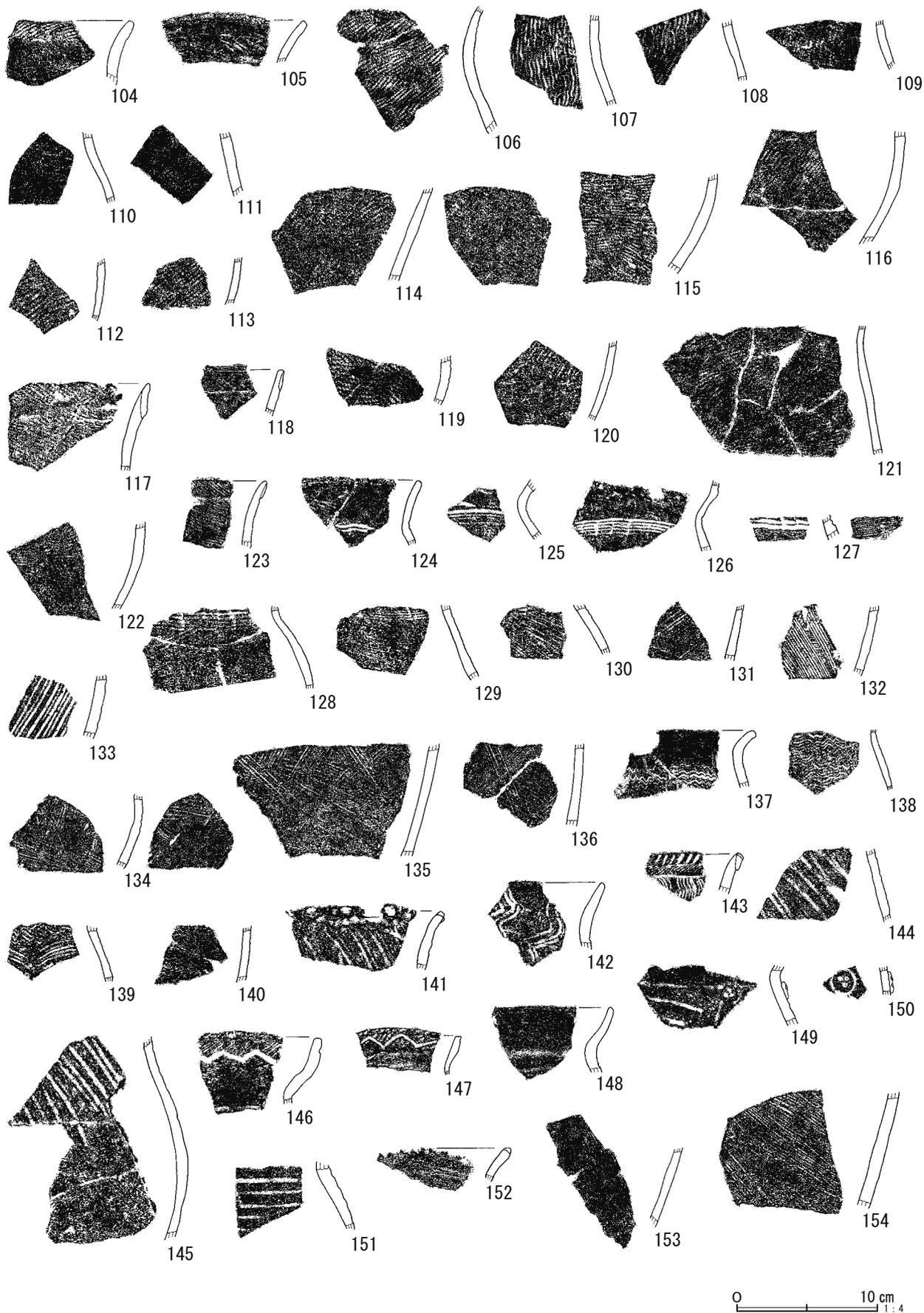
78～86は、外面にヘラで重四角文が描かれた破片であり、肩部から胴上部までに収まる。79～81は、同一個体である。78は、下位に重四角文が描かれており、上位は平行沈線が4条、中段は2条巡り、中段の平行沈線間に爪形の刺突列が1列巡る。沈線が太い。地文にLR単節縄文が施文されている。79～81は、上位の無文部下に段を持ち、半円形の刺突列が1列巡る。下位は、LR単節縄文地に浅くやや太い沈線で重四角文が描かれており、重四角文間に縦長で大きい楕円形の刺突列が2列垂下する。82は、縦長の突帯が付き、両脇に重四角文と思われる太い沈線が垂下する。突帯には、LR単節縄文が施文されている。83は、沈線がやや太い。地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。84は、6条の平行沈線上に重四角文が描かれており、重四角文内にRL単節縄文充填されている。85は、地文にLR単節文が施文されている。86は、沈線が細い。地文にRL単節縄文が施文されている。調整は、79～81の外面無文部、84の内面が横・斜位、82・86の内面は横位のヘラミガキである。78・79～81・83・85の内面は、不明である。

87は、外面に櫛歯状工具で重四角文が描かれた肩部片である。櫛歯の数は、2本である。重四角文内にLR単節縄文を充填する部分と無文部を交互に配置している。調整は、外面無文部が斜位、内面は横・斜位のヘラミガキである。

88～92は、外面にヘラで重三角文が描かれた破片である。88～91は肩部から胴上部までに収まり、92は胴部中段の破片である。89・90は、中部高地栗林式系である。88は、肩部に段を持ち、爪形の刺突列が1列巡る。段下は、重三角文上に平行沈線が5条巡る。段上と平行沈線下の地文にRL単節縄文が施文されている。89は、重三角文上にヘラで懸垂文が描かれており、区画内に櫛歯状工具による直線文が複数垂下する。沈線が太い。懸垂文外は無文と思われるが、重三角文の施文された下位は、地文に縄文が施文されている可能性がある。90は、重三角文上に山形文が1条横位に巡る。沈線が太い。地文にLR単節縄文が施文されている。91は、地文にRL単節縄文か無節Rが施文されている。92は、全面ではないが、地文に無節Lが施文されている。内面調整は、89・91が不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、88が横・斜位、90・92は横位に施されているが、90はヘラミガキ前に施された斜位の粗いハケメが残り、輪積痕もみられた。

93・94は、外面にヘラで*形結紐文が描かれた胴上部片である。93は、平行沈線2条下に3～4条の沈線で描かれている。94は、太い平行沈線2条の下に細い沈線4条で描かれており、上下と中央に半円形の刺突列が施文されている。内面調整は、93が横・斜位のヘラミガキであり、輪積痕が一部みられた。94は、不明である。

95・96は、外面に櫛歯状工具で*形結紐文が描かれた破片であり、胴上部から中段までに収まる。櫛歯の数は、2本である。95は、縦横位に巡る3条の直線文内に文様が描かれている。地文に無節R



第 46 图 第 7 号住居跡出土遺物 (6)

が施文されている。96は、斜線文両脇に楕円形の刺突列が施文されている。地文に無節Lが施文されている。内面調整は、95が不明、96は横位のヘラミガキである。96は、内面に輪積痕がみられた。

97は、広口壺の胴部中段の破片である。調整は、内外面ともに横位のヘラミガキであり、内面は粗く施されている。外面のみ赤彩が施されている。

11～21・98～155は、甕である。11は、口縁部から胴上部までの部位である。口縁部の開きが小さく、ほぼ直立に近い。頸部はすぼまり、胴部は下位に向かって緩やかに膨らむ。外面の文様は、口縁端部に刻み、口縁部から胴上部まで全面にLR単節縄文が施文されている。内面調整は、粗いヘラミガキである。破片102と同一個体である。12～21は、胴下部から底部までに収まる部位である。19～21の底部は、円柱状を呈する。12は、胴下部上位に無節Lが施文されている。調整は、12・15・17・20が内外面ともにヘラミガキであり、12の内面は粗く施されている。13・14・16・18・19・21は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデであるが、17の外面はヘラミガキ前に施されたハケメが一部残る。底面に12がヘラによる刻み、19は種子圧痕と思われる凹みが複数、20は木葉痕がみられた。13は、内面に煤が付着していた。13・20は、胎土がやや粗い。甕としたが、12以外は壺の可能性もある。

98～123は、外面に縄文が施文された破片である。98～116はLR、117～120はRL単節縄文、121・122は無節L、123はRである。LR単節縄文が施文された98～116は、98～105が口縁部から頸部まで、106～111が頸部から胴上部まで、112～116は胴部中段から下部までに収まる破片である。縄文は、98・99が端部を含む肥厚した口縁部外面、100・101は肥厚した口縁部を含む外面全面、102・106～113・115は外面全面、103は端部を含む口縁部外面、104は口縁部外面、105は口縁端部、114・116は外面上位に施文されている。102は、11と同一個体である。100の頸部、107～109は、縄目が縦位になるように施文されている。調整は、98の頸部外面無文部、101・111・112・115の内面、116の下位の外面無文部は不明であるが、その他はヘラミガキが主体となる。ヘラミガキは、99・103の頸部外面無文部、114の下位の外面無文部が縦・斜位、104の頸部外面無文部は横位、105の口縁部外面が横・斜位に施されている。103は、下位にヘラミガキ前に施された斜位のハケメが一部残る。内面は、98・100・103～105・109・113が横位、99・102・106～108・110・114・116は横・斜位に施されている。102・113は、粗く施されている。114は、ヘラミガキ前に施された斜位のハケメが残る。108は、内面に輪積痕がみられた。101・102・112は、胎土がやや粗い。RL単節縄文が施文された117～120は、117・118が口縁部から頸部まで、119・120は胴部中段から下部までに収まる破片である。縄文は、117が肥厚した口縁部を含む外面全面、118は端部を含む肥厚した口縁部外面、119は外面全面、120は外面上位に施文されている。調整は、118の頸部外面無文部、120の下位の外面無文部と内面は不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、117・119の内面が横・斜位、118の内面は横位に施されている。117は、胎土がやや粗い。無節Lが施文された121・122は、121が頸部から胴上部まで、122は胴部中段から下部までの破片である。縄文は、121が外面全面、122は外面上位に施文されている。調整は、すべて不明である。122は、胎土がやや粗い。無節Rの施文された123は、口縁部から頸部までの破片である。縄文は、肥厚した口縁部を含む外面全面に施文されている。内面調整は、横位のヘラミガキである。

124～143は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた破片である。124～140は、中部高地栗林式系

である。124～127は、頸部外面に簾状文が横位に巡る破片であり、口縁部から胴上部までに収まる。櫛歯の数は、124が2本、125は4本、126は5本、127は2本以上である。簾状文以外の外面文様は、124が口縁端部にLR単節縄文が施文されている。125は、胴上部に文様があるが、摩耗が著しいため詳細不明である。126は、口縁部に波状文と思われる文様が一部みられたが、詳細は不明である。調整は、ヘラミガキが主体となる。ヘラミガキは、124の口縁部外面無文部、125の内面、126の口縁部外面下位の無文部は横・斜位、124の胴上部外面無文部と内面、125の口縁部外面無文部、126の胴上部外面無文部と内面は、横位に施されている。127は、胴上部の外面無文部に横位のヘラミガキが施されているが、横・斜位のハケメが残る。内面は、横位のハケメである。122・126は、胎土がやや粗い。

128～131は、胴部外面に縦位の羽状文が描かれた破片である。128～130は頸部から胴上部まで、131は胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、128が5本、129は5本以上、130は4本、131は不明である。羽状文以外の外面文様は、128～130が頸部に同一工具による簾状文が横位に巡る。調整は、128の内面が横位、130の内面は横・斜位のヘラミガキである。131は、外面が横・斜位のハケメ、内面は斜位のヘラミガキである。129の内面は、不明である。128は、胎土がやや粗い。

132・133は、胴部外面に横位の羽状文が描かれた胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、不明である。調整は、132の外面が横位のハケメ、内面は横・斜位のヘラミガキである。133の内面は、不明である。132は、外面上位にイネの圧痕と思われる凹みがみられた。

134～136は、胴部外面に斜格子文が描かれた胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、134が4本、同一個体の135・136は8本である。調整は、すべてヘラミガキであり、134の外面、135・136の内外面は横・斜位、134の内面は斜位に施されているが、134の内外面、135・136の外面は、ヘラミガキ前に施された横・斜位のハケメが残る。

137～140は、外面に波状文が横位に巡る破片である。137は口縁部から頸部まで、138・139は頸部から胴上部まで、140は胴部中段の破片である。櫛歯の数は、137・140が4本、138・139は5本である。波状文は、137・139が頸部外面、138・140は外面全面に複数巡る。波状文以外の外面文様は、137が口縁端部にLR単節縄文が施文され、胴上部に同一工具による直線文が垂下する。139は、胴上部に同一工具で縦位の羽状文が描かれている。調整は、すべてヘラミガキであり、137の口縁部外面無文部、137～139の内面は横位、140の内面は横・斜位に施されている。

141は、外面に櫛歯状工具で斜線文が描かれた口縁部から頸部までの破片である。櫛歯の数は、2本である。斜線文以外の外面文様は、口縁端部に刻みが施文されている。調整は、内外面ともに不明である。胎土が粗い。

142・143は、外面に櫛歯状工具による波状文が垂下する口縁部から頸部までの破片である。櫛歯の数は、142が3本、143は9本である。波状文は、142が口縁部外面以下に間隔を空けて垂下する。143は、頸部以下にやや間隔を空けて垂下する。波状文以外の外面文様は、143の口縁端部に斜位の刻みが施文され、肥厚した口縁部外面に細かいLR単節縄文が施文されている。調整は、すべてヘラミガキであり、142の外面、143の内面は横位、142の内面は横・斜位に施されており、142の内面は粗く施されている。143は、文様構成から筒形土器の範疇で捉えた方が良いかもしれない。

144・145は、胴上部外面にヘラで太い斜線文が描かれた破片である。同一個体である。144は胴上部、

145 は胴上部から下部までの破片である。いずれも調整は、不明である。胎土が粗い。

146 ～ 151 は、胴部外面にヘラでコの字重ね文が描かれた中部高地栗林式系と思われる破片である。146 ～ 148 は受け口状を呈する口縁部から頸部まで、149 ～ 151 は頸部から胴上部までに収まる破片である。外面の文様は、146・147 が口縁端部と口縁部の地文にLR単節縄文が施文され、ヘラ描きの山形文が1条横位に巡る。以下は、無文である。山形文は、146 が太く、147 は細い。148 は、口縁端部にLR単節縄文が施文され、無文部を挟んで胴上部にヘラ描きの平行沈線が巡る。149 は、頸部が無文で胴上部以下にコの字重ね文が描かれている。胴上部以下の地文にLR単節縄文が施文され、コの字重ね文の連結部上位にボタン状貼付文が付く。149・150 のボタン状貼付文は、竹管状工具による円形の刺突が3つ刻まれている。151 は、沈線がやや太い。外面無文部と内面の調整は、150 の外面が不明であるが、その他はすべて横位のヘラミガキである。146 は、胎土がやや粗い。

152 ～ 155 は、ほぼ無文の破片である。152 は口縁部から頸部まで、その他は胴下部の破片である。152 は、口縁端部に刻みが施されている。調整は、152 の外面が横位の粗いヘラミガキ、153・154 の外面は斜位の細かいハケメ、154 の内面は横・斜位のヘラミガキ、155 は外面が縦・斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位の粗いハケメであるが、外面はヘラミガキ前に施された斜位のハケメが一部残る。152・153 の内面は、不明である。153 ～ 155 は、壺の可能性もある。

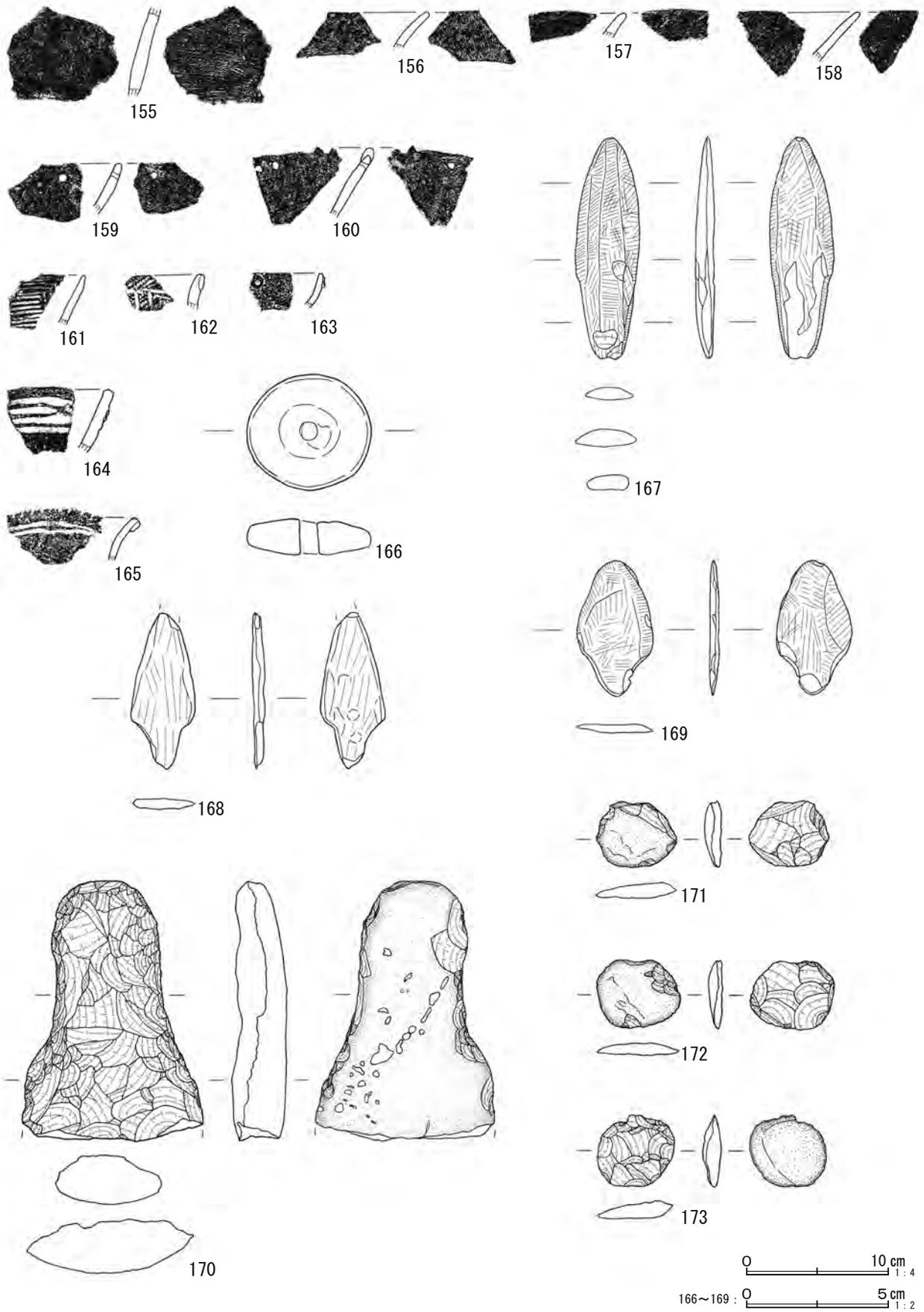
22・156 ～ 160 は、中部高地栗林式系の高坏である。22 は、接合部である。調整は、外面と坏部内面がヘラミガキ、脚部内面はヘラナデである。外面と坏部内面に赤彩が施されている。156 ～ 160 は、口縁部から坏部までに収まる破片である。159・160 は、口縁部に焼成前穿孔がみられた。159 は1つ、160 は2つである。160 は、口縁端部に二個一対の突起が付く。調整は、すべて内外面ともにヘラミガキであり、156・157・159・160 の外面は横位、158 は横・斜位に施されている。内外面に赤彩が施されているが、156・160 はほぼ剥落しており、159 は外面の大半が剥落している。

23・163 は、鉢である。23 は、残存状態が良くないが、全形の分かる大型の鉢である。口縁部から体部が半球形を呈し、底部はやや円柱状を呈する。口縁部にやや大きい焼成前穿孔が1つがみられた。全面無文である。調整は、摩耗が著しいため部分的な図示であるが、内外面ともにヘラミガキである。163 は、中部高地栗林式系の口縁部片である。外面の文様は、中央に竹管状工具による円形の刺突が施文されたボタン状貼付文が付くのみである。調整は、内外面ともに横位のヘラミガキである。鉢としたが、他の器種の可能性もある。

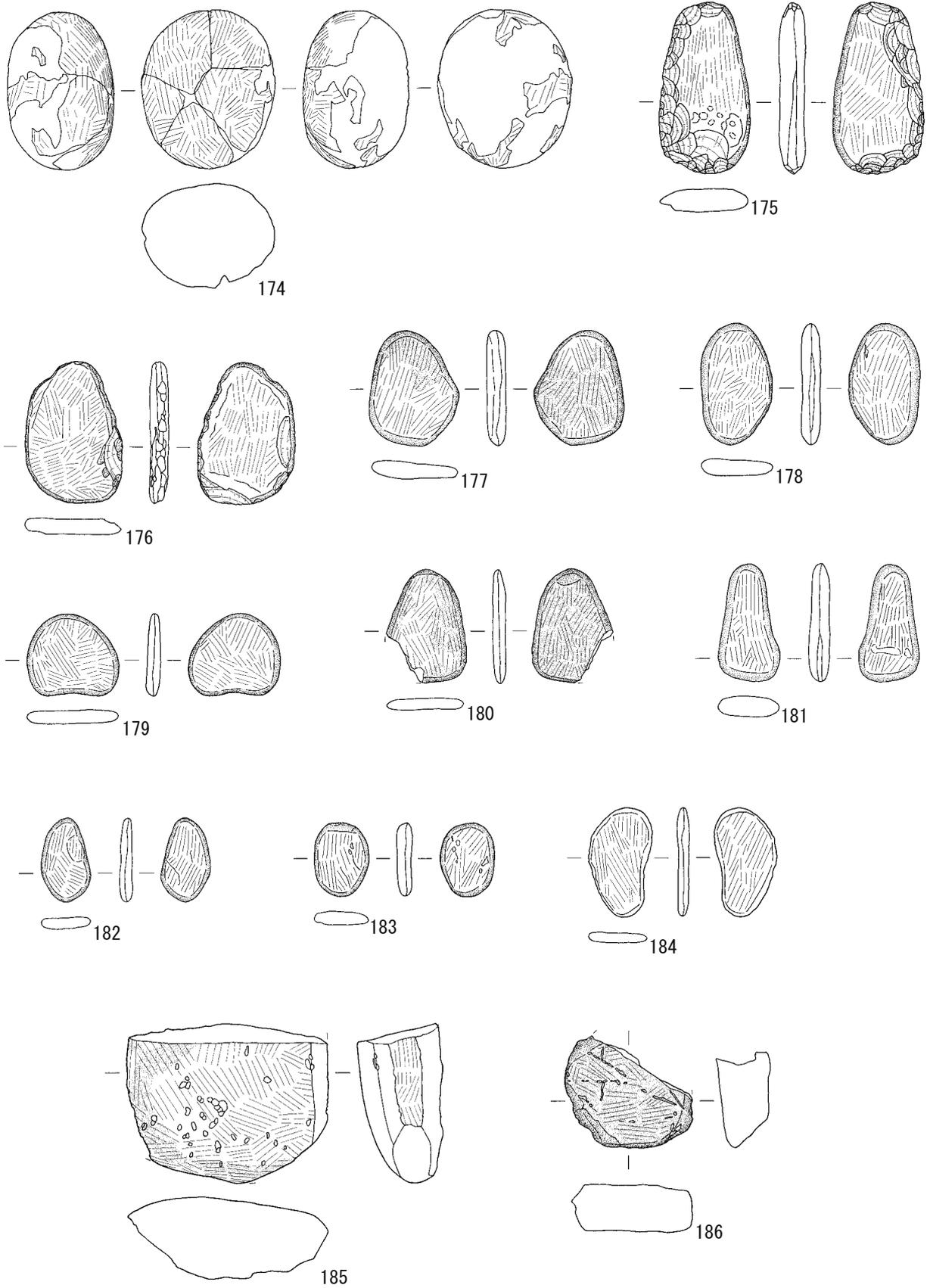
161・162 は、筒形土器の口縁部から頸部までの破片である。162 は、口縁部が肥厚している。いずれも外面にヘラで重四角文が描かれており、161 は重四角文内に短い平行沈線が複数充填されている。162 は、地文にLR単節縄文が施文されている。内面調整は、161 が横・斜位の丁寧なヘラミガキ、162 は不明である。筒形土器としたが、壺の可能性もある。

24 は、やや煩雑な造りのミニチュア土器である。完形品である。いびつな口縁部が逆ハの字に開き、器壁の厚い底部が円柱状を呈する。無文である。調整は、内外面ともにヘラミガキであるが、内面は上位に指頭圧痕もみられた。

166 は、完形の土製紡錘車である。中央に径0.65 cmの孔を持つ。両面とも孔の周囲がやや盛り上がり、片面にやや凹む部分がみられた。胎土は、大半の土器と同じである。



第 47 图 第 7 号住居跡出土遺物 (7)



0 10 cm 1:4

第 48 图 第 7 号住居跡出土遺物 (8)

第8表 第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	7.7	35.1	7.4	ABDHIKN	灰黄 黒	B	70%	内外面摩耗顕著。
2	弥生土器 壺	-	(34.0)	-	ABCDEHIKN	にぶい橙 黒褐	A	肩~胴50%	内面全面、外面所々摩耗顕著。
3	弥生土器 壺	17.8	(9.3)	-	ABCDHIKN	灰黄褐色	B	口~頸95%	内面摩耗・剥離顕著、外面やや摩耗。
4	弥生土器 壺	-	(42.3)	6.9	ABDIKN	浅黄 黒	B	頸~底80%	内外面所々摩耗顕著。
5	弥生土器 壺	-	(16.0)	-	ABHIKN	黒褐 にぶい黄橙	B	胴部20%	内外面摩耗。内面輪痕有。縄文施文部赤彩、ほぼ剥落。
6	弥生土器 壺	-	(21.8)	6.1	ABEHIKN	にぶい黄橙 黒	B	頸~底70%	内外面摩耗顕著。
7	弥生土器 壺	-	(11.85)	7.8	ABCHIKN	外：橙 内：黒褐	B	胴~底80%	内外面摩耗顕著。
8	弥生土器 壺	(13.3)	(3.0)	-	ABCHN	黒褐色	B	口~頸30%	内外面摩耗顕著。
9	弥生土器 壺	(16.0)	(10.2)	-	ABDHIKN	にぶい橙 黒褐	B	口~肩70%	内外面大半摩耗。口縁部直下二個一對焼成前穿孔有。
10	弥生土器 壺	-	(3.1)	9.6	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：黄灰	B	底部90%	内外面やや摩耗。
11	弥生土器 甗	(24.4)	(13.1)	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	口~胴20%	内面大半摩耗顕著。No.102 同一個体。
12	弥生土器 甗	-	(10.85)	7.2	ABHIKN	浅黄 褐灰	B	胴~底50%	内外面摩耗顕著。
13	弥生土器 甗	-	(4.45)	(9.8)	ABDHIKN	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	B	胴~底40%	内外面摩耗顕著。内面煤付着。
14	弥生土器 甗	-	(4.3)	7.9	ABCDHIKN	外：にぶい黄橙 内：灰褐	B	胴~底95%	内外面やや摩耗。
15	弥生土器 甗	-	(3.15)	6.8	ABCDHIKN	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	B	胴~底50%	内外面摩耗顕著。
16	弥生土器 甗	-	(2.1)	8.0	ABCDHIKN	にぶい橙色	B	底部100%	
17	弥生土器 甗	-	(1.85)	7.1	ABEHIKN	外：にぶい橙 内：にぶい橙	B	底部60%	内面摩耗顕著。
18	弥生土器 甗	-	(2.6)	(7.6)	ABDHIKN	外：にぶい橙 内：褐灰	B	底部30%	外面摩耗顕著。
19	弥生土器 甗	-	(4.3)	7.7	ABCHIN	褐灰色	B	胴~底60%	内外面摩耗顕著。底面種子圧痕?凹み複数有。
20	弥生土器 甗	-	(2.35)	(6.4)	ABCHIKN	灰黄褐色	B	底部45%	内外面摩耗顕著。
21	弥生土器 甗	-	(2.4)	(6.2)	ABCHIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	底部25%	内外面摩耗顕著。
22	弥生土器 高坏	-	(3.15)	-	ABHIKN	外：にぶい赤褐 内：にぶい黄橙	B	接合部80%	内外面やや摩耗。内外面赤彩。
23	弥生土器 鉢	(29.4)	14.35	9.2	ABDHIKN	浅黄 黒	B	30%	口縁部焼成前穿孔有。
24	弥生土器 ^{ニチュア}	5.55	3.6	3.7	ABEHIKN	浅黄橙色	B	完形	内外面大半摩耗顕著。
25	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	口~頸部片	内外面やや摩耗。
26	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIN	にぶい黄橙色	B	頸部片	外面種子圧痕?凹み有。
27	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIK	外：浅黄橙 内：灰褐	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。No.28 同一個体。
28	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIK	外：浅黄橙 内：褐灰	B	頸~肩部片	内外面摩耗顕著。No.27 同一個体。
29	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
30	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEHIKN	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄褐	B	肩部片	外面摩耗顕著。
31	弥生土器 壺	-	-	-	AHIKN	黒 色	B	肩~胴上片	
32	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：褐灰 内：黒	B	肩~胴上片	内外面摩耗顕著。
33	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	暗灰黄色	B	肩~胴上片	内外面摩耗顕著。縄文施文部赤彩、ほぼ剥落。
34	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	外：にぶい黄橙 内：灰	B	頸~肩部片	内外面摩耗顕著。
35	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	にぶい黄褐色	B	頸~肩部片	内外面摩耗顕著。
36	弥生土器 壺	-	-	-	ABDK	外：灰黄褐 内：灰	B	頸~肩部片	内外面摩耗顕著。
37	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	
38	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	肩部片	内外面やや摩耗。
39	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	にぶい橙色	B	肩部片	外面摩耗顕著
40	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	浅黄色	B	肩部片	外面摩耗顕著。
41	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIK	外：灰黄褐 内：灰	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
42	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	外：褐 内：黒	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
43	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：黒褐 内：にぶい褐	B	胴上部片	
44	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい橙 内：褐灰	B	肩部片	外面摩耗顕著。
45	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIK	外：橙 内：灰黄褐	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
46	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	にぶい黄褐色	B	頸~肩部片	外面摩耗顕著。
47	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。縄文施文部赤彩、ほぼ剥落。
48	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	浅黄褐色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
49	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：黒褐 内：灰	B	胴中~下片	内面全面、外面下位摩耗顕著。
50	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：黒褐	B	胴中~下片	内外面やや摩耗。No.51 同一個体。
51	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：淡黄 内：黒褐	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。No.50 同一個体。
52	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：橙 内：黒褐	B	胴中~下片	外面やや摩耗。
53	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	灰黄色	B	肩~胴上片	内外面摩耗顕著。
54	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐 内：黒褐	B	胴中~下片	内面全面、外面大半摩耗顕著。
55	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIK	灰黄褐色	B	頸~肩部片	外面摩耗顕著。
56	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	頸~肩部片	内外面やや摩耗。
57	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	肩~胴上片	内外面やや摩耗。内面輪痕有。
58	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	外：灰黄褐 内：黒	B	肩部片	内外面摩耗顕著。外面赤彩、ほぼ剥落。
59	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIK	にぶい黄褐色	B	肩部片	内面摩耗顕著。
60	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	外：褐灰 内：黒	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
61	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸~肩部片	外面摩耗顕著。
62	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIK	外：褐灰 内：灰黄褐	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
63	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄褐 内：黒	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
64	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：褐灰 内：にぶい黄橙	B	頸~肩部片	外面摩耗顕著。
65	弥生土器 壺	-	-	-	ABCEHIKN	外：灰白 内：にぶい黄橙	B	肩部片	外面摩耗顕著。
66	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄褐 内：黒褐	B	胴上部片	外面やや摩耗。
67	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
68	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	黒 色	B	肩~胴上片	外面所々摩耗顕著。
69	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	褐灰色	B	胴上~中片	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
70	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：黒 内：黄灰	B	胴上部片	内面摩耗顕著。内面輪積痕有。
71	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：淡黄 内：黒	B	胴上部片	
72	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
73	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	内面大半摩耗顕著。
74	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	肩部片	内外面摩耗顕著。外面赤彩、ほぼ剥落。
75	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	外面摩耗顕著。
76	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい橙 内：にぶい褐	B	胴上部片	
77	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐 内：褐灰	B	胴上部片	内面やや摩耗。
78	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	肩～胴上片	内面摩耗顕著。
79	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：暗褐 内：灰	B	肩～胴上片	内面摩耗顕著。No.80・81 同一個体。
80	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：暗褐 内：褐灰	B	胴上部片	内面摩耗顕著。No.79・81 同一個体。
81	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	外：にぶい橙 内：褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。No.79・80 同一個体。
82	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDIKN	外：にぶい黄橙 内：黒	B	肩部片	
83	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：褐灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
84	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
85	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIKN	外：にぶい黄褐 内：暗灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
86	弥生土器 壺	-	-	-	ABIN	外：灰黄褐 内：にぶい褐	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
87	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	にぶい橙色	B	肩部片	外面摩耗顕著。
88	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	肩～胴上片	
89	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
90	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内面輪積痕有。
91	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
92	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
93	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：黒褐 内：褐灰	B	胴上部片	外面上位摩耗顕著。内面輪積痕有。
94	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄橙 内：黒	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
95	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上～中片	内外面摩耗顕著。
96	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：にぶい黄橙 内：黒褐	B	胴上部片	外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
97	弥生土器 広口壺	-	-	-	ABDHIKN	外：赤 内：にぶい黄橙	B	胴中段片	外面赤彩。
98	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	褐灰色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
99	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外：黒 内：にぶい黄橙	B	口～頸部片	内外面やや摩耗。
100	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHKN	にぶい橙色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
101	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
102	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面大半摩耗顕著。No.11 同一個体。
103	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	外：黒褐 内：にぶい橙	B	口～頸部片	内面大半摩耗顕著。
104	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：浅黄 内：褐灰	B	口～頸部片	外面摩耗顕著。
105	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：黒褐 内：黒	B	口～頸部片	
106	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
107	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：黒褐	B	頸～胴上片	
108	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIK	外：暗褐 内：黒褐	B	頸～胴上片	内面輪積痕有。
109	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIK	黒褐色	B	頸～胴上片	
110	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	内外面大半摩耗顕著。
111	弥生土器 甕	-	-	-	AHIKN	外：黒褐 内：暗褐	B	頸～胴上片	内外面摩耗顕著。
112	弥生土器 甕	-	-	-	ABIKM	にぶい褐色	B	胴中段片	内面剥離、外面摩耗顕著。
113	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	橙 色	B	胴中段片	
114	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：にぶい黄橙 内：黄灰	B	胴中～下片	内外面大半摩耗顕著。
115	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
116	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	黒褐色	B	胴中～下片	内外面大半摩耗顕著。
117	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	灰黄色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
118	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	外面摩耗顕著。
119	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい褐 内：黒褐	B	胴中段片	
120	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIK	黒褐色	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
121	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIKN	浅黄色	B	頸～胴上片	内外面摩耗顕著。
122	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：褐灰 内：黒褐	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
123	弥生土器 甕	-	-	-	ABCHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内面大半摩耗顕著。
124	弥生土器 甕	-	-	-	ACIN	外：黒 内：黒褐	B	口～胴上片	
125	弥生土器 甕	-	-	-	ABHKN	外：にぶい黄橙 内：黒褐	B	口～胴上片	外面摩耗顕著。
126	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面やや摩耗。
127	弥生土器 甕	-	-	-	ABH	黒褐色	B	頸～胴上片	
128	弥生土器 甕	-	-	-	ABHN	外：灰黄褐 内：黒	B	頸～胴上片	外面摩耗顕著。
129	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHN	外：橙 内：暗褐	B	頸～胴上片	内外面摩耗顕著。
130	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	B	頸～胴上片	
131	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	B	胴中～下片	内面やや摩耗。
132	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHN	外：暗褐 内：にぶい黄橙	B	胴中～下片	外面種子圧痕（イネ？）凹み有。
133	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中～下片	内面摩耗顕著。
134	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	胴中～下片	内外面やや摩耗。
135	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：黒褐 内：にぶい褐	B	胴中～下片	内面、外面下位摩耗顕著。No.135 同一個体。
136	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：暗褐 内：にぶい褐	B	胴中～下片	内面大半摩耗顕著。No.134 同一個体。
137	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	暗褐色	B	口～頸部片	
138	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄褐 内：黄灰	B	頸～胴上片	外面大半摩耗顕著。
139	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：黒褐 内：暗灰黄	B	頸～胴上片	内面やや摩耗。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
140	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHKN	外：灰黄褐 内：褐灰	B	胴中段片	
141	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	橙 色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
142	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	黒褐色	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
143	弥生土器 甕	-	-	-	AHIKN	外：黒 内：黒褐	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
144	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	外：橙 内：にぶい黄橙	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。No.146 同一個体。
145	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	B	胴上～下片	内外面摩耗顕著。No.145 同一個体。
146	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIN	にぶい黄色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
147	弥生土器 甕	-	-	-	ABDEHIKN	褐灰色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
148	弥生土器 甕	-	-	-	ACDHIKN	外：灰黄褐 内：黒	B	口～頸部片	外面やや摩耗。
149	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	B	頸～胴上片	内面大半摩耗顕著。
150	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHIKN	外：にぶい黄橙 内：灰褐	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
151	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：褐灰 内：にぶい黄橙	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
152	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIN	外：暗褐 内：灰黄褐	B	口～頸部片	
153	弥生土器 甕	-	-	-	ADHN	黒褐色	B	胴下部片	内面摩耗顕著。
154	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	胴下部片	内外面やや摩耗。
155	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIK	外：褐灰 内：暗灰	B	胴下部片	外面大半摩耗顕著。
156	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。内外面赤彩、ほぼ剥落。
157	弥生土器 高坏	-	-	-	ABHKN	にぶい赤褐色	B	口縁部片	内外面赤彩。
158	弥生土器 高坏	-	-	-	ABHKN	赤 色	B	口～坏部片	内外面赤彩。
159	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDHIKN	外：赤褐 内：浅黄橙	B	口～坏部片	内外面赤彩、外面大半剥落。焼成前穿孔有。
160	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～坏部片	内外面摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。二個一対焼成前穿孔有。
161	弥生土器 筒形	-	-	-	ABHIK	灰黄褐色	B	口～頸部片	
162	弥生土器 筒形	-	-	-	AHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
163	弥生土器 鉢	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	外面摩耗顕著。
164	縄文土器浅鉢	-	-	-	ABDHIKN	外：浅黄橙 内：黒褐	B	口～体部片	晩期末。内面やや摩耗。
165	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	後期前。内外面摩耗顕著。
166	土製紡錘車	最大径 4.35 cm、最大厚 1.3 cm、孔径 0.65 cm。			胎土：ABHIKN。				重量 20.6 g。完形。
167	磨製石剣	最大長 7.8 cm、最大幅 2.2 cm、最大厚 0.7 cm。							重量 16.6 g。ほぼ完形。緑色岩。
168	磨製石鏃	最大長 (5.5) cm、最大幅 2.25 cm、最大厚 0.45 cm。							重量 (6.9) g。刃先欠。片岩。
169	磨製石鏃	最大長 4.75 cm、最大幅 2.65 cm、最大厚 0.32 cm。							重量 (5.2) g。所々欠。粘板岩。
170	打製石斧	最大長 (18.1) cm、最大幅 (12.65) cm、最大厚 3.8 cm。							重量 (927.5) g。刃部欠。粘板岩。
171	搔器	最大長 4.6 cm、最大幅 5.65 cm、最大厚 1.15 cm。							重量 35 g。完形。粘板岩。
172	搔器	最大長 5.8 cm、最大幅 4.75 cm、最大厚 0.95 cm。							重量 31 g。完形。粘板岩。
173	搔器	最大長 5 cm、最大幅 5.3 cm、最大厚 1.3 cm。							重量 34.5 g。完形。粘板岩。
174	磨石	最大長 11.05 cm、最大幅 (9.35) cm、最大厚 7.35 cm。							重量 (1,040) g。表面大半剥離。粘板岩。
175	磨石	最大長 11.95 cm、最大幅 6.3 cm、最大厚 1.85 cm。							重量 (153) g。ほぼ完形。砂岩。
176	磨石	最大長 9.9 cm、最大幅 6.75 cm、最大厚 1.35 cm。							重量 (116.3) g。所々欠。砂岩。
177	磨石	最大長 8.1 cm、最大幅 6.2 cm、最大厚 1.35 cm。							重量 86.8 g。完形。砂岩。被熱。
178	磨石	最大長 8.4 cm、最大幅 4.95 cm、最大厚 1.3 cm。							重量 70.9 g。完形。砂岩。
179	磨石	最大長 5.6 cm、最大幅 6.4 cm、最大厚 1 cm。							重量 49.9 g。完形。砂岩。
180	磨石	最大長 8.0 cm、最大幅 (5.4) cm、最大厚 0.85 cm。							重量 (40) g。片隅付近欠。砂岩。被熱。
181	磨石	最大長 8.15 cm、最大幅 4.2 cm、最大厚 1.45 cm。							重量 54.5 g。完形。砂岩。
182	磨石	最大長 5.85 cm、最大幅 3.45 cm、最大厚 0.85 cm。							重量 21.6 g。完形。泥岩。
183	磨石	最大長 5.15 cm、最大幅 3.8 cm、最大厚 1.1 cm。							重量 32.3 g。完形。石英閃緑岩。
184	磨石	最大長 7.65 cm、最大幅 4.2 cm、最大厚 0.85 cm。							重量 39.8 g。完形。緑泥片岩。
185	砥石	最大長 (11.15) cm、最大幅 (14) cm、最大厚 (5.7) cm。							重量 (1,150) g。大半欠。粘板岩。被熱。
186	砥石	最大長 (6.65) cm、最大幅 (8.4) cm、最大厚 (3.75) cm。							重量 (292.5) g。約 1/3 欠。砂岩。被熱。

167～185は、石器・石製品である。167は、緑色岩製の短い磨製石剣である。基部に剥離痕などがみられたが、ほぼ完形に近い。全面丁寧に研磨されており、鏑は片面のみみられた。刃先は、刃こぼれが生じている。168・169は、磨製石鏃である。168は片岩、169は粘板岩製である。168は刃先、169は所々を欠くが、長さは5cm前後を測り、石鏃としては、やや大型の部類に入る。扁平で、刃先の形状が異なるが、いずれも基部を持つ。研磨は、168がやや煩雑であるが、169は刃先付近を中心に密に施されている。170は、粘板岩製の打製石斧である。刃部を欠くが、大型の部類に入る。片面に自然面が残り、剥離を加えた面が反っている。171～173は、粘板岩製の搔器である。すべて完形品であり、円形に近い。174～184は、磨石である。石材、大きさ、形態にバラエティがみられる。剥離や一部欠損するものもあるが、完形品が多い。石材は、174が粘板岩、175～181は砂岩、182は泥岩、183は石英閃緑岩、184は緑泥片岩である。大きさは、174・175がやや大きい。形態は、174のみ球形、その他は扁平で楕円形を呈するものが多い。174は、平滑でやや光沢を帯びている部分がみられた。177・

180は、被熱している。185・186は、砥石である。石材は、185が粘板岩、186は砂岩である。いずれも欠損しており、被熱している。

流れ込みの164は縄文土器、165は弥生時代後期前半の壺である。164は、晩期末の浮線文土器の浅鉢である。口縁部から体部までの破片である。口縁部外面に眼鏡状の浮線文が巡る。調整は、内外面ともにヘラミガキであり、外面は横位、内面は横・斜位に施されている。165は、壺の口縁部から頸部までの破片である。複合口縁端部内側に斜位の刻みが施されており、その他は無文である。調整は、外面が不明、内面は横位のヘラミガキである。胎土がやや粗い。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第8号住居跡（第49図）

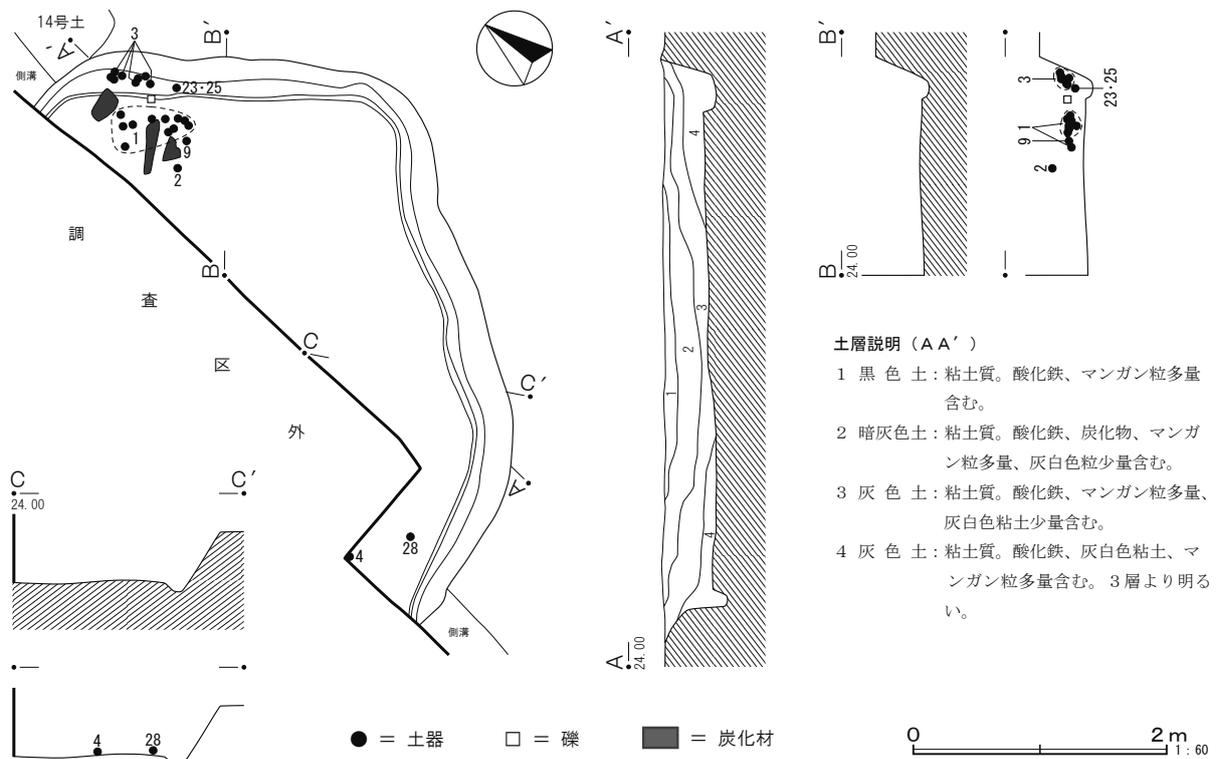
第3区（2014（平成26）年度第1次調査第3区）127－151・152グリッドに位置する。北側で第14号土坑と若干重複するが、新旧関係は不明である。西側半分が調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、長軸は推定6m、短軸は5m程を測ると思われる。平面プランは、横長のいびつな隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－39°－Wを指す。確認面からの深さは、最大0.62mを測る。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。掘り方は、みられなかった。覆土は、4層（1～4層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。北壁付近の床面直上では、遺物に混じって炭化材が3箇所確認された。

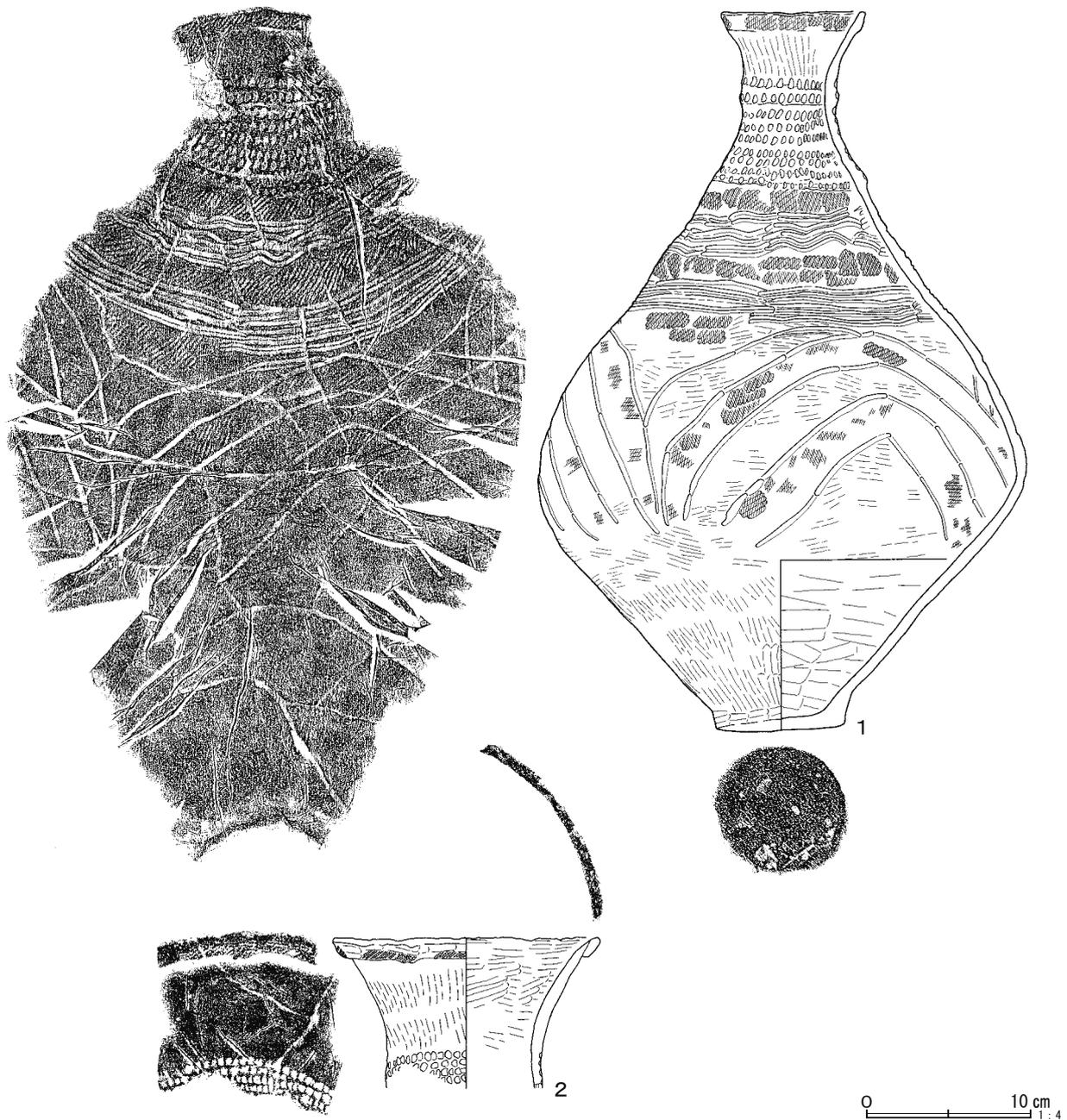
壁溝は、検出された範囲内を全周する。幅は0.25m前後を測り、床面からの深さは、0.09～0.17mとやや幅がみられた。

ピット・炉跡・貯蔵穴は、確認されなかった。

本住居跡は、他の住居跡に比べると量は少ないが、残存状態の比較的良好な土器が出土した。図示



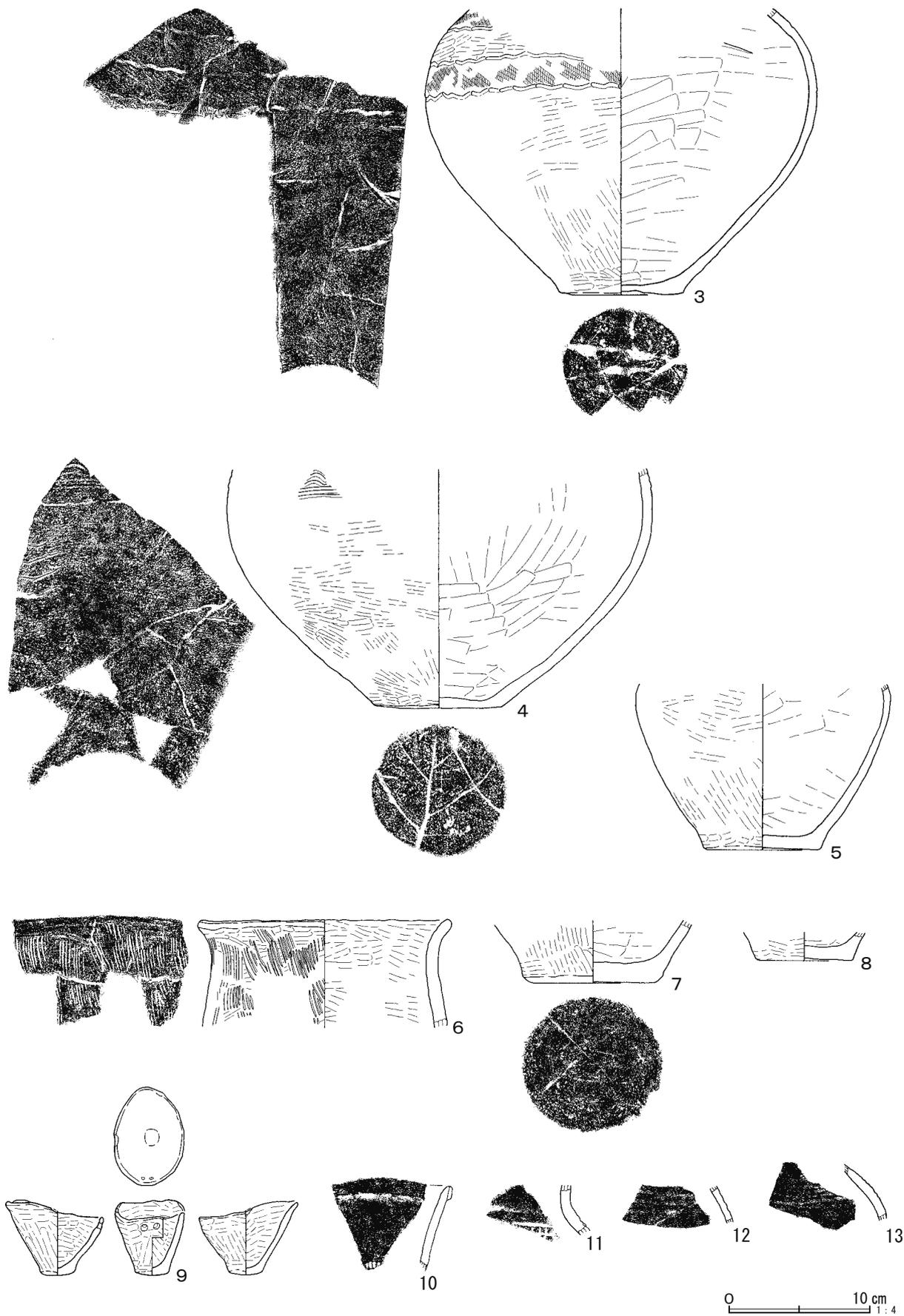
第49図 第8号住居跡



第50図 第8号住居跡出土遺物(1)

可能な遺物は、土器のみである。出土土器(第50～52図)は、弥生土器壺(1～5・10～22)、甕(6～8・23～32)、高坏(33)、片口(9)がある。出土位置を図示した土器は、南北壁の隅付近の床面直上付近から出土した。出土位置を図示した土器以外は、覆土から出土した。

1～5・10～22は、壺である。1は、ほぼ完形の比較的大型の壺である。肥厚した口縁部がやや受け口状を呈し、すぼまる頸部はほぼ直立し、中段付近に低い突帯状を呈する段を持つ。頸部以下は、胴部中段までハの字状に広がるが、肩部上位に段を持ち、胴上部との境付近がややすぼまる。胴部はやや算盤玉形を呈し、中段付近に最大径を持つ。底部は、円柱状を呈する。外面の文様は、口縁部に無節Lが施文され、以下は無文である。段を持つ頸部から肩部上位までは、半円形の刺突列が9列巡る。肩部上位にある段下は、2本一単位の楕歯状工具による波状文が3条、同一工具による直線文とヘラ



第 51 图 第 8 号住居跡出土遺物 (2)

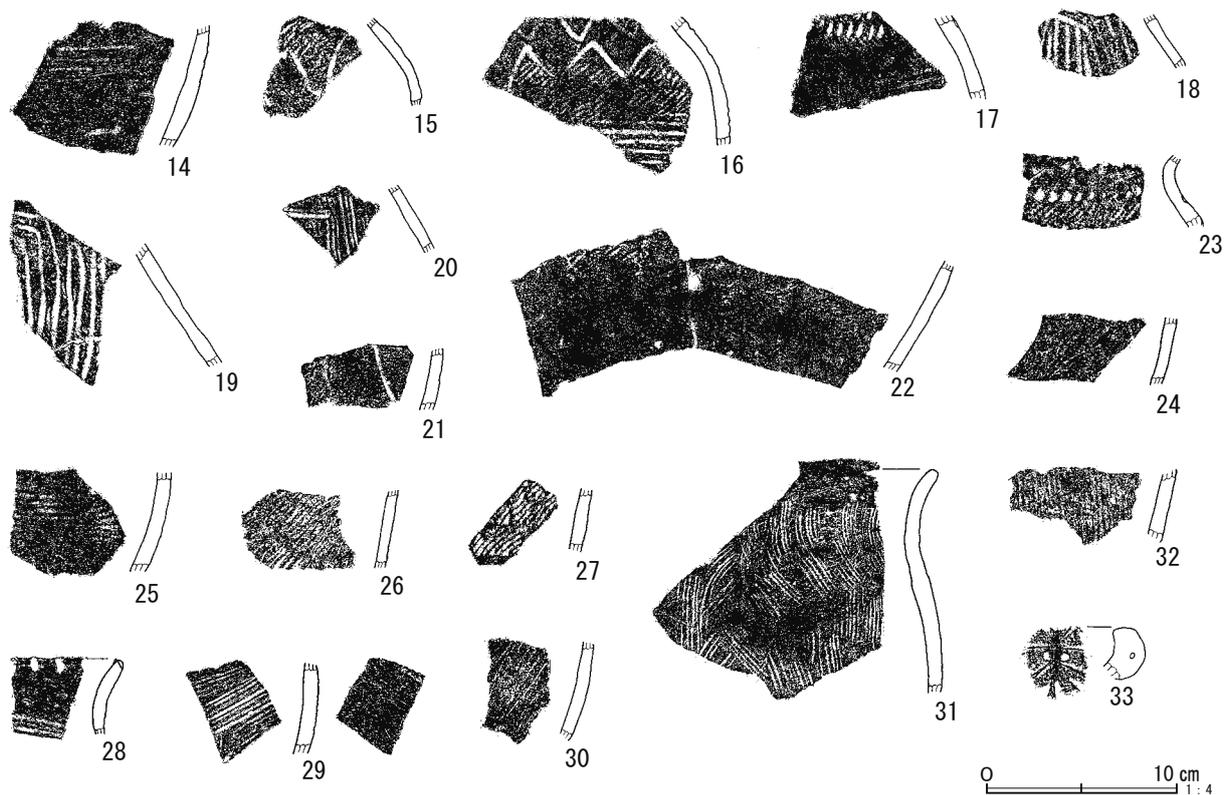
描きの平行沈線を一部混ぜた4～5条が間隔を空けて横位に巡り、間に無節Lが充填されている。以下は、胴部中段下までへらで大振りの連弧文が描かれており、間に無節Lを充填する部分と無文部を交互に配置している。連弧文間に充填された縄文は、摩耗が著しいため部分的な図示であるが、本来は区画内全面に施文されている。調整は、頸部と胴上部以下の外面無文部がへらミガキ、内面は、図示していない口縁部が横・斜位、頸部は斜位のへらミガキであり、胴上部以下はへらナデである。底面に種子圧痕と思われる凹みが複数みられた。2は、口縁部から頸部までの部位である。残存状態が比較的良好である。複合口縁部がやや外反しながら開き、すばまる頸部がほぼ直立する。外面の文様は、複合口縁端部と口縁部下位にLR単節縄文が施文されており、以下は無文である。頸部は、半円形の刺突列が4列以上横位に巡る。外面無文部と内面の調整は、すべてへらミガキである。複合口縁部外面上位の無文部は、LR単節縄文を施文した後にへらミガキが施されている。3は、胴上部から底部までの部位である。胴部が球形を呈し、中段よりやや上に最大径を持つ。外面の文様は、胴上部から中段よりやや上にへら描きによる横位の波状文2条間に無節Rが充填された文様帯が間隔を空けて2段巡る。調整は、胴上部と下部の外面無文部がへらミガキ、内面はへらナデである。底面に木葉痕がみられた。4・5は、胴部中段付近から底部までの部位である。4は、胴部が球形を呈し、最大径を中段付近に持つと思われる。残存状態が良くないため、外面の文様は一部のみの確認であるが、胴部中段より上に3本一単位の櫛歯状工具による波状文と直線文が横位に巡る。調整は、胴下部外面の無文部がへらミガキ、内面はへらナデである。底面に木葉痕がみられた。5は、胴部が倒卵形を呈すると思われ、底部はやや円柱状を呈する。外面全面無文である。調整は、外面がへらミガキ、内面はへらナデである。

10は、口縁部から頸部までの破片である。複合口縁部外面にLR単節縄文か無節Lが施文され、以下は無文である。頸部下位に爪形の刺突列が2列以上巡る。頸部外面無文部と内面の調整は、不明である。胎土がやや粗い。

11～14は、外面にへら描きの平行沈線が巡る破片である。11は頸部から肩部まで、12・13は胴上部、14は胴部中段から下部までの破片である。11は、肩部に平行沈線が2条以上巡り、間に爪形の刺突列が巡る。肩部以下は、地文にLR単節縄文が施文されている。頸部は、無文である。12～14は、平行沈線が12は上位に3条、13は中段に5条、14は上位に4条巡る。13は、平行沈線下にRL単節縄文が施文されている。12・14の下位、13の上位は、無文と思われる。調整は、11の頸部外面無文部が斜位、内面は横位のへらミガキである。12～14の外面無文部と内面は、不明である。12は、胎土がやや粗い。

15・16は、外面にへら描きの大振りな山形文が横位に巡る破片であり、胴上部から中段までに収まる。15は、山形文上に無節Lが施文され、以下は無文である。16は、上位に山形文が2条巡り、下位の山形文と胴部中段に巡るへら描きによる5条以上の平行沈線間に無節Lが充填されている。調整は、16の山形文が巡る外面上位が横位のへらミガキ、15の外面無文部と内面、16の内面は不明である。15は、胎土がやや粗い。

17～20は、外面に重四角文が描かれた破片であり、肩部から胴上部までに収まる。重四角文は、17～19がへら、20は2本一単位の櫛歯状工具で描かれている。17は、地文に無節Rが施文されており、重四角文上に爪形の刺突列が2列巡る。18は、重四角文としたが、崩れており、異なる可能性も



第52図 第8号住居跡出土遺物(3)

ある。19は、やや太い沈線で描かれている。20は、重四角文内に同一工具による波状文が1条垂下する。19・20は、地文に縄文が施文されているか不明である。内面調整は、17が横・斜位のヘラナデ、19は横・斜位のヘラミガキ、18・20は不明である。18は、胎土がやや粗い。

21は、外面にヘラ描きの連弧文が横位に巡る胴部中段の破片である。連弧文間に無節Rを充填する部分と無文部を交互に配置している。調整は、外面無文部が不明、内面は横位のヘラミガキである。

22は、胴下部片である。上位にLR単節縄文が施文され、下位は無文である。調整は、外面無文部が斜位、内面は横位のヘラミガキである。

6～8・23～32は、甕である。6は、口縁部から胴部中段付近までの部位である。破片31と同一個体である。短い口縁部が逆ハの字に開き、頸部はすぼまる。胴部は、緩やかに膨らむ。外面の文様は、頸部以下に6本一単位の櫛歯状工具による直線文や弧線文、斜線文が複数垂下する。外面無文部と内面の調整は、ヘラミガキである。7・8は、胴下部から底部までに収まる部位である。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。7は、底面に木葉痕とヘラ描きの×印がみられた。

23～27は、外面に縄文が施文された破片である。23～25はLR単節縄文、26・27は無節Lである。LR単節縄文が施文された23～25は、23が頸部から胴上部まで、24・25が胴部中段から下部までの破片である。縄文は、23が胴上部、24・25は外面全面に施文されている。23は、頸部が無文であり、胴上部の縄文上に半円形の刺突列が1列巡る。調整は、24の内面が不明であるが、23の頸部外面無文部と内面、25の内面は横位のヘラミガキである。無節Lが施文された26・27は、胴部中段から下部までの破片である。縄文は、いずれも外面全面に施文されている。内面調整は、26が横位のヘラミガキ、27は不明である。

第9表 第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	8.8	44.1	7.7	ABDHIKN	黒 灰白	B	ほぼ完形	内外面摩耗顕著。底面種子圧痕?凹み複数有。
2	弥生土器 壺	(16.2)	(9.25)	-	ABCHIKN	浅黄橙 黒	B	口~頸80%	内外面摩耗顕著。
3	弥生土器 壺	-	(20.35)	8.7	ABDHIKN	黄灰 黒	B	胴~底40%	内外面摩耗顕著。
4	弥生土器 壺	-	(17.15)	(9.0)	ABDHIKN	浅黄橙 黒褐	B	胴~底30%	内外面摩耗顕著。
5	弥生土器 壺	-	(11.85)	8.3	ABEHIKN	橙 黒	B	胴~底30%	内外面摩耗顕著。
6	弥生土器 甗	(18.0)	(7.75)	-	ABHIKN	黒褐色	B	口~胴20%	内面全面、外面所々摩耗顕著。No.31同一個体。
7	弥生土器 甗	-	(4.5)	9.9	ABCDHIKN	外:にぶい黄橙 内:褐灰	B	胴~底70%	内面摩耗顕著、外面やや摩耗。底面×印有。
8	弥生土器 甗	-	(2.05)	(6.8)	ABDHIKN	灰黄色	B	底部45%	内外面摩耗顕著。
9	弥生土器 片口	7.0	5.4	2.4	ABDHIKN	灰黄 黒	B	ほぼ完形	内外面摩耗顕著。二個一対焼成前穿孔有。
10	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	黄灰色	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
11	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIN	外:黒褐 内:浅黄	B	頸~肩部片	内面摩耗顕著。
12	弥生土器 壺	-	-	-	AHIKN	黒色	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
13	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	にぶい黄橙 黄灰	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
14	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外:灰黄 内:黄灰	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
15	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外:黒褐 内:浅黄橙	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
16	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外:浅黄 内:黄灰	B	胴上~中片	内面摩耗顕著。
17	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	外:黒褐 内:黒	B	胴上部片	
18	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外:灰黄 内:黒褐	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
19	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外:淡黄 内:黄灰	B	肩~胴上片	内外面大半摩耗顕著。
20	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外:黒褐 内:にぶい黄橙	B	肩部片	内外面摩耗顕著。
21	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外:灰黄 内:暗灰	B	胴中段片	内外面摩耗顕著。
22	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	黒褐色	B	胴下部片	内外面大半摩耗顕著。
23	弥生土器 甗	-	-	-	ABCDHIKN	外:暗褐 内:浅黄	B	頸~胴上片	内外面やや摩耗。
24	弥生土器 甗	-	-	-	ABCHIKN	外:にぶい黄橙 内:暗灰黄	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
25	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIKN	外:黒褐 内:灰褐	B	胴中~下片	外面摩耗顕著。
26	弥生土器 甗	-	-	-	AHIKN	黒褐色	B	胴中~下片	内外面大半摩耗顕著。
27	弥生土器 甗	-	-	-	ABCDHIKN	灰黄褐色	B	胴中~下片	内面摩耗顕著。
28	弥生土器 甗	-	-	-	ADHIKN	外:にぶい黄褐 内:灰白	B	口~頸部片	内外面摩耗顕著。
29	弥生土器 甗	-	-	-	ABHIKN	外:黒褐 内:にぶい黄橙	B	胴中段片	内外面一部摩耗顕著。
30	弥生土器 甗	-	-	-	ABCHIKN	外:にぶい褐 内:黒褐	B	胴中~下片	内外面摩耗顕著。
31	弥生土器 甗	-	-	-	AHIKN	黒褐色	B	口~胴中片	No.6同一個体。
32	弥生土器 甗	-	-	-	ABEHIN	外:にぶい赤褐 内:にぶい黄橙	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
33	弥生土器 高坏	-	-	-	ABEHIKN	にぶい橙色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。突起側面焼成前穿孔有。

28～32は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた破片である。28～30は、中部高地栗林式系である。28は、口縁部から頸部までの破片である。頸部外面に簾状文が横位に巡る。櫛歯の数は、3本以上である。簾状文以外の外面文様は、口縁端部に刻みが施されている。口縁部の外面無文部と内面の調整は、不明である。胎土が粗い。29は、外面に縦位の羽状文が描かれた胴部中段の破片である。櫛歯の数は、7本である。内面調整は、斜位のハケメ後、下位に横位のへらミガキが施されている。30は、外面に横位の羽状文が描かれた胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、不明である。調整は、外面下位の無文部が横位のへらミガキ、内面は不明である。31は、口縁部から胴部中段までの破片である。文様・調整は、同一個体の6と同じである。32は、外面に単位不明の直線文が複数垂下する胴下部片である。内面調整は、不明である。32は、胎土がやや粗い。

33は、中部高地栗林式系の高坏の口縁部片である。外面にやや縦長の突起が付き、側面に小さい焼成前穿孔がみられた。調整は、不明である。

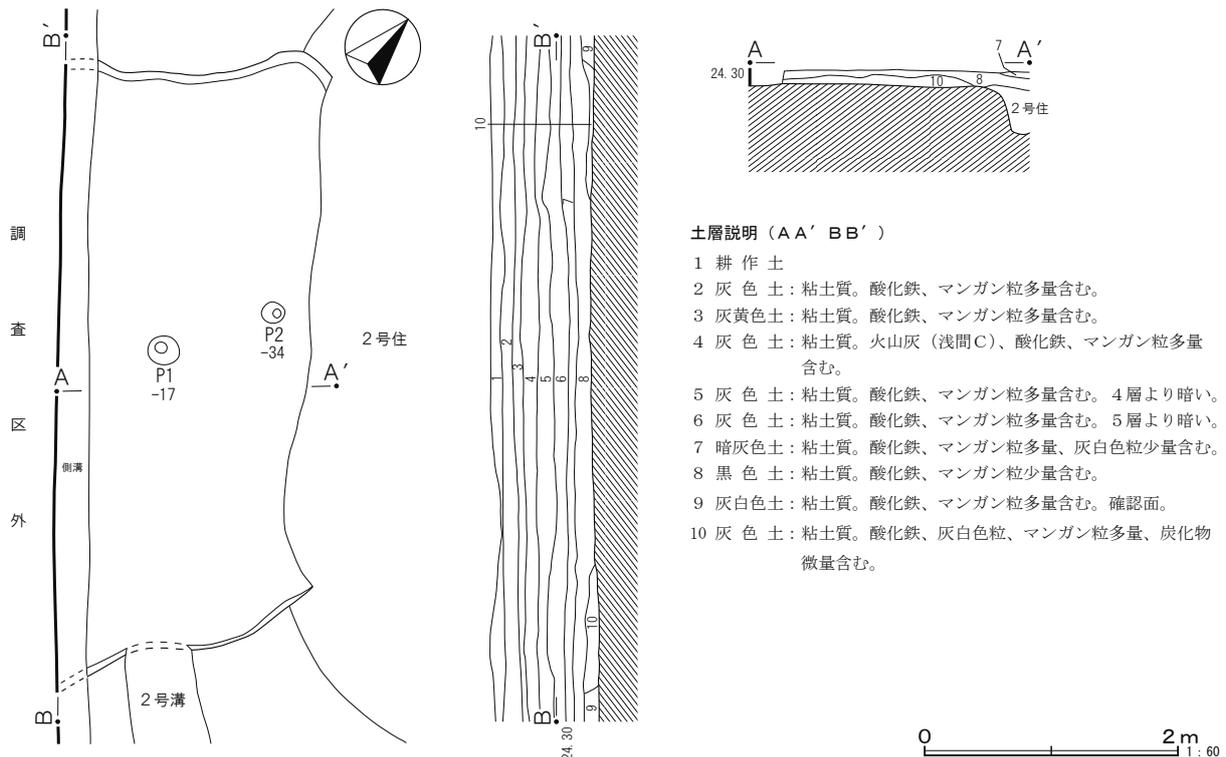
9は、小型の片口である。ほぼ完形品である。片口対面の口縁部に二個一対の焼成前穿孔がみられた。調整は、内外面ともにへらミガキである。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

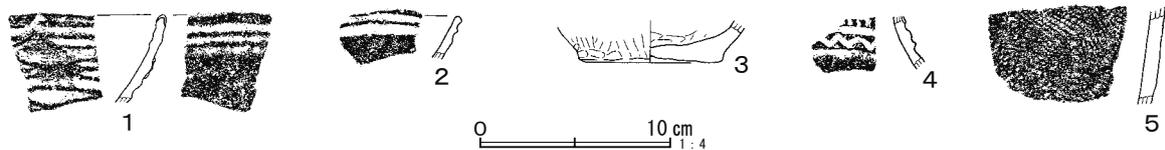
2 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構(第53図)

第1区(2009(平成21)年度第2次調査)143・144-152・153グリッドに位置する。東側で第2



第53図 第1号竪穴状遺構



第54図 第1号竪穴状遺構出土遺物

第10表 第1号竪穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABEHIKNO	外：浅黄橙 内：黒褐	B	口～体部片	晩期末。内外面摩耗顕著。
2	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABDHIKN	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	B	口～体部片	晩期末。内外面摩耗顕著。
3	弥生土器 壺	-	(2.2)	(7.5)	ABCDIKN	にぶい黄橙色	B	底部40%	中期後。
4	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDIN	浅黄橙色	B	肩部片	中期後。内外面摩耗顕著。
5	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐 内：黒褐	B	胴中～下片	中期後。外面摩耗顕著。

号住居跡、南側で第2号溝跡と重複しており、両遺構との新旧関係は明確にできなかったが、本遺構が第2号住居跡より新しいと思われる。西側は、調査区外にある。

本遺構は、規模・平面プランが住居跡に似るが、浅くて住居とは言い難い構造であることから竪穴状遺構とした。正確な規模は不明であるが、検出された南北は4.54m、東西は2m程である。平面プランは、いびつな方形ないし長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.13mと浅い。底面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は、2層（8・10層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

底面中央付近では、ピットが2基確認された。覆土は図示できなかったが、いずれも柱痕跡は確認されなかった。径が小さく、深さにバラツキがある。単独ピットの可能性もある。

出土遺物（第54図）は、縄文時代晩期末の浅鉢（1・2）、弥生時代中期後半の壺（3・4）、甕（5）があるが、いずれも流れ込みと思われる。すべて覆土から出土した。この他にも古墳時代後期の土師

器坏蓋模倣坏小片が出土したが、図示不可能であった。

1・2は、浮線文土器浅鉢の口縁部から体部までの破片である。1は、外面に網目状ないし眼鏡状の浮線文が巡り、口縁部内面に平行沈線が3条巡る。2は、外面に平行の浮線文が巡る。1の内面、2の体部外面無文部と内面の調整は、横位のヘラミガキである。1は、胎土がやや粗く、金雲母を含む。3は、やや円柱状を呈する壺の底部である。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。甕の可能性もある。4は、中部高地栗林式系の壺の肩部片である。外面は、爪形の刺突列下にヘラ描きの太い平行沈線が2条、間に波状文が1条巡り、以下は無文である。調整は、外面下位の無文部が縦位、内面は横・斜位のヘラミガキである。5は、外面全面にRL単節縄文が施文された胴部中段から下部までの破片である。内面調整は、横位のヘラミガキである。

出土遺物で伴うものは、図示不可能であった古墳時代後期の土師器と思われる。従って、本遺構の時期は、重複する第2号溝跡と前後関係のある古墳時代後期としておきたい。

3 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第55図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）145・146－150グリッドに位置する。本建物跡のピット1が東側で単独ピット1を切っている。本建物跡の内側には、単独ピット2～4、外側には単独ピット5・17が位置するが、新旧関係及び本建物跡に関連するか不明である。

1×1間の建物跡であるが、西側は調査区外に延びる可能性がある。ピットは、4基検出された。柱間は、2.1mを測る。ピット1・2は、長軸0.7m、短軸0.6m前後の楕円形、ピット3・4は、径0.5m程の円形を呈する。確認面からの深さは、すべて0.3m程である。ピット2は、覆土に柱痕跡らしき層が確認されたが、その他では柱痕跡は確認されなかった。

出土遺物はないが、本建物跡の時期は、覆土の内容や過去に実施した未報告の北側調査区の成果などから古墳時代後期と思われる。

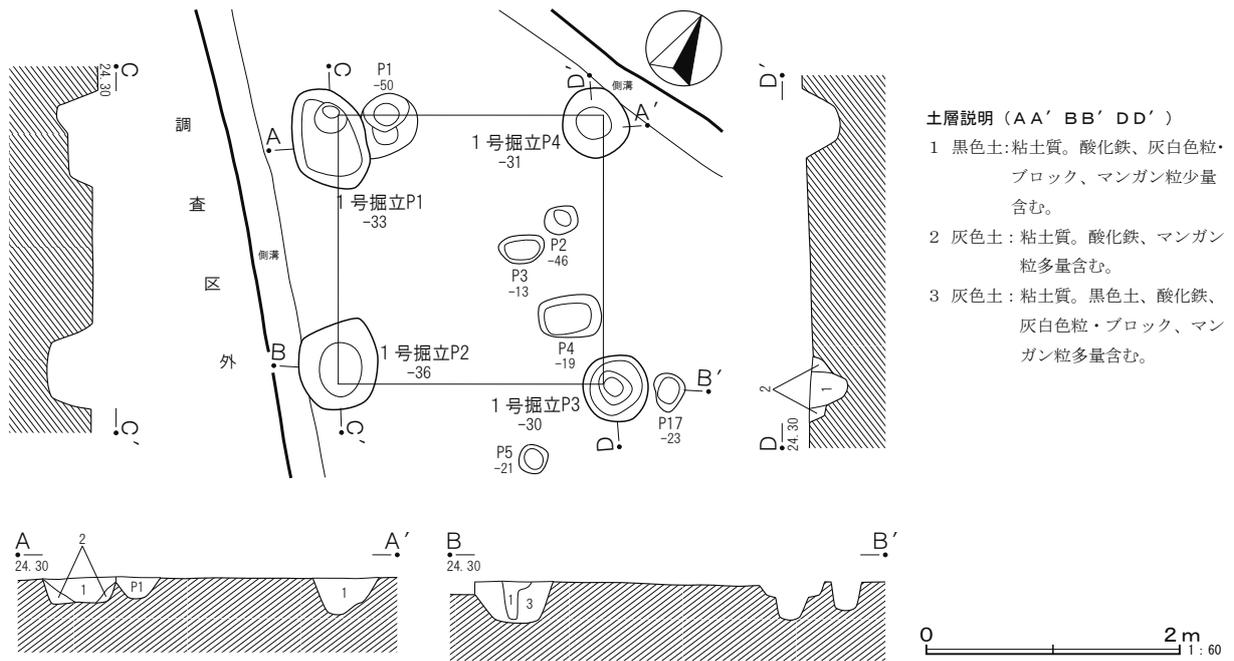
4 柵列跡

第1号柵列跡（第56図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）145・146－150・151グリッドに位置する。北西端のピット1は、西側で単独ピット6と重複するが、新旧関係は不明である。ピット3付近に位置する第1号溝跡と第3号土坑は、直接的な切り合い関係にないため新旧関係は不明である。また、ピット3・4間には、単独ピット33～37が位置するが、新旧関係及び本柵列跡に関連するか不明である。本柵列跡のすぐ北西には、ほぼ軸の揃う第1号掘立柱建物跡が位置する。

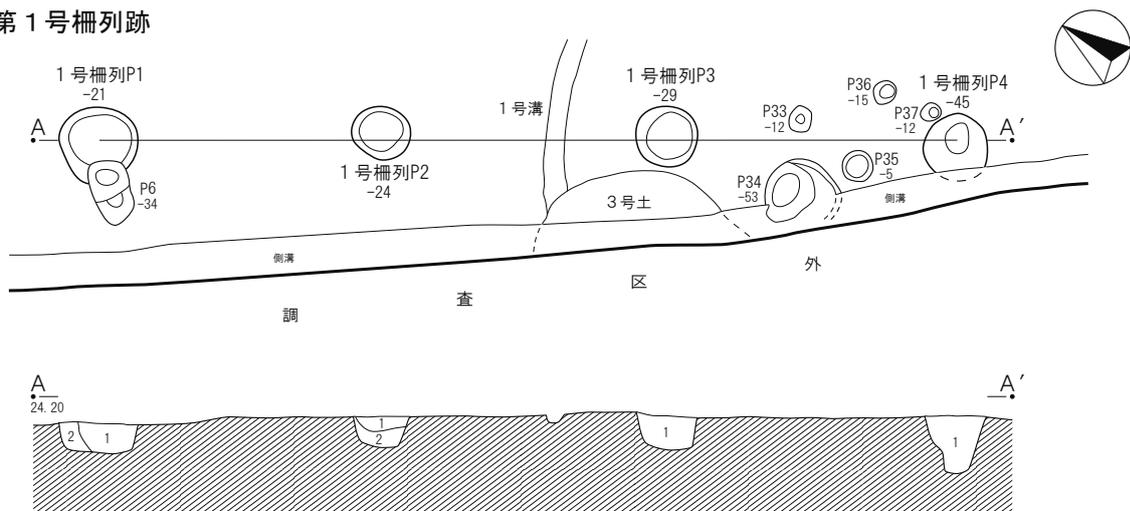
ピットは、4基確認された。径0.5m前後を測り、平面プランは、円形を呈する。確認面からの深さは、ピット4が0.45mで最も深く、その他は0.25m前後である。柱間は、2.1m程で等間隔に並ぶ。いずれのピットも柱痕跡は確認されなかった。

出土遺物（第57図）は、弥生時代中期後半の壺（1）、甕（2・3）がある。1・2がピット1、3はピット2から出土した。ピット3・4では、弥生土器壺か甕の胴下部小片が計6点出土したが、図示不可

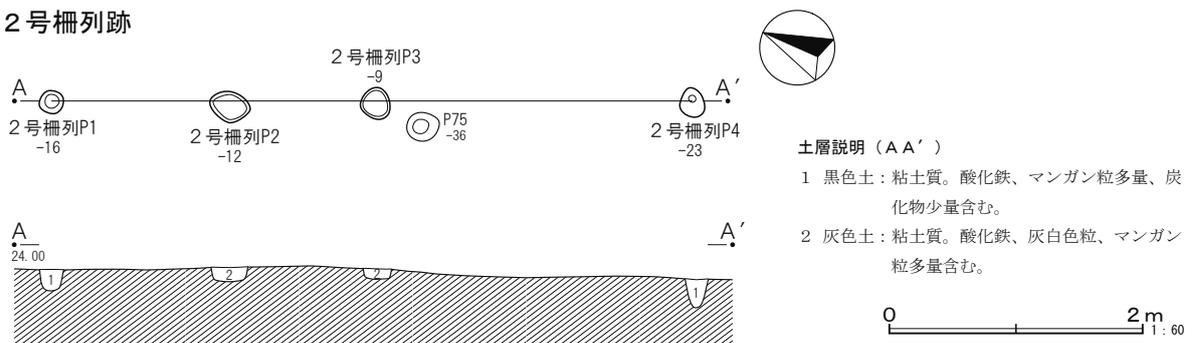


第55図 第1号掘立柱建物跡

第1号柵列跡



第2号柵列跡



第56図 第1・2号柵列跡



第 57 図 第 1 号柵列跡出土遺物

第 11 表 第 1 号柵列跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKM	外：灰黄褐 内：黒褐	B	肩部片	中期後。内面摩耗顕著。P1 出土。
2	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：浅黄橙 内：褐灰	B	口縁部片	中期後。外面摩耗顕著。P1 出土。
3	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴中～下片	中期後。内外面摩耗顕著。P2 出土。

能であった。すべて流れ込みと思われる。

1 は、壺の肩部片である。外面は、5 本一単位の櫛歯状工具による山形文 2 条の上に半円形の刺突列が巡る。以下は、LR 単節縄文が施文されている。内面調整は、不明である。2 は、甕の口縁部片である。口縁端部に LR 単節縄文か無節 L が施文されている。口縁部外面無文部の調整は不明であるが、内面は横位のヘラミガキである。3 は、甕の胴部中段から下部までの破片である。外面全面に LR 単節縄文が施文されている。内面調整は、不明である。

出土遺物に伴うものはないが、本柵列跡の時期は、覆土の内容や北西に位置する第 1 号掘立柱建物跡とほぼ軸が揃うことから古墳時代後期と思われる。

第 2 号柵列跡 (第 56 図)

第 3 区 (2014 (平成 26) 年度第 1 次調査第 3 区) 126・127 - 150・151 グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、ピット 3 南西に単独ピット 75 が位置している。新旧関係及び本柵列跡に関連するか不明である。

ピットは、4 基確認された。ピット 1 は、径 0.2 m 前後の円形を呈するが、ピット 2～4 は、長軸 0.3 m、短軸 0.2 m 前後の楕円形を呈する。確認面からの深さは、ピット 3 が 0.09 m と浅いが、その他は 0.2 m 前後である。柱間は、一定しておらず、ピット 1・2 間は 1.3 m、ピット 2・3 間は 1.1 m、ピット 3・4 間は 2.4 m 程を測る。いずれのピットも柱痕跡は確認されなかった。

遺物は、ピット 2 から弥生土器壺か甕の胴下部小片 2 点が出土したが、図示不可能であった。流れ込みと思われる。

出土遺物に伴うものはないが、本柵列跡の時期は、覆土の内容や過去に実施した北側調査区の成果などから古墳時代後期と思われる。

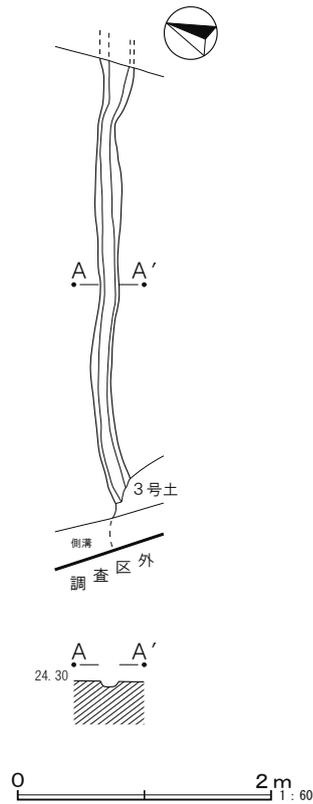
5 溝跡

第 1 号溝跡 (第 58 図)

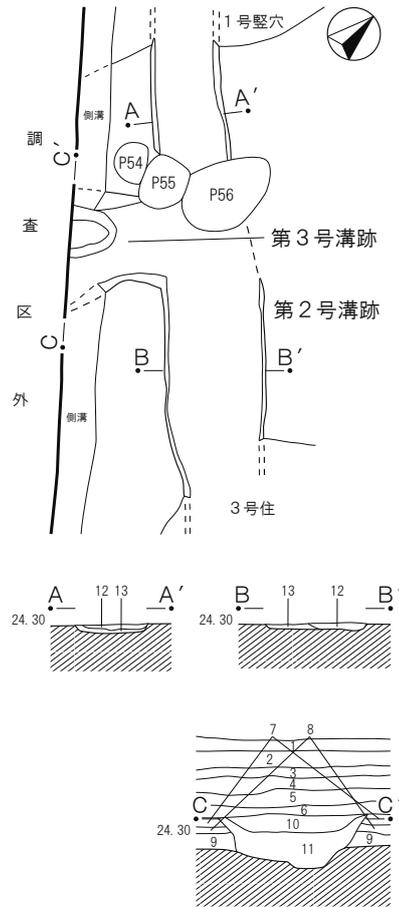
第 1 区 (2009 (平成 21) 年度第 2 次調査) 145 - 151 グリッドに位置する。南西の調査区境で第 3 号土坑に切られている。北東に位置する第 1 号住居跡とは、本溝跡が手前で途切れているため重複するか不明であるが、本溝跡が第 1 号住居跡より新しいことは確実である。また、本溝跡は、第 1 号柵列跡のピット 2・3 間に位置しているが、直接的な重複関係にないため新旧関係は不明である。

やや蛇行しながらほぼ東西方向に走る。正確な規模は不明であるが、検出された長さは、3.42 m である。幅は、概ね 0.2 m 前後を測る。確認面からの深さは、0.05 m 程と浅い。断面形は、逆台形状を

第1号溝跡



第2・3号溝跡



第2・3号溝跡

土層説明 (AA' BB' CC')

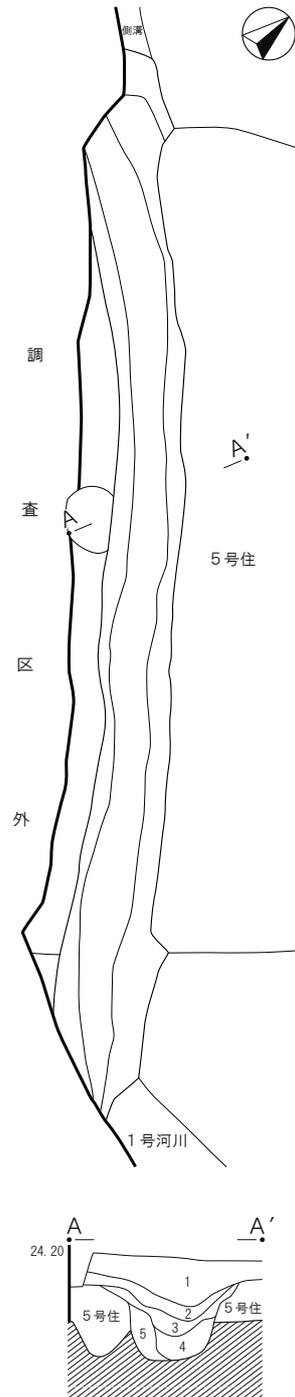
- 1 耕作土
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 3 灰黄色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 4 灰色土：粘土質。火山灰（浅間C）、酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。4層より暗い。
- 6 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。5層より暗い。
- 7 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。
- 8 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。7層より明るい。
- 9 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。確認面。
- 10 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 11 黒色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。
- 12 黒色土：粘土質。酸化鉄、灰白色土、マンガン粒少量含む。
- 13 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、黒色土少量含む。

第4号溝跡

土層説明 (AA')

- 1 黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 2 黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。1層より明るい。
- 3 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒多量、炭化物少量含む。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色シルト、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

第4号溝跡



第58図 第1～4号溝跡

呈する。覆土は図示できなかったが、黒色土による単一層であり、自然堆積と思われる。

出土遺物は、縄文時代晩期末の深鉢の口縁部から頸部までの破片（第59図1-1）のみである。肥厚した口縁部と頸部外面に条痕文が施文されている。条痕文は、口縁部が横位、頸部は斜位に施されている。胎土がやや粗い。弥生時代初頭の可能性もある。流れ込みと思われる。

出土遺物は伴わないが、本溝跡の時期は、ほぼ軸の揃う第1号掘立柱建物跡や第1号柵列跡と同じ

く古墳時代後期と思われる。ただし、第1号柵列跡とは、時期差を持つと思われる。

第2号溝跡（第58図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）143・144－153グリッドに位置する。多くの遺構と重複関係にある。北西部では、第1号竪穴状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。南東部で重複する第3号住居跡とは新旧関係を確認できなかったが、本溝跡が新しいと思われる。本溝跡中間付近は、一部途切れる部分もあるが、単独ピット54～56と第3号溝跡と重複しており、前者との新旧関係は不明であるが、後者とは本溝跡に直交して接続し、深さもほぼ同じであることから同時期と思われる。

北西から南東方向に走る。正確な規模は不明であり、検出された長さは3.65 mと短い。南東部は重複する第3号住居跡より新しいことからさらに延びるとと思われる。ただし、第3号住居跡の覆土断面では本溝跡の掘り込みが確認されなかったため、住居内西側で終息すると思われる。幅は、北西部が0.55 m、南東部が0.8 m前後を測り、北西部から南東部に向かって広くなる。確認面からの深さは、0.07 m程と浅い。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、2層（12・13層）確認された。ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は、弥生土器か古墳時代後期の土師器小片が3点出土したが、図示不可能であった。

出土遺物に時期を特定できるものはないが、本溝跡の時期は、重複する第3号溝跡と同じく古墳時代後期と思われる。

第3号溝跡（第58図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）143－153グリッドに位置する。北東部で同時期の第2号溝跡に接続し、同位置にある単独ピット54～56との新旧関係は、不明である。

北東から南西方向に走る。正確な規模は不明であり、検出された長さは0.73 mと短い。南西は調査区外に延びる。幅は、第2号溝との接続部付近が0.67 m、調査区境付近は0.98 mを測り、北東から南西に向かって広くなる。確認面からの深さは、0.23 m程と浅いが、調査区境での土層断面観察では0.47 mの掘り込みであったことが確認された。また、調査区境付近の底面では、ピット状に一段深い部分がみられた。底面からの深さは、0.05 mと浅い。断面形は、ピット状の掘り込み以外は概ね横長の逆台形状を呈する。覆土は、2層（10・11層）確認された。下層にブロックを多量含むが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、古墳時代後期の土師器有段口縁坏（第59図3－1）のみであるが、この他にも図示不可能な土師器坏蓋模倣坏、坏身模倣坏の小片が出土している。

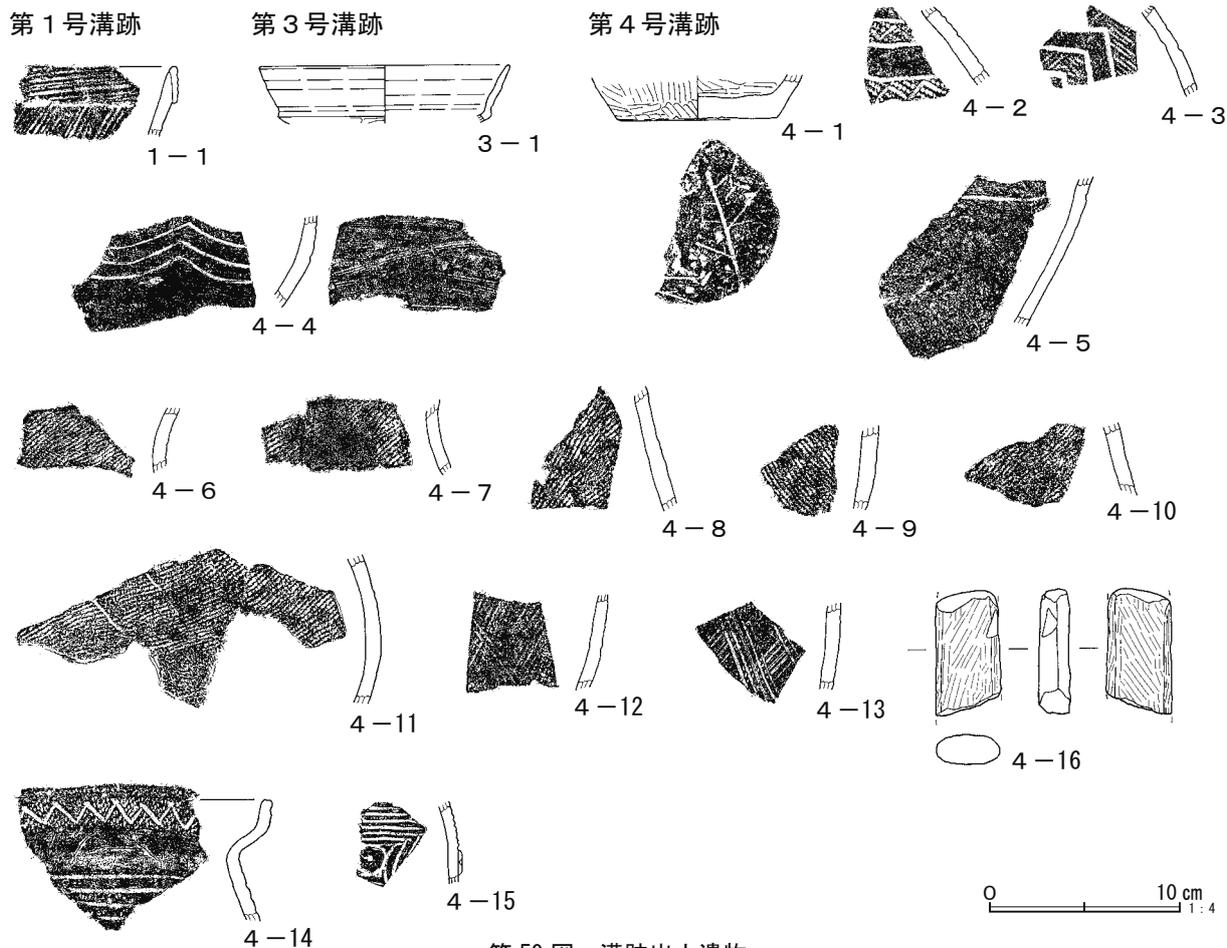
3－1は、内外面に段を持つ口縁部が逆ハの字に開き、体部と底部の境に稜を持つ。底部の大半を欠く。調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底面はヘラ削りである。

本溝跡の時期は、古墳時代後期と思われる。

第4号溝跡（第58図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）140・141－155・156グリッドに位置する。第5号住居跡中央付近を切っており、南東部は調査区境付近で第1号河川跡に接続する。

北西から南東方向に走る。北西部は、調査区外に延びる。正確な規模は不明であるが、検出された長さは7.79 m、上場の幅は1.1 m前後、確認面からの深さは、0.8 m程を測る。断面形は、中段より



第 59 図 溝跡出土遺物

第 12 表 溝跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1-1	第 1 号溝跡	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDEHIKN	にぶい褐色	B	口～頸部片	晩期末?内面やや摩耗。
3-1	第 3 号溝跡	土師器 坏	(13.2)	(3.05)	-	ABEHIKN	明赤褐色	B	30%	古墳後。内外面やや摩耗。
4-1	第 4 号溝跡	弥生土器 甕	-	(2.35)	(8.4)	ABEHIKN	灰黄色	B	底部 45%	中期後。底面種子圧痕?凹み複数有。
4-2	第 4 号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	外:橙 内:にぶい黄橙	B	胴上部片	中期後。内面やや摩耗。
4-3	第 4 号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗顕著。内面所々剥離。
4-4	第 4 号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外:黒褐 内:灰褐	B	胴中～下片	中期後。
4-5	第 4 号溝跡	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外:にぶい褐 内:黒	B	胴中～下片	中期後。内外面大半摩耗顕著。
4-6	第 4 号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	頸部片	中期後。内面大半摩耗顕著。No.4-7・8 同一。
4-7	第 4 号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外:暗褐 内:灰黄	B	頸部片	中期後。内面やや摩耗。No.4-6・7 同一個体。
4-8	第 4 号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIK	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙	B	胴上部片	中期後。No.4-6・7 同一個体。
4-9	第 4 号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外:にぶい黄橙 内:黄灰	B	胴中段片	中期後。内面やや摩耗。
4-10	第 4 号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外:にぶい黄橙 内:黄灰	B	胴上部片	中期後。外面摩耗顕著。
4-11	第 4 号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	AHIKN	黒褐色	B	胴中段片	中期後。
4-12	第 4 号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	中期後。内外面やや摩耗。
4-13	第 4 号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	外:黒褐 内:にぶい褐	B	胴中段片	中期後。内面大半摩耗顕著。
4-14	第 4 号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外:にぶい黄橙 内:にぶい橙	B	口～胴上片	中期後。内外面摩耗顕著。
4-15	第 4 号溝跡	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	黒褐色	B	胴上～中片	中期後。内面やや摩耗。
4-16	第 4 号溝跡	磨石	最大長 (6.55) cm、最大幅 3.45 cm、最大厚 1.7 cm。重量 (70.6) g。両端欠。片岩。							

やや上にある段までが逆ハの字、以下は逆台形状を呈する。覆土は、5層（1～5層）確認された。炭化物を少量含む層が多くみられたが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第 59 図）は、弥生時代中期後半の壺（4-2～5）、甕（4-1・6～15）、磨石（4-16）があるが、すべて重複する第 5 号住居跡からの流れ込みと思われる。

4-2～5 は、壺である。4-2・3 は、胴上部片である。2・4 は、中部高地栗林式系である。外面にヘラ描きの平行沈線 2 条間に山形文と R L 単節縄文を充填した文様帯が間隔を空けて 2 段巡る。

4-3は、ヘラで描かれた重四角文内にLR単節縄文を充填する部分と無文部を交互に配置している。4-4・5は、胴部中段から下部までの破片である。外面の文様は、上位に4-4がヘラ描きの連弧文、4-5は平行沈線が巡る。下位は、無文である。調整は、4-2の外面無文部と内面が横・斜位のヘラミガキ、4-4は胴下部外面無文部が横位のハケメ後に所々を横位のヘラミガキ、内面は横・斜位のハケメ、4-5は胴下部外面無文部上位が縦位、下位は斜位、内面は横・斜位のヘラミガキである。4-3の外面無文部と内面は、不明である。

4-1・6～15は、甕である。4-1は、底部である。調整は、内外面ともにヘラミガキである。底面に木葉痕と種子圧痕と思われる複数の凹みがみられた。壺の可能性もある。4-6～11は、外面に縄文が施文された破片である。4-6・7は頸部、4-8・10は胴上部、4-9・11は胴部中段の破片である。縄文は、同一個体である4-6～8がLR、4-9がRL単節縄文、4-10・11が無節Lである。縄文は、すべて外面全面に施文されている。内面調整は、すべてヘラミガキであり、4-6～8・10は横位、4-9・11は横・斜位に施されている。4-12～15は、中部高地栗林式系である。4-12・13は、外面に櫛歯状工具で斜格子文が描かれた胴部中段の破片である。櫛歯の数は、4-12が4本、4-13は5本である。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。4-14・15は、胴部外面にヘラでコの字重ね文が描かれた破片である。4-14は口縁部から胴上部まで、4-15は胴上部から中段までの破片である。4-14は、口縁部が受け口状を呈する。コの字重ね文以外の外面文様は、口縁端部、口縁部と胴上部の地文にLR単節縄文が施文され、口縁部にヘラ描きの山形文1条が横位に巡る。頸部は、無文である。4-15は、コの字重ね文内に円形刺突が中央に刻まれたボタン状貼付文が付く。調整は、いずれもヘラミガキであり、4-14の頸部外面無文部と内面が横位、4-15の内面は斜位に施されている。

4-16は、片岩製の磨石である。扁平な棒状を呈するが、両端を欠く。

出土遺物に伴うものはないが、本土坑の時期は、覆土の内容や重複する遺構との新旧関係などから古墳時代後期と思われる。

6 土坑

第1号土坑（第60図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）145－150グリッドに位置する。南側で重複する単独ピット13・14との新旧関係は確認できなかったが、本土坑が古いと思われる。

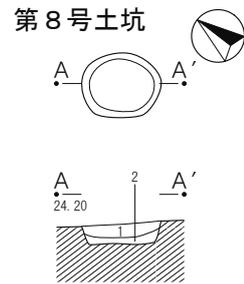
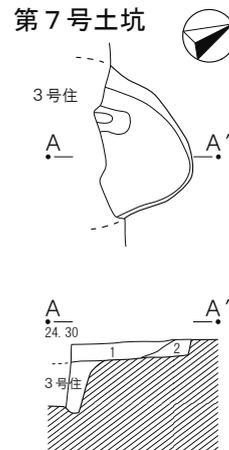
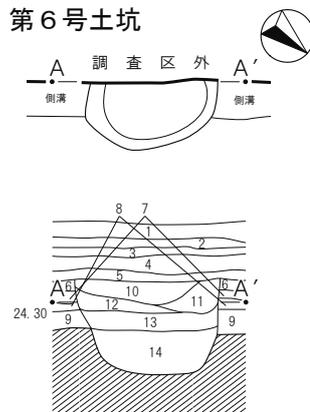
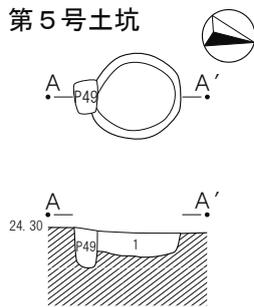
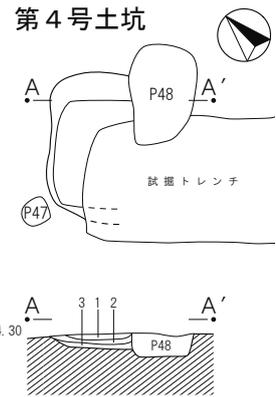
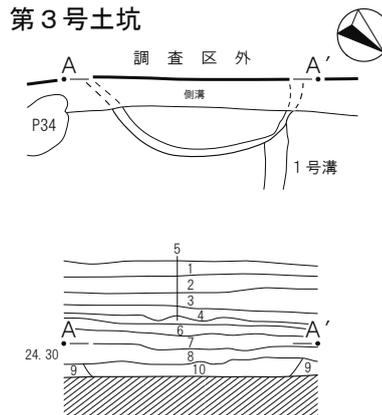
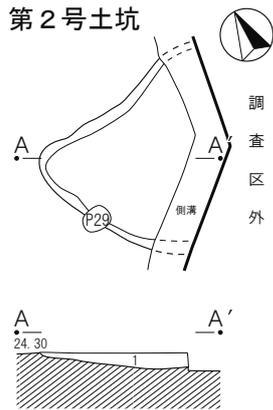
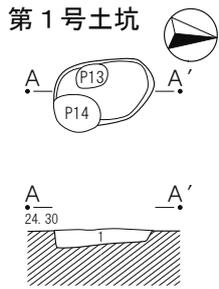
規模は、長軸0.8m、短軸0.51mを測る。平面プランは、楕円形を呈する。確認面からの深さは、最大0.14mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は南へやや傾斜する。覆土は、灰色土による単一層であるが、自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本土坑の時期は、覆土の内容から弥生時代中期後半～末としておきたい。

第2号土坑（第60図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）144・145－150グリッドに位置する。南西部で単独ピット29と重複しているが、新旧関係は不明である。東側は、調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は1.5m、南北は1.18mを測る。平面プランは、いび



第1号土坑

土層説明 (AA')

1 灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。

第2号土坑

土層説明 (AA')

1 黒色土: 粘土質。酸化鉄、灰白色ブロック、マンガン粒多量含む。

第3号土坑

土層説明 (AA')

- 1 耕作土
- 2 灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 3 灰黄色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 4 灰色土: 粘土質。火山灰 (浅間C)、酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。4層より暗い。
- 6 灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。5層より暗い。
- 7 暗灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。
- 8 暗灰色土: 粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。7層より明るい。
- 9 灰白色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。確認面。
- 10 灰色土: 粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

第4号土坑

土層説明 (AA')

- 1 暗灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 2 灰色土: 粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 3 灰色土: 粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。2層より明るい。

第5号土坑

土層説明 (AA')

- 1 暗灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。

第6号土坑

土層説明 (AA')

- 1 耕作土
- 2 灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 3 灰黄色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 4 灰色土: 粘土質。火山灰 (浅間C)、酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。4層より暗い。
- 6 灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。5層より暗い。
- 7 暗灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。
- 8 暗灰色土: 粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。7層より明るい。
- 9 灰白色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。確認面。
- 10 灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 11 灰色土: 粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。
- 12 暗灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 13 暗灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。12層より明るい。
- 14 暗灰色土: 粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒・ブロック、マンガン粒少量含む。13層より明るい。

第7号土坑

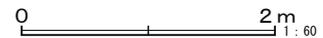
土層説明 (AA')

- 1 黒色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 2 灰色土: 粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。

第8号土坑

土層説明 (AA')

- 1 灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 灰色土: 粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。1層より暗い。



第60図 第1～8号土坑

つな楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.13 mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面は中央に向かって緩やかに下る。覆土は、黒色土による単一層であるが、ブロックを多量含むことから埋め戻された可能性がある。

遺物は、器種不明の弥生土器小片2点、古墳時代後期の土師器坏蓋模倣坏小片1点が出土したが、いずれも図示不可能であった。本土坑には、後者が伴うと思われる。

本土坑の時期は、出土遺物と覆土の内容から古墳時代後期と思われる。

第3号土坑（第60図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）145－151グリッドに位置する。北東部で第1号溝跡を切っている。本土坑の北東には、第1号柵列跡が位置するが、直接的な切り合い関係にないため、新旧関係は不明である。南西半分以上が調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は0.52 m、南北は1.72 mを測る。平面プランは、円形ないし楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大m 0.15を測る。立ち上がりはやや鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は、灰色土による単一層であるが、自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、弥生時代中期後半の壺の胴上部片（第62図3－1）のみである。この他に器種不明の弥生土器小片が1点出土したが、図示不可能であった。すべて流れ込みと思われる。

3－1は、外面上位に2本一単位の櫛歯状工具による波状文3条が横位に巡る。下位はLR単節縄文か無節Lが施文されている可能性がある。内面調整は、不明である。

出土遺物に伴うものがないが、本土坑の時期は、重複する第1号溝跡との新旧関係から古墳時代後期以降としか言えない。

第4号土坑（第60図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）144－151グリッドに位置する。北東隅付近を単独ピット48に切られており、南側を試掘トレンチにより欠くため、残存状態が悪い。

正確な規模は不明であるが、長軸1.17 m、短軸は0.7 m程を測ると思われる。平面プランは、隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.12 mを測る。立ち上がりは、北東部が緩やかであるが、その他は鋭角である。底面は、ほぼ平坦であった。覆土は、3層（1～3層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、弥生時代中期後半の甕の口縁部から頸部までの破片（第62図4－1）のみである。この他に器種不明の弥生土器小片が7点出土したが、図示不可能であった。

4－1は、肥厚した口縁部外面にLR単節縄文か無節Lが施文され、以下は単位不明の櫛歯状工具による直線文が複数垂下する。内面調整は、横位のヘラミガキである。

本土坑の時期は、出土遺物と覆土の内容から弥生時代中期後半と思われる。

第5号土坑（第60図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）144－152グリッドに位置する。南側立ち上りを単独ピット49に切られている。

径0.7 m前後の円形を呈する。確認面からの深さは、最大0.19 mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は中央付近がやや凹む。覆土は、暗灰色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。

遺物は、器種不明の弥生土器小片が6点出土したが、図示不可能であった。

本土坑の時期は、出土遺物と覆土の内容から弥生時代中期後半～末としておきたい。

第6号土坑（第60図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）144・145－152グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。南西半分が調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、径1m前後のややいびつな円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.48mであったが、調査区境での土層断面観察の結果、0.73m程の掘り込みであったことが確認された。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は、5層（10～14層）確認された。11層にブロックを多量含むが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、弥生時代中期後半の壺（第62図6-2）、甕（6-3）、甗（6-1）がある。この他にも器種不明の弥生土器小片が3点出土したが、図示不可能であった。

6-2は、壺の胴上部片である。外面は、ヘラ描きの浅くやや太い平行沈線がほぼ等間隔に5条巡る。外面上位に種子圧痕と思われる凹みがみられた。6-3は、甕の胴部中段の破片である。外面全面にLR単節縄文が施文されている。6-2・3の内面調整は、不明である。6-1は、甗の胴下部から底部までの部位である。底面中央に孔を持つ。調整は、内外面ともにヘラミガキである。

本土坑の時期は、出土遺物と覆土の内容から弥生時代中期後半と思われる。

第7号土坑（第60図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）142－153グリッドに位置する。本土坑は、第3号住居跡の掘削中に確認されたため、南側を欠くこととなってしまったが、土層断面観察の結果、第3号住居跡を切っていることが判明した。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は1.19m、南北は0.69mを測り、平面プランは楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、概ね0.24m程であったが、底面西側では第3号住居跡との境付近でピット状の掘り込みがみられた。底面からの深さは0.12mを測る。立ち上がりは、西側がやや緩やかであったが、その他は鋭角である。底面は、ピット状の掘り込み部分以外、ほぼ平坦であった。覆土は、2層（1・2層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、弥生時代中期後半の甕の胴部中段から下部までの破片（第62図7-1）のみである。この他にも器種不明の弥生土器小片が多数出土したが、図示不可能であった。すべて第3号住居跡からの流れ込みと思われる。

7-1は、外面に5本一単位の櫛歯状工具で縦位の羽状文が描かれている。調整は、外面が斜位のハケメ、内面は不明である。

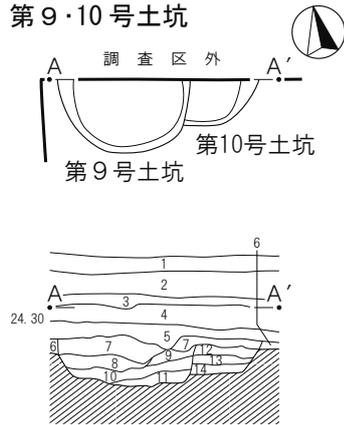
出土遺物は伴わないが、本土坑の時期は、重複する第3号住居跡との新旧関係や覆土の内容から古墳時代後期と思われる。

第8号土坑（第60図）

第1区（2009（平成21）年度第2次調査）141－154・155グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

規模は、長軸0.63m、短軸0.51mを測り、平面プランは、楕円形を呈する。確認面からの深さは、

第9・10号土坑



第9・10号土坑

土層説明 (A A')

- 1 耕作土
- 2 灰色土：粘土質。火山灰（浅間A）、酸化鉄少量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄少量含む。
- 4 灰色土：粘土質。火山灰（浅間A）、酸化鉄、灰白色粒微量含む。
- 5 灰白色土：粘土質。火山灰（浅間A）、酸化鉄、灰白色粒・ブロック微量含む。
- 6 灰色土：粘土質。酸化鉄少量、灰白色ブロック微量含む。
- 7 灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
- 8 灰色土：粘土質。炭化物少量、灰白色粒微量含む。
- 9 灰色土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物微量含む。
- 10 灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒少量、焼土粒微量含む。
- 11 灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒・ブロック少量含む。
- 12 灰色土：粘土質。灰白色ブロック多量含む。
- 13 灰色土：粘土質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
- 14 灰白色土：粘土質。灰色粒少量含む。

第11号土坑

土層説明 (A A')

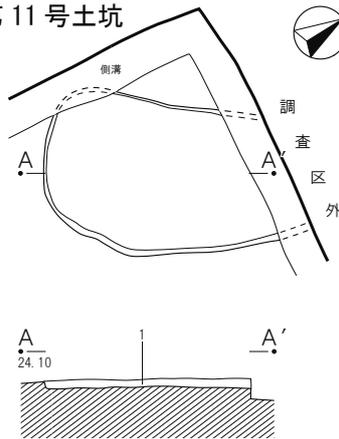
- 1 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、暗灰色粘土少量含む。

第12号土坑

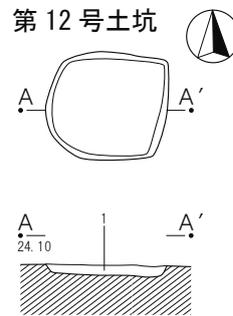
土層説明 (A A')

- 1 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、暗灰色粘土少量含む。

第11号土坑



第12号土坑



第13号土坑

土層説明 (A A')

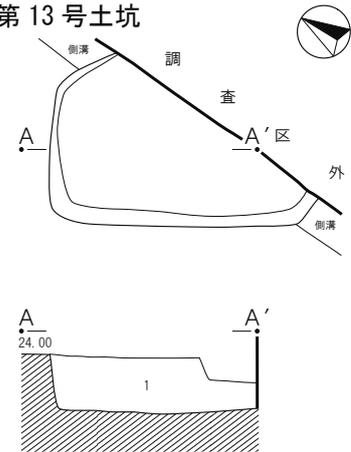
- 1 黄灰色粘土・黒色粘土・灰白色シルトブロック混合層：酸化鉄、マンガン粒多量含む。

第14号土坑

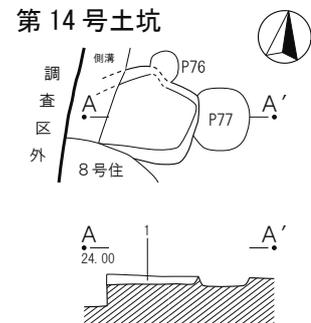
土層説明 (A A')

- 1 暗灰色土：粘土質。灰白色粘土多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。

第13号土坑



第14号土坑



第61図 第9～14号土坑

最大0.16 mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は、2層（1・2層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

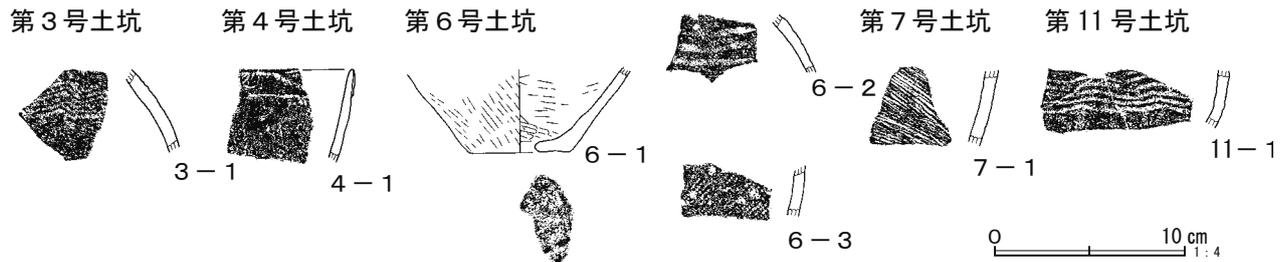
出土遺物はないが、本土坑の時期は、覆土の内容から弥生時代中期後半～末としておきたい。

第9号土坑（第61図）

第2区（2009（平成21）年度第3次調査A区）133－155グリッドに位置する。東側で第10号土坑を切っており、北側半分は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、径1.03 m前後の円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.27 mであったが、調査区境での土層断面観察の結果、0.41 m程の掘り込みであったことが確認された。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられた。覆土は、5層（7～11層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本土坑の時期は、覆土の内容から第10号土坑より新しい弥生時代中期後半～末としておきたい。



第 62 図 土坑出土遺物

第 13 表 土坑出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
3-1	第 3 号土坑	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外:にぶい黄橙 内:黒褐	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗顕著。
4-1	第 4 号土坑	弥生土器 甕	-	-	-	AHIN	黒褐色	B	口～頸部片	中期後。外面摩耗顕著。
6-1	第 6 号土坑	弥生土器 甗	-	(4.4)	(5.3)	ABDEHIKN	にぶい橙色	B	胴～底 25%	中期後。内外面摩耗顕著。
6-2	第 6 号土坑	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外:灰黄褐 内:黒	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗。外面種子圧痕?凹み有。
6-3	第 6 号土坑	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外:灰黄褐 内:黒褐	B	胴中段片	中期後。内外面摩耗顕著。
7-1	第 7 号土坑	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外:暗褐 内:にぶい橙	B	胴中～下片	中期後。
11-1	第 11 号土坑	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	褐灰色	B	胴中～下片	中期後。内外面摩耗顕著。

第 10 号土坑 (第 61 図)

第 2 区 (2009 (平成 21) 年度第 3 次調査 A 区) 133 - 155 グリッドに位置する。西側を第 9 号土坑に切られており、北側半分は調査区外にある。

約 1/4 の検出であるため、規模・平面プランは不明である。確認面からの深さは、最大 0.23 m を測る。検出できた南東部の立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は、3 層 (12 ~ 14 層) 確認された。ほぼ水平であり、12 層はブロックを多量含んでいたことから上層については人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物はないが、本土坑の時期は、覆土の内容と重複する遺構との新旧関係から第 9 号土坑より古い弥生時代中期後半～末としておきたい。

第 11 号土坑 (第 61 図)

第 3 区 (2014 (平成 26) 年度第 1 次調査第 3 区) 127 - 149・150 グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。北東部は調査区外にあり、南西隅は側溝により欠く。

正確な規模は不明であるが、検出された長軸は 2 m、短軸は 1.24 m を測る。平面プランは、隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大 0.07 m と浅い。立ち上がりは鋭角ないし垂直に近く、底面は中央付近がやや盛り上がるが、ほぼ平坦であった。覆土は、灰色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、弥生時代中期後半～末の壺の胴部中段から下部までの破片 (第 62 図 11-1) のみである。この他に器種不明の弥生土器小片が 5 点出土したが、図示不可能であった。すべて流れ込みと思われる。

11-1 は、外面上位に 3 本一単位の櫛歯状工具による波状文 2 条が横位に巡り、以下に LR 単節縄文が施文されている。内面調整は、横位のヘラミガキである。

本土坑の時期は、出土遺物と覆土の内容から弥生時代中期後半～末としておきたい。

第 12 号土坑 (第 61 図)

第 3 区 (2014 (平成 26) 年度第 1 次調査第 3 区) 127 - 150 グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

一辺 0.9 m 前後のややいびつな方形を呈する。確認面からの深さは、最大 0.08 m と浅い。立ち上がりは鋭角であり、底面は東側にやや傾斜するが、ほぼ平坦であった。覆土は、灰色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。

遺物は、器種不明の弥生土器小片が 4 点出土したが、図示不可能であった。

本土坑の時期は、出土遺物と覆土の内容から弥生時代中期後半～末としておきたい。

第 13 号土坑 (第 61 図)

第 3 区 (2014 (平成 26) 年度第 1 次調査第 3 区) 126 - 150 グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。南東隅付近は、調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された長軸は 2.03 m、短軸は 1.36 m 程を測る。平面プランは、隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大 0.45 m と深い。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は、色調の異なる粘土やシルトのブロックによる混合層であり、人為的に埋め戻されていた。

遺物は、器種不明の弥生土器小片が出土したが、図示不可能であった。流れ込みと思われる。

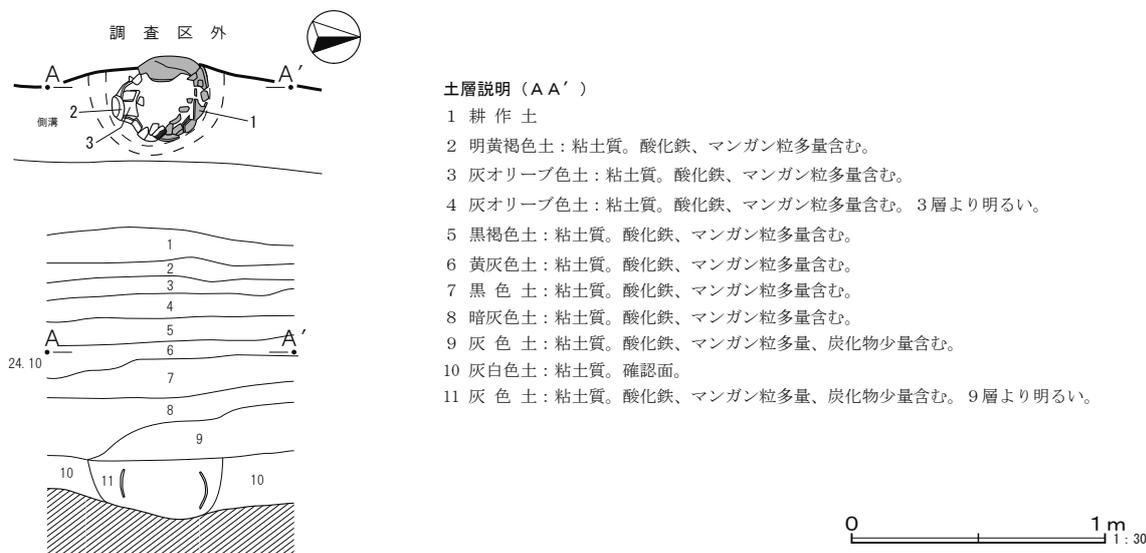
出土遺物に伴うものがないが、本土坑の時期は、西側に隣接する第 2 号柵列跡をはじめとする古墳時代後期の遺構と軸がほぼ揃うことから古墳時代後期と思われる。

第 14 号土坑 (第 61 図)

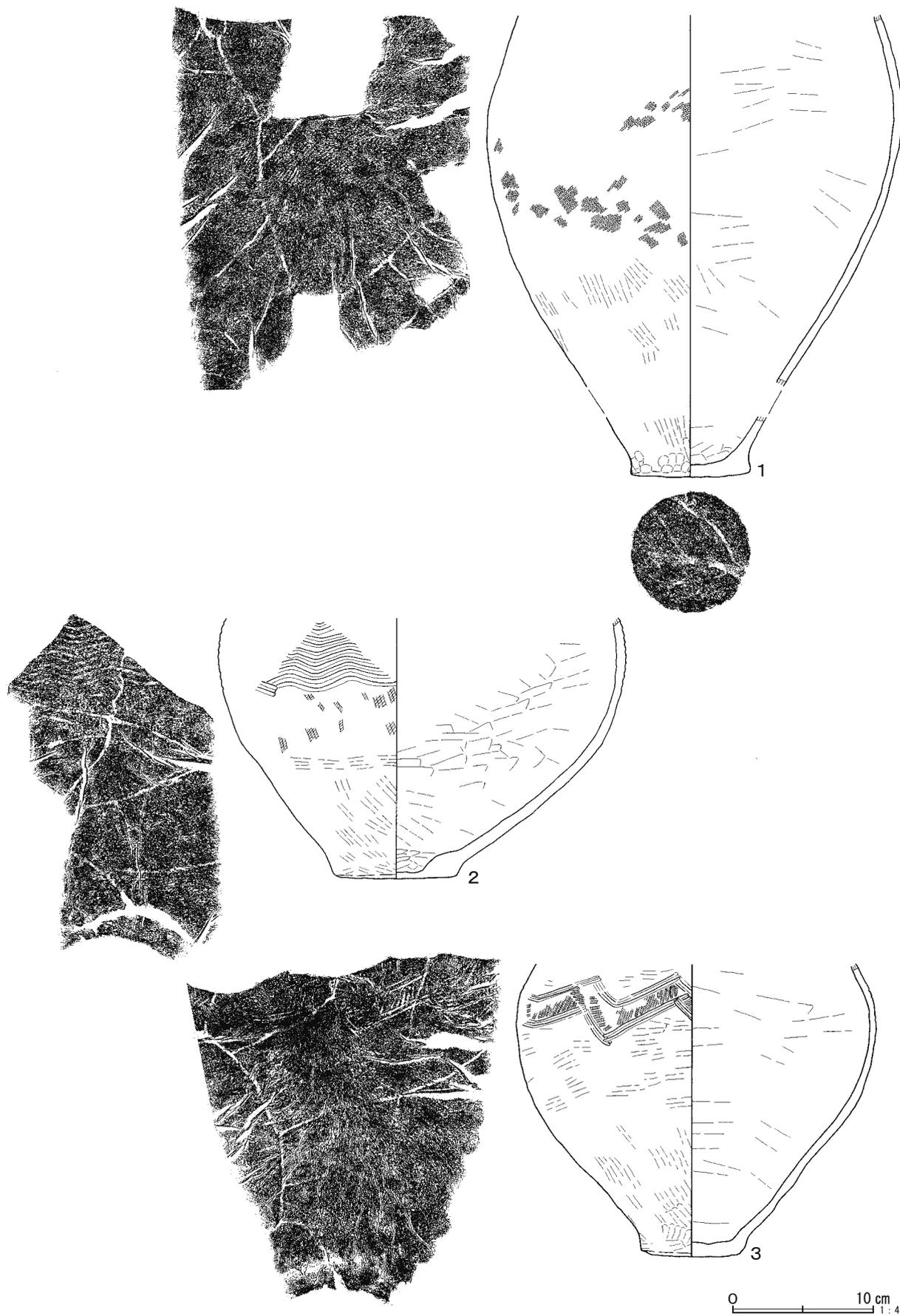
第 3 区 (2014 (平成 26) 年度第 1 次調査第 3 区) 127 - 151 グリッドに位置する。多くの遺構と重複しており、残存状態が良くない。北側で単独ピット 76、東側で単独ピット 77、南側で第 8 号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。西側は、側溝により欠く。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は 0.69 m、南北は 0.76 m を測り、平面プランはややいびつな隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大 0.07 m と浅い。立ち上がりはやや鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は、暗灰色土による単一層であるが、灰白色粘土を多量含んでいたことから人為的に埋め戻された可能性もある。

出土遺物はないが、本土坑の時期は、覆土の内容から弥生時代中期後半としておきたい。



第 63 図 第 1 号土器棺墓



第 64 图 第 1 号土器棺墓出土遺物

第14表 第1号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 甕	-	(33.1)	8.4	ABDEHIKN	暗褐 にぶい橙	B	胴～底70%	内外面摩耗顕著。棺身。
2	弥生土器 壺	-	(18.6)	8.7	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：灰	B	胴～底30%	内外面摩耗顕著。棺蓋。
3	弥生土器 壺	-	(20.85)	7.0	ABEHIK	灰白 黒褐 褐灰	B	胴～底90%	内外面摩耗顕著。棺蓋。

7 土器棺墓

第1号土器棺墓（第63図）

第3区（2014（平成26）年度第1次調査第3区）127－152グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、墓壇西側の立ち上がりが調査区外にあり、土器棺上位は破壊を受けていた。

調査区沿いに側溝を掘ったことから墓壇を面的に検出できなかったが、径0.55m前後の円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.24mを測る。立ち上がりはやや鋭角であり、底面北側が凹んでいた。

土器棺は、墓壇中央に埋設されたと思われる。棺身には、大型甕の胴上部以下が使用されており、開口部を南向きにして横位に埋設されていた。棺蓋には2つの壺が使用されており、胴上部以下ほぼ残存する壺を棺身の甕と合わせ口にしており、さらにその上からもう1つの壺の約1/4の破片で覆っていた。平面図では、棺蓋の位置を明確に図示できなかったが、破片の棺蓋の下に胴上部以下ほぼ残存する棺蓋が位置する。土器棺の周囲には、灰色土が埋められており、棺身内に入り込んだ土とともに混入物の精査をおこなったが、骨片などは検出されなかった。

出土遺物（第64図）は、棺身に使用された弥生土器甕（1）と棺蓋の壺（2・3）がある。

棺身の1は、大型甕の胴上部から底部までの部位であるが、底部に近い胴下部の一部を欠く。胴部は倒卵形を呈し、上位に最大径を持つ。底部は、円柱状を呈する。外面の文様は、胴上部から中段下まで全面にLR単節縄文が施文されている。縄文は、摩耗が著しいため部分的な図示となっているが、本来は全面に施文されている。調整は、胴下部外面の無文部がヘラミガキであり、底部付近は指頭圧痕が施されている。内面は、ヘラナデである。底面に木葉痕がみられた。

棺蓋の2・3は、壺の胴上部から底部までの部位である。ほぼ同じ器形・法量であり、2は約1/4が残存し、3は胴上部以下ほぼ残存する。いずれも胴部が球形を呈し、最大径を中段に持つ。底部は、円柱状を呈する。2・3の外面文様は、2本一単位の櫛歯状工具による文様が主体となる。2は、最大径を持つ胴部中段に2本一単位の波状文が5条以上密に巡り、以下に無節Rが施文されている。無節Rは、摩耗が著しいため部分的な図示であるが、本来は波状文下全面に施文されている。3は、最大径を持つ胴部中段よりやや上に2本一単位の山形文が上下に巡り、間に無節Lが充填されている。2の無節R以下、3の山形文の上下は無文である。2・3の調整は、2・3の外面無文部がヘラミガキ、内面はいずれもヘラナデである。

本土器棺墓の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

8 ピット

ピットは、計83基確認された。すべての調査区に分布するが、第1区（2009（平成21）年度第2次調査）で多数検出されている。第1区は、ほぼ全面に所在するが、北西部の144～146－150～152グリッドに集中する。第2区（2009（平成21）年度第3次調査A区）は、第1号河川跡の立ち上がりで1基

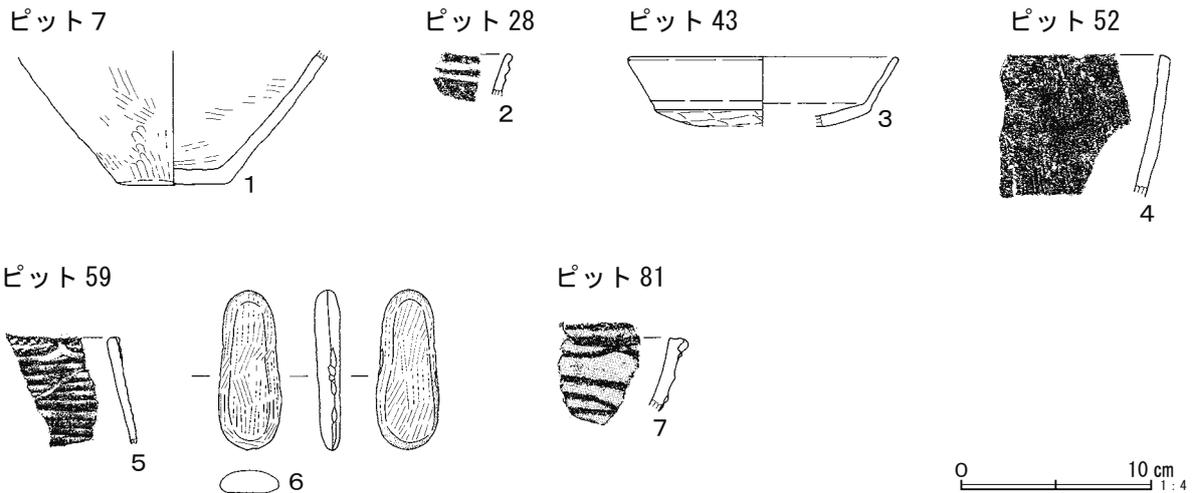
のみみられた。第3区（2014（平成26）年度第1次調査第3区）は、調査区北側に点在する。径0.3m前後の円形を呈するものが多く、確認面からの深さは、バラツキがある。覆土は図示しなかったが、いずれのピットも柱痕跡は確認されなかった。時期を特定できるものはないが、検出された他の遺構と同時期の弥生時代中期後半～末か古墳時代後期のいずれかに属するものが多いと思われる。各ピットの計測値については、第15表を参照のこと。なお、表中の長短軸に（）が付くものは現存長、深さに（）が付くものは、重複する遺構の底面から確認された数値を示す。また、備考欄には、他の遺構との新旧関係とともに出土土器で図示不可能な小片について、縄文土器は「縄」、弥生土器は「弥」、古墳時代後期の土師器は「土」の表記で数量とともに記載した。

ピット出土遺物で図示可能なものは、縄文土器（第65図2・4・5・7）、弥生土器（1）、磨石（6）、古墳時代後期の土師器（3）と非常に少ない。

1は、弥生時代中期後半～末の壺の胴下部から底部までの部位である。ピット7から出土した。調整は、内外面ともにヘラミガキである。甕の可能性もある。ピット7では、図示不可能な弥生土器の小片も出土した。2は、縄文時代晩期末の浮線文土器浅鉢の口縁部片である。ピット28から出土した。

第15表 ピット計測表

No.	位置	長(m)	短(m)	深(m)	備考	No.	位置	長(m)	短(m)	深(m)	備考
P1	146-150G	(0.46)	0.45	0.5	1号掘立より古。弥1。	P43	144-151G	0.37	0.34	0.3	
P2	146-150G	0.26	0.22	0.46	1号掘立と新旧・関連不明。弥2。	P44	144-151G	0.24	0.22	0.08	
P3	146-150G	0.37	0.23	0.13	1号掘立と新旧・関連不明。	P45	144-151G	0.27	0.17	0.08	
P4	146-150G	0.5	0.32	0.19	1号掘立と新旧・関連不明。土1。	P46	144-151G	0.25	0.23	0.07	
P5	146-150G	0.22	0.22	0.21	1号掘立と新旧・関連不明。	P47	144-151G	0.21	0.19	0.08	
P6	146-150G	0.53	0.32	0.34	1号柵と新旧・関連不明。	P48	144-151G	0.81	0.52	0.21	4号土より新。
P7	145-150G	(0.53)	0.36	0.44	弥2。	P49	144-152G	0.26	0.17	0.31	5号土より新。
P8	145-150G	0.3	0.24	0.14		P50	144-152G	0.2	0.19	0.05	
P9	145-150G	0.25	0.22	0.28	弥2。	P51	142-152G	0.32	0.2	0.37	2号住より新。弥1。
P10	145-150G	0.27	0.24	0.29		P52	142-152G	0.51	0.38	0.5	弥1。
P11	145-150G	0.39	(0.22)	0.39		P53	143-153G	0.36	0.33	0.06	
P12	145-150G	0.35	0.21	0.26		P54	143-153G	0.32	(0.26)	0.27	P55と新旧不明。
P13	145-150G	0.25	0.18	(0.21)	1号土より新。	P55	143-153G	0.43	0.37	0.22	2・3号溝、P54・56と新旧不明。
P14	145-150G	0.37	0.29	0.42	1号土より新。弥4。	P56	143-153G	0.78	0.54	0.21	2号溝、P55と新旧不明。
P15	145-150G	0.27	0.23	0.33		P57	143-153G	0.5	(0.4)	0.61	3号住より新。弥3。
P16	145-150G	0.23	0.22	0.29		P58	142-152-153G	0.44	0.33	0.42	
P17	145-150G	0.3	0.24	0.23	1号掘立と新旧・関連不明。	P59	142-143-153G	0.25	0.23	0.42	
P18	145-150G	0.23	0.21	0.2	弥2。	P60	142-153G	0.24	0.24	0.44	
P19	145-150G	0.32	0.27	0.31		P61	141-153G	(0.55)	0.3	0.32	
P20	145-150G	0.31	0.22	0.31		P62	142-154G	0.48	0.35	0.26	
P21	145-150G	0.28	0.24	0.35	土1。	P63	142-154G	0.37	0.34	0.32	
P22	145-150G	0.25	0.25	0.06		P64	141-155G	0.21	0.12	0.09	
P23	145-150G	0.22	0.21	0.12		P65	140-155G	0.24	0.22	0.08	
P24	145-150G	0.47	0.3	0.39		P66	140-155G	0.27	0.22	0.31	
P25	145-150G	0.23	0.23	0.07	弥1。	P67	140-155G	0.28	0.28	0.12	弥1。
P26	145-150G	0.24	0.22	0.08		P68	140-156G	0.38	0.3	0.14	
P27	145-150G	0.29	0.25	0.33		P69	139-155G	0.26	0.23	0.33	
P28	145-150-151G	0.28	0.23	0.31	弥5。	P70	139-156G	0.29	0.19	0.11	
P29	144-145-150G	0.22	0.19	0.25	2号土と新旧不明。	P71	133-156G	0.36	0.28	0.34	1号河川より新。
P30	144-150G	(0.16)	(0.14)	(0.11)	1号住より新。	P72	127-150G	(0.62)	0.34	0.04	
P31	145-151G	0.28	0.26	0.53	弥1。	P73	127-150G	0.32	0.28	0.11	
P32	145-151G	0.43	0.4	0.2	弥3。	P74	127-150G	0.28	0.25	0.22	弥4。
P33	145-151G	0.21	0.18	0.12		P75	126-150G	0.25	0.23	0.36	2号柵と新旧・関連不明。弥1。
P34	145-151G	0.58	(0.39)	0.53	1号柵と新旧・関連不明。	P76	127-151G	(0.25)	0.21	0.06	14号土と新旧不明。
P35	145-151G	0.25	0.25	0.05	1号柵と新旧・関連不明。	P77	127-151G	0.49	0.4	0.05	14号土と新旧不明。弥1。
P36	145-151G	0.18	0.18	0.15	1号柵と新旧・関連不明。弥2。	P78	126-151G	0.23	0.2	0.38	
P37	145-151G	0.16	0.14	0.12	1号柵と新旧・関連不明。	P79	126-151G	0.22	0.2	0.21	弥1。
P38	145-151G	0.39	0.36	0.1		P80	127-152G	0.39	0.32	0.19	縄1、弥1。
P39	145-151G	0.22	0.21	0.14		P81	127-152G	0.33	0.26	0.25	弥1。
P40	144-151G	0.43	(0.35)	0.07	P41と新旧不明。弥1。	P82	127-152G	0.22	0.21	0.23	
P41	144-151G	0.42	0.34	0.13	P40と新旧不明。弥3。	P83	126-127-152G	1.04	0.54	0.17	1号河川より新。弥6。
P42	144-151G	0.43	0.41	0.13							



第 65 図 ピット出土遺物

第 16 表 ピット出土遺物観察表

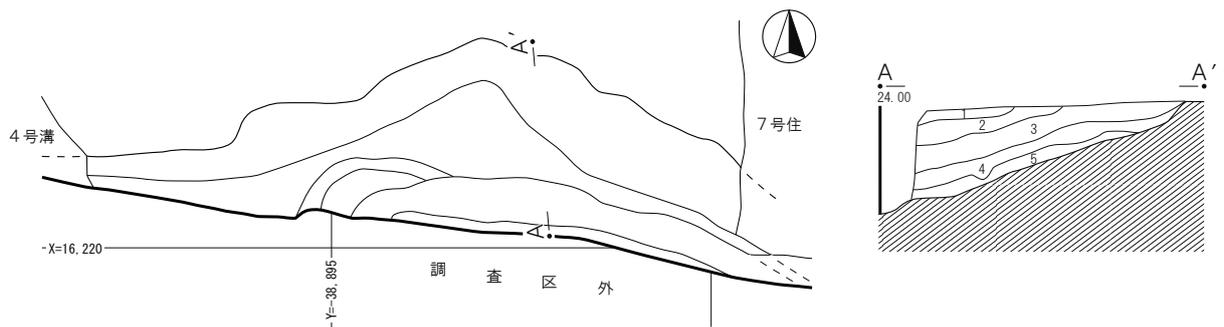
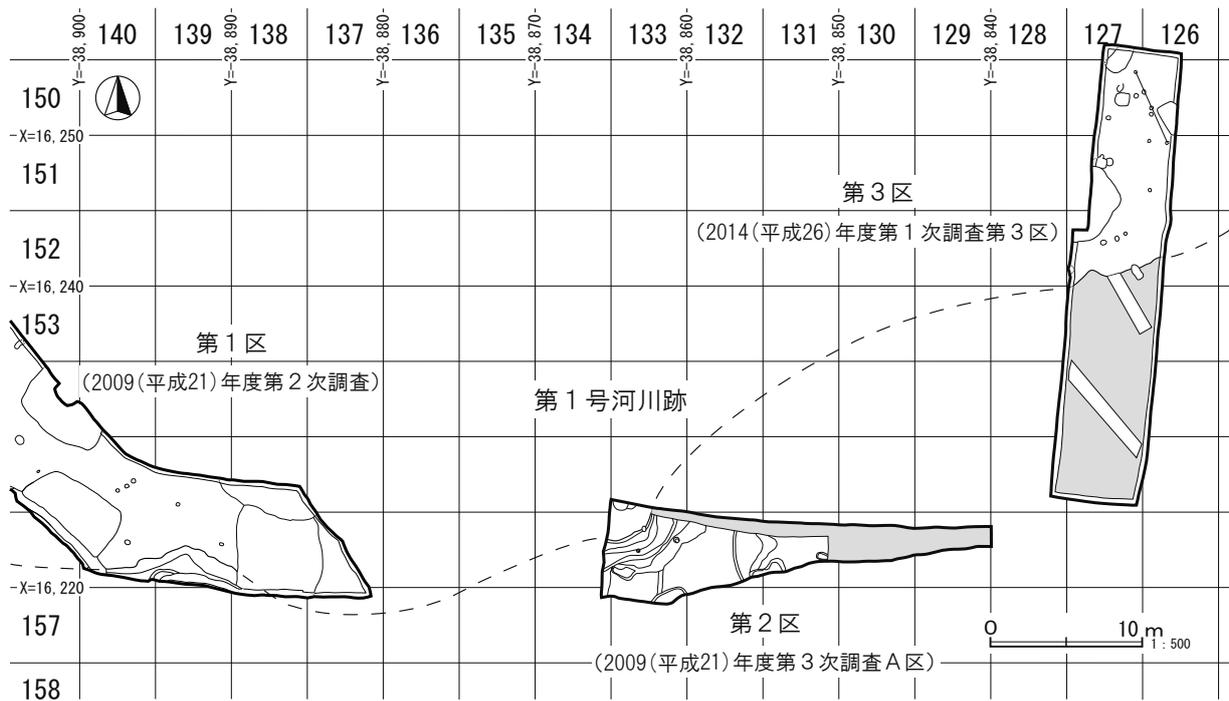
番号	出土ピット	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	ピット 7	弥生土器 壺	-	(7.05)	(5.9)	ABDHIK	外:黒 内:灰黄褐	B	胴~底 45%	中期後~末。内外面摩耗・剥離顕著。
2	ピット 28	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABHIN	黒褐色	B	口縁部片	晩期末。内外面やや摩耗。
3	ピット 43	土師器 坏	(14.2)	(3.7)	-	ABCHIN	にぶい橙色	B	20%	古墳後。内外面摩耗顕著。
4	ピット 52	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDHIKN	外:にぶい黄橙 内:にぶい橙	B	口~胴上片	晩期末。内外面摩耗顕著。
5	ピット 59	縄文土器 鉢	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	口~体部片	晩期末。
6	ピット 59	磨石	最大長 8.4 cm、最大幅 3.3 cm、最大厚 1.35 cm。重量 (43.8)g。所々欠。砂岩。							
7	ピット 81	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABIKN	外:暗褐 内:黒褐	B	口~体部片	晩期末。外面赤彩、ほぼ剥落。

外面上位に平行の浮線文が巡る。外面下位と内面の調整は、横位のヘラミガキである。ピット 28 では、図示不可能な弥生土器の小片も出土した。3 は、古墳時代後期の土師器坏蓋模倣坏である。ピット 43 から出土した。口縁部が逆ハの字に開き、体部と底部の境に稜を持つ。底部中央を欠くが、平底に近い。調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底面はヘラ削りである。4 は、縄文時代晩期末の深鉢の口縁部から胴上部までの破片である。ピット 52 から出土した。外面全面に縦位の細密条痕が施されている。内面調整は、不明である。胎土が粗い。ピット 52 では、図示不可能な弥生土器の小片も出土した。5・6 は、ピット 59 から出土した。5 は、縄文時代晩期末の鉢の口縁部から体部までの破片である。外面に平行の浮線文が複数巡る。口縁部上位に L R 単節縄文が施文されており、下から挟り込みが入る部分がみられた。内面調整は、横位のヘラミガキである。6 は、砂岩製の磨石である。所々を欠く。扁平で楕円形を呈する。弥生時代中期後半~末と思われる。7 は、縄文時代晩期末の浮線土器浅鉢の口縁部から体部までの破片である。ピット 81 から出土した。口縁端部の中央が沈線状に凹み、外面に瘤が付く。口縁部外面は、眼鏡状の浮線文が巡る。口縁端部を含む外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。内面調整は、横位のヘラミガキである。胎土がやや粗い。ピット 81 では、図示不可能な弥生土器の小片も出土した。

9 河川跡

第 1 号河川跡 (第 66 ~ 71 図)

河川跡は、すべての調査区で検出された。第 1 区 (2009 (平成 21) 年度第 2 次調査) は、調査区南東の 138 ~ 140 - 156・157 グリッド、第 2 区 (2009 (平成 21) 年度第 3 次調査 A 区) は、調査区ほぼ



土層説明 (AA')

- 1 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。1層より明るい。
- 3 黒色粘土：酸化鉄、マンガン粒少量含む。
- 4 暗灰色粘土：酸化鉄、マンガン粒少量、所々に灰色粘土含む。
- 5 灰色シルト：灰白色シルト多量、酸化鉄、マンガン少量含む。

平面図： 0 2m 1:100

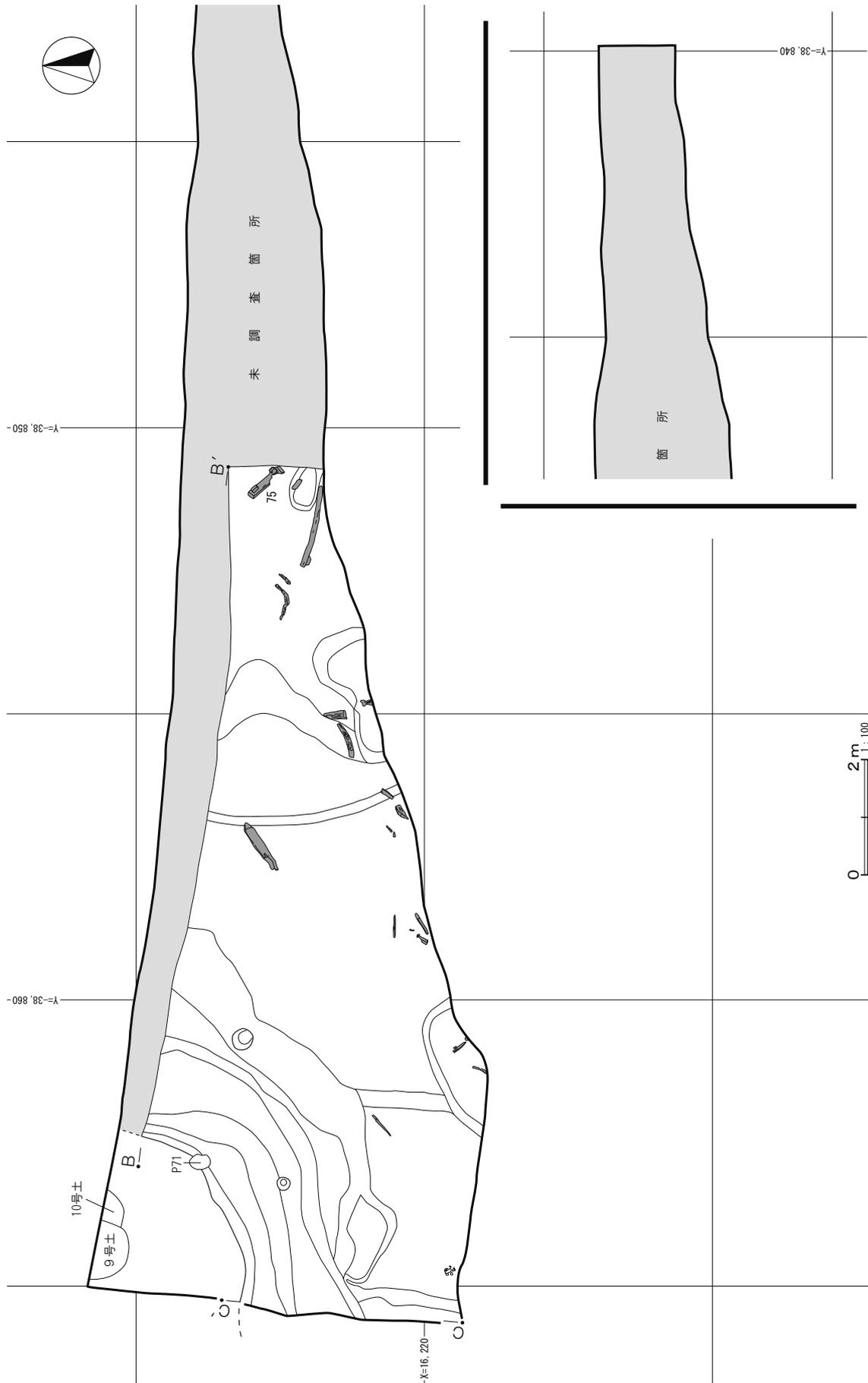
断面図： 0 2m 1:60

第66図 第1号河川跡(1)

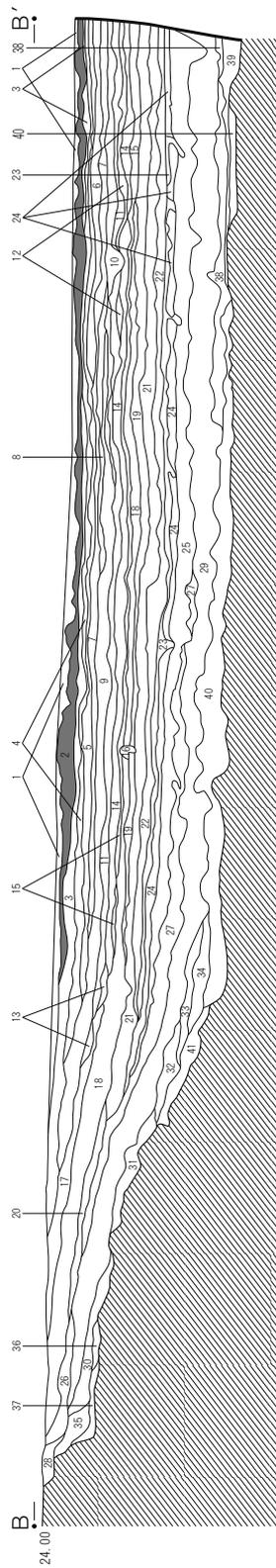
全面の129～134－155～157グリッド、第3区(2014(平成26)年度第1次調査第3区)は、調査区南半分の126～128－152～155グリッドで確認された。

第1区では、北側の立ち上がり付近が検出された。西側で第4号溝跡が接続しており、東側では第7号住居跡を切っている。第2区では、西端で北西部の立ち上がりが検出され、以東は全面河川跡であった。立ち上がりの一部を単独ピット71に切られている。第3区も北側の立ち上がりが検出され、以南は全面河川跡であった。立ち上がりの一部を単独ピット83に切られている。

各区で検出された河川跡の立ち上がりを繋げると、西から北東方向へ蛇行して流れていたことが明らかとなった。この流路は、現況河川の衣川と同じであることから前身と考えられ、時代が下るにつれて北から南へ移動していったと考えられる。なお、調査区の都合から対岸を検出することは不可能であったが、本遺跡範囲東側で過去に実施した調査では、幅が25m前後であったことから、本報告の



第 67 図 第 1 号河川跡 (2)

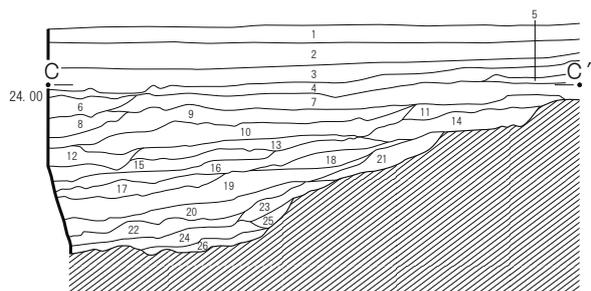


土層説明 (A A')

- 1 灰色土：粘土質。青灰色粒少量、酸化鉄、炭化物、灰白色粒微量含む。
- 2 灰色土：粘土質。火山灰 (H r - F A)、炭化物多量含む。
- 3 灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒多量、焼土粒微量含む。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄少量含む。
- 5 灰色土：粘土質。炭化物多量含む。下層に灰白色シルトが帯状に堆積。
- 6 灰色土：粘土質。炭化物多量、灰白色粒・ブロック少量含む。
- 7 灰色土：粘土質。灰白色ブロック、腐食した植物繊維少量含む。
- 8 灰色土：粘土質。灰白色粒多量含む。腐食した植物繊維帯状に堆積。
- 9 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック少量、腐食した植物繊維帯状に堆積。
- 10 黄灰色土：粘土質。腐食した植物繊維少量、木片微量含む。
- 11 灰色土：シルト質。灰白色粒少量含む。腐食した植物繊維帯状に堆積。
- 12 褐灰色土：粘土質。木片少量、灰白色粒微量含む。
- 13 灰色土：粘土質。腐食した植物繊維帯状に堆積。
- 14 灰色土：粘土質。灰色ブロック、腐食した植物繊維多量、木片少量、灰白色粒微量含む。
- 15 灰色土：粘土質。灰白色粘土ブロック多量、腐食した植物繊維帯状に堆積。
- 16 黄灰色土：粘土質。炭化物、木片微量含む。
- 17 灰色土：粘土質。炭化物、灰白色ブロック少量、酸化鉄、灰白色ブロック少量含む。
- 18 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
- 19 灰白色土・腐食した植物繊維混合層
- 20 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量、暗灰色粒少量含む。
- 21 灰白色土：シルト質。炭化物、灰色ブロック微量含む。
- 22 黄灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
- 23 灰白色土：シルト質。炭化物、灰色ブロック微量含む。
- 24 黄灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
- 25 灰色粘土：木片少量、黄灰色粒微量含む。
- 26 灰色土：粘土質。灰白色粒微量含む。
- 27 腐食した植物繊維層：オリーブ黒色粘土微量含む。
- 28 灰色土：粘土質。酸化鉄少量、灰白色粒微量含む。
- 29 オリーブ黒色粘土：焼土粒、炭化物、灰白色粒微量含む。
- 30 灰色土：粘土質。炭化物少量、酸化鉄、灰白色粒微量含む。
- 31 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量含む。
- 32 灰色粘土：明緑灰色粒・ブロック少量含む。
- 33 灰色粘土：腐食した植物繊維多量含む。
- 34 灰色シルト：灰色粘土ブロック、明緑灰色ブロック、腐食した植物繊維、木片少量、炭化物、灰白色粒微量含む。
- 35 灰色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒微量含む。
- 36 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色ブロック少量含む。
- 37 灰色土：粘土質。灰色ブロック少量、酸化鉄、炭化物、灰白色粒微量含む。
- 38 黒色粘土：腐食した植物繊維、木片少量、明オリーブ灰色粒微量含む。
- 39 青灰色砂
- 40 灰色粘土：明緑灰色シルト粒・ブロック多量、炭化物微量含む。
- 41 灰色粘土：明緑灰色シルト粒・ブロック極多量、腐食した植物繊維微量含む。

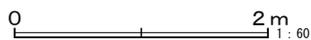


第 68 図 第 1 号河川跡 (3)



土層説明 (C C')

- 1 耕作土
- 2 灰色土：粘土質。火山灰（浅間A）、酸化鉄少量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄少量含む。
- 4 灰色土：粘土質。火山灰（浅間A）、酸化鉄、灰白色粒微量含む。
- 5 灰白色土：粘土質。火山灰（浅間A）、酸化鉄、灰白色粒・ブロック微量含む。
- 6 灰白色土：粘土質。灰白色粒・ブロック少量、酸化鉄微量含む。
- 7 灰色土：粘土質。火山灰（浅間A）、酸化鉄、灰白色粒微量含む。
- 8 灰色土：粘土質。炭化物少量、酸化鉄、灰白色ブロック微量含む。
- 9 灰色土：粘土質。明青灰色粒少量、酸化鉄、炭化物、灰白色粒微量含む。
- 10 灰色土：粘土質。灰白色粒少量、酸化鉄、炭化物、灰色ブロック微量含む。
- 11 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒微量含む。
- 12 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック少量、酸化鉄、炭化物微量含む。粘性やや強。
- 13 灰色土：粘土質。灰色粒・ブロック、灰白色粒少量、酸化鉄、炭化物微量含む。
- 14 灰色土：粘土質。灰色ブロック多量、酸化鉄、灰白色ブロック多量含む。
- 15 灰白色土：シルト質。灰色ブロック少量、黒色粘土粒・ブロック、酸化鉄、炭化物微量含む。
- 16 黒色粘土：腐食した植物繊維少量、灰白色粒・ブロック微量含む。
- 17 灰色粘土：酸化鉄、炭化物、灰色粘土ブロック、灰白色シルト粒微量含む。
- 18 灰色土：シルト質。酸化鉄。炭化物、灰白色粒微量含む。
- 19 灰色粘土：酸化鉄。炭化物、灰色粘土ブロック、灰白色シルト粒微量含む。
- 20 灰色粘土：灰白色シルト粒少量、酸化鉄、炭化物微量含む。
- 21 灰色土：シルト質。灰白色シルト粒多量、酸化鉄少量、炭化物、灰色粒微量含む。
- 22 灰色粘土：灰白色シルト粒、明緑灰色シルト粒少量、酸化鉄、炭化物微量含む。
- 23 灰白色土：粘土質。灰色ブロック、灰白色シルトブロック多量、酸化鉄微量含む。
- 24 灰色粘土：灰色粘土ブロック多量、灰白色シルト粒、腐食した植物繊維、明緑灰色シルト粒・ブロック少量含む。
- 25 灰白色土：シルト質。灰白色シルト粒・ブロック多量含む。
- 26 灰色粘土：明緑灰色シルト粒・ブロック多量含む。



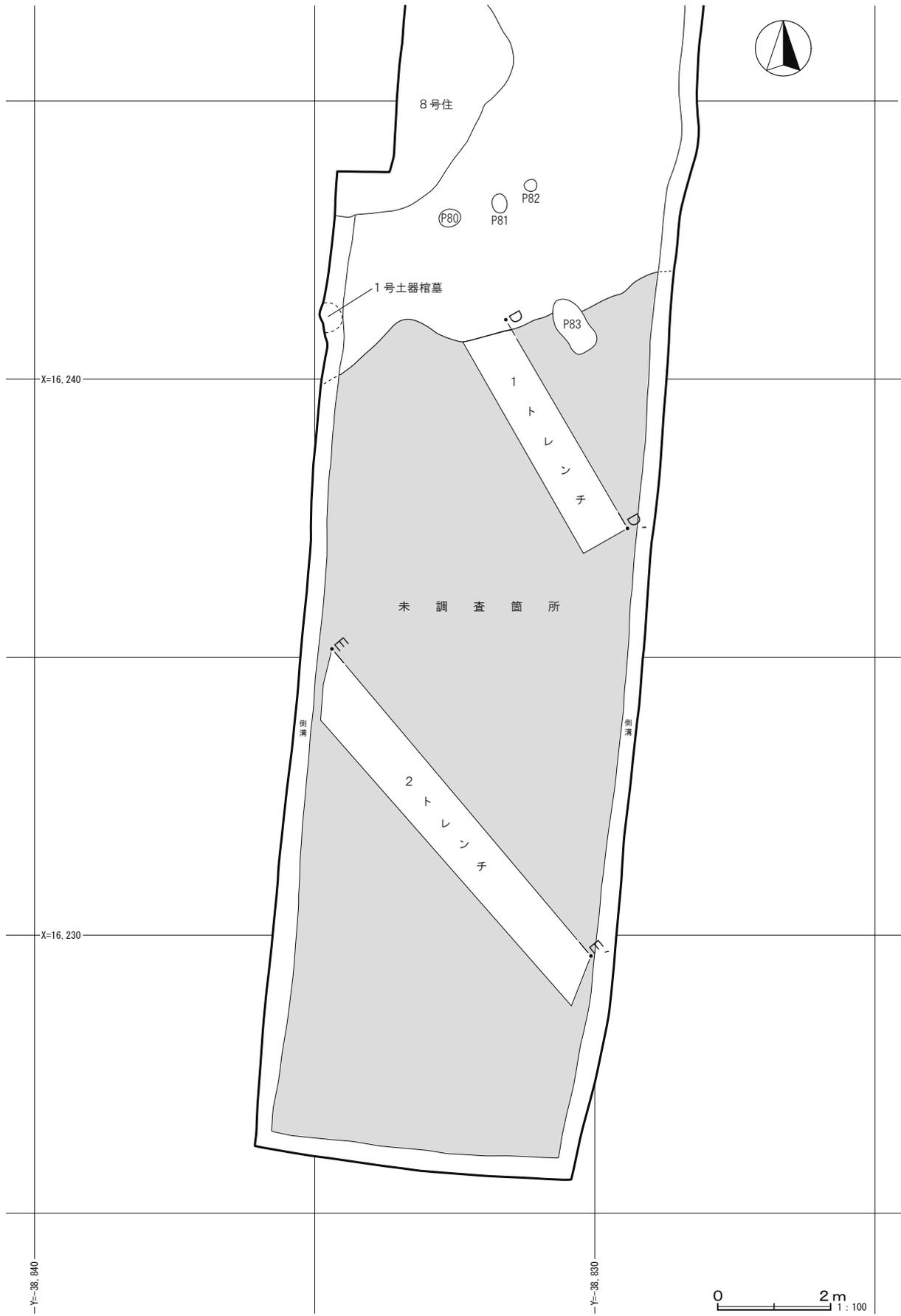
第 69 図 第 1 号河川跡 (4)

河川跡も同様の川幅であったと思われる。

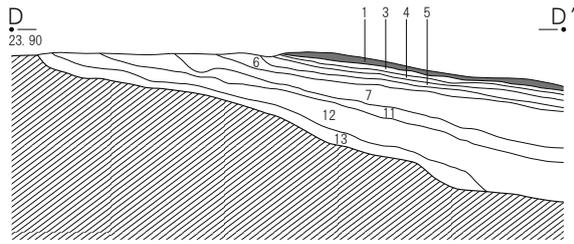
調査は、第 1 区が立ち上がり付近全面、第 2 区は幅狭い調査区東側を除くほぼ全面を川底まで掘り下げた。第 3 区は、トレンチを 2 本入れたが、遺物が皆無であったため、全面掘削は行わなかった。覆土は、川底まで最大 1.4 m 程掘り下げた第 2 区をはじめ、各区で多くの層が確認されたが、特記すべき事項としては、火山灰 (H r - F A) が確認されたことが挙げられる。火山灰 (H r - F A) は、第 2・3 区の覆土上位において層として明確に確認されたことから、本河川跡の流路の変更時期を考える上で重要な鍵となる。また、第 1 区では確認されなかったが、立ち上がりから離れて堆積している状況を考慮すると、調査区外南側に堆積している可能性が高い。

出土遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代に大別され、縄文時代は後期と晩期、古墳時代は前期と後期に分けられる。このうち、最も多く出土したのは弥生時代であり、時期は中期後半～末に限定される。出土量は、各区の調査面積などにもよるが、図示可能な遺物は、第 1 区と第 2 区に限定され、僅かに第 2 区の方が多い。時代別では、縄文時代は時期を問わず、第 2 区からの出土が多い。弥生時代中期後半～末と古墳時代前・後期は、ほぼ同数の出土である。

出土遺物 (第 72・73 図) は、縄文時代後・晩期の深鉢 (1・4・5)、浅鉢 (2・3)、弥生時代中期後半～末の壺 (6～10・13～33)、甕 (11・12・34～61)、高坏 (62～64)、蓋 (65)、筒形土器 (66)、磨製石斧 (67)、古墳時代前期の土師器壺 (68)、甕 (69)、古墳時代後期の須恵器高坏 (70)、土師器甕 (71～73)、高坏 (74)、古墳時代前期以降と思われる木製品の脚付盤 (75) があり、この他にも写真のみの掲載であるが、桃の種子 (写真図版 53) が第 2 区で出土した。また、第 2 区では、川底ほぼ全面から木片が多数出土しており、75 もそれらに混じって出土した。土器は、摩耗の著しいものが大半を占

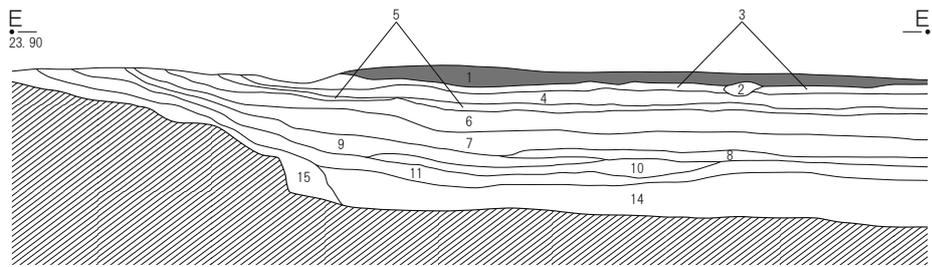


第70図 第1号河川跡(5)



土層説明 (D D' E E')

- 1 黒色粘土：火山灰 (H r - F A) 多量、酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒少量含む。
- 2 灰色粘土ブロック
- 3 灰色粘土：黒色粘土多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。
- 4 暗灰色粘土：黒色粘土、炭化物多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。
- 5 灰色粘土：黒色粒、酸化鉄、灰白色粒、マンガン少量含む。
- 6 灰色粘土：酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。4層より明るい。
- 7 灰白色粘土：酸化鉄、マンガン粒少量含む。



- | | |
|----------------------|--------------------------------------|
| 8 オリーブ褐色粘土 | 12 暗灰色粘土：酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。 |
| 9 暗オリーブ褐色粘土 | 13 灰白色粘土：暗灰色粘土、灰色粘土多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。 |
| 10 暗オリーブ褐色粘土：9層より暗い。 | 14 暗褐色シルト |
| 11 黒色土：腐食した植物繊維層。 | 15 暗灰色粘土 |

0 2 m 1:60

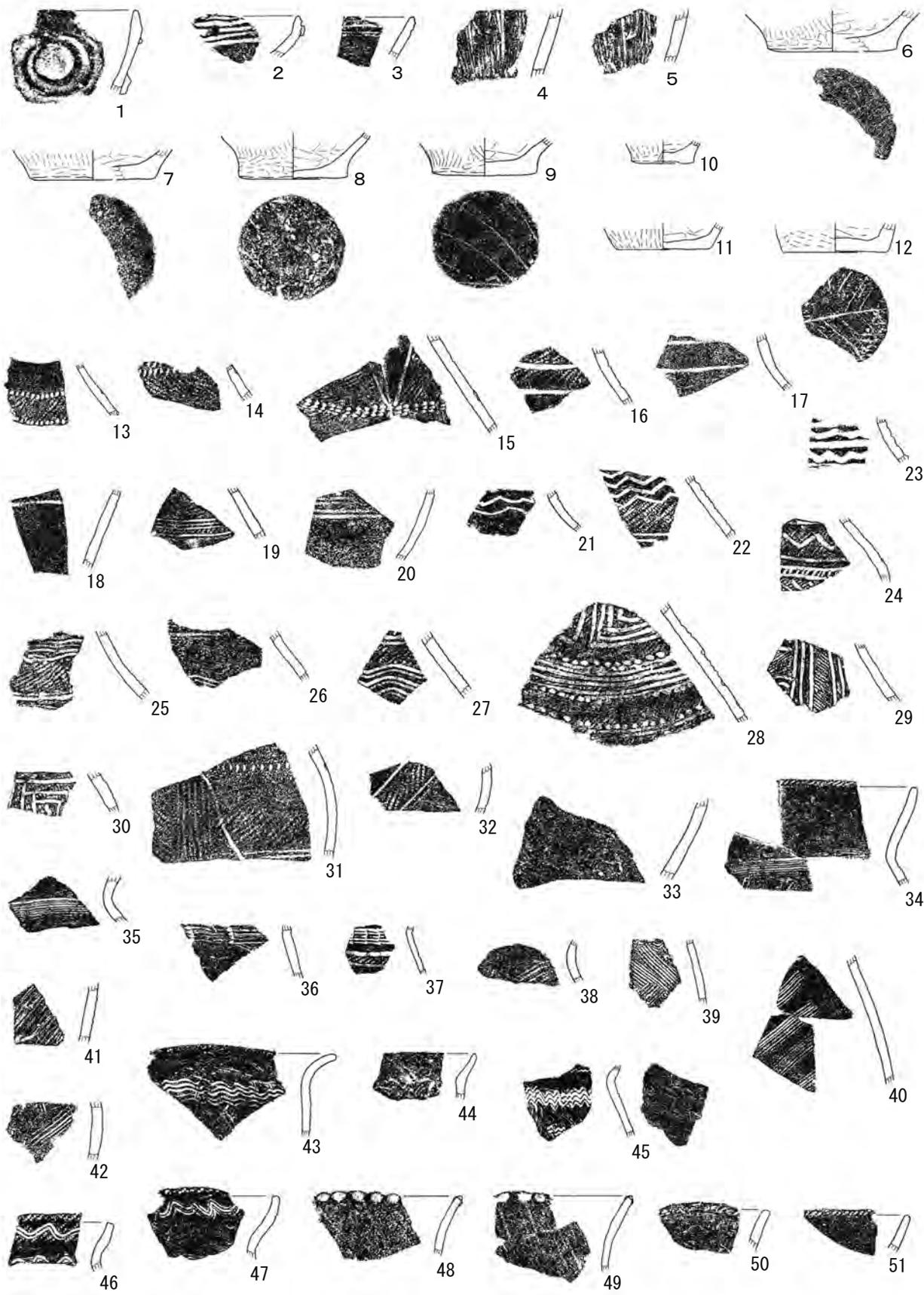
第 71 図 第 1 号河川跡 (6)

める。

1～5は、縄文土器である。1は、縄文時代後期後葉高井東式の深鉢の口縁部片である。波状口縁部外面に円形の隆帯が付く。内面調整は、不明である。胎土が粗い。2～5は、縄文時代晩期末の土器である。2・3は、浮線文土器浅鉢の口縁部から体部までの破片である。外面の文様は、口縁部に眼鏡状ないし平行の浮線文が巡り、2は連結部に瘤が付き、体部に無節Lが施文されている。3の体部は、無文である。2の内面、3の体部外面無文部と内面の調整は、横位のヘラミガキである。同一個体の4・5は、深鉢の胴下部片である。外面に縦位の粗い条痕が施されている。内面調整は、横・斜位のヘラナデである。いずれも胎土がやや粗い。

6～67は、弥生時代中期後半～末の遺物である。67のみ石器、その他は土器である。6～10・13～33は、壺である。破片は、判別の難しいものもあるが、中部高地栗林式系ないしその可能性が高いものがある。6～10は、底部である。円柱状を呈するものが多い。10のみ小振りであり、他の器種の可能性がある。調整は、すべて外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。底面に6は細かい網代痕、9は木葉痕がみられた。7・8は、種子圧痕と思われる凹みが7は1つ、8は複数みられた。壺としたが、甕の可能性もある。

13～15は、外面に刺突列が横位に巡る破片であり、肩部から胴上部までに収まる。刺突は、13が半円形、14が爪形、15は3本一単位の櫛歯状工具による簾状文状を呈する。13は、無文部下に刺突列が上下に2列巡り、間にLR単節縄文が充填されている。14は、上位に刺突列が2列巡り、下位にRL単節縄文が施文されている。15は、中段に巡る簾状文状の刺突列上にヘラで上向きの鋸歯文が描かれており、鋸歯文内にLR単節縄文か無節Lが充填されている。縄文は、刺突列下にも施文されている。上位の鋸歯文外は、無文である。調整は、13の外面無文部、14の内面が不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、13の内面が横位、15の外面無文部は斜位、内面は横・斜位に施



0 10 cm 1:4

第 72 图 第 1 号河川跡出土遺物 (1)

されている。14は、胎土に赤色粒子を多量含む。

16～18は、外面にヘラ描きの平行沈線が巡る破片である。16・17は頸部から肩部まで、18は胴下部の破片である。16・17は、中部高地栗林式系である。太い平行沈線が間隔を空けて巡る。16は、下位の平行沈線より上にLR単節縄文が施文されているが、平行沈線下の無文部に一部はみ出ている。17は、無文地に平行沈線が巡る。18は、上位に平行沈線が巡り、下位は無文である。調整は、17の外面無文部と内面が不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、16・18の外面無文部が斜位、16の内面は横位、18の内面は横・斜位に施されている。

19・20は、外面に櫛歯状工具による直線文が横位に巡る破片である。19は胴上部、20は胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、19が5本、20は2本である。19は、下位に直線文が1条巡る。地文にLR単節縄文が施文されている。20は、上位に直線文が2条巡り、下位は無文である。調整は、19の内面が横・斜位のヘラミガキ、20は外面無文部が不明、内面は横位のヘラミガキである。20は、胎土が粗い。

21は、外面上位にヘラ描きの波状文2条が横位に巡る肩部片である。波状文下に細かいRL単節縄文が施文されている。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。

22～24は、外面にヘラ描きの平行沈線と横位の波状文ないし山形文が巡る破片である。22・23は肩部、24は胴上部の破片である。23・24は、中部高地栗林式系である。22は、上位にやや太い山形文が4条、下位に細い平行沈線が3条巡り、間にLR単節縄文が施文されている。23は、太い平行沈線と波状文が交互に巡る。24は、平行沈線が4条巡り、間隔を空けた上2条の平行沈線間に太い山形文が1条巡る。下位は、間隔を狭めて巡る2条の平行沈線間に爪形の刺突列が1列巡り、以下に斜線文か重三角文が描かれている。地文にLR単節縄文が施文されている。内面調整は、すべて横位のヘラミガキである。

25～27は、外面に櫛歯状工具による波状文ないし山形文と直線文が横位に巡る破片であり、肩部から胴上部までに収まる。櫛歯の数は、すべて2本である。25は、上位に緩い波状文が3条、下位に直線文が2条巡る。地文にLR単節縄文が施文されている。26は、上位に直線文、下位に山形文が巡り、地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。27は、上位に直線文が1条、下位に波状文が3条巡り、間に無節Lが施文されている。内面調整は、27が横・斜位のヘラミガキ、その他は不明である。25は胎土が粗く、26はやや粗い。

28～31は、外面に重四角文が描かれた破片である。28～30はヘラ、31は2本一単位の櫛歯状工具で描かれている。28～30は肩部から胴上部までに収まり、31は胴上部から中段までの破片である。28は、上下に重四角文が描かれており、重四角文間は円形刺突列2列と間に平行沈線が5条巡る。沈線が太い。上位の刺突列は段に巡り、下位の重四角文上にも同じ刺突列が巡る。地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。29は、重四角文内上位に平行沈線、下位に波状文が2条巡り、間に細かいLR単節縄文が充填されている。LR単節縄文は、重四角文間にも充填されている。30は、重四角文内中央に太い波状文が1条垂下する。中部高地栗林式系の胴部外面にコの字重ね文が描かれた甕の可能性もある。地文にLR単節縄文が施文されている。31は、重四角文内上位に爪形の刺突列が1列、中段に波状文が2条巡る。地文にLR単節縄文が施文されている。内面調整は、すべてヘラミガキであり、28

～30は横・斜位、31は横位に施されている。

32は、外面に櫛歯状工具で重三角文か連弧文が描かれた胴部中段の破片である。櫛歯の数は、2本である。区画内に無節Lが縄目を縦位になるように充填されている。外面無文部と内面の調整は、ヘラミガキであり、前者は横・斜位、後者は横位に施されている。

33は、無文の胴下部片である。外面の調整は不明であるが、内面は横位のヘラミガキである。胎土がやや粗い。甕の可能性もある。

11・12・34～61は、甕である。12・13は、底部である。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。12は、底面に木葉痕と種子圧痕と思われる凹みが1つみられた。壺の可能性もある。

34～47は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた中部高地栗林式系の破片である。34～37は、頸部外面に簾状文ないし直線文が横位に巡る破片であり、口縁部から胴上部までに収まる。櫛歯の数は、同一個体の34・35が7本、36は4本、37は5本である。34・35は、頸部に直線文が巡る。直線文以外の外面文様は、口縁端部にLR単節縄文が施文され、胴上部は直線文と同じ工具で縦位の羽状文が描かれている。口縁部は、無文である。36は、頸部に簾状文が巡り、胴上部は同一工具で縦位の羽状文が描かれている。37は、頸部に簾状文が巡り、胴上部はヘラ描きの平行沈線が2条巡り、間にLR単節縄文が充填されている。簾状文上と平行沈線の上下は、無文である。調整は、ヘラミガキが主体となる。ヘラミガキは、34・35の口縁部外面無文部と内面、37の外面無文部が横位、36の内面は横・斜位に施されている。34・35の口縁部外面無文部下位は、ヘラミガキ前に施された横・斜位のハケメが残る。37の内面は、不明である。

38～41は、胴部外面に横位の羽状文が描かれた破片である。38～40は頸部から胴上部まで、41は胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、38が4本、39は7本、40は6本、41は不明である。横位の羽状文は、38・40がやや間隔を空けて、その他は密に描かれている。羽状文以外の外面文様は、39の頸部に同一工具による波状文が横位に巡る。38・40は、頸部が無文である、調整は、38・40の頸部外面無文部が横ナデ、39の内面は不明、その他はヘラミガキである。ヘラミガキは、38の胴上部外面無文部が横位、38・41の内面、40の胴部外面無文部と内面は、横・斜位に施されている。

42は、胴部外面に斜格子文と思われる文様が描かれた胴部中段の破片である。櫛歯の数は、5本である。櫛歯が交わっていないことから斜格子文ではない可能性もある。調整は、外面無文部が横位のヘラミガキ、内面は不明である。

43～47は、外面に波状文が横位に巡る破片であり、口縁部から胴上部までに収まる。櫛歯の数は、43が5本、44は不明、45・47は4本、46は2本である。波状文は、43・44が頸部に1条、45は胴上部に間隔を空けて2条以上、46は口縁部と頸部下位に各1条、47は口縁部に1条巡る。波状文は、43・46が緩く、44・45・47は煩雑である。波状文以外の外面文様は、43の口縁端部にLR単節縄文が施文され、胴上部は同一工具で横位の羽状文が描かれている。46は、口縁端部と口縁部の地文、47は口縁端部にLR単節縄文が施文され、47は頸部に櫛歯の一部が確認されたことから簾状文が巡る可能性がある。43・44の口縁部外面、45・47の頸部外面、46の頸部外面上位は、無文である。46・47は、口縁部が受け口状を呈することから胴部外面にコの字重ね文が描かれた甕の可能性もある。調整は、43の口縁部外面無文部、45の頸部外面無文部と内面、47の口縁部上位の内外面は、横ナデである。45は、

胴上部外面が横・斜位のハケメ、内面は斜位のハケメが施された後、部分的に斜位のヘラミガキが施されている。46の頸部外面上位無文部と内面、47の口縁部以下の内外面は、横位のヘラミガキである。43の内面、44の口縁部内外面は、不明である。

48・49は、外面にヘラで斜線文が描かれた口縁部から頸部までの破片である。同一個体である。斜線文以外の外面文様は、口縁端部に大きい刻みが施文されている。調整は、内外面ともに不明である。胎土が粗い。

50～59は、外面に縄文が施文された破片である。50～55はLR、56～58はRL単節縄文、59は無節Rである。LR単節縄文が施文された50～55は、50～52が口縁部、53は胴上部、54・55は胴部中段の破片である。縄文は、50～52が口縁端部、53～55は外面全面に施文されている。50～52の口縁部外面は、無文である。調整は、ヘラミガキが主体となる。ヘラミガキは、50の外面が横・斜位、50・53の内面、51の内外面は横位に施されている。50の外面は、やや粗く施されている。51は、外面下位にヘラミガキ前に施された横位のハケメが一部残る。52の外面は、横ナデである。52・54・55の内面は、不明である。52は、外面に輪積痕が一部みられた。53・55は、胎土がやや粗い。RL単節縄文が施文された56～58は、56が口縁部から頸部まで、57・58は胴部中段から下部までの破片である。縄文は、56が肥厚した口縁部を含む外面全面、57は外面全面、58は外面上位に施文されている。58の外面下位は、無文である。縄文以外の外面文様は、56の口縁端部に刻みが施文されている。調整は、57の内面が横・斜位の粗いヘラミガキ、その他は不明である。57は、胎土がやや粗く、58は粗い。無節Rが施文された59は、胴部中段から下部までの破片である。縄文は、外面全面に施文されている。内面調整は、斜位のヘラミガキである。

60・61は、無文の胴下部片である。調整は、60の外面が縦位のハケメ、内面は横・斜位のヘラミガキである。61は、内外面ともにヘラミガキであり、外面は縦・斜位、内面は上位が横位、下位は斜位に施されている。61は、壺の可能性もある。

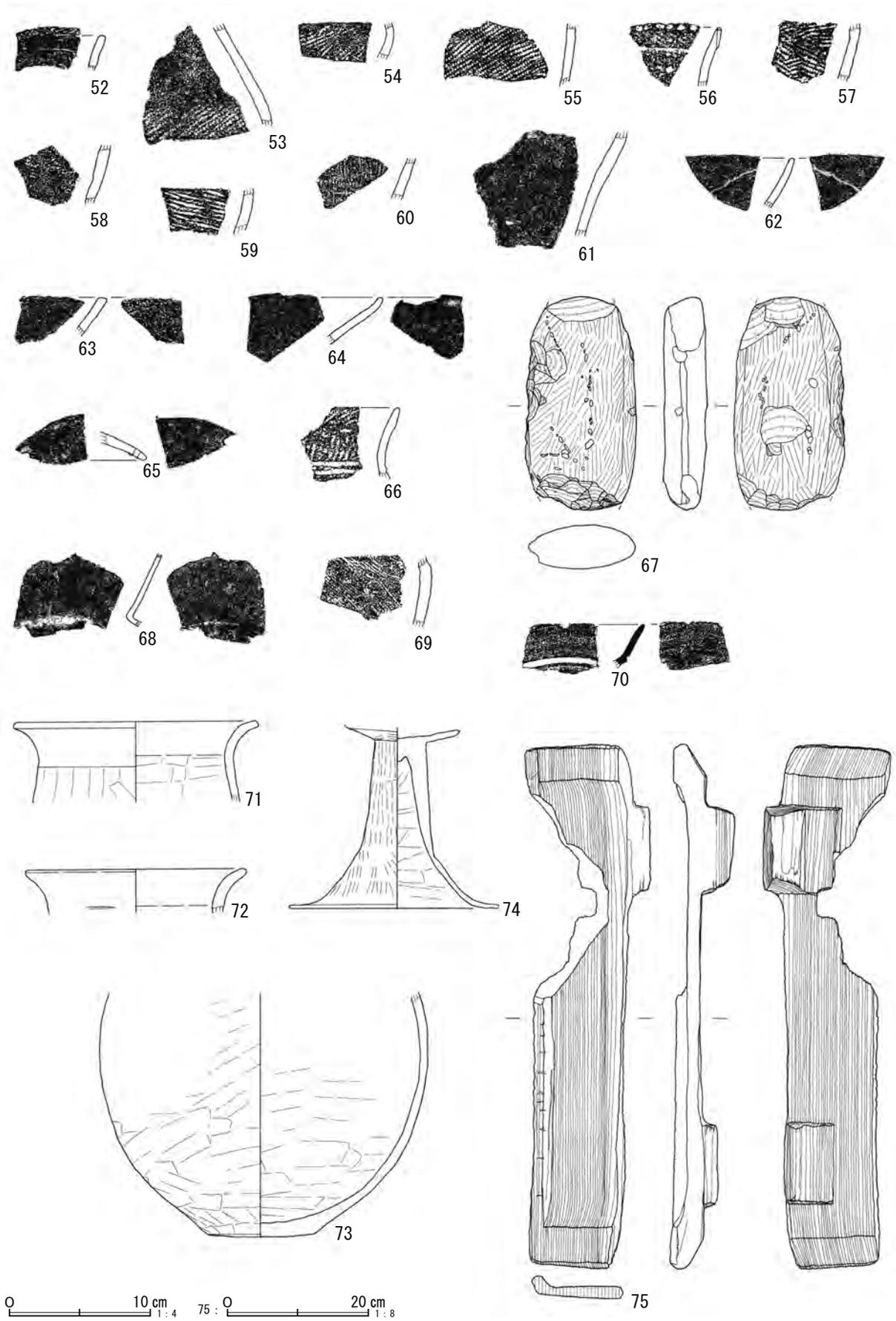
62～64は、中部高地栗林式系の高坏の破片であり、口縁部から坏部までに収まる。調整は、すべてヘラミガキであり、62・63は内外面ともに横位、64は外面上位と内面が横位、外面下位は斜位に施されている。すべて内外面に赤彩が施されているが、62はほぼ全面、63は大半が剥落している。

65は、中部高地栗林式系の蓋と思われる口縁部片である。調整は、外面が横位、内面は斜位のヘラミガキである。焼成前穿孔がみられたが、おそらく二個一対と思われる。内外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。蓋としたが、高坏の可能性もある。

66は、筒形土器の口縁部から頸部までの破片である。やや肥厚した口縁部を含む外面全面にLR単節縄文が施文され、頸部にヘラ描きの平行沈線が2条巡る。縄文は、口縁部が横位、以下は縄目が縦位になるように施文されている。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。筒形土器としたが、他の器種の可能性もある。

67は、粘板岩製の扁平な磨製石斧である。刃部をはじめ、所々を欠損している。

68・69は、古墳時代前期の土師器である。68は、小型丸底壺の口縁部下位から肩部までの破片である。調整は、内外面ともに縦位のヘラミガキであるが、内面はヘラミガキ前に施された横位のハケメが残る。器壁が薄く、焼成良好である。69は、甕の頸部から胴上部までの破片である。調整は、頸部外面が横ナデ、



第 73 图 第 1 号河川跡出土遺物 (2)

第17表 第1号河川跡出土遺物観察表

番号	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	第2区	縄文土器 深鉢	-	-	-	AHN	黒褐色	B	口縁部片	後期後。内外面摩耗顕著。
2	第2区	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABCDHIKN	灰黄褐色	B	口～体部片	晩期末。内面摩耗顕著。
3	第2区	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABDHIN	褐灰色	B	口～体部片	晩期末。内外面大半摩耗顕著。
4	第2区	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDHIKN	外：暗褐 内：黒褐	B	胴下部片	晩期末。No.5 同一個体。
5	第2区	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABCDHIKN	外：暗褐 内：にぶい黄橙	B	胴下部片	晩期末。No.4 同一個体。
6	第1区	弥生土器 壺	-	(2.95)	(9.0)	ABCDHIKN	外：にぶい赤褐 内：灰黄褐	B	底部30%	中期後。内外面摩耗顕著。
7	第1区	弥生土器 壺	-	(2.1)	(8.8)	ABCHN	外：にぶい黄褐 内：黒褐	B	底部30%	中期後。内外面摩耗。底面種子圧痕？凹み有。
8	第1区	弥生土器 壺	-	(3.3)	7.6	ABDHIKN	外：淡黄 内：黄灰	B	底部100%	中期後。内外面摩耗。底面種子圧痕？凹み複数有。
9	第2区	弥生土器 壺	-	(2.7)	7.3	ABHIKN	外：黒褐 内：灰黄褐	B	底部100%	中期後。内面やや摩耗。
10	第1区	弥生土器 壺	-	(1.65)	4.4	ABHIKN	暗灰色	B	底部100%	中期後。内外面摩耗顕著。
11	第2区	弥生土器 甕	-	(1.9)	(6.6)	ABDHIKN	灰黄褐色	B	底部45%	中期後。内外面摩耗顕著。
12	第1区	弥生土器 甕	-	(2.1)	(7.4)	ABCDHK	外：にぶい黄橙 内：淡黄	B	底部40%	中期後。内外面摩耗。底面種子圧痕？凹み有。
13	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：淡黄 内：黄灰	B	肩部片	中期後。内外面摩耗顕著。
14	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	中期後。内外面摩耗顕著。
15	第2区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	外：にぶい黄橙 内：灰白	B	肩～胴上片	中期後。外面やや摩耗。
16	第2区	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	外：にぶい橙 内：黒	B	頸～肩部片	中期後。内面やや摩耗。
17	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCEHIKN	にぶい黄橙色	B	頸～肩部片	中期後。内外面摩耗顕著。
18	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：黒褐 内：灰	B	胴下部片	中期後。内外面やや摩耗。
19	第2区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIK	外：にぶい黄橙 内：灰白	B	胴上部片	中期後。外面摩耗顕著。
20	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい黄橙 内：灰黄	B	胴中～下片	中期後。内外面摩耗顕著。
21	第2区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：褐灰 内：灰白	B	肩部片	中期後。
22	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	中期後。
23	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：灰 内：浅黄橙	B	肩部片	中期後。内外面やや摩耗。
24	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	黒色	B	胴上部片	中期後。内外面大半摩耗顕著。
25	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	中期後。内外面摩耗顕著。
26	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：浅黄 内：黄灰	B	肩～胴上片	中期後。内外面摩耗顕著。
27	第2区	弥生土器 壺	-	-	-	AHIKN	黒褐色	B	肩部片	中期後。内外面やや摩耗。
28	第2区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEHIKN	浅黄色	B	肩～胴上片	中期後。内外面摩耗顕著。
29	第2区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	灰黄褐 黒褐	B	肩部片	中期後。
30	第2区	弥生土器 壺	-	-	-	AHIN	黒褐色	B	胴上部片	中期後。
31	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：浅黄 内：褐灰	B	胴上～中片	中期後。外面摩耗顕著。
32	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：暗褐 内：褐灰	B	胴中段片	中期後。内外面摩耗顕著。
33	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄橙 内：黒褐	B	胴下部片	中期後。内外面摩耗顕著。
34	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	中期後。外面やや摩耗。No.35 同一個体。
35	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCEHIKN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	中期後。外面下位摩耗顕著。No.34 同一個体。
36	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：にぶい黄橙 内：黒褐	B	頸～胴上片	中期後。外面下位摩耗顕著。
37	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	中期後。内面摩耗顕著。
38	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	AHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	中期後。内外面やや摩耗。
39	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：黒褐 内：暗褐	B	頸～胴上片	中期後。内面摩耗顕著。
40	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	AHI	黒色	B	頸～胴上片	中期後。
41	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	胴中～下片	中期後。
42	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	胴中段片	中期後。内面摩耗顕著。
43	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	暗褐色	B	口～胴上片	中期後。内外面摩耗顕著。
44	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄色	B	口～頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
45	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	AHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	中期後。
46	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	口～頸部片	中期後。
47	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	B	口～頸部片	中期後。外面上位やや摩耗。
48	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCEHIKN	橙 色	B	口～頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。No.49 同一個体。
49	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCEHIKN	外：橙 内：灰黄	B	口～頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。No.48 同一個体。
50	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄 内：黒	B	口縁部片	中期後。
51	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIN	外：褐灰 内：灰褐	B	口縁部片	中期後。
52	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	にぶい橙色	B	口縁部片	中期後。内面摩耗顕著。外面輪積痕有。
53	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	中期後。内外面大半摩耗顕著。
54	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	褐灰色	B	胴中段片	中期後。内外面摩耗顕著。
55	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIN	外：にぶい褐 内：灰黄	B	胴中段片	中期後。内面摩耗顕著。
56	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHKN	にぶい黄橙 褐灰	B	口～頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
57	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	AHIKN	黒褐色	B	胴中～下片	中期後。外面摩耗顕著。
58	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	胴中～下片	中期後。内外面摩耗顕著。
59	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：灰白 内：黒褐	B	胴中～下片	中期後。内外面摩耗顕著。
60	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄褐 内：黒褐	B	胴下部片	中期後。外面摩耗顕著。
61	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDHIKN	外：浅黄橙 内：黒	B	胴下部片	中期後。
62	第1区	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDHIKN	灰黄 赤褐	B	口～坏部片	中期後。内外面摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。
63	第1区	弥生土器 高坏	-	-	-	ABDHKN	明赤褐 にぶい黄橙	B	口縁部片	中期後。内外面摩耗。内外面赤彩、大半剥落。
64	第2区	弥生土器 高坏	-	-	-	ABHIKN	赤 色	B	口～坏部片	中期後。内外面赤彩。
65	第2区	弥生土器 蓋	-	-	-	ABHIKN	黒褐色	B	口縁部片	中期後。外面赤彩、ほぼ剥落。焼成前穿孔有。
66	第1区	弥生土器 筒形	-	-	-	ABEHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	口～頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
67	第2区	磨製石斧	最大長 (15.45) cm、最大幅 8.0 cm、最大厚 3.15 cm。	重量 (626.5) g。						所々欠。粘板岩。
68	第1区	土師器 壺	-	-	-	ABDHKN	にぶい橙色	A	口～肩部片	古墳前。
69	第2区	土師器 甕	-	-	-	AHIKN	外：黒褐 内：にぶい黄橙	B	頸～胴上片	古墳前。

番号	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
70	第1区	須恵器 高坏	-	-	-	ABLN	灰色	B	口～坏部片	古墳後。末野産。
71	第1区	土師器 甕	(17.7)	(5.9)	-	BDEHIN	灰黄色	B	口～胴 20%	古墳後。
72	第1区	土師器 甕	(16.0)	(3.25)	-	ABDEHIKN	浅黄色	B	口縁部 20%	古墳後。
73	第2区	土師器 甕	-	(17.8)	7.7	ABCHN	外:にぶい赤褐色 内:にぶい曜	B	胴～底 40%	古墳後。内外面摩耗顕著。
74	第2区	土師器 高坏	-	(13.4)	(15.2)	ABCDIKN	にぶい橙色	B	接～脚 70%	古墳後。内外面摩耗顕著。
75	第2区	木製脚付盤	最大長 76.6 cm、最大幅 (15.2) cm、最大厚 7.0 cm。約半分欠。							

胴上部外面は斜位のハケメ、内面は斜位の粗いヘラミガキである。胎土がやや粗い。

70～74は、古墳時代後期の土器である。70は、須恵器高坏の口縁部から坏部までの破片である。坏部外面に太い平行沈線が1条巡る。調整は、内外面ともにロクロナデである。末野産である。71～74は、土師器である。71・72は、長胴甕の口縁部から胴上部までに収まる部位である。短い口縁部が大きく外反し、71の胴上部は下位に向かってやや膨らむ。調整は、口縁部内外面が横ナデ、胴上部外面はヘラ削り、内面はヘラナデである。72は、口縁部外面下位にヘラによる刻みがみられた。いずれも器壁が厚い。73は、丸胴甕の胴上部から底部までの部位である。やや縦長の球形を呈し、胴部中段付近に最大径を持つ。調整は、外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。74は、高坏の接合部から脚部までの部位である。脚部は円柱状を呈し、器壁の薄い裾部が大きく外反する。調整は、坏部外面が横ナデ、以下はヘラミガキ、脚部内面はヘラナデである。坏部内面は、剥離しているため不明である。

75は、古墳時代前期以降と思われる木製品の脚付盤(75)である。縦長の長方形を呈するが、約半分を欠く。身が浅く、底面両端に脚が削り出されている。樹種は不明である。

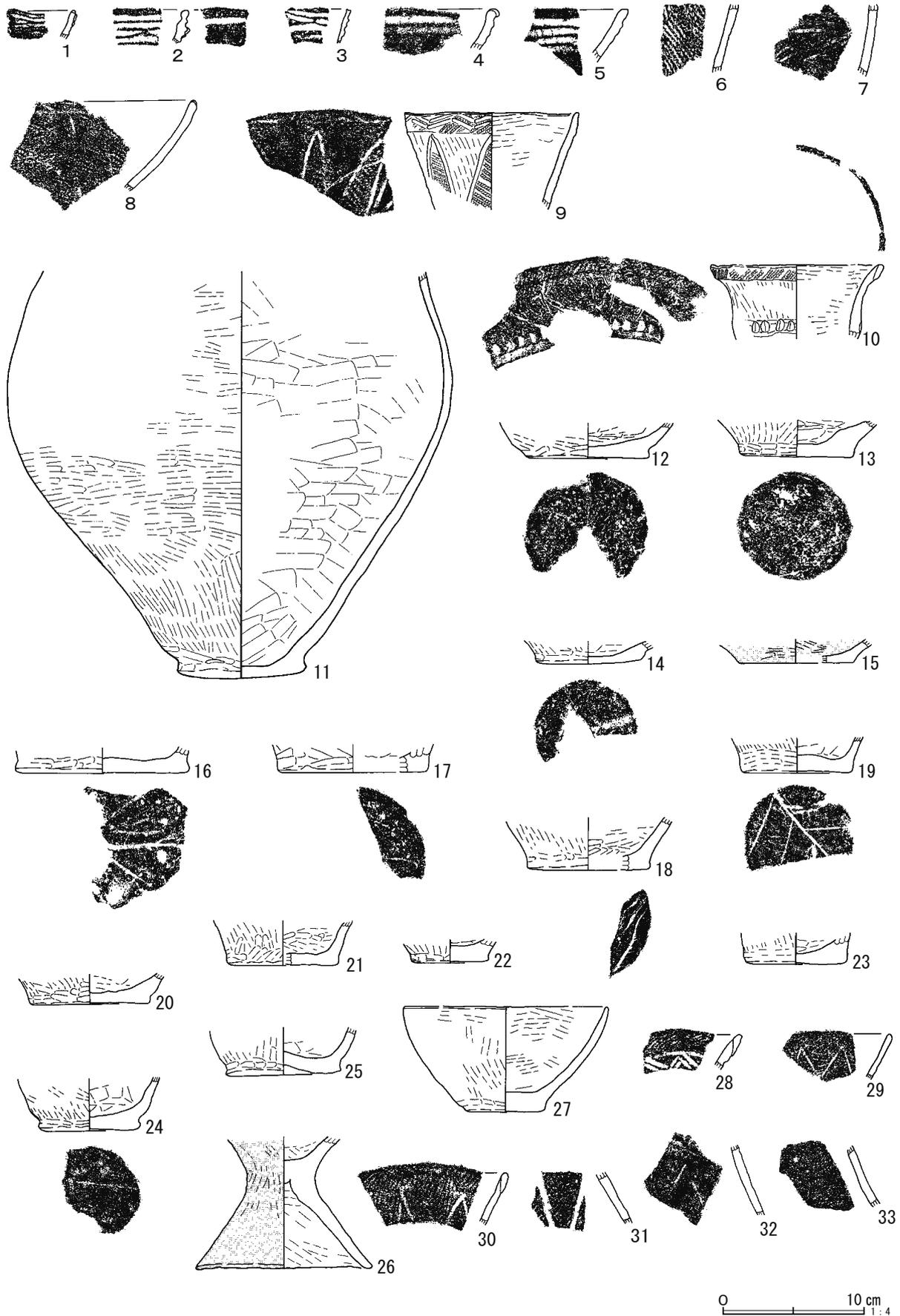
10 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、縄文時代から近世まで幅広く検出されている。最も多いのは、弥生時代中期後半～末の遺物であり、出土位置は竪穴住居跡などが多数検出された第1区(2009(平成21)年度第2次調査)が多い。また、時代・時期別にみても第1区の出土が多い。なお、本報告では、弥生時代中期後半～末と古墳時代後期以外の遺構は、明確に確認されていない。

出土遺物(第74～77図)は、縄文時代晩期末の浅鉢(1～5)、深鉢(6)、弥生時代中期初頭～前半の甕(7)、鉢(8)、弥生時代中期後半～末の壺(9・10・12～14・28～78)、広口壺(15・79)、甕(11・16～25・80～123)、高坏(26・124～126)、鉢(27)、筒形土器(127)、打製石斧(128)、磨製石斧(129)、磨石(130・131)、管玉(132)、古墳時代前期の土師器台付甕(133・134)、古墳時代後期の須恵器甕(135)、土師器坏(136・137)、甕(138・139)、甗(140・141)、鉢(142)、石製紡錘車(143)、平安時代の灰釉陶器瓶(144)、土師質土器坏(145)、中世の古銭(146)、近世の陶器播鉢(147)、磁器皿(148)がある。土器は、摩耗の著しいものが大半を占める。

1～6は、縄文時代晩期末の土器である。1～5は、浮線文土器浅鉢の口縁部から体部までの破片である。外面に眼鏡状ないし平行の浮線文が巡り、2は内面に平行沈線が1条巡る。1・4は口縁部が緩い波状を呈し、端部に突起が付く。3は口縁端部中央が沈線状に凹む。1・2・4の内面調整は、横位のヘラミガキである。3の内面、5の体部外面無文部と内面の調整は、不明である。6は、深鉢の胴下部片である。外面に撚糸文が施文されている。内面調整は、不明である。1は胎土がやや粗く、2・6は粗い。

7・8は、弥生時代中期初頭～前半の土器である。7は、甕の胴部中段の破片である。外面上位に



第 74 図 遺構外出土遺物 (1)

ヘラ描きの平行沈線が3条巡り、下位に横位の羽状文が描かれている。地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。胎土がやや粗い。8は、鉢の口縁部から体部までの破片である。緩い波状口縁部上位にヘラ描きの平行沈線1条が巡り、上に短い斜線文が描かれている。以下は、全面にLR単節縄文か無節Rが施文されている。内面調整は、いずれも横・斜位のヘラミガキである。

9～132は、弥生時代中期後半～末の遺物である。9～127は、土器である。9・10・12～14・28～78は、壺である。破片は、判別の難しいものがあるが、中部高地栗林式系ないしその可能性が高いものがある。9・10は、口縁部から頸部までの部位である。9は、やや肥厚した口縁部がほぼ直立し、頸部は逆ハの字状を呈する。外面の文様は、口縁部に2本一単位の櫛歯状工具による山形文が横位に1条巡り、地文にLR単節縄文が施文されている。頸部は、ヘラで上向きの鋸歯文が描かれ、鋸歯文内にLR単節縄文が充填されている。頸部外面無文部と内面の調整は、ヘラミガキである。10は、肥厚した口縁部がやや外反し、頸部はほぼ直立する。外面の文様は、端部を含む口縁部にLR単節縄文が施文され、頸部は半円形の大きい刺突列が施文された低い突帯が巡る。頸部外面無文部と内面の調整は、ヘラミガキである。12～14は、やや円柱状を呈する底部である。調整は、すべて外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。底面に12・13は種子圧痕と思われる凹みが複数、14は木葉痕がみられた。壺としたが、甕の可能性もある。

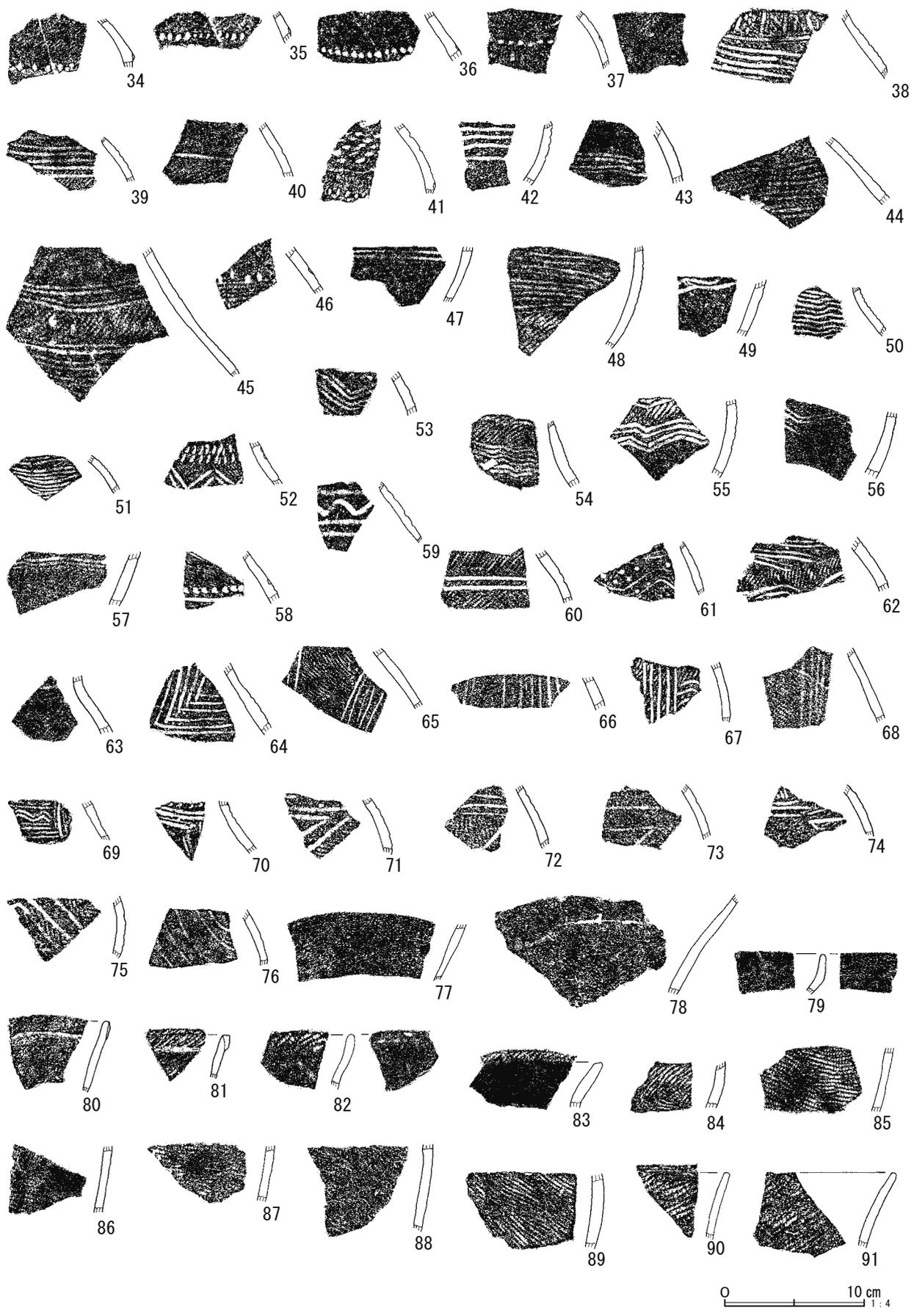
28は、口縁部から頸部までの破片である。肥厚した口縁部外面に無節Lが施文され、直下に2本一単位の櫛歯状工具による山形文が横位に巡る。内面調整は、横位のヘラミガキである。

29～32は、外面にヘラで鋸歯文が描かれた破片である。29・30は口縁部から頸部まで、31・32は肩部の破片である。29・30は、鋸歯文上にLR単節縄文が施文され、下は無文である。30は端部を含む肥厚した口縁部外面にLR単節縄文が施文されている。31・32は、上向きの鋸歯文内にLR単節縄文か無節Lが充填されている。鋸歯文上は、無文である。31は沈線が太く、32は細い。32は、上位にヘラ描きの波状文2条が横位に巡る。調整は、30の外面無文部と内面は不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、29の外面無文部が斜位、内面は横位、31の外面無文部と内面は斜位、32の外面無文部は斜位、内面は横・斜位に施されている。32は、胎土がやや粗い。

33は、無文の肩部片である。調整は、外面が斜位のヘラミガキ、内面は不明である。外面上位に種子圧痕と思われる凹みが1つみられた。

34～37は、外面に刺突列が横位に巡る胴上部片である。刺突は、34～36が半円形、37は横長の四角形状を呈する。34・35は、段に刺突列が巡り、段上はLR単節縄文か無節Lが施文されている。34の段下は、無文である。36は上位が無文であり、下位に刺突列が巡る。37は、刺突列上にヘラ描きの浅い平行沈線が2条巡り、下にもヘラで文様が描かれているが、詳細は不明である。調整は、34の外面無文部、37の内面が横位のヘラミガキ、34・35の内面、36の外面無文部と内面は不明である。37は、内面に種子圧痕と思われる凹みが1つみられた。

38～42は、外面にヘラ描きの平行沈線が巡る破片である。38～41は肩部から胴上部までに収まり、42は胴部中段から下部までの破片である。38・39・42は、沈線が太い。38は、中段以下に平行沈線が6条巡り、最上位の沈線は下位の5条とやや間隔を空けて巡る。上位は、ヘラ描きの沈線がほぼ等間隔に複数垂下する。地文にLR単節縄文が施文されている。39は、平行沈線6条がほぼ等間隔に巡る。



第 75 図 遺構外出土遺物 (2)

地文にLR単節縄文が施文されている。40は、中段に平行沈線が1条巡り、上位は無文、下位は無節Lが施文されている。41も中段に平行沈線が1条巡り、上位は爪形の刺突が複数施文され、下位はやや間隔を空けて同じ刺突列が1列巡る。地文にLR単節縄文が施文されている。42は、上位に平行沈線が4条巡り、下位は無文である。調整は、40の外面无文部が横位、42の外面无文部は斜位のヘラミガキである。内面は、すべて不明である。38・41は、胎土がやや粗く、39は粗い。

43～48は、外面に櫛歯状工具による直線文が横位に巡る破片である。43～46は肩部から胴上部までに収まり、47・48は胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、すべて2本である。43は、上位にLR単節縄文か無節Lが施文され、下位に直線文が3条巡る。44は、LR単節縄文下に直線文が5条巡る。45は、直線文が上位の無文部下に2条、LR単節縄文帯を挟んだ下に4条巡る。46は、無文部下に半円形の刺突列1列と直線文3条が巡る。47は、上位に直線文が巡り、下位は無文である。48は、上位に直線文が5条巡り、下位は無節Lが施文されている。調整は、47の外面无文部が横位のヘラミガキ、その他は不明である。45は、胎土がやや粗い。

49は、外面にヘラ描きの緩い波状文が横位に巡る胴部中段から下部までの破片である。波状文は、上位に2条巡る。下位は、無文である。調整は、外面无文部が斜位、内面は横位のヘラミガキである。

50～57は、外面に櫛歯状工具による波状文ないし山形文が横位に巡る破片である。50～54は頸部から胴上部までに収まり、55～57は胴部中段から下部までの破片である。櫛歯の数は、51・57が3本、その他は2本である。50・51は、緩い波状文が外面に複数巡る。52は、上位に爪形の刺突列が2列、下位に山形文が1条巡る。地文に細かいRL単節縄文が施文されている。53は、山形文が3条巡る。地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。54は、上位と中段以下に緩い波状文が巡る。中段以下の波状文は、3条である。地文に無節Lが施文されている。55は、上位と中段に波状文が2条巡り、下位は無文である。波状文施文部の地文に無節Lが施文されている。56は、上位に波状文が2条巡り、下位は無文である。上位の地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。57は、上位に緩い波状文が巡り、下位は無文である。調整は、51・52・56の内面が横・斜位、55・56の外面无文部は斜位のヘラミガキであり、その他は不明である。54は、外面下位に長方形の凹みがみられた。55・57は、胎土がやや粗い。

58～61は、外面にヘラ描きの平行沈線と横位の波状文が巡る破片であり、肩部から胴上部までに収まる。59は、中部高地栗林式系である。58は、上位に波状文、下位に半円形の刺突列1列と平行沈線2条が巡る。波状文と平行沈線間に細かい無節Rが施文されている。59は、上下に平行沈線、間に波状文が巡る。下位の平行沈線は、2条である。沈線が太い。60は、上位に緩い波状文、中段に平行沈線2条が巡る。地文に細かいLR単節縄文が施文されている。61は、平行沈線下に波状文がやや間隔を空けて2条巡り、円形の刺突がランダムに施文されている。沈線が細い。内面調整は、60が横位のヘラミガキ、その他は不明である。

62は、外面に櫛歯状工具による煩雑な直線文と波状文が横位に巡る胴上部片である。上位に直線文が3条、下位に緩い波状文が巡り、間にLR単節縄文が施文されている。内面調整は、不明である。

63は、外面にヘラ描きの平行沈線と櫛歯状工具による横位の波状文が巡る頸部から肩部までの破片である。上位に平行沈線が2条、やや間隔を空けて下位に4本一単位の波状文が巡る。調整は、外面

無文部が横位のヘラミガキ、内面は不明である。

64～70は、外面に重四角文が描かれた肩部から胴上部までに収まる破片である。64～68がヘラ、69・70は2本一単位の櫛歯状工具で描かれている。64は、沈線がやや太い。65～68は、複数の沈線が垂下する。65はやや傾いており、重四角文ではない可能性もある。67は、重四角文内に横位の波状文が3条巡る。66は縄文が施文されているか不明であるが、65・67・68は、地文にRL単節縄文が施文されている。69は、重四角文内に同一工具で短い波状文が1条横位に巡る。70は、重四角文上に半円形の刺突列が巡る。内面調整は、64の内面が横・斜位、69の内面は横位のヘラミガキであり、その他は不明である。66・68・69は、胎土がやや粗い。

71～75は、外面にヘラで重三角文が描かれた破片である。71～74は胴上部、75は胴部中段の破片である。71は、地文にRL単節縄文が施文されている。72は、重三角文内にLR単節縄文が充填されている。73・74は、縄文が施文されているか不明である。75は、重三角文内にRL単節縄文を充填する部分と無文部を交互に配置している。調整は、すべて不明である。71は、外面上位に種子圧痕と思われる凹みが1つみられた。72～74は、胎土がやや粗い。

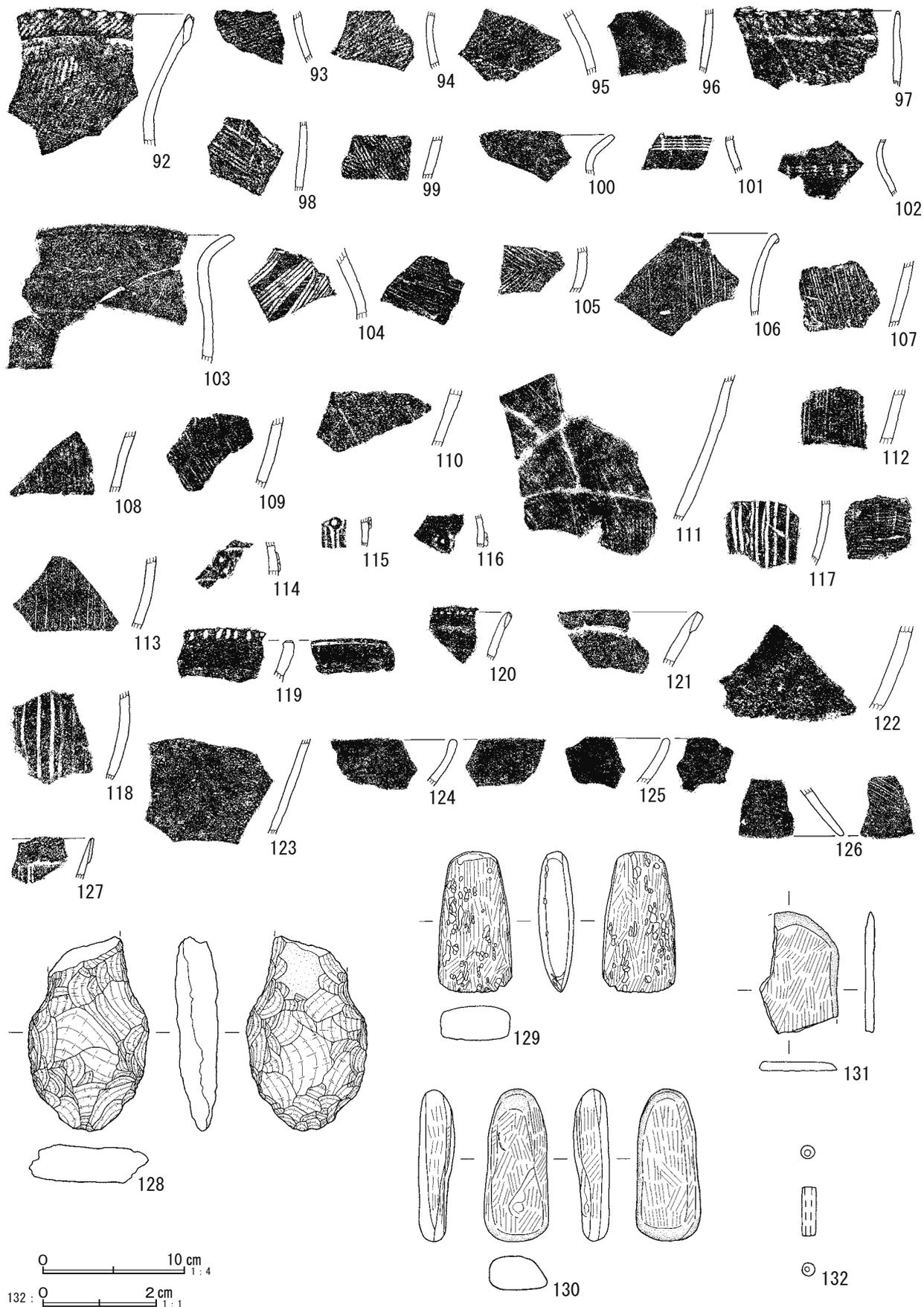
76は、ヘラで渦文が描かれた胴上部片である。東北南部川原町口式系であるが、胎土から在地産と思われる。調整は、外面が斜位のヘラミガキ、内面は不明であるが、輪積痕が一部みられた。

77・78は、無文の胴下部片である。調整は、77の外面が斜位、内面は横位のヘラミガキ、78の外面は不明、内面は横・斜位のヘラミガキである。78は、胎土がやや粗い。甕の可能性もある。

15・79は、広口壺である。15は、底部である。調整は、内外面ともにヘラミガキで赤彩が施されているが、大半が剥落している。広口壺としたが、他の器種の可能性もある。79は、受け口状を呈する口縁部から頸部までの破片である。調整は、内外面ともに横位のヘラミガキで赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。

11・16～25・80～123は、甕である。11は、胴上部から底部までの部位である。ピット68直上付近から出土した。全面無文である。胴部は倒卵形、底部は円柱状を呈する。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。16～25は、胴下部から底部までに収まる部位である。底部は、円柱状を呈するものが多い。25は、上げ底が顕著である。調整は、17が内外面ともにヘラナデ、21は内外面ともにヘラミガキ、その他は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。16は、胎土が粗い。16～19・24は、底面に木葉痕、22は外面に輪積痕がみられた。甕としたが、壺の可能性もある。

80～99は、外面に縄文が施文された破片である。80～84はLR、85～89はRL単節縄文、90～96は無節L、97～99はRである。LR単節縄文が施文された80～84は、80～83が口縁部から頸部まで、84は胴部中段の破片である。縄文は、80が肥厚した口縁部を含む外面全面、81は口縁端部と肥厚した口縁部を含む外面全面、82は端部を含む口縁部外面、83は口縁端部、84は外面全面に施文されている。調整は、80・81・84の内面が不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、82の頸部外面無文部と内面、83の口縁部外面無文部と内面が横位、83の頸部外面無文部は斜位に施されている。81は、胎土がやや粗い。82は、口縁部内面にイネの圧痕と思われる凹みが1つみられた。RL単節縄文が施文された85～89は、すべて胴部中段の破片であり、縄文は外面全面に施文されている。内面調整は、88が不明であるが、その他はすべてヘラミガキであり、85・86・89が横位、87は横・



第 76 図 遺構外出土遺物 (3)

斜位に施されている。85 は、胎土に角閃石を多量含む。88 は、胎土がやや粗い。無節Lが施文された90～96は、90～94が口縁部から頸部までに収まり、95は胴上部、96は胴部中段の破片である。縄文は、すべて外面全面に施文されており、90は口縁端部にも施文されている。縄文以外の外面文様は、92が肥厚した口縁端部に刻みが施文されている。内面調整は、94・95が不明であるが、その他はすべてヘラミガキであり、90～92が横位、93・96は横・斜位に施されている。95は、胎土に白雲母を多量含む。無節Rが施文された97～99は、97が小さい波状を呈する口縁部から胴上部まで、98は胴部中段、99は胴部中段から下部までの破片である。縄文は、すべて外面全面に施文されている。内面調整は、すべて不明である。97は、口縁部外面に輪積痕がみられた。97・98は、胎土が粗い。97は、弥生時代初頭～中期前半まで遡るかもしれない。

100～113は、外面に櫛歯状工具で文様が描かれた破片である。100～105は、中部高地栗林式系である。100～102は、頸部外面に簾状文が横位に巡る破片であり、口縁部から胴上部までに収まる。櫛歯の数は、100が不明、101は5本、102は4本である。簾状文以外の外面文様は、100の口縁端部にLR単節縄文が施文されている。100の口縁部、101の胴上部、102の口縁部と胴上部外面は、無文である。調整は、102が不明であるが、その他はすべて外面無文部と内面に横位のヘラミガキが施されている。102は、胎土に赤褐色粒子を多量含む。103は、胴部外面に縦位の羽状文が描かれた口縁部から胴部中段までの破片である。櫛歯の数は、4本前後と思われる。羽状文以外の外面文様は、口縁端部にLR単節縄文が施文され、頸部に羽状文と同一工具による波状文が1条巡る。口縁部外面無文部と内面の調整は、不明である。104・105は、胴部外面に横位の羽状文が描かれた破片である。104は頸部から胴上部まで、105は胴部中段の破片である。櫛歯の数は、104が4本、105は不明である。横位の羽状文は、104がやや間隔を空けて、105は密に描かれている。羽状文以外の外面文様は、104の頸部に羽状文と同一工具による簾状文が横位に巡る。調整は、104の外面が斜位のハケメ、内面は斜位の粗いヘラミガキであるが、内面はヘラミガキ前に施された斜位のハケメが残る。105の内面は、斜位のヘラミガキである。105は、胎土がやや粗い。

106～113は、外面に直線文ないし斜線文が複数垂下する破片である。106は口縁部から頸部まで、107～113は胴下部の破片である。109～111は、同一個体である。106・108・112・113は直線文、その他は斜線文である。櫛歯の数は、106が7本、107・108・112は不明、109～111は6～7本、113は5本であり、いずれも細い。直線文が施文された106・108・112・113は、106が肥厚した口縁部以下、その他は全面に施文されている。113は、地文に無節Rが施文されており、コの字重ね文の可能性はある。斜線文が施文された107・109～111は、すべて外面全面に施文されている。内面調整は、106～108・112が不明であるが、109～111は横・斜位、113は横位のヘラミガキである。106・107は、胎土がやや粗く、106は白雲母、107は石英を多量含む。106は、外面下位にイネの圧痕と思われる凹みがみられた。

114～118は、胴部外面にヘラでコの字重ね文が描かれた中部高地栗林式系と思われる破片である。114～116は胴上部、117・118は胴部中段から下部までの破片である。114～116は、中央に円形の刺突が刻まれたボタン状貼付文が付く。117は、コの字重ね文内中央にヘラ描きの緩い波状文が1条垂下する。117・118は、沈線がやや太い。内面調整は、114～116が不明であるが、117は横・斜位のハケメ、

118は横・斜位のヘラミガキである。114・115・118は、胎土がやや粗い。

119～123は、ほぼ無文の破片である。119～121は口縁部から頸部まで、122・123は胴下部の破片である。口縁部は、120がやや受け口状を呈し、121・122は肥厚している。119・120は、口縁端部に刻みが施されている。調整は、120の内外面、123の内面は不明であるが、その他はすべてヘラミガキである。ヘラミガキは、119・121の内外面は横位、122は外面が斜位、内面は横位、123の外面は斜位に施されている。119は、内面の中段付近に種子圧痕と思われる凹みが1つみられた。121・122は、胎土がやや粗い。

26・124～126は、中部高地栗林式系の高坏である。31は、接合部から脚部までの部位である。脚部がハの字に開く。器壁が厚い。調整は、外面と坏部内面がヘラミガキ、脚部内面はヘラナデである。124・125は、口縁部から坏部まで、126は脚部の破片である。調整は、ヘラミガキが主体となる。ヘラミガキは、124が内外面ともに横位、125は外面が横・斜位、内面は横位、126は外面が斜位に施されている。126の内面は、上位が斜位のハケメ、下位は横位のヘラミガキである。26の外面、124・125の内外面、126の外面は赤彩が施されているが、26・124はほぼ全面、125・126は大半が剥落している。

27は、全形の分かる無文の鉢である。口縁部から体部が半球形を呈し、底部はやや円柱状を呈する。調整は、内外面ともにヘラミガキである。器壁が厚い。

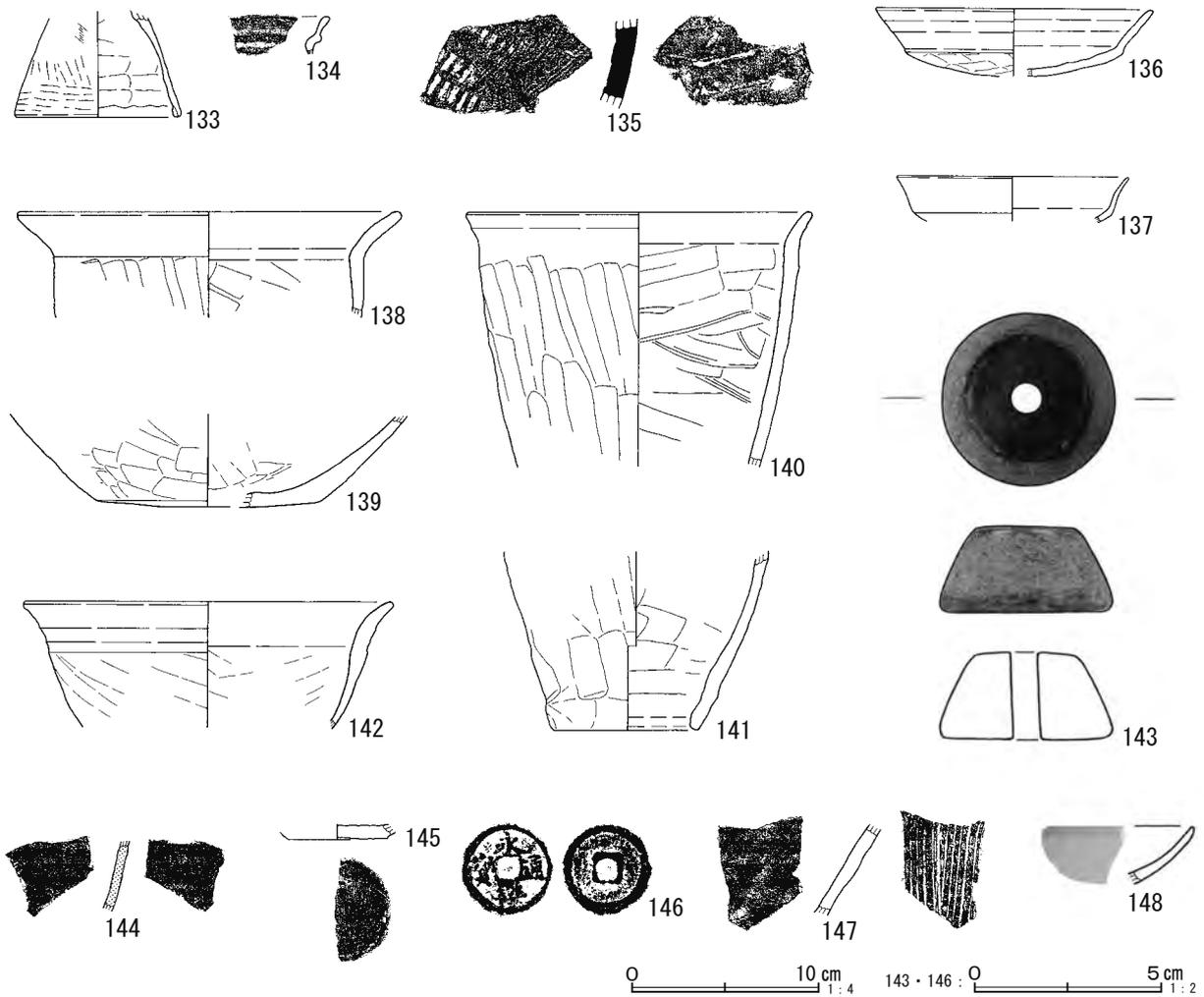
127は、筒形土器の口縁部から頸部までの破片である。外面の文様は、頸部以下に単位不明の櫛歯状工具による直線文が垂下する。肥厚した口縁部を含む外面全面の地文にLR単節縄文か無節Lが施文されている。内面調整は、不明である。壺の可能性もある。

128～131は、石器・石製品である。128は、粘板岩製の打製石斧である。基部を欠くが、中央付近の側面に深い抉り込みが入る。129は、片岩製の磨製石斧である。完形品である。刃部に刃こぼれが生じている。130は、砂岩製の磨石である。完形品である。やや厚手で楕円形を呈する。131は、泥岩製の砥石である。大半を欠く。

132は、緑色凝灰岩製の管玉である。片端一部を欠く。1cm未満と短い。片側穿孔である。

133・134は、古墳時代前期の口縁部がS字状を呈する土師器台付甕である。133は、ハの字に開く台部である。器壁が薄く、台部裾を内側に折り返している。調整は、外面がヘラミガキであるが、ヘラミガキ前に施されたハケメが一部残る。内面は、ヘラナデである。134は、S字状を呈する口縁部から頸部までの破片である。調整は、内外面ともに横ナデである。器壁が薄い。

135～143は、古墳時代後期の遺物である。135～142は、土器である。135は、須恵器甕の胴部中段から下部までの破片である。調整は、外面がタタキ、内面は回転ナデである。外面上位に自然釉が付着しており、内面は輪積痕が複数みられた。産地不明である。136～142は、土師器である。136は有段口縁坏、137は坏蓋模倣坏である。いずれも浅身で体部と底部の境に稜を持つ。口縁部は、136が逆ハの字に大きく開き、137は口縁部が外反する。底部は、いずれも平底に近いと思われる。調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底面はヘラ削りである。138・139は、甕である。138は、長胴甕の口縁部から胴上部までの部位である。最大径を持つ短い口縁部が逆ハの字に大きく開き、胴上部はほぼ直立する。調整は、口縁部内外面が横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。器



第 77 図 遺構外出土遺物 (4)

壁が厚い。139 は、丸胴甕の胴下部から底部までの部位である。調整は、外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。140・141 は、同一個体の甕である。接合関係は確認できなかった。短い口縁部の開きが小さく、底部に向かって緩やかに下る。調整は、甕と同じであるが、胴部内面はハケメに近い部分がみられた。胴上部の内面に輪積痕が一部みられた。142 は、鉢である。体部下位から底部を欠く。段を持つ口縁部が外反し、体部は内湾する。調整は、甕・甕と同じである。143 は、蛇紋岩製の石製紡錘車である。完形品である。側面の研磨が非常に粗い。

144・145 は、平安時代の土器である。144 は、灰釉陶器瓶の胴下部片である。調整は、外面上位と内面がロクロナデ、外面下位は手持ちヘラ削りである。産地不明である。145 は、酸化焰焼成による土師質土器の底部である。調整は、外面がロクロナデ、内面はヘラミガキが施された内黒である。底面に回転糸切痕が残る。

146 は、永楽通宝である。完形品である。本報告唯一の中世遺物である。

147・148 は、近世の遺物である。147 は、堺・明石系陶器播鉢の体部片である。外面調整は、外面がロクロナデと指頭圧痕である。内面は、単位不明の櫛目が縦位に施されている。148 は、肥前系磁器皿の口縁部から体部までの破片である。内外面に貫入がみられ、口縁部外面に二重圏線が巡る。

第18表 遺構外出土遺物観察表

番号	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	145・146-150・151G	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐色 内：黒褐色	B	口～体部片	晩期末。内外面摩耗顕著。
2	第1区	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABDKN	灰黄色	B	口～体部片	晩期末。
3	第1区	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABHIKN	灰黄褐色	B	口～体部片	晩期末。内外面摩耗顕著。
4	第2区	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABCDHIKN	外：浅黄褐色 内：灰白	B	口～体部片	晩期末。内外面摩耗顕著。
5	第3区	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ABCDIN	にぶい黄褐色	B	口～体部片	晩期末。内外面摩耗顕著。
6	第1区	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHIN	外：褐色 内：灰黄褐色	B	胴下部片	晩期末。内外面摩耗顕著。
7	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDHIKN	外：灰褐色 内：にぶい黄褐色	B	胴中段片	中期中～前。外面摩耗顕著。
8	第2区	弥生土器 鉢	-	-	-	ABHIKN	外：黒 内：灰黄褐色 黒褐色	B	口～体部片	中期中～前。外面摩耗顕著。
9	140-156G	弥生土器 壺	(12.6)	(7.05)	-	ABDHIKN	灰黄褐色	B	口～頸20%	中期中後。内外面摩耗顕著。
10	第2区	弥生土器 壺	(12.4)	(5.4)	-	ABCHN	外：橙 内：灰白	B	口～頸40%	中期中後。
11	140-156G	弥生土器 甕	-	(29.5)	9.2	ABEHIKN	灰黄褐色 灰黄	B	胴～底70%	中期中後。内外面摩耗顕著。
12	第1区	弥生土器 壺	-	(2.6)	8.9	ABCDK	外：浅黄褐色 内：灰黄褐色	B	底部70%	中期中後。内面摩耗。底面種子圧痕?凹み複数有。
13	第2区	弥生土器 壺	-	(2.75)	8.1	ABEHIKN	外：黒 内：灰	B	底部90%	中期中後。内外面摩耗。底面種子圧痕?凹み複数有。
14	第2区	弥生土器 壺	-	(1.7)	7.6	ABCDHKN	外：灰白 内：暗灰	B	底部55%	中期中後。内外面摩耗顕著。
15	第1区	弥生土器 大口壺	-	(1.75)	(8.3)	ABHIKN	赤 灰白	B	底部20%	中期中後。内外面摩耗。内外面赤彩、大半剥落。
16	第2区	弥生土器 甕	-	(1.9)	(12.4)	ABCDHIKN	橙 色	B	底部30%	中期中後。内外面摩耗顕著。
17	第1区	弥生土器 甕	-	(2.05)	(10.8)	ABHIKN	にぶい黄色	B	底部20%	中期中後。内外面摩耗顕著。
18	第1区	弥生土器 甕	-	(3.85)	(8.8)	ABCDHIKN	浅黄色	B	胴～底30%	中期中後。内外面摩耗顕著。
19	第3区	弥生土器 甕	-	(2.6)	7.9	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴～底60%	中期中後。内外面摩耗顕著。
20	第1区	弥生土器 甕	-	(2.2)	8.6	ABEHIKN	外：灰黄 内：褐灰	B	底部50%	中期中後。内外面摩耗顕著。
21	第1区	弥生土器 甕	-	(3.25)	(8.0)	ABCDHIN	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	B	胴～底45%	中期中後。内外面摩耗顕著。
22	第1区	弥生土器 甕	-	(1.7)	5.6	ABDEHIKN	外：灰白 内：黄灰	B	底部100%	中期中後。外面輪積痕有。
23	第3区	弥生土器 甕	-	(2.3)	(7.2)	ABCDHIKN	にぶい橙色	B	底部50%	中期中後。内外面摩耗顕著。
24	第3区	弥生土器 甕	-	(3.85)	(7.2)	ABCDHIKN	外：暗灰黄 内：にぶい黄褐色	B	胴～底45%	中期中後。内外面摩耗顕著。
25	第3区	弥生土器 甕	-	(3.55)	8.3	ABCDHKN	外：浅黄褐色 内：暗灰	B	胴～底50%	中期中後。内外面摩耗顕著。
26	第1区	弥生土器 高坏	-	(9.6)	12.6	ABHKN	橙 色	B	接～脚60%	中期中後。内外面摩耗。外面赤彩、ほぼ剥落。
27	140-155G	弥生土器 鉢	(14.8)	7.6	5.6	ABDEHKN	浅黄色	B	40%	中期中後。内外面摩耗顕著。
28	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	浅黄色	B	口～頸部片	中期中後。内外面やや摩耗。
29	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKN	外：にぶい黄褐色 内：灰白	B	口～頸部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
30	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	淡黄色	B	口～頸部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
31	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄褐色 内：黒褐色	B	肩部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
32	第2区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい黄褐色 内：黒褐色	B	肩部片	中期中後。外面摩耗顕著。
33	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	中期中後。内外面摩耗。外面種子圧痕?凹み有。
34	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：灰白 内：黄灰	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
35	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIN	淡黄色	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
36	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEHIKN	外：にぶい黄褐色 内：黄灰	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
37	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄 内：黒褐色	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗。内面種子圧痕?凹み有。
38	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	にぶい橙色	B	肩～胴上片	中期中後。内外面摩耗顕著。
39	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐色 内：黒褐色	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
40	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：淡黄 内：にぶい黄褐色	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
41	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：にぶい黄褐色 内：暗灰	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
42	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	浅黄色	B	胴中～下片	中期中後。内外面摩耗顕著。
43	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
44	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	灰 色	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。No.52同一個体。
45	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	黄灰 灰黄	B	肩～胴上片	中期中後。内外面摩耗顕著。No.51同一個体。
46	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：浅黄 内：黄灰	B	肩～胴上片	中期中後。内外面摩耗顕著。
47	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中～下片	中期中後。内外面摩耗顕著。
48	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	黄灰 灰白	B	胴中～下片	中期中後。内外面摩耗顕著。
49	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	にぶい褐色	B	胴中～下片	中期中後。内外面摩耗顕著。
50	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHKN	外：浅黄 内：灰白	B	肩部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
51	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：黒褐色 内：褐灰	B	胴上部片	中期中後。内外面やや摩耗。
52	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	灰黄褐色	B	肩部片	中期中後。内外面やや摩耗。
53	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐色 内：黒	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
54	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	にぶい橙色	B	頸～肩部片	中期中後。内外面摩耗。外面長方形凹み有。
55	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	外：暗褐色 内：にぶい黄褐色	B	胴中～下片	中期中後。内面摩耗顕著。
56	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：灰黄褐色 内：黄灰	B	胴中～下片	中期中後。内外面摩耗顕著。
57	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄褐色 内：黄灰	B	胴中～下片	中期中後。内外面摩耗顕著。
58	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	外：にぶい黄褐色 内：黄灰	B	肩～胴上片	中期中後。内面摩耗顕著。
59	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDKN	外：にぶい黄褐色 内：灰黄	B	肩～胴上片	中期中後。内外面摩耗顕著。
60	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：暗褐色 内：灰黄	B	胴上部片	中期中後。内外面やや摩耗。
61	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
62	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEHIKN	外：にぶい黄褐色 内：黄灰	B	胴上部片	中期中後。内面摩耗顕著。
63	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	B	頸～肩部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
64	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：にぶい黄褐色 内：黒	B	肩～胴上片	中期中後。内外面やや摩耗。
65	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIKN	外：にぶい黄褐色 内：暗灰黄	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
66	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCDHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
67	139-156G	弥生土器 壺	-	-	-	ABEHIKN	外：にぶい黄褐色 内：黄灰	B	胴上部片	中期中後。内面摩耗顕著。
68	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	外：灰黄褐色 内：浅黄	B	胴上部片	中期中後。内外面摩耗顕著。
69	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHIKN	暗灰黄色	B	肩部片	中期中後。内外面摩耗顕著。

番号	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
70	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	外:灰黄褐色 内:褐灰	B	肩部片	中期後。内外面摩耗顕著。
71	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCEH1KN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗。外面種子圧痕?凹み有。
72	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCH1KN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗顕著。
73	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDI1KN	にぶい黄褐色 黒褐色	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗顕著。
74	第3区	弥生土器 壺	-	-	-	ABHI1KN	黒褐色	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗顕著。
75	140-155G	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH1KN	浅黄色	B	胴中段片	中期後。内外面摩耗顕著。
76	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEH1KN	淡黄色	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
77	第1区	弥生土器 壺	-	-	-	ABCE1KN	浅黄褐色	B	胴下部片	中期後。内外面摩耗顕著。
78	140-156G	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEH1KN	外:にぶい黄褐色 内:褐灰	B	胴下部片	中期後。外面摩耗顕著。
79	第1区	弥生土器 大口壺	-	-	-	ABHK1N	褐灰色	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。
80	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDH1N	浅黄褐色	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
81	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1KN	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
82	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1K	暗褐色	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗。内面種子圧痕?凹み有。
83	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDH1KN	外:にぶい黄褐色 内:褐灰	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
84	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1KN	外:黒褐色 内:淡黄	B	胴中段片	中期後。内面摩耗顕著。
85	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1K	黒褐色	B	胴中段片	中期後。内面やや摩耗。
86	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHI1KN	暗褐色 にぶい黄褐色	B	胴中段片	中期後。外面摩耗顕著。
87	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABIK1N	外:にぶい褐色 内:黒褐色	B	胴中段片	中期後。外面摩耗顕著。
88	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1KN	外:にぶい黄褐色 内:灰黄	B	胴中段片	中期後。内外面摩耗顕著。
89	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDEH1KN	外:暗褐色 内:灰黄	B	胴中段片	中期後。内外面やや摩耗。
90	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1KN	黒褐色	B	口~頸部片	中期後。内面摩耗顕著。
91	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1N	黒褐色	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
92	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDH1KN	外:浅黄褐色 内:灰黄	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
93	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDH1KN	浅黄褐色	B	頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
94	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABIK1N	外:浅黄褐色 内:黒	B	頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
95	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCH1KN	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	B	胴上部片	中期後。内面摩耗顕著。
96	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1N	黒褐色	B	胴中段片	中期後。内外面大半摩耗顕著。
97	140-155G	弥生土器 甕	-	-	-	ABDEH1KN	外:浅黄褐色 内:灰黄	B	口~胴上片	中期後。内外面摩耗顕著。
98	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1KN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	中期後。内外面摩耗顕著。
99	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1KN	外:黒褐色 内:灰黄	B	胴中~下片	中期後。内面摩耗顕著。
100	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1N	灰黄褐色	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
101	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCH1KN	外:褐灰 内:浅黄褐色	B	頸~胴上片	中期後。内外面やや摩耗。
102	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABE1K	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	B	頸~胴上片	中期後。内外面摩耗顕著。
103	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1KN	黒褐色	B	口~胴中片	中期後。内外面摩耗顕著。
104	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCH1K	黒褐色	B	頸~胴上片	中期後。外面やや摩耗。
105	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABEHI1KN	外:黒褐色 内:にぶい褐色	B	胴中段片	中期後。内面摩耗顕著。
106	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1KN	黒褐色	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗。外面イネ圧痕?凹み有。
107	140-155G	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1N	外:暗褐色 内:浅黄褐色	B	胴下部片	中期後。内面摩耗顕著。
108	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHK1N	外:浅黄褐色 内:にぶい褐色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。
109	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCH1KN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	中期後。内外面摩耗。No.110・111 同一個体。
110	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDH1KN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	中期後。内外面摩耗。No.109・111 同一個体。
111	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCH1KN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	中期後。内外面摩耗。No.109・110 同一個体。
112	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ADHI1KN	黒褐色	B	胴下部片	中期後。内面摩耗顕著。
113	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1KN	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	B	胴下部片	中期後。内外面摩耗顕著。
114	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCD1KN	外:褐色 内:にぶい黄褐色	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗顕著。
115	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1KN	にぶい褐色	B	胴上部片	中期後。内面摩耗顕著。
116	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1KN	外:黒褐色 内:にぶい褐色	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗顕著。
117	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	AI1KN	黒色	B	胴中~下片	中期後。
118	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCH1N	外:灰褐色 内:にぶい黄褐色	B	胴中~下片	中期後。内面やや摩耗。
119	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABHI1N	外:灰黄褐色 内:黒	B	口~頸部片	中期後。外面摩耗。内面種子圧痕?凹み有。
120	第2区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1KN	外:にぶい黄褐色 内:黒	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
121	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDH1KN	外:黄灰 内:にぶい黄褐色	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
122	第3区	弥生土器 甕	-	-	-	ABDH1KN	外:黒褐色 内:にぶい褐色	B	胴下部片	中期後。外面摩耗顕著。
123	第1区	弥生土器 甕	-	-	-	ABCDH1KN	外:浅黄褐色 内:にぶい褐色	B	胴下部片	中期後。内外面摩耗顕著。
124	第1区	弥生土器 高坏	-	-	-	ABHI1KN	にぶい黄褐色	B	口~坏部片	中期後。内外面摩耗。内外面赤彩、ほぼ剥落。
125	第2区	弥生土器 高坏	-	-	-	ABHI1KN	赤褐色 にぶい黄褐色	B	口~坏部片	中期後。内外面摩耗。内外面赤彩、大半剥落。
126	第3区	弥生土器 高坏	-	-	-	ABCH1K	にぶい褐色	B	脚部片	中期後。内外面摩耗。外面赤彩、大半剥落。
127	第1区	弥生土器 筒形	-	-	-	ABCDH1KN	外:にぶい黄褐色 内:灰黄	B	口~頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
128	第1区	打製石斧	最大長(13.25)cm、最大幅(8.45)cm、最大厚(2.95)cm。重量(396.5)g。基部欠。粘板岩。							
129	第2区	磨製石斧	最大長9.95cm、最大幅5.2cm、最大厚2.5cm。重量(174)g。ほぼ完形。片岩。							
130	第1区	磨石	最大長10.75cm、最大幅4.5cm、最大厚2.45cm。重量160g。完形。砂岩。							
131	第1区	磨石	最大長(8.5)cm、最大幅(5.45)cm、最大厚(0.7)cm。重量(48.5)g。大半欠。泥岩。							
132	第3区	管玉	最大長0.88cm、最大径0.23cm、孔径0.08~0.12cm。重量(0.1)g。片端一部欠。緑色凝灰岩。							
133	第3区	土師器 台付甕	-	(5.8)	8.9	ABCH1KN	橙色	B	台部70%	古墳前。外面摩耗顕著。
134	第1区	土師器 台付甕	-	-	-	ABCDH1N	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	古墳前。内外面摩耗顕著。
135	第1区	須恵器 甕	-	-	-	ABHN	灰白色	B	胴中~下片	古墳後。産地不明。外面上位自然釉付着。
136	第1区	土師器 坏	(14.8)	3.6	-	ABEHK	明赤褐色	B	20%	古墳後。
137	第1区	土師器 坏	(12.4)	(2.45)	-	ABN	橙色	B	口~体25%	古墳後。内外面摩耗顕著。
138	第1区	土師器 甕	(20.6)	(5.7)	-	ABHI1KN	褐色	B	口~胴20%	古墳後。
139	第1区	土師器 甕	-	(5.0)	(11.9)	ABEHN	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	B	胴~底30%	古墳後。内面摩耗顕著。

番号	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
140	第2区	土師器 甗	(18.5)	(13.7)	-	ABCDHIKN	明赤褐色	B	口~胴 20%	古墳後。内外面やや摩耗。No.141 同一個体。
141	第2区	土師器 甗	-	(9.6)	7.7	ABCDHIKN	明赤褐色	B	胴~底 70%	古墳後。内外面摩耗顕著。No.140 同一個体。
142	第1区	土師器 鉢	(19.8)	(6.8)	-	ABCDHKN	橙色	B	口~体 30%	古墳後。内外面摩耗顕著。
143	第1区	石製紡錘車	最大径 4.5 cm、最大厚 2.3 cm、孔径 0.75 cm。完形。重量 65 g。蛇紋岩。							
144	第1区	灰釉陶器 瓶	-	-	-	AB	灰白色	A	胴下部片	平安。産地不明。
145	第1区	土師質土器 坏	-	(0.85)	5.4	ABHIKM	外：にぶい黄橙 内：黒	B	底部 50%	平安。内黒。酸化焰焼成。
146	第1区	古 銭	最大径 2.4 cm、孔径 0.58 cm、最大厚 0.1 cm。重量 g。完形。「永楽通寶」。楷書。初鑄年：明 1408 年。							
147	第1区	陶器 擂鉢	-	-	-	-	明赤褐色	A	体部片	19c 前。堺・明石系。
148	第1区	磁器 皿	-	-	-	-	灰白色	A	口~体部片	18c。肥前系。

V 調査のまとめ

前中西遺跡の報告は、今回で13回目となる。本遺跡は、縄文時代から近世まで続く複合遺跡であるが、中でも弥生時代の遺構・遺物の検出数が突出しており、今回の報告も弥生時代が主体となる。従って、ここでは弥生時代についてまとめてみたい。

本遺跡の弥生時代については、その特異性から2013（平成25）年にシンポジウムが開催され、詳細の一端が明らかになっている（関東弥生文化研究会ほか2013・2014）。出土土器を基にした時期区分は、①中期中葉新段階（池上式新段階）、②中期後半古段階（北島式古段階）、③中期後半中段階（北島式中段階）、④中期後半新段階（北島式新段階）、⑤中期末（用土・平遺跡段階）、⑥後期初頭（岩鼻Ⅰ式）、⑦後期前半（岩鼻Ⅱ式）の7期に区分され、長期にわたる大規模かつ当地域における拠点集落であったことが判明している。集落の動向については、開始期の①中期中葉新段階から②中期後半古段階までは小規模であるが、③中期後半中段階になると大規模になり、⑤中期末以降は縮小していく。遺構は、主に南関東の影響を受けた在地の系統を持ち続けるが、遺物は時期が下るにつれて中部高地の栗林式土器文化圏の影響を強く受けるようになり、在地と外来系の要素が融合した独自の地域社会が展開される。

以上を踏まえ、ここでは上記の時期区分に基づき、出土土器から本報告分の弥生時代集落の変遷を辿り、現時点における本遺跡全体の弥生時代の遺構分布状況を提示する。なお、栗林式土器との編年関係は、①が栗林1式、②が栗林2式古段階、③④が栗林2式新段階、⑤が栗林3式に併行する。

本報告地点では、弥生時代の住居跡が8軒検出されており、時期を特定し得る良好な土器が大量に出土している。また、土器棺墓も1基検出されている。以下、紙数に限りがあるため、まず出土土器から上記遺構の具体的な時期について述べ、石器・石製品についても特記事項を述べる。

第1号住居跡出土土器は、壺・甕ともに文様の簡素化が進み、栗林式系が多くみられる。壺は、全形の分かる第8図1に代表される頸部に文様が集約されたものが目立つ。甕は、胴部文様に縦位の羽状文が多くみられ、第8図3や第9図59・60のように煩雑に描かれたものが含まれる。以上の内容から、第1号住居跡の時期は、⑤中期末に相当すると思われる。

第2号住居跡出土土器は、全形の分かるものはないが、第13図1をはじめとする在地の壺は、文様が密に施文された北島式中段階に相当する。ただし、北島式の特徴の1つである肩部付近に設けられた段が弱い点、また判別が難しいものもあるが、栗林式系をやや多く含む点は、新しい要素と言える。甕は、栗林式系が多くみられる。胴部文様は、縦位の羽状文や横位の波状文があり、比較的丁寧に施文されたもの（第13図2）もあれば、やや煩雑なもの（第14図61・63）もある。また、壺・甕の他に栗林式系の赤彩された高坏（第13図9）が出土しており、栗林式の影響を強く受けていることが窺える。以上の内容から、第2号住居跡の時期は、③中期後半中段階でも新しい段階に位置付けたい。

第3号住居跡出土土器は、残存状態の良好なものが多数みられる。壺は、第2号住居跡と同じく文様が密に施文された北島式中段階が主体となる。ただし、肩部付近に設けられた段が明瞭である点、瓢壺に似た壺（第19図3）がみられる点などから同段階でも古い様相を呈する。なお、壺には、第4号住居跡出土土器と接合関係の認められた外来系の壺（第20図8）があるが、これについては後述する。

甕は、第 21 図 12 に代表される縄文のみ施文された在地の甕が多く出土しており、栗林式系が圧倒的に少ない。以上の内容から、第 3 号住居跡の時期は、③中期後半中段階でも古い段階に位置付けたい。

第 4 号住居跡出土土器は、全形の分かるものはないが、在地の壺は、文様が密に施文された北島式中段階に相当する。また、破片には判別の難しいものがあるが、栗林式系もみられる。本住居跡では、前述した第 3 号住居跡出土土器で本住居跡出土土器と接合関係の認められた外来系の壺以外にも接合関係の認められた北島式壺の破片(第 29 図 51)があり、両住居跡が同時期とみて良い条件を持つ。甕は、検出数自体少ないが、栗林式系が縄文の施文された在地の甕よりやや少ない。以上の内容から、第 4 号住居跡の時期は、第 3 号住居跡と同じ③中期後半中段階の古い段階に相当すると思われる。

第 5 号住居跡出土土器も全形の分かるものはないが、在地の壺は、北島式に相当する。ただし、2 条の波状文間に縄文を充填する文様帯と無文部を交互に配置するもの(第 33 図 1、第 34 図 31・32)がみられ、無文化が進行している。甕は、縄文の施文された在地の甕が少なく、栗林式系が多い。栗林式系甕の胴部文様は、縦位の羽状文や横位の波状文などがあるが、やや煩雑に施文されている。以上の内容から、第 5 号住居跡の時期は、④中期後半新段階に相当すると思われる。

第 6 号住居跡出土土器は、検出数自体少ないが、壺は頸部に文様が集約された栗林式系(第 39 図 1)がある。甕・高坏は、破片のみであるが、栗林式系が多く出土している。以上の内容から、第 6 号住居跡の時期は、⑤中期末に相当すると思われ、重複する第 7 号住居跡との新旧関係とも相違ない。

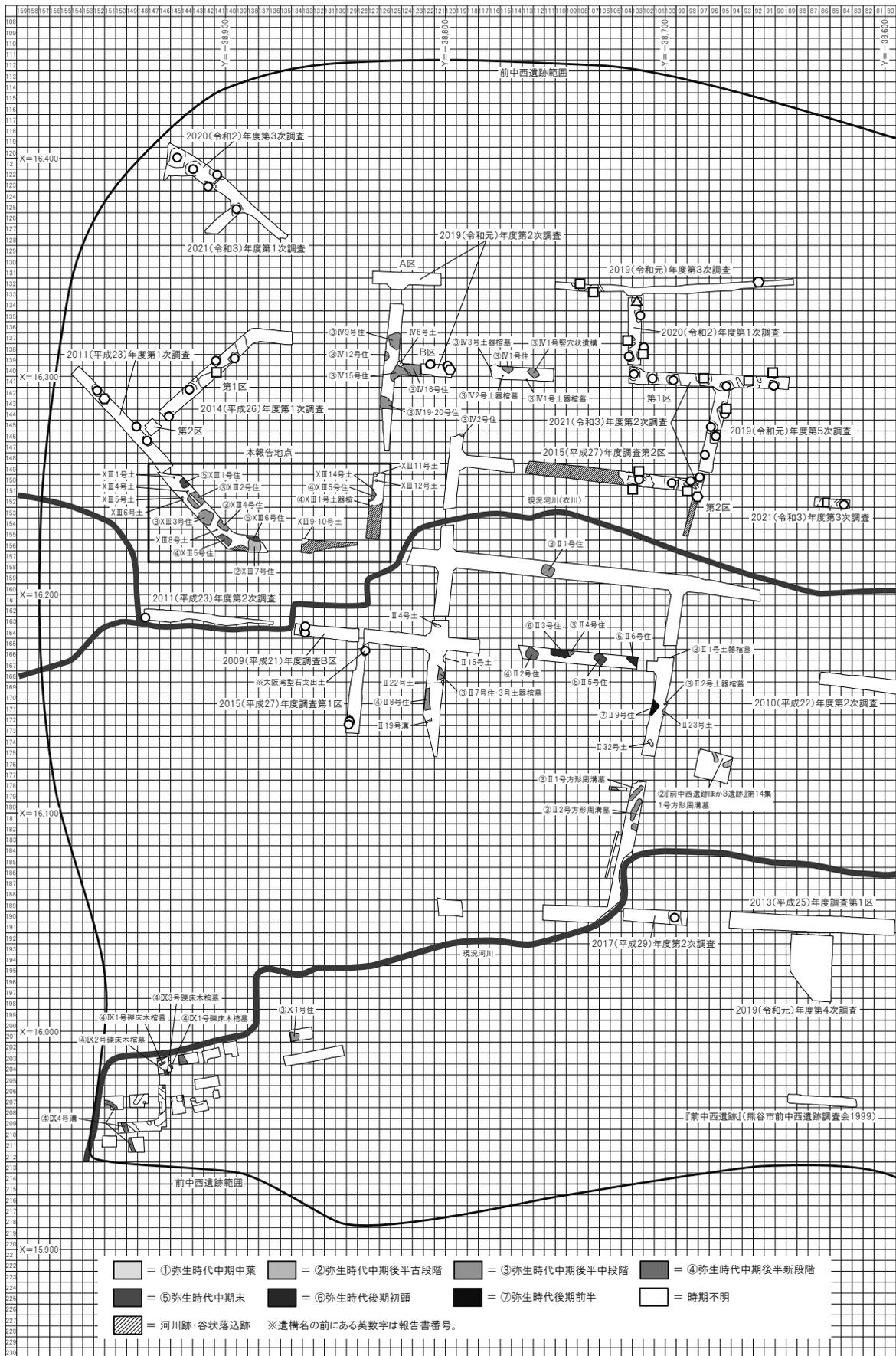
第 7 号住居跡出土土器は、残存状態の良好なものが多数みられる。壺は、文様が密に施文された北島式が主体となり、栗林式系が少ない。本住居跡出土の北島式壺は、肩部付近に設けられた段が明瞭であり、胴部文様にバラエティがみられる。このうち特に注目すべきは、フラスコ文と*形結紐文である。フラスコ文が描かれた第 41 図 1・2のうち、1 はフラスコ文の祖形とされる中期後半古段階の深谷市上敷免遺跡 Y-4 号住居跡出土第 18 図 1(財埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993)に類似する。一方、2 は、中期後半中段階の北島遺跡(財埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002)出土の完成されたフラスコ文に近いが、上位が突帯、下位は沈線で構成されている。これらの特徴を考慮すると、第 41 図 1・2 は北島遺跡より古く、上敷免遺跡より新しい段階に位置付けられよう。*形結紐文は、深谷市上敷免遺跡の中期前半の再葬墓出土土器(関 1983)に条痕文で描かれた例(図 5-7・8)があり、在地に系譜を辿ることができる文様である。しかし、中期中葉の池上遺跡では、重菱形文など似た例はあるものの、同じものはなく、次段階の北島遺跡では全く見られないことから中期後半中段階以降は定着しない文様と思われる。甕は、縄文の施文された在地の甕が多く、栗林式系が少ない。以上の内容から、第 7 号住居跡の時期は、②中期後半古段階に相当すると思われる。

第 8 号住居跡出土土器は、他の住居跡に比べると量が少ないが、比較的良好な北島式の壺が数個体みられる。全形の分かる第 50 図 1 は、文様が密に施文され、段が明瞭である点などから北島式中段階に相当すると思われたが、胴部の連弧文はやや煩雑で間延びしており、新しい要素を持つ。また、第 5 号住居跡出土第 33 図 1 と同じく 2 条の波状文間に縄文を充填する文様帯と無文部を交互に配置するもの(第 51 図 3)があり、無文化が進行している。甕は、検出数が少ないが、栗林式系と在地のものがある。以上の内容から、第 8 号住居跡の時期は、④中期後半新段階に相当すると思われる。

第1号土器棺墓で使用された土器は、棺身1個体、棺蓋2個体の計3個体である。すべて北島式であり、棺身の甕（第64図1）は、縄文のみ施文された在地のものである。棺蓋の壺2個体（第64図2・3）は、いずれも胴部以下の残存であるが、2は波状文が密に巡り、以下に縄文が施文されているが、3は2条の山形文間に縄文を充填した文様帯が巡るだけであり、無文化が進行している。以上の内容から、第1号土器棺墓の時期は、④中期後半新段階に相当すると思われる。なお、棺身・棺蓋ともにすべて在地のものが使用されているのは、被葬者の出自によるものか。

土器は、中期後半古段階までは在地の北島式が主体となるが、中期後半中段階以降は、時期が下るにつれて栗林式系が増加する傾向にあり、このことはこれまでの見解と一致する。中期後半古段階から中段階でも古い段階までの土器は、摩耗が著しいため分かりづらいものもあるが、ヘラミガキ調整による丁寧な造りのものが多い。また、縄文に無節を多用する点は、本遺跡では今まで見られなかったことである。なお、本報告では、栗林式系以外にも外来系の土器が出土している。第3・4号住居跡では、東北南部の川原町口式系の壺（第20図8、第22図68～73、第29図73）が出土しており、このうちの第3号住居跡第20図8は、先に述べた第3・4号住居跡間で接合関係が認められた土器である。本報告の川原町口式系土器は、いずれも胴部にヘラで渦文が描かれているが、沈線の幅が本場に比べて太い点、胎土が在地のものである点などから搬入品ではないと思われる。また、川原町口式系以外にも第4号住居跡では、外来系と思われる壺（第28図1）が出土している。頸部から胴部中段付近まで外面全面に横位の羽状文が描かれているが、果たしてこれは栗林式甕の胴部文様を壺に施文したものと捉えて良いのか、あるいは全く別の系統と捉えた方が良いのか判断に悩む。いずれにしてもその器形と併せて他系統の土器と思われるが、胎土は在地のものであることから本例についても搬入品ではないと思われる。

本報告では、土器以外にもバラエティに富んだ石器・石製品が多数出土している。第3・7号住居跡では、本遺跡で初となる磨製石剣が2点（第23図133、第47図167）出土している。石材は、いずれも緑色岩としたが、栗林式土器文化圏のブランド品である榎田型磨製石斧に代表される緑色岩とは異なるものである。両者は、片面にのみ鏃を持つ点は共通するが、形態・法量が異なる点は、時期差によるものであろうか。第2・7号住居跡では、磨製石鏃が複数出土している。第2号住居跡では3点（第15図87～89）、第7号住居跡では2点（第47図168・169）出土しており、住居跡から複数出土した事例は、本遺跡では今回が初となる。第2号住居跡出土の3点は小型、第7号住居跡出土の2点はやや大型であり、両者は形態・法量が異なる。当初、第7号住居跡出土の石鏃2点は、その形態・法量から未製品か思われたが、刃先が研磨されている状況から完成品と判断した。両住居跡出土石鏃の形態・法量の違いは、磨製石剣と同じく時期差によるものであろうか。磨石は、大半の住居跡から多数出土しており、形態・法量にバラエティがみられる。このうち第2号住居跡出土の第16図109、第3号住居跡出土の第24図140～142、第7号住居跡出土の第48図174は、一部が非常に平滑で光沢を帯びている。こうした磨石は、本遺跡の既報告地点や市内に所在する他の遺跡でも出土しており、総じて片手で持てるくらいのものであるが、第2号住居跡出土第16図109のような大型のものは、本遺跡のみならず周辺においても事例がなく、その性格や使用方法などを考える上で貴重な遺物である。



第 78 図 弥生時代遺構分布図

以上、各住居跡及び土器棺墓出土土器と石器・石製品について述べたが、上記を踏まえた本報告分の集落の変遷をまとめると、以下のとおりとなる。

②第7号住→③第3・4号住→③第2号住→④第5・8号住、第1号土器棺墓→⑤第1・6号住

単独検出の第2・7号住居跡以外は、近接する第3・4号住居跡も含め、各段階で概ねほぼ同軸方向を向く。規模は、第1号住居跡のみ小さいが、その他は拡張したものも含め、6m前後を測るものが多い。平面プランは、全形を検出したものが少ないが、隅丸長方形ないし隅丸方形を呈する。なお、本報告では、本遺跡でこれまで確認されていなかった構造が第2・3号住居跡にみられた。その構造とは、住居の壁の外周にテラス状の浅い段が巡るものである。第2号住居跡は、調査区外にある東壁を除くほぼ全面、第3号住居跡は西壁沿いで確認された。テラス状の段を持つ住居跡は、近隣で実施した未報告の住居跡でも確認されており、時期による偏りはみられないが、こうした構造を持つ住居跡は、遺跡範囲内でも西側集落に限定される。現時点では、その性格は不明と言わざるを得ないが、類例の増加を待って検討したい。

既報告分、本報告分、そして未報告分も含めた本遺跡全体の弥生時代の遺構について、現時点の分布状況を提示すると、第78図のとおりとなる。未報告分については、2021（令和3）年度末まで実施した調査成果を掲載しており、主に住居跡や方形周溝墓、土器棺墓を示したが、これらについては今後実施する整理調査で遺構数の変更などが生じる可能性がある。これまで検出された住居跡は、未報告分も含めると130軒を超える。方形周溝墓は、現時点では39基を数えるが、調査区の都合から単独の溝として扱ったものの中には方形周溝墓になる可能性が高いものがあるため、検出数がさらに増えることは必至である。すべての遺構が同時期ではないが、調査箇所が主に街路築造部分であることを考慮すると、当該部分以外には相当数の住居跡や方形周溝墓が所在することは、明らかである。

本報告の最大の成果としては、中期後半古段階の住居跡が検出されたことが挙げられる。当該段階の遺構は、遺跡範囲中央付近の94～96－175・176グリッドに位置する第14集第1号方形周溝墓、東側の42－171グリッドに位置するⅢ第26号土坑の2つのみであったが、今回ようやく住居跡が検出された。当該段階の集落は、小規模であることは間違いないと思われるが、未調査箇所にまだ遺構が所在する可能性は極めて高い。

本遺跡における居住域と墓域の広がりや、調査の進展に伴い、混沌とした様相を呈してきた。約32ヘクタールを測る広大な遺跡範囲内に居住域が東西に分かれることは確かであるが、墓域は遺跡範囲中央よりやや北西に位置する未報告地点90～109－132～152グリッドにおいて、方形周溝墓が住居跡に混じって検出されていることから時期によって場所を変えているようである。現時点では、両者の新旧関係は不明と言わざるを得ないが、時期差があることは間違いない。なお、遺跡範囲中央の西端に近い138～144－137～142グリッドにおいても住居跡群に混じって方形周溝墓が1基検出されている。この方形周溝墓は、方台部が推定約21mを測る大型のものであり、時期は中期後半と思われる。方台部には、同時期と思われる住居跡が1軒所在するが、方形周溝墓はこの住居跡を意図的に埋め戻して構築されていた。こうした大型の方形周溝墓を居住域に構築する事象は、神奈川県横浜市折本西原遺跡（横浜市埋蔵文化財調査委員会1980・折本西原遺跡調査団1988）、千葉県佐倉市六崎大崎台遺跡（佐倉市大崎台B地区遺跡調査会1985・1986）など南関東地方の環濠が巡る拠点集落において

みられる事象であり、北は群馬県高崎市高崎城三ノ丸遺跡（高崎市教育委員会 1994）まで波及している。本遺跡の弥生時代集落には環濠が伴わないが、居住域に大型方形周溝墓を構築する点からみると、集落形態に関しては南関東地方の影響を受けていたことが窺える。本遺跡の居住域と墓域の関係、そして大型方形周溝墓の詳細については、今後実施する整理調査で明らかになると思われる。

最後に弥生時代以外についても触れておく。本報告では、縄文時代晩期末の土器が流れ込みで出土している。晩期末の土器は、周辺では深谷市上敷免遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993）で河川跡から多数出土しており、本遺跡でも過去に流れ込みで少量出土しているが、出土位置は遺跡範囲西側に限定される。縄文時代の遺跡は、本遺跡西側に中西遺跡、東側に諏訪木遺跡が隣接し、後期中葉から後期中葉までの遺構・遺物が多数検出されている。中西・諏訪木遺跡とは時期に多少のヒアタスがあるが、本遺跡一帯では縄文時代後期中葉からほぼ絶え間なく続くことが明らかになってきた。遺構の検出が難しい時期ではあるが、晩期末にも縄文人の痕跡があったことを示す貴重な成果である。

本報告の発掘調査、そして弥生時代を題材としたシンポジウムからおおよそ 10 年が経過してしまった。その間には、全国初となる樋に複合鋸歯文が描かれた大阪湾型石戈をはじめ、栗林式土器文化圏の強い影響下にあったことを示す資料が多数確認されている。本遺跡の弥生時代については、今後も継続して実施する発掘調査及び整理調査によりまた新たな成果を得ることになるだろう。

引用・参考文献

- 折本西原遺跡調査団 1988『折本西原遺跡 1』
- 関東弥生文化研究会ほか 2013『シンポジウム 熊谷市前中西遺跡を語る－弥生時代の大規模集落－』
- 2014『考古学リーダー 23 熊谷市前中西遺跡を語る～弥生時代の大規模集落～』
- 熊谷市遺跡調査会 2001『諏訪木遺跡』
- 2013『上之古墳群・諏訪木遺跡』
- 2016『前中西遺跡Ⅹ』
- 熊谷市教育委員会 1979『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』
- 1980『中条遺跡群・中島遺跡』
- 1981『鎧塚古墳』
- 1982『中条遺跡群Ⅲ 権現山古墳・常光院東遺跡』
- 1983『めづか』
- 1984『中条遺跡群 光屋敷遺跡』
- 1999『女塚遺跡・女塚 4 号墳』
- 2001『肥塚中島遺跡・出口上遺跡・出口下遺跡 肥塚古墳群第 14・15・16 号墳』
- 2002『中条氏館跡』
- 2002『前中西遺跡Ⅱ』
- 2003『前中西遺跡Ⅲ』
- 2007『諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第 2 号墳』
- 2008『藤之宮遺跡』
- 2009『前中西遺跡Ⅳ』

- 2010 『西城切通遺跡』
- 2010 『前中西遺跡V』
- 2011 『前中西遺跡VI』
- 2012 『前中西遺跡VII』
- 2013 『前中西遺跡 西別府館跡 王子西遺跡 立野遺跡』
- 2013 『前中西遺跡VIII』
- 2017 『諏訪木遺跡III』
- 2018 『中西遺跡I』
- 2018 『前中西遺跡XII』
- 2019 『中西遺跡II』
- 2020 『諏訪木遺跡IV』
- 2020 『諏訪木遺跡V 上之古墳群第3・4号墳』
- 2021 『池上遺跡・鶴巻遺跡』
- 2021 『藤之宮遺跡II』
- 熊谷市前中西遺跡調査会 1999 『前中西遺跡』
- 2014 『前中西遺跡IX』
- 2016 『前中西遺跡XI』
- 埼玉県遺跡調査会 1971 『横塚山古墳』
- 埼玉県教育委員会 1984 『池守・池上』
- 1988 『埼玉の中世城館跡』
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982 『池上西』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集
- 1991 『小敷田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 1993 『上敷免遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 2002 『北島遺跡V』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集
- 2002 『池上／諏訪木』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集
- 2003 『北島遺跡VI』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集
- 2004 『古宮／中条条里／上河原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第298集
- 2007 『諏訪木遺跡II』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集
- 2008 『諏訪木遺跡III』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第351集
- 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1985 『大崎台遺跡発掘調査報告書I』
- 1986 『大崎台遺跡発掘調査報告書II』
- 関 義則 1983 「須和田式土器の再検討」『埼玉県立博物館紀要』10 埼玉県立博物館
- 高崎市教育委員会 1994 『高崎城三ノ丸遺跡』
- 松田 哲 2017 「埼玉県熊谷市前中西遺跡出土石戈の概要」『考古学研究』第64巻第3号 考古学研究会
- 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1980 『折本西原遺跡』

写真図版



第3号住居跡発掘作業風景



第 1 区 (2009 (平成 21) 年度第 2 次調査) 全景 (南東から)



第 1 区 (2009 (平成 21) 年度第 2 次調査) 全景 (北西から)

図版 2



第 1 区 (2009 (平成 21) 年度第 2 次調査) 全景 (東から)



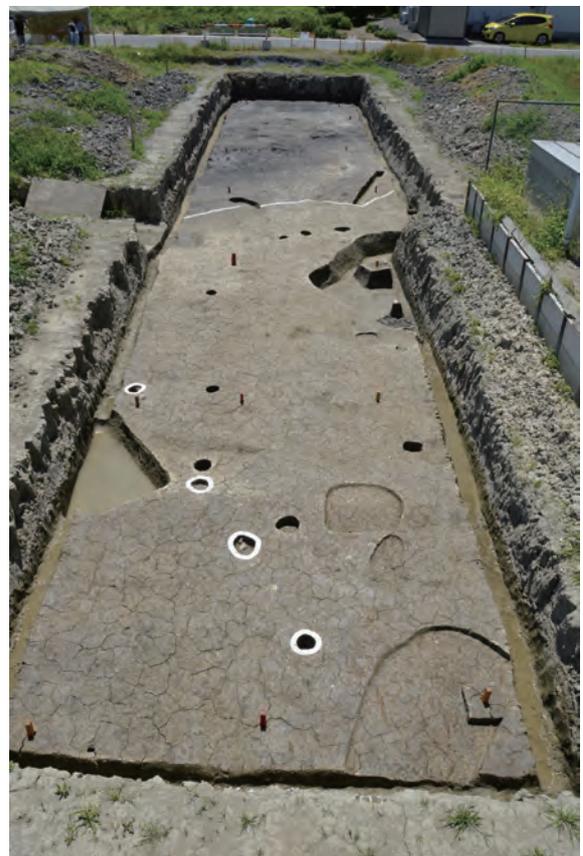
第 1 区 (2009 (平成 21) 年度第 2 次調査) 全景 (西から)



第2区 (2009 (平成 21) 年度第3次調査) 全景 (東から)



第3区 (2014 (平成 26) 年度第1次調査) 全景 (南から)



第3区 (2014 (平成 26) 年度第1次調査) 全景 (北から)

图版 4



第 1 号住居跡



第 2 号住居跡 (拡張前)



第 1 号住居跡遺物出土状況 (1)



第 2 号住居跡遺物出土状況 (1)



第 1 号住居跡遺物出土状況 (2)



第 2 号住居跡遺物出土状況 (2)



第 2 号住居跡 (拡張後)



第 3 号住居跡遺物・炭化材出土状況



第3号住居跡



第3号住居跡遺物出土狀況 (1)



第3号住居跡西側遺物・炭化材出土狀況



第3号住居跡遺物出土狀況 (2)



第3号住居跡遺物出土狀況 (3)



第3号住居跡東側遺物・炭化材出土狀況



第3号住居跡遺物出土狀況 (4)

图版 6



第 3 号住居跡遺物出土狀況 (5)



第 3 号住居跡遺物出土狀況 (9)



第 3 号住居跡遺物出土狀況 (6)



第 4 号住居跡



第 3 号住居跡遺物出土狀況 (7)



第 5 号住居跡



第 3 号住居跡遺物出土狀況 (8)



第 5 号住居跡遺物出土狀況 (1)



第 5 号住居跡遺物出土狀況 (2)



第 7 号住居跡遺物出土狀況 (2)



第 6・7 号住居跡



第 7 号住居跡遺物出土狀況 (3)



第 7 号住居跡炉 1・2



第 7 号住居跡遺物出土狀況 (4)



第 7 号住居跡遺物出土狀況 (1)



第 7 号住居跡遺物出土狀況 (5)

图版 8



第 8 号住居跡



第 8 号住居跡遺物出土状況



第 1 号竪穴状遺構



第 1 号掘立柱建物跡



第 1 号柵列跡



第 2 号柵列跡



第 1 号溝跡



第 2 · 3 号沟迹



第 1 号土坑



第 2 号土坑



第 4 号沟迹



第 3 号土坑



第 4 号土坑

图版 10



第 5 号土坑



第 9 · 10 号土坑



第 6 号土坑



第 11 号土坑



第 7 号土坑



第 12 号土坑



第 8 号土坑



第 13 号土坑



第 14 号土坑



第 1 号土器棺墓



第 1 号河川跡 (第 2 区)



第 1 号河川跡 (第 1 区)



第 1 号河川跡 (第 2 区西侧) 木片出土状况



第 1 号河川跡 (第 2 区中央) 木片出土状况



第1号河川跡（第2区中央）木製品出土状況（西から）



第1号河川跡（第3区）火山灰堆積状況（南東から）



第1号河川跡（第2区中央）木製品出土状況（北から）



第1号河川跡（第3区）1トレンチ土層（南西から）



第1号河川跡（第2区中央）木製品出土状況（北側）



第1号河川跡（第3区）2トレンチ土層（南西から）



第1号河川跡（第2区中央）木製品出土状況（南側）



作業風景



第 1 号住居跡 第 8 图 1



第 1 号住居跡 第 8 图 2



第 1 号住居跡 第 8 图 3



第 1 号住居跡 第 8 图 5



第 1 号住居跡 第 8 图 4



第 1 号住居跡 第 8 图 11



第 1 号住居跡 第 8 图 17

图版 14



第 2 号住居跡 第 13 图 1



第 2 号住居跡 第 13 图 12



第 2 号住居跡 第 13 图 2



第 3 号住居跡 第 19 图 1



第 2 号住居跡 第 13 图 9



第 3 号住居跡 第 19 图 2



第3号住居跡 第19图3



第3号住居跡 第19图6



第3号住居跡 第19图4



第3号住居跡 第20图7



第3号住居跡 第19图5



第3号住居跡 第20图8



第 3 号住居跡 第 20 图 9



第 3 号住居跡 第 21 图 12



第 3 号住居跡 第 20 图 10



第 4 号住居跡 第 28 图 1



第 3 号住居跡 第 20 图 11



第 4 号住居跡 第 28 图 2



第4号住居跡 第28図10



第5号住居跡 第33図1



第4号住居跡 第28図11(上から)



第5号住居跡 第33図2



第4号住居跡 第28図11(横から)



第5号住居跡 第33図3



第 5 号住居跡 第 33 图 4



第 5 号住居跡 第 34 图 7



第 5 号住居跡 第 33 图 5



第 6 号住居跡 第 40 图 1



第 5 号住居跡 第 33 图 6



第 7 号住居跡 第 41 图 1



第7号住居跡 第41图1 胴部文様



第7号住居跡 第42图3



第7号住居跡 第41图2



第7号住居跡 第42图4



第7号住居跡 第41图2 胴部文様



第7号住居跡 第42图5



第 7 号住居跡 第 43 图 6



第 7 号住居跡 第 43 图 11



第 7 号住居跡 第 43 图 7



第 7 号住居跡 第 44 图 12



第 7 号住居跡 第 43 图 9



第 7 号住居跡 第 44 图 23



第 7 号住居跡 第 44 图 24



第 8 号住居跡 第 51 图 3



第 8 号住居跡 第 50 图 1



第 8 号住居跡 第 51 图 4



第 8 号住居跡 第 50 图 2



第 8 号住居跡 第 51 图 5



第8号住居跡 第51图6



第1号土器棺墓 第64图1



第8号住居跡 第51图7 (横から)



第1号土器棺墓 第64图2



第8号住居跡 第51图7 (後から)



第1号土器棺墓 第64图3



遺構外 第 74 図 9



遺構外 第 77 図 133



遺構外 第 74 図 10



第 1 号河川跡 第 73 図 73



遺構外 第 74 図 11



第 1 号河川跡 第 73 図 74



遺構外 第 74 図 26



遺構外 第 77 図 142



第 1 号住居跡 第 8 图 18 ~ 34



第 1 号住居跡 第 8 · 9 图 35 ~ 52



第 1 号住居跡 第 9 图 53 ~ 67



第 1 号住居跡 第 9 图 68 ~ 88



第 1 号住居跡 第 9·10 图 89 ~ 106



第 2 号住居跡 第 13 图 13 ~ 34



第2号住居跡 第13·14图 35 ~ 47



第2号住居跡 第14图 48 ~ 63



第2号住居跡 第14·15 图64 ~ 84



第3号住居跡 第21 图17 ~ 39



第3号住居跡 第21·22图 40 ~ 55



第3号住居跡 第22图 56 ~ 72



第3号住居跡 第22图 73 ~ 95



第3号住居跡 第22·23图 96 ~ 122



第 4 号住居跡 第 28·29 图 12 ~ 34



第 4 号住居跡 第 29 图 35 ~ 50



第4号住居跡 第29图 51 ~ 69



第4号住居跡 第29·30图 70 ~ 89



第4号住居跡 第30图 90 ~ 113



第5号住居跡 第34图 14 ~ 36

图版 34



第5号住居跡 第34·35图37~56



第5号住居跡 第35图57~71



第5号住居跡 第35图 72 ~ 89



第5号住居跡 第36图 90 ~ 109



第6号住居跡 第40图2~13



第7号住居跡 第44图25~45



第7号住居跡 第44·45 图46 ~ 64



第7号住居跡 第45 图65 ~ 81



第7号住居跡 第45图 82 ~ 101



第7号住居跡 第45·46图 102 ~ 118



第7号住居跡 第46图 119 ~ 140



第7号住居跡 第46·47图 141 ~ 163



第8号住居跡 第51·52图10~33



第1号竖穴状遺構 第54图4·5 第1号柵列跡 第57图1~3 第4号溝跡 第59图4-2~15
第3号土坑 第62图3-1 第4号土坑 第62图4-1 第6号土坑 第62图6-2·3
第7号土坑 第62图7-1 第11号土坑 第62图11-1



第1号河川跡 第72图13~40



第1号河川跡 第72·73图41~66



遺構外 第 74・75 図 28 ~ 47



遺構外 第 75 図 48 ~ 70



遺構外 第 75 図 71 ~ 91



遺構外 第 76 図 92 ~ 106



遺構外 第76図 107 ~ 127



第1号住居跡 第10図 107 ~ 109 第2号住居跡 第15図 85・86 第3号住居跡 第23図 123 ~ 132
第4号住居跡 第30図 114 ~ 119 第5号住居跡 第36図 110 ~ 113 第7号住居跡 第47図 164



第1号竪穴状遺構 第54図1・2 第1号溝跡 第59図1-1 ピット28 第65図2
 ピット52 第65図4 ピット59 第65図5 ピット81 第65図7
 第1号河川跡 第72図1~5 遺構外 第74図1~8



第7号住居跡 第47図165 第4号住居跡 第30図120 第5号住居跡 第36図114・115
 第1号河川跡 第73図68・69 遺構外 第77図134 第1号河川跡 第73図70
 遺構外 第77図135 遺構外 第77図144 遺構外 第77図146・147



第 1 号住居跡 第 10 图 112 ~ 120



第 2 号住居跡 第 15 图 91 ~ 100



第 2 号住居跡 第 15·16 图 101 ~ 108



第 3 号住居跡 第 23·24 图 134 ~ 139



第 3 号住居跡 第 24·25 图 140 ~ 155



第 2 号住居跡 第 16 图 109 第 3 号住居跡 第 26 图 156



第4号住居跡 第30·31图 121 ~ 129



第5号住居跡 第36图 116 ~ 120



第7号住居跡 第47·48图 170 ~ 176



第7号住居跡 第48图 177 ~ 186



第4号溝跡 第59図4-16
ピット59 第65図6
第1号河川跡 第73図67
遺構外 第76図128~131



第2号住居跡 第15図87~90



第3号住居跡 第23図133



第 7 号住居跡 第 47 图 167



第 7 号住居跡 第 47 图 168 · 169



第 7 号住居跡 第 47 图 166



遺構外 第 77 图 143



遺構外 第 76 图 132



第 1 号河川跡 第 73 图 75



1 : 第 2 号住居跡 2 : 第 7 号住居跡△ 1 3 : 第 7 号住居跡△ 2 4 : 第 7 号住居跡△ 3
 5 : 第 7 号住居跡△ 4 6 : 第 7 号住居跡床面直上一括 7 : 第 1 号河川跡

報 告 書 抄 録

ふりがな	まえなかにしいせきじゅうさん							
書名	前中西遺跡ⅩⅢ							
副書名	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ							
巻次	—							
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第44集							
編集者名	松田 哲							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2023(令和5)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東緯 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まえなかにしいせき 前中西遺跡	くまがやしかみのぼんち 熊谷市上之2385番地 ちさき 地先ほか	11202	092	36° 08' 43"	139° 24' 03"	20091030 ～ 20100129	675.5	区画整理 街路築造 工事
	くまがやしかみのぼんち 熊谷市上之2534番地1 ちさき 地先ほか			36° 08' 43"	139° 24' 05"	20100105 ～ 20100331		
	くまがやしかみのぼんち 熊谷市上之2533番地1 ちさき 地先ほか			36° 08' 44"	139° 24' 06"	20140522 ～ 20140829	260	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
前中西遺跡	集落 祭祀 墓	縄文時代後・晩期	—	縄文土器		弥生時代中期後半から末までの住居跡が8軒検出され、各住居跡からは大量の遺物が出土した。出土遺物は、残存状態の良い土器をはじめ、石器・石製品、土製品などがあり、石製品には本遺跡初となる磨製石剣が2点出土した。		
		弥生時代中期初～前期	—	弥生土器				
		弥生時代中期後半～末	住居跡 8軒 土坑 10基 土器棺墓 1基	弥生土器、石器 石製品、土製品 玉類				
		古墳時代前期	—	土師器				
		古墳時代後期	竪穴状遺構 1基 掘立柱建物跡 1棟 柵列跡 2列 溝跡 4条 土坑 3基	須恵器、土師器				
		縄文～古墳後	河川跡 1条	縄文土器、弥生土器 石器、土師器 木製品				
		平安時代	—	灰釉陶器、土師質土器				
		中世	—	古銭				
		近世	—	陶磁器				
		時期不明	土坑 1基 ピット群					

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第44集

前中西遺跡XⅢ

- 熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書XⅣ -

令和5年3月24日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／関東図書株式会社